文藝と教育

坪内逍遥著

春陽堂發行

文藝と教育

坪内逍遙著

坪内逍遥著

文藝ど教育 全

春陽堂發行

序

主として去る三十年より同三十三年に至る迄に綴り棄てたるを集めたり、著者が目下の所見とは多少同じからぬ説もまじりたれど、只字句を修正したるのみにして他はすべてもとのまゝに錄しつ。

明治三十五年五月

著者　志るす

文藝と教育目次

文藝

新作家某の親戚より所謂批評家連中に與へて
「詩人小説家特待法」を請求する書……一
何故に滑稽作者は出でざるか……一二
如何なる人が最も善く笑ふか……二二
詩人の二性格……二九
文學研究法……三七
學説と私交……六七
社會の制裁と讒誣の懲罰……七二
演劇刷新の唯一策……七五
默阿彌作『網模樣燈籠菊桐』……八二

劇壇の現在及び未來……八九
作の上より見たる我が劇壇の現在及び未來……九五
我が演劇の前途……一〇一
問はずがたり
(一) 劇詩家と狂言作者、見られぬ劇と讀まれぬ脚本……一一〇
(二) 脚本と小說……一一二
(三) 理想的脚本……一一六
(四) 脚本の三要素……一二〇
(五) かなたの舞臺面……一三一
(六) 景色畫、道具畫……一三九
尋常の觀劇者と所謂劇評家……一四三
史劇に就きての疑ひ……一四八
史劇に關する疑ひを再び太陽記者に質す……一六四

藝術上に所謂歷史的といふ語の眞義如何
歷史畫の分類及び階級……一七六
歷史畫の主賓論……一九一
歷史畫の先後論……二〇七
再び歷史畫を論ず
第一 問題のぢだゝら……二一〇
第二 ゆきちがひの數箇條……二三三
第三 藝術に對する我が立脚地……二三七
第四 總收……二五五
第五 追加……二六一
新聞小說鑑裁の標準……二六四
讀書雜感……二八三

教育

學校に於ける學生の演劇……二九〇

學課としての朗讀法……二九五
中學年齡の男女に小說を讀ましむるの可否に關して教員某に答ふる書……二九七
倫理觀の障魔……三一六
方今の小中學の德育及び其の弊……三二六
方今の倫理教育を論ず
（上）倫理教育上の根本問題……三三九
（中）現行德育方案の根本的缺陷……三四八
（下）教訓の發起點を定めざるべからず……三六五
方今の倫理教員……三八七
倫理講話者心得……三九二
德教頽廢の譬喩觀……四〇二

文藝と教育

坪內逍遙著

新作家某の親戚より所謂批評家連中に與へて「詩人、小說家特待法」を請求する書

謹んで現明治美文壇の批評家諸先生方に申上候、小生儀は某縣某郡某村某小學校に多年在勤仕居候者に有之、從來教育事業にのみ專念從事致居候ひしため、不幸にも詩文創作の才に乏しく候へども、壯年より雜誌、新聞紙及び近刊小說類相好み、多年京地書肆、博文館、春陽堂などより種々近刊の書類を取寄せ、玩讀の後は親戚朋友などにも貸與へ候習慣に候ひき、然るところ、今般之れがために(?)圖らざる惡(?)結果を釀成し、幾分の責任まぬかれがたく、衷心何分にも安んじかね候ゆゑ、甚だ卒爾には候へども、敢て賢明なる諸先生の御教諭御裁斷を仰ぎ候事と相成候、愚甥某甲事、別號神憑子と申者、聊か仔細有之、幼少より小生かたにて養育

致し來り候ところ、小學に罷在候頃より詩人、小說家志願に有之、兎角學校の正課を嫌ひ、古今の小說及び雜誌類をのみ耽讀いたし候ゆゑ、親共心配致し、百方意見を加へ、果は小生まで非難を受け、毎度迷惑致候事も有之、さるによつて斷然雜誌小說類買入候事嚴しく相とゞめ候へども、機既に後れ、彼れが病膏肓に入り、十四五歲の際、已に新體詩、短篇小說等を相綴り、或二三の地方文學雜誌に投寄し、頗る好評を博し候てより、おひ〳〵高慢に相成り、詩人たるの資は自分の天賦なりなど自信致し、諸先生の所謂放縱不羈の振舞甚しく、父母親戚の訓誡は一切相用ひ申さず、かくて昨年末に至り、新作家御歡迎の御檄文拜見致候と其のまゝ、如何に思ひたち候てか、突然夜に乘じて上京の途に上り候を、翌日に及びはじめて心附き、家內騷動の末、小生儀、同人父母の依賴を受け、親戚一同の總代として、直ちに呼戻しの爲め出京仕り、處々雲を摑み尋ね歩き、辛うじて本人居所相知れ候ゆゑ、百方繰返し歸國の儀說得仕り候へども、中々聞入候樣子無之、剩へ、承り候へば、已に『文藝倶樂部』『新小說』『社會小說』等諸方の小說出版元へ、自作各一篇宛投寄候由、右は本年一二月中に公にせられ、廣く喝采を博すべき筈と、當人自信致居り、兎も角も其の結果相分かり候までは、歸國の儀いつかな承知いたしがたき旨申張り、

殆ど當惑仕候儀に有之候、然るところ、小生儀最初父母の依賴を受け出京致候際には、只管父母の心中を思ひ遣り候より、一圖に異見の上引連れ歸國可致所存に候ひしが、ふと近刊の新聞雜誌上にて諸先生の御高論、御隨筆等數篇拜讀いたし、聊か思ひ返し候所有之、或は彼れが志願のまゝ、放任致し置き候かた、却りて彼れが一身の爲とも相成り、且つは少々おふけなき儀には候へども、或は明治美文學の爲かとも被存候仔細有之、一應愚見申述べ、若し諸先生に於て御賛成被成下候はゞ、小生は此のまゝ引取り、父母親戚の手前は如何やうにも申繕ひ、愚甥一人を人間の不具者と仕候とも、明治文學の爲と相成候はゞ、犧牲に供し候とも、敢て惜しむに足らざる儀と思ひたち候理由、何卒一通り御聽取被下度奉願上候

小生儀從來は福澤先生の御論說など最も有りがたく拜見致居候ひし事故、詩人、小說家など申す者の性質は、くはしくは承知いたさず、詩人とても矢張並々の人間、否、多分並の人間よりは以上の者のやう存居候ひしところ、近來諸先生の御高說を拜見いたし候てより、漸く前見の誤謬多き由に心附き候、諸先生の御高說に由れば、本來詩人なる者は、最も狂熱に富み、常識以上に(或先生の御論によれば、常識以外に)超脫して、多情多感、不羈放縱、情感燃ゆるが如き天性の病の爲に、往々恃

倫非道の行爲をも致し候者にて、其の例東西に夥しく、古來詩人と狂人とは相近き者といふ諸學者の定評も有之、區々たる倫常に羈束せられ、屑々たる常識に拘々たる者の、到底窺ひ知りがたき一種の妙境に住し候者、隨うて其の燃ゆるが如き情熱の爲に、屢〻倫道を外れ候行爲あるも、畢竟其の天性の然らしむる所にて、決して咎むべき事にあらず、むしろ詩人の詩人たる所以に候由、おひ〳〵に相分かり、如何にも道理ある御論と失禮ながら奉感入候、愚昧の小生に候ゆゑ、從來はまづ常識と申す者を大切に心得、常識ある者是れ之れを凡人といひ、常識以下の者是れ之れを愚人又は蠻人といひ、常識以外、即ち常識に外れたる者是れ之れを狂人といひ、常識以上即ち常識を具へたる上に更に高等の靈識を具へたる者、是れ之れを俊傑の人といひ、此の俊傑中に詩人、哲學者、賢人、聖人などいふ分際の人々をも發見いたすべき者と存じ、常識に外れ若しくは常識乏しくして單に狂熱の激しき輩は狂人に近きのみにあらで輕症の狂人、即ち類似瘋癲と信じ、鼎立し易からざる狂熱と常識と靈識と此の三つの者を兼ね具ふればこそ眞詩人とも尊稱せらるゝ次第と心得居候ひしが常識の取るに足らざるを辨ぜられ候御高說及び狂熱と天才とを同意義の如く御說明相成り、盛に狂熱を御奬勵なされ

候御論によりて、はじめて眞詩人の資格拜承仕り、成程狂熱と常識とは兩立しがたきもの、二兎を逐ふ者は一兎をも獲ず、盲人特有の敏捷なる「感」を得んと欲すればまづ雙眼を割愛せざれば能はざるが如く、女性的特質を得んとすれば昔時の官宦に倣はざるを得ざるが如く、詩人的狂熱と詩人的靈覺とが常識に伴はざるは必然の道理、爭ふべからざる事實と合點仕候、さて右の御高論を標準として愚案を運らし候へば、愚甥神、憑子の如きは、頗る右資格に的當致居候哉に被存候、まづ彼れが神經過敏にして多情多感なる事は、其の怒り易く、激し易く、悲しみ易く、嫉妬深く、執念深く、好惡甚しく、心變り易く、且つ疑ひ深き性質にも著く、現に七八歲のころ父母と激しく口論の末小刀にて自殺せんと致せし事あり、十三四歲のころ隣家の少女と戯れ遊び候樣子異樣なりとて叔母なる者の異見を加へ候ひしを耻ぢ怒りて、身を投げんと致せし事あり、且つ訓誡に戻り、約束をたがへ、放埒を好み候こと、殆ど其の天性の如く、我儘氣隨は一村中に及ぶものなく、父母親戚に抵抗して惡言を口に致候事は數ふるに遑あらず、但し他人に對しては、幼少より俗に謂ふオクメン深く、十九歲に相成候ても、目と目を見合せ候て、他人、就中、婦人と物語致しかね候など、いづれも御高說中の諸特質に相當致候、最も近年に至

り、此のオクメン漸くやみ、昂然そりかへりて相手の貌を詠め候やう相成候へども、これは何か感じ候所ありて、力めてさやう致候らしく、内心は矢張舊の如く、神經甚だ過敏にて、顯顯の邊常にぶる〳〵と動き、夜分など引つゞき眠らぬことも候らしく、顔色蒼白、激して申候言論に秩序なく、取締なく、擧動全く狂人に類し候、只今は公言致兼候へども彼れが昨年中の行爲二つ三つ申上候はゞ、御示しに相成候英佛獨伊幾百の大詩人と殆ど同資格の人物なる事、多分御會得相成べくと存候、又彼れが常識を缺乏致居候度合は、眞に驚くべき程にて、所謂禮儀作法は申すまでもなく、五倫五常などいふことはじめより排斥と申よりはむしろ念頭に置き申さず、百事自家の感情を規矩として去就致し、所謂義理といふ者には毫末も介意致候事なく、只管自家の所感を標準として天地人間の事を裁斷し、たまたま社會上、政治上の事を談じ候へば、聊か聞き覺え居り候共産黨、虚無黨などの主義に似たる說を主張し、常に一切平等の說を唱へ、博愛の大義を口に致候へども、例の神經過敏に候まゝ、時として最親戚をすらも殺さんと決心致候事有之候、就中、其の廻り氣の鋭きこと、これまた眞に驚き入り候程にて、如何にせばかくは邪推致し得べきものかと被存候程、針小の事をも棒大に、深く遠く推量致し、架上

に架を加へ、煩悶苦惱致候技倆は、到底凡人の及ぶ所に御座なく、慥かに大想像、大狂熱ある證據かとも被存、如何なる點より見候も、御高示の詩人的資格を悉具せるものゝ如く、半ヶ月程御交際被成下候はゞ、止むを得ず御絶交可被成と同時に、其の詩人的資格の非凡なるとを、必ず御認定可被成と存候、斯樣の次第に候故、若し今度出版の三作幸に幾分か見所ありと御認め被成候やうに御座候はゞ、本人の爲、明治文學の爲、まぼらく放任致し置き、徐に將來の大成を相待可申かと存候が、御賢慮如何に候やらん、蓋し、たとへ今度の作は不出來に候とも、かゝる資格ある以上は、早晩大傑作相綴り申すべく、然るに目下の作十分ならず候とて、强ひて連れ歸り候ときは、彼れ例の神經過敏の性として、例の如く大狂熱を發し、如何なる珍事仕出だし候はん哉も圖りがたく、さりとて只管異見を加へ、件の狂熱を押鎭め候時は、右大切なる詩人的資格を毀損するの道理と相成り、さりとてかゝる狂熱者を伴ひ歸り候ては、不開化頑冥なる片田舍の儀に候へば、諸先生の如き達識家としては一人も無之、隨うて座敷牢へ入れ置くべしなど申す者も出來すべく、當人の狂憤、父母の愁傷、周圍の迷惑嘸かしと思ひ遣られ、中間に立候小生一人、眞に途方に暮れ候次第に御座候、これによりて、ふと思ひ浮び候一愚案有之、こは獨り

當人の爲のみならず、明治文學の爲ならんと愚存候に付、かくは諸先生の高諭を煩はし奉ることゝ相成候さるは餘の儀に候はず、諸先生の御盡力によりて、詩人、小說家特待法といふ一法令の實施相成候やう、其の筋へ御献言被成下候かさなくとも世間にて實際特待致し呉れ候やうの運びに相成り候はゞ、愚甥、神、憑一人の上は申すに及ばず、明治文學の爲めに間接に非常の保護奬勵と相成るべく、振古未曾有の一大御功德かと存候、夫れ熱〻惟るに古來不具者には必ず多少の特待法有之候、例へば彼の盲人の如き、彼の聾者の如きは、それ〴〵特待の便宜を得て、此の世の中を渡り候、尊むべき詩人、小說家を不具者と名け候は、聊か不禮に聞え候へども、凡人の所持致居候常識を缺乏致候上は、並人に比べ候て不具者たるに相違御座なく、又此の不具を治し候ては、諸先生の御說に背き、暗に詩人を殺し候にひとしき不仁の所爲と相成るべく候へば、詩人はすべて倫常以外と見做し、中古の王侯が侏儒を特待致候ひし如く、香具師が蛛男のたぐひを優待いたし候如く、如何なる振舞仕候とも、是れはこれ不具の技術家の持前、其の燃ゆるが如き天性の然らしむる所、むしろ憫むべき儀、若しくは或先生の仰せられしに隨ひ、憐れむべき儀と寛恕し、たかゞ瘋癲病院位を至極の懲罰と定め、違約借り倒し、不義

理、無禮、我儘、不埒等は申すに及ばず、主なき又は主ある花を手折り候位の儀も、古來先例おびたゞしき儀と默許被成下候はゞ、當人は兎も角も、父母師兄たる者安心して其の子弟を詩人たらしむべく、小生はた心を安んじて愚甥を當地に止め置き候べく、彼れが父母はた必ずしも懸念致すまじく候、さてまた當人に於ては、かゝる特待を受け候はゞ、狂熱いよ〳〵發達いたし、常識はいよ〳〵缺乏し、必定驚くべく感ずべき詩人的生涯を送り候べく、隨うて其の作はた驚くべき狂熱に富み候はんこと、火を睹るよりも明かなりと信じ、候、最も或先生の御高說には、益〻激すれば益〻昂上するの理合ゆゑ、むしろ甚しく困窮せしむるが可しと相見え候へども、貧すれば鈍するの喩、よし鈍せざるも、神經過敏の餘り、氣短かに自殺など致候哉も圖りがたく、これは宜しかるまじく候、たゞし此の特待法設けられ候とも、何か瞭然たる標章やうの物御座なく候ては、詩人と凡人との見分け附きがたく、當人は兎も角も相手方に於て、往々處置上の不都合も生ずべく候へば、彼の舊美術學校生徒が制帽制服を着せしが如く、又彼の聾者が胸間の板札により て其の不具者たるを示すが如く、詩人、小說家と認定せられ候人々には、何か制服やうの物相着せ候かた宜しかるべくやに存候、或は詩人の脚は地につかずと申

す事の表章として、驢馬などに騎りあるくやう致候ては如何哉、ベガサスの先例も候へば、只の駿馬かとも存候ひしが、さては徐ろに熟察致候に不便なるべく、就中、山光水色、又は美人などを熟察致候折に不恰好と存候、又帽子は狂熱の標章として火炎がたの緋帽子などはいかゞ、尚詳細の服裝は、諸先生に於て御高見可有之、敢て愚存は不申述候、只一言申洩ちすまじきは旅行券の儀に候、下宿屋及び旅館にては、投宿の即時、右の旅行券を請取り置き、後日支拂滯り、若しくは珍事出來、又は本人行方知れず相成候折は、之れを特待本部、若しくは諸先生の御邸へ持參致し、失費其の他の整理相願候やうの手續肝要なるべく、又醜からぬ女子、就中、妙齡の處女ある家々は、十分緋帽子に注意致し、應分の用心致候やう、前以て觸れ示し置候こと、我々同胞の義務なるべく存候、さてかく愚案致候間に、更に一つ案じ附き候は、「詩人々造法」に御座候、方今の諸論者、口を開けば大詩人いでず〳〵と歎息被致候へども、是れ畢竟は常識が詩人の大敵藥たることを心得ざる輩多きに由り候儀にて、諸先生の御高説拜見以來、小生などはやゝ悟る所有之、詩人と申すもの必ずしも人爲もて造りいだしがたきにもあらずと發明仕候、例へば、小生の如きも、十二三歳のころまでは、頗る肝癪つよく、はゞ詩人的性質相具へ居り候ひしが、父母共に頑冥にして、專ら常識を重んじ、日夜行住坐臥の間に、常識的教訓嚴密にて、些も狂熱を許し呉れず候ひしゆゑ、おひ〳〵天賦の至寶を失ひ、不幸にも本年三十六歳まで、未だ嘗て狂熱的技倆を現さず候へども、若し詩人特待の法彌〻御實施相成り候はゞ、晩學ながら、小生も或は一二年間詩人的生活相試み申すべくやなど存候、常識及び靈識を具へながら狂熱を具ふる儀は、やゝ心元なく候へども、單に狂熱のみにてよろしとの儀に候はゞ、必ずしも多く人後に落ちまじく信じ候、尚同村中末頼もしき候補者夥多有之、否、丁年以下の者は殆ど皆詩人的傾向に富み居り候哉に見受候、歸村次第、諸先生の御高見を申傳へ、新作家御歡迎の御厚意並びに特待法御設施の件などほのめかし候はゞ、彼等一同狂喜、雀躍、陸續上京仕候儀と存候、終に臨み伺置候は、右等常識に乏しき又は常識を缺き候狂熱者、即ち詩人、小説家の瘋癲的作物は、所詮如何樣なる御用に供せられ候物にや、又詩人的天職は、終身御許可相成候にや、萬一只一時御玩賞の後、突然御棄却相成候やうにては、又は御都合により、中途にて免職申渡され候やうにては、何とやらん子弟に對し、小生頑愚の故とは存候へども、聊か笑止のやうにも被存、今度發明仕候「詩人々造法」をも流石に實施いたしかね候へども、若し其の効用及び其の御

愛、翫、期限等十分に御示し被下候はゞ、斷然決心仕り、遠からず、詩人々造法の細則（例へば父母師兄の心得、平生の飲食物等に關する凡例等）詳細考定の上諸先生の几下に進め、更に御高見を承り、江湖の父母師兄等に示したく存候、まづは詩人小說家特待法に關する御高見うかゞひのため、匆々如此候、頓首再拜。

（明治三十年一月稿）

何故に滑稽作者は出でざるか

かたよりたる發達も面白からぬ現象なれど、流行の目まぐるしきも望ましからぬ事なり。小說一部につきて花客三四千を通例とする我が狹隘なる讀書社會は、譬へば山間の小村の如く、何事も打てばすぐに響き傳はりて起伏消長せわしなく、五年とは一處にとゞまらぬ有樣なり。悲慘小說（深刻小說などいふものが行はれてより、時はまだ多く經ざれど、讀書社會の一部分はもはや單調子に退屈して變り色の注文かしましく、近ごろは滑稽小說といふ呼び聲おひ〳〵高くなりたり。悲慘小說が流行すればとて一同こぞりて之れに向ふも餘りに狹隘な

る我が文壇の一弊なれど、暫しも單調子を得忍ばずして、宿下り小僧が「十二月」などに入りたるやうに、一時にいろ〳〵の注文を提出し、定見なき作者連の心を迷はすも短氣なる批評壇の病ひなり。いかさま、此の世の中には明暗の二面は常に在るべく、悲慘の事實のゆたかなると同時に口をあいて笑ふべき事もあまたあるべし。悲哀も社會の一面なれば、好笑も其の一面なり、悲哀も人生の齟齬の影にて、好笑も同じく齟齬の影なり。心のまゝにならぬ此の浮世に齟齬扞格の絕えぬ限りは、悲哀と好笑との根絕えなく、其のうちに笑ふべき事も悲しむべき事もある道理なれば、悲哀を寫す作ばかりありて嬉笑を描く作のなきは、不具の文壇たる無論なれど、さりとて、好笑は悲哀と殊にて專ら心の据方に由るものゆゑ、所謂 hearty laugh は決して望まれぬ場合もあるべし、而して腸をえぐるやうなるを悲哀の作の上乘となす如く、我れを忘れて絕倒せしむる無邪純粹の好笑しき作をこそ滑稽の傑作といふならめば、豫め時と場合とを考へ、はたしてかゝる hearty laugh の得望まるゝか否かを見定め、さて好笑を求めずんば、嬉笑を求めて案外に苦笑を得、鰻を求めてとんだ蛇を握る悔あるべし。蓋し悲哀とても論の立てかたによりては、只心の据方にのみ存在する者となるべけれど、生死を事實

とし、生存競爭を事實とし、且つ此の事實に多少苦痛の實の伴ふことを認め、さて苦痛といふものを悲しむべき事實の表徵とするときは、悲哀はいかにも人生の一大事實なり、心の据方にのみ存在する者とは見做しがたし。然るに好笑は格別なり、時と場合と人柄とを殊にすれば往々にして異なるものにて、不變常住の本性あるにあらず。甲のをかしと見る事を乙はをかしからず又は悲しと見ることあり、或は前にはをかしと見し事を後にはをかしからず又は悲しと思ふことと、同一人の場合にもあり。蠻人のをかしと見る事を開化の民は怖ろしとも痛ましとも見、少女の悲しと思ふ事を男又は大人は見てほゝゑむなど、其の例擧げ來れば限りなし。好笑を苦痛の伴はぬ齟齬、危險の添はぬ矛盾にありとするは、古くより傳へられたる學說なれど、此の苦痛といふことも、人々の感性によりて强弱ある可く、其の强弱によりて、危險か不危險かの問題も決せらるべしとすれば、好笑はヤハリ心の据方一つに定まる者にて恒性なきものゝ如くなるべき也。通例、如何なる人が最も屢〻笑ふかといふに、俗に馬鹿笑ひといへる如く、智慮淺き者が多く笑ふ也。又男女共に幼少のころは皆善く笑ふ也。此等は單に意外の撞着、意外の齟齬、又は意外の矛盾に遭ふ毎に、豫期と實際との齟齬する爲に、言

はゞ突然と神經作用の釣合を失し、半は生理的に失笑する者とも評すべし。其の事が必ずしもをかしきにはあらざるなり。寧ろ彼等の考察力、即ち智慮の足らざるが爲に、不當なる豫期をなし、豫期の不當なりしために自然の結果として豫期と實際と矛盾を生じ、其の矛盾の案外に撲たれて笑ふなれば、此の種の好笑の起因は、全く彼等が心の据方に存したるものなり。道理上よりいへば、些もをかしき事はなき理也。要するに、立入りて因緣果報の理を考ふる時は、世の中に些もをかしきことはなくなる理なり、只上面を見ればこそ、或心持より見ればをかしき事あまたあるが如くなれど、深く立入りて考ふれば、モリエールの喜劇さへもさつぱりをかしからぬものとなるべく、或は心の据方によりて、なか〳〵に哀れを催す媒ともなるべし。たとへば『守錢奴』の主人公アルパゴンは、人皆をかしと見る人物なれど、立入りて考ふれば、世に憫れむべきは彼れの如き人物なり、現在の我が子にだに棄てられ、欺かれ、廣き天が下に只ひとりの同感者をだに有ぬとは笑止至極の次第ならずや。予ははじめて彼の作を讀みし時、故ありてモリエールに對し一種の成心をもちて讀みしゆゑにてもあらんが、彼れが大切なる貯蓄を失うて煩悶するあたりに至りては、覺えず同感の念起りて親を苦しむ

る不孝の子等をいと憎しと思ひき。涙こそは催さどりしが、哀れと思ふ念は切に浮びき。又彼の沙翁の作のシャイロックのごときも、或觀者より見れば只憎しとのみ見ゆべく、或觀者より見れば哀れと見ゆべく、グラシヤノ一流の者の目より見ばアルバゴン同樣のをかしき人物とも見らるべし。現に英國にて一時はシャイロックを喜劇の人物として演じたりしことあり。今とても俳優の仕草次第にて普通の見物を絶倒せしむるやう演ずるは容易なるべし。又彼の『オセロ』の如きは最も慘絶なる悲劇なれども、其のうち一二幕を除く外は、一歩を轉ぜしめば一種の滑稽劇となさんこと難かるまじく思はるゝ也。此等皆悲哀と好笑との間は膜一重にて、容易く相轉換すべく、而も其の根柢は悲哀にして其の皮相の好笑なるを知るべし。すなはち究理の智と同感の情とを以て臨む時は、人生殆ど悲哀のみありて好笑なしと言ひ得べきが如し。

或は笑を人間の特有とする所より、笑ある上は此れに對する好笑の實なきを得ずと論ずる者もあれど、笑にも種々の差別あり、生理上、病より出づる笑もあれば、高慢の笑もあり。而も侮蔑譏刺の意に出づる笑の如きは爲我自負の笑にて純粹の好笑に屬する笑にはあらず。より思ふに今の滑稽作物を需欲する者、往

々にして滑稽と諷刺とを混同し、今の世嘲笑すべき事多し、何故に笑はざるなど唱ふるもあれど、こは猶小説の興隆を希望して專ら勸懲小説を奬勵せんとするが如し。美術奬勵者としてはやゝ變則なる嚮導の爲方なり。高慢嘲弄の笑を以て美術の材となさしむる時は、げに滑稽作物の源泉涌くが如くなるべし、何となれば或心にとりてはすべて他人に關する齟齬失錯は悉くをかしと見ゆるなり、彼の爲我の念甚しき者は、知交の災難をも笑ひ、朋友の失敗をも笑ひ、祖國の失錯をすらも嘲り笑へばなり。蓋し究理の念乏しく、同感の情全く空しく、利己爲我の念をのみ盛んにして世に臨まば、天下古今、我に利害無き限りの失錯は皆悉く笑ふに堪へたらん。此等の人物が嘲笑の聲を絶たざるは自然の結果なり。

されども固と美術の本性は、無私と云ふを第一とするなれば、爲我利己の念を母とせる笑は、世の同臭を笑はしむるには足るとも決して美の感を起さしむる能はざるべし。たとへ暫くは初心の讀者を瞞着するを得とも、久しくして馬脚見えて淺ましき感起らん。文學上にては、單に高慢の笑を材として譏刺嘲謔を恣いまゝにする者を名けて嘲謔家といひ、心に同感の情をいだいて、口に滑稽の言を吐く者を、其の規誡せんの念の有無によりて、或は諷刺家と名け、滑稽家と稱

す。滑稽家の作は好笑の醇粹なるものにして、譬ふれば清泉の水の如く、諷刺家の作はやゝ其の醇ならざるものにして、譬へば澄める藥泉の水の如し。而して嘲謔家の作に至りては好笑の最も不醇なるもの也、其の最も美なるものも濁れる藥泉の水の如く、其の下劣なるは恰も溷濁の水の如し。第一は無邪清淨なれば、之れを讀めば涼風腋に透り、讀み終りて颯爽の快いふべからず。向上の念を起さしむるにもあらず、愛憐の情を催さしむるにもあらず、蕩然として六塵の樂欲を洗ひ去り、心をして無我無他の境界に遊ばしむるの妙功力に至りては、彼の讀み了りて後に感慨若しくは愛憐の情を惹起する悲哀悲壯の作に比して更に一層の出世間的趣致あるを覺ゆ。蓋し涕下る瞬間には尙些の塵感添はちざるを得ざれど、無邪に笑ふ刹那には生死なく、苦樂なき也。是れ豈に一種の高雅境にあらずや。第二、諷刺家の作は其の底に多少の酸氣ありて、人をして毎に人間の事を回想せしむるがゆゑに時としては前の笑は化して暗涙となちざるを得ざることあり、而も其の笑は温き同感の笑なれば、妙に後の暗涙と融和し、譬へば海に入りて冷を覺え、浴して暖を感じ、人をして心の更に健かなるを覺えしむるが如き趣あり。特り第三の嘲謔に至りては、予は多く之れを喜ぶ能はず。彼等

の作は、大抵一時の私情に成り、若しくは一時の虛譽心に成れる跡歷々と見えて、到底無邪の作たるを得ざればなり。且つ其の爲人よりいふも、性習、閱歷等の結果にて、ひとへにおのれを賴み、おのれを尊しと思ひあがり、器宇のいたく狹隘なるが多く、猜疑、嫉妬の念深く、只管他を責むるに酷なるが通例也。ふと見れば嘲謔と諷刺との間に差別無きが如く見ゆるゆゑ、通例は二者を混同して、バトラアの如きをもアヂソン、ヂッケンスとならべ稱し、ボープが『ダンシャッド』の如きをもフィールヂング、サッカレーの作と同一に見做すことあり。されどかゝるは截然たる精緻の分別の何事にも確立しがたき一例にて、所詮は其の作の醇醨不明なるが爲に外ならず。例へばバトラアは明かに嘲謔家を本性とすれども、其の美處に就いて之を觀れば優かに諷刺家たる資あるを見るべく、サッカレー、ヂッケンスは諷刺家若しくは滑稽家なれども、時としては嘲謔に流れたり。又彼のスキフトは今尙諷刺家の大王と呼ばれて通例は嘲謔家と見做されざれど、予の定義に由るときは、諷刺は其の皮相の美處に在りて其の骨髓に在るものはヤハリ嘲謔なり、爲我の情なり、則ち其の作に見はるゝ好笑は醇粹の好笑にあらざるなり。所詮、嘲謔家の作は讀むこと漸く深うして好笑の感漸く淺く、能笑者の影の見えそむ

何故に滑稽作者は出でざるか

ると同時に、讀む者其の特質の由來に想到し、其の閲歴、性習、遺傳等に想到し、且つ竟に當代の社會に想到して轉〻悽愴の感無きを得ざるに至る。スキフトを精讀して後に起る究竟の感は是れなり。然らざれば讀み了りて後に一種不快の感を生ず、作家が卑劣なる虚譽心と其の淺膚なる自尊心とが歴々として浮動すればなり。バトラアにだに及ばざる尋常の嘲謔家の作は比々是れなり。好笑を滑稽の眞意とせば、此くの如きは太だ其の眞意にとほざかれるにあらずや。予は所謂諷刺家をすら深く推重する能はざれば、まして諷刺家の假面の底に、漫に嘲謔の筆を弄び、他の瑕疵を拾ひ、弱處を訐き、以てみづから尊うせんとする者はむしろ深く憫むべしとなす。何となれば彼等は正面して直前勇往する能はざる者なれば也、直言直諫する勇無き者なれば也。彼の中古の世に於ける侏儒童坊に類似せずとなさず。侏儒のうち、或は東方朔に似たる者あり、或は『キング、リヤ』の童坊に似たるものあり、多智圓轉、善く謔し、善く諷し、所謂其の究らざるは哲に似、其の正諫するは直に似たるもの無きにあらねど、要するに曾呂利新左の亞流也。太守一たび赫として怒らば畏縮して口を開く能はざる徒のみ。亂離の世、暗黑の朝には、或は此の種の徒も無からざるを得ざりしなるべく、又恐ら

くは其の力足らざるために、止むなく暫く侏儒に隱れて、賊を罵り、君を傷み、綫に其の鬱勃たる義憤を遣る英王リヤの童坊の如きものもありしなるべし、其の意はむしろ憫れむべき也。或はまた怨憤極まりて遍く人間を憎惡し、世を擧げて嘲倒せんとする者、之れを大にしてはスキフト、之れを小にしては鳩溪の如きもあるべし、彼等の心中もまた太だ悲しむべし。蓋し幕政の偏頗と十八世紀の横邪とを知れる者は、彼等の所爲、彼等の所著のまことに已むべからざりしを察せずんばあらず、かゝる濁世に於ける冷笑戲謔は力爭上に失敗したる天才が自家を立つる唯一の武器なればなり。さはれ名を嘲世諷俗に藉りて、言論自由なる文化の世に、自己の虚譽を思ふの外、何等の目的なく、何等の同感無く、只正面して言ふを憚るの故にのみ、妄に嘲謔の筆を弄し、社會を諷する名の底に個人を譏笑する作の如きは、予は殆ど讀むことを好まず、よし讀むも好笑の美を感ぜざるなり。或は恐る、今の讀書社會の需むる所は此の種の滑稽にあらざるかと。予は此の種の滑稽は得ること太だ易かるべしと思ふ、爲我は十九世紀の特質にして嘲謔は冷かなる爲我の必屬なればなり。されどかくの如き滑稽は予の需むる所にあらず、同臭は之れを得て好笑を感ずべし、予はむしろ一種の不快を感ずべ

きなり。さてまた或は此の類の滑稽を欲せずとせば、眞の醇乎たる滑稽の作は今の文壇に求むるを得べきか否か、といふ疑問起る也。（明治三十年十一月）

如何なる人が最も善く笑ふか

笑ひに種々あり、苦笑も笑ひなり、冷笑も笑ひなり、嘲笑も笑ひなり。また絶望の笑ひあり、失心の笑ひあり、狂癲の笑ひあり、無邪の笑ひあり、大悟の笑ひあり、娯樂の笑ひあり。此のうち何れをか美なる笑ひとすべき。

苦笑と冷笑と嘲笑とは共に自負、高慢の笑ひ即ち侮蔑の笑ひなり。此の種の笑ひは私意を離るゝ能はざるものゆゑ、何處にか苦味又は酸味あり。絶望の笑ひは俗にいふヤケ笑ひなれば、おのづから多少の凄味ありて、好笑といはんよりは崇嚴といふべき趣味を帶ぶ。失心痴癲の笑ひ及び狂癲の笑ひは間〻をかしみを呼ばで却りて笑止の感を促す、笑ひの不具なるものなり。さて無邪氣の笑ひ、例へば稚兒の戯笑の如きは、流石にをかしからぬにあらねど、大かたはうつくしき方なり、美なる笑ひには相違なきも、所謂好笑の美たるよりは優美の美に近きこと多く、間〻他をして無邪氣なりし來しかたを追懐せしめ、退嬰の念を起さしむることあり、好笑の美としてはむしろ醇ならざるものといふべきか。大悟の笑ひ、是は浮世の辛酸を味ひ盡しての笑ひなれば、笑ひの間に安住ありて聞く者を魅する力あれど、若し教訓の意籠るときは興味索然たるものとなりて往々にして自尊自負の笑ひに類似す。

さて所謂娯樂の笑ひにはおのづから種類あり、俗に謂ふ太平樂の笑ひも此の中に入るべく、優遊自適の持前より生るゝ笑ひも此のうちに入るべし。彼の何の主義も無く、何の向上心もなく、自滿自足して現在に安んずる者善く笑ふ、之れを太平樂の徒といひ、劣等の意味にて樂觀家といふ。此のともがらの笑ひも流石にをかしからぬにあらず、されど往々にして無意義の笑ひ又は馬鹿笑ひに類することあるゆゑ、再三に及びては聞く者不快を感ぜざるを得ず。彼等笑ひを喜ぶの餘り、時としては大切なる人情をも全く笑ひの犧牲にして顧みざるあれば なり。さて優遊自適の持前の徒はこれに似て大に異なる所あり、彼等は笑ひを翫物とはせずして生命とする也、即ち笑ひのうちに安住を見いだし、笑ひのうちに苦樂を忘れんとするなり。太平樂の徒が笑ひを愛するは尋常の歌人、俳客

の目前の貌を愛するが如く、優遊自適の徒が笑ひを愛するは芭蕉、西行が春の心、秋の心を愛するが如し。物の心に可笑味を認めたるはあらゆる人を笑はしむべく、物の形にのみ可笑味を認めたるは只同臭味をのみ笑はするに止まる。

以上諸種の笑ひの外に、予の見る所によれば、別に觀美の笑ひ、即ち「詩人の笑ひ」といふものあり、こは實際は以上諸種中の或者と聯關することをまぬかれざれど、尙其の本性よりいへば、おのづから他と別種のものにて、必ずしも現在界に安住するが故に笑ふにもあらず、笑ひのみを生命とするが爲に笑ふにもあらず。もとより高慢の笑ひにあらねば、無邪氣又は大悟の笑ひにもあらず、否、ひとへに觀美上より來る笑ひなり。されば平生悒鬱なる詩人も、其の詩人たる本性ある限りは、時に好笑の美に感じて我れを解脫して笑ふこと『タスク』の作者が『チョンギルビン』に於けるが如きことあるべく、侮蔑を本意として筆を執るも中ごろ好笑の美に撲たれて、我れ知らず無私の境に入り、一分には苦味、酸味を帶べども、一分に醇なる可笑味ありて長へに他を笑はしむること、スキフト、ポープ等が其の著の或部分に於けるが如きこともあるべし。されど詩人とても本は人なり、よし美に撲たるゝ瞬間には全く自我を忘るゝ傾きありとも、其の性好笑に適せずんば

同化を維持せんは難き理なれば、眞の好笑美に適する詩人を得んとすれば、所詮は、前に謂へる諸種の中に其の素性を求めざるを得ざるべし、例へば、蜀山、十返舍の滑稽は恐らく大苦鬪の精神界には求めがたかるべく、『ハムレット』以前のシェークスピヤには『アズ、ユー、ライキ、イット』又は『テムペスト』の滑稽を望みがたかるべし。

史に徵するに、大滑稽と大劇詩とはほゞ運命を同うするに似たり、又眞の滑稽は概して大悲壯詩の後又は同時に出でたり。希臘に三大劇詩家いでゝアリストファニーズつぎ、『ヂヰナ、コメヂア』いでゝボカチオ現れ、ラングランドの悲壯の後にチョーサアの諷諧いで、二大悲劇を作して後に縱橫自在のシェークスピヤもはじめて滑稽の秘訣を得たり。彼のモリエールのラシーヌ、コルヲーユと其の時を同うせる、將た同例に伍せしめがたきに非ず。こはそも如何なる理由に因るか。

他を笑はしむることの他を泣かしむるよりも容易なるに因るか。何故に笑はしむることは泣かしむるよりも容易きか。何故に大脚本と大滑稽とは時を同うせんとする傾きを有するぞ。

こゝに到れば予が前に掲げたる「何故に滑稽作家は出でざるか」と題したる論說の意と相接す。蓋し笑ひは悲しみと異なりて主として心の據方に基くものゆ

ゑ、多數の人々に同感せしむべき笑ひは大なる笑ひならざるべからず、常識以下又は常識を逸れたる笑ひにては事足らず、常識を網羅して更に其の上に出でたる笑ひならでは不能なり。言ひ換ふれば、客觀的と稱しても可なる程の大主觀より生れたる笑ひにあらずば、恐らく同じ心持をもてる少數人を笑はするに止まりて其の他を笑はしむる能はざるべし。此の點頗る脚本と相似たり。彼れも大に成功せんとすれば、狹き主觀を脱し、時處を脱し、常識を網羅して其の上にいで、宇宙をも網羅するの概あるを要す。而して此れはたゞ〻其の趣きあり。是れ其の大脚本と出生期を同うする一理由ならんか。さて次ぎには、前論に說きたる如く、好笑は悲哀とちがひて常に現に實在するものならねば、冷かに因果の關係を考査し、若しくは温き同感を以て之れに臨む時は、はじめ可笑しと見えしものも、或は可憐となり、或は痛ましきものとなり、或は馬鹿らしきものと變りて、正當に謂ふ可笑味は爲に失はるゝ傾きあるゆゑ、物質上及び精神上に於ける現實の苦鬪激烈にして、人々常に悲痛を感じ、若しくは當代の理想定まらずして人々處世の方針に迷ひ、隨うて人事の是非及び其の因果の理を尋問し研究せんの念人々の胸臆に盛んなる時代には、涙又は汗に比して笑ひはいと乏しかるべく、就中、多數に同感せしむべき大主觀(即ち客觀に相當する程)の笑ひは得難かるべし。更に通俗に之れを言へば、無我夢中の心持にあればこそ箸の倒れたるもをかしけれど、少しく眞面目になりて事々に因果の道理を探りはじむれば、笑ふべきことといと〳〵乏しくなり、假令笑ふともタカゞ微笑位にて、例へばアヂソン一流の笑ひに過ぎざるべし。之れも笑ひには相違なく、滑稽には相違なけれど、所詮、あまり上品過ぎて今人の求むるごとき大喜劇の料とはなるまじきなり。勿論、如何なる精神的苦鬪の世にも、人の天禀の自然にて、其の思潮に捲込まれざる詞客もあるべく、又前代太平の氣脈を遺傳して新思潮に漂はざるともがらもあらめど、尙、一九、鯉丈の作が十九世紀の青年をもて快笑せしむる能はざるが如く、又三十歳前の悟道三味の何となく底淺きが如く、かゝる輩の筆頭の可笑味は他の苦悶の徒を絶倒せしむる力なし。苦鬪の世を笑倒せん力ある笑ひは苦鬪をくゞりぬけたる笑ひ、即ち因果を探りきりたる後の笑ひ、前に謂ふ大悟の笑ひに近きものならざるべからず。予はシェークスピヤの喜劇を讀みて其の壯年の淺薄なる喜劇と其の中年後の圓熟せる喜劇との間に此の間の消息の仄かなるを覺ゆ。大悲劇成りて大喜劇いづるの理或は此のあたりの消息に基かずや。

もとより詩人中にも其の天禀次第によりて、先天的に好笑美に感じ易きものもあるべく、さる天禀を具へたるは、假令如何なる時勢にいづるも、周圍の障害に打克ちて其の天賦の特質を發揮せんか、そはもとよりこゝに否定すべき限りにはあらず、されど予が見る所謬りなくば、苟も詩人と言はるゝ限りは、何れも多感多情にして所謂神經性ならざるなく、而して神經性にはおのづから二種ありて、其の主觀性に屬するは言ふまでもなく時勢に克つ能はざる約束を有するもの、譬へば今日の如き社會に在りては到底忘我して笑ふ能はざる者也。又他の客觀性に至りては常に其の周邊の大氣に感じて移動し、左右し、能く同化するを得といへども、是れ將た周圍の潮流が我が今日の如くならんに、能く安住して笑ふを得べきか。予は今日の社會の情況の稀有空前なるを信ずるが故に、其の多感の詩人をして悲哀、就中、小悲哀の美を認めしむるは易けれども、大好笑の美を認めしむるの難かるべきを感ぜずんばあらず。（此の段は後に掲げたる詩人の二性格といふ説を參照せられたし。）

以上筆に任せて論じ來りたる所やゝ散漫に流れたれば、讀む人恐らくは主旨の在る所を領せざらんか。予が意は理想未定の時代には大なる笑ひなし、研究時代には大なる笑ひなし、故に我が今日の文壇に滑稽の作出でざるは自然の數なりといふにあり。前代に屬する者は或は笑ふことを得べし、新思潮に浴せざるともがらは或は笑ふことを得べし、されども新代を笑はしむる能はざるべし、而して新代の作家、就中眞摯なる新代の作家は未だ笑ふ程の餘裕を有せず、彼等よし笑ふとも、大人を笑はしむる能はざらん。されば今にして滑稽の作を渇望し苛求するは書肆の願望としては當然、普通讀者の要求としては恕すべく、新代を指導する批評家の言としては、予は其の本意の那邊にあるかを訝り、其の平生の詩觀の那邊にあるかを訝らざるを得ざるなり。

（明治三十一年一月）

詩人の二性格

今更のやうなれど、人の持前ばかり爭はれぬものは無し。概して言へば、人々が一生は、其の歴史も運命も其の持前によりて豫め定められてありといふを得べし。崔嵬の山嶽もまろばすべく蒼茫の河海も飜すべし、變改しがたきは人々の天禀なり。通例、生理上より人の持前を分ちて、神經質、膽汁質、多血質、粘液質など、

類を定むれど、こゝには文學に最も縁故深き神經性の上のみに就いて觀察を下さんに、一概に神經性に屬するものとせられたるうちにも、自ら二大性別の截然たるを覺ゆるなり。最も此の區別を詳かにわきまへんとする時は、存外にこちたく事々しき論文となるべく、恐らくは讀む人々も倦厭すべし、さまでにして吹聽する程の觀察にもあらねば、只筆任せに思ひ得たる所を言はんに、

神經性と一概に總稱する性格に、予の見る所によれば、主觀的性格と客觀的性格との二大別あり、さて予が主觀的と名けたる神經性即ち純粹の神經質は、何事につけても我が思ふ所を本尊とする性質にて、内に決する所無ければ一歩も進退する能はざる持前也、他の客觀的神經性又の名多血的神經質は之れと異なり、むしろ物に觸れ、事に觸れて、我が思ふ所動き易く、それが爲に、場合によりては我れを忘れて右し若しくは左することあり。主觀性を concentraive と名づくれば、客觀性は diffusive とも名づくべく、彼れを rigid 若しくは stiff と言はゞ、此れを pliant 又は flexible と言ふべし。主觀性の人は、何等か先づ概念やうのもの若しくは主義やうの據りどころを得ざれば作することも出來ず、進退することも能はずといふ性なり。即ち先づ何等か「内」に依據する所あるを要す、客觀性は然らず、其の時々の衝動に促されて云爲行動する持前なるゆゑ、其の進退の動機は間〻「外」にありて「内」にあらず、隨うて前者は能動的となり、後者は所動的となる。所動的なるが故に所謂客觀性の動くや、其の方向一ならず、或時は右し、或時は左し、其の心、このもかのもに動きて、はじめは殆ど其の歸趨する所を知るに由なし、喩へば醉人の蹣跚として歩むが如く、曲線の波動を畫くが如し。之れを色に譬ふれば、白にもあらず、紅にもあらず、青にもあらず、黒にもあらず、竟に何の色とも名づけがたし、むしろ其の境によりて色を變ずる薄鼠色のたぐひにも喩へんか。此の種の持前の人にして、其の心に誠なく、道義なき時は、浮薄の徒となり、世に謂ふ八方美人の徒となり、詩人作家としては、何の主張も無く、何の觀念も無き、淺膚なる叙事詩人に終るべし。されば味方としても頼もしげなく、敵としても恐るゝに足らぬ人物も、此のうちより出で、醉生夢死の徒も此のうちより出で、卑劣無操の徒もこゝより出づ、是れ客觀性の甚だ危險なる所以也。

他の主觀的は之れに反す、先づ「内」に定むる所ありて、さて後に動くゆゑ、其の方針(尠くとも其の當時ほどは)牢乎たり、其の進むや直線的にして、譬へば馬車馬の前進するが如し。其の據る所唯一なるが故に、殆ど毫末も顧盼すること無し、顧盼

せず、斟酌せず、故に思ひ切つて勇往するなり。よしや屢〻反省すとも、其の窮極の裁判を下すものは我が概念、若しくは其の概念に依據せる我が感情に外ならざるが故に、到底其の方向を劇變することなし。此の持前より觀る時は(譬へば)物の數は零と一とあるのみ、彼れは零と一との間に萬里の懸隔あるを認むれども、一と二若しくは三との間の關係と、一と百若しくは千との間の關係とに、懸隔あることを認めざるなり。此の持前の者は以爲へらく、一は我が理想なり、一を遂げずんば零(ジーロー)即ち死(デッス)あらんのみと。彼れは一以上萬億までの間に幾何のAlternatives あるもそを容るゝことを肯ぜざらんとす、即ち俗に謂ふ「一かバチか」主義なり。此の性の危險は頑陋偏固に流るゝことにあり、其の私情のみ盛なるは刻薄となり、殘忍となり、其の「智」乏しき時は頑愚となり、其の情激切なる時は狂暴となり、其の意、情と共に剛き時は狷介となる。さもあれ彼の剛毅果敢の士若しくは彼の直情徑行、主義に殉し理想に殉する義人烈士は、常に多く此のうちより出づ。猶ほ他の客觀性格のうちに寛厚温潤の君子人を出だし、無私公正の士をだすがごとし。

其の大小高卑の差はさまざまなれど、要するに、主觀性は一理想、一概念、一主義、若

しくは我が意、我が情に執着する者、隨うて其の彌〻高からんことは之れを望むべきも、其の次第に廣からんことは望み易からず。彼れは猶山嶽の如し、星霜と共に或は其の高くなりゆくを望むべきも、其の集凝的傾向著鋭なるが爲に、其の範圍を廣うせんはいと〳〵難し。此の種の持前は、假令萬卷の書を讀むも、豫め成心ありて讀むが故に、我が意に適へるは取りて我が城を堅むるも、他は唾して取らざるなり。又千百の人に接するも我が心に合へるには襟を披きて答問するも、さあらぬは悉く擯斥して應接せず。其の人生を觀察するや、毎に概して演繹的なり、毎に其の心に前提あり、成心あり、唯一の尺度あり、其の性の本來より言へば、楯の兩面を見ることを欲せざる者、極端より極端に走らんとする者、but を口にするを悅ばざる者也、即ちegoistic なり。之れを詩人に見る、大抒情詩人も此のうちより出で、詩風を刷新するの天才も此の内より出づ。又之れを政治宗教、其の他の社會に見る、革命家や、創業家や、概ね皆こゝより出づ。

客觀性は、彼れの no but に對して ever but なり。觸るゝ所の物に同化する傾きを有するが故に、往々にして全く我れを遺失せんとす。夫れ優柔不斷は神經性の通情ながら、客觀性の斷決し得ざるは、左顧右盼するが故にして、主觀性の踟躕す

るは、內外相鬪ふが故なり。客觀性は時としては全く我れを遺亡して因循し、主觀性は常に我れを意識し、譬へばハムレットの煩悶の如く、自問自答のうちに踟躕するなり。此の苦鬪の結果、客觀性は、雙方に對する義理人情の遂げがたきが爲に稀に自ら殺すことあるべし、而して即ち其の間に自家なきなり、主觀性は、自家の理想と他に對する義理人情との調和せざるが爲に或は間〻自殺することあるべし。即ち其の死期にも「我」あり(必ずしも「私」にはあらねど)、客觀性は自我を失す、故に時としては中庸を得、又常に屢〻顧盼酌量す、其の常識に富む所以なり。故に彼の非我界を叙するの作即ち客觀詩(叙事詩)は主として此の種の性格に適す。守成家、整理家はた此の性よりいづることあり。

主觀性は一理想、一概念、若しくは一主義を固守するが故に、其の一言一動は其の守る所に依據す、隨うて其の前提たる據りどころを是認すれば其の一言一動、悉く之れを是認せざるべからず、即ち一言一動の末までも悉く logical なり。彼れは義にあらざれば言はず、義にあらざれば動かざらんとす、義は主觀性の生命なり、唯〻「義」を生命とす、故に logical ならざるを得ず。唯〻 logical なり、故に窮屈なり、嚴格なり、苟もせず、忽諸にせず、故に寡默なり、深沈なり、峻嚴なり、單調なり。

客觀性は然らず、其の重んずる所は義にあらずして寧ろ「情」なり、我が情プラス衆他人の情なり。或は義理に拘ずることあり、而も其の所謂義は我が見定めたる義と限らずして遍通的に謂ふ義なり、故に甲の所謂義と乙、丙、丁の所謂義と、相牴牾し相衝突して自家其の間に介するや、或は遍通の義を證し得ざるが爲に、首鼠兩端(若し其の心に熱誠無からんか)彼れに同じ、此れに同じ、浮萍の波に伴ふが如くならんとす。而も其の同化と同感とは此の種性格の必然なり、其の本來よりいへば、求めて而して後に然るにあらず、寧ろ其の境と遇との刺戟が彼れをして其の心的態度を變へしむる也。既に其の境遇によりて心狀に變化を生ず、其の云爲言動はた隨うて變ぜざらんとするも得んや。快活なる境に觸れては半無意識にして快活となり、悒鬱なる境に接しては同じく半無意識にして悒鬱の人となる。隨うて或時は眞摯、或時は洒落、或時は深沈、或時は儇佻、他人のかゝる性格を見て彌〻信じがたしとする所以なり。唯〻それ他になづき易く、親しみ易し、故に能辯なり、sociable なり、滑脫なり、圓轉なり、變幻無窮なり、多方面なり。

總じて主觀性は現實界には其の性格上の必然の約束によりて兎角に安住の地を見出だすことを難んず、故に動もすれば厭世に傾き易く、悲觀に流れ易し、即ち

純乎たる悲劇の主人公なり。

客觀性は其の高卑大小を問はず、概して現實に安住す、其の下劣なるは喜劇の主人公にして、其の高上なるは自然を樂むの徒なり。豐年主義の徒もこゝに宿り、樂天の徒もまた之れに居る。

彼れに仙骨あらば、此れに俗骨あるべく、彼れ高くば、此れ廣かるべし。彼れ抒情詩人たるに適し、革新家たるに適せば、此れ叙事詩人たるに適し、保守家たるに適せん。

主觀性は、新文明の劈頭に生れて何等かの功を成すべく、新文明成熟の後にいでゝは、多少悲しむべき慘劇の主とならん。客觀性は、社會整頓の時代に生れて、多少有用の材たるべく、或は一世の師表たらん、誤りて新文明の劈頭に生れば、其の業ほと〳〵言ふに足らじ。

主觀性は秋月の如し、其の光に浴する者、淨光に照らされたる山川の美を言ふと共に必ず其の澤の源を仰ぐ。客觀性は春日の如し、人春日の麗らかなるを言ふも曾て空を仰ぐ者なし、即ち其の澤をたゝふるも其の源を忘るゝなり。例へばシェリーを讀むや、シェリーの性格と理想とを意識せざる能はず、スコットを讀むや、彼

れが傳を讀まずして誰れか能くスコットが性を知らん、一は高くして一は廣し。誰れか此の高大と廣大とを併せて詩界の晝夜を占領するものぞ。蓋し此の客觀性と此の主觀性とを不可思議にも双つながら併せ有して、はじめは抒情詩人として革新家として世に現れ、後に翻然として大覺し、叙事詩人の資と守成家の質とを兼ね具ふるに至らんものにあらずして、誰れか能く其の人なるを得ん。

所謂大劇詩家は此の種の人物より出づ。予は英のシェークスピヤに其の一例を見、獨のゲーテに其の形跡を見る。而してゲーテの竟にシェークスピヤたらざりしは、爲我的十九世紀の必然の影響に因るものなりと思ふは非か。

（明治三十一年九月）

文學研究法（講話筆記）

文學と云ふ語は曖昧多義で、人々に依つて意味を異にして居るが、概していへば、ごく廣い意味とごく狹い意味との二つである。ごく廣い意味でいへば、人の思想を記錄したものは皆文學で、書物と云ふことゝ殆ど同義で、著述と云ふ位の意

味。此の廣い意味でいへば、法令を集めたやうな著述、法律の解釋のやうなもの、或は醫學書類、或は物理學、化學、數學、天文學など云ふサイエンス類までが文學になる。偖又、ごく狹い意味に文學を解釋する人々もある。近頃の新聞雜誌などに見える文學者と云ふ言葉は、新體詩を作る人とか、或は小說を書く人といふ意味である。此の場合は詩歌小說と同義でごく狹い意味の文學である。

偖私が此處に用ふる文學と云ふ語は廣狹いづれの意味かと云ふと、廣い方でも狹い方でもない。何方と云へば其の中間である。私の定義では文學とは想像と感情とが主となつて出來た思想を記錄した者と云ふ義で、其の要素として是非共「想像」と云ふ元素と「感情」と云ふ元素とがなければならぬ。其の著述が出來る時にも想像と感情とが元となつて出來たのであるが、さて之れを讀む時にも亦た想像と感情とで向はねばならぬ。即ち想像と感情とより出でゝ想像と感情とに訴へる種類の著述を文學と云ふ。苟も想像力があり、苟も感情があつてさうして普通の智識のある者ならば、文學と云ふ名稱の下に屬する著述を讀んで分らぬ筈はなく、感動せぬ筈はない。男女、老幼、賢愚の區別なく、苟も情があり、想像があり、普通の智識がある以上は、必ず文學書を解し得る筈である。是れが

他の著述と文學書との違ふ第一の要點である。他の著述は讀者を限る傾がある。天文學の書とか、或は鑛物學とか、動物學とか云ふサイエンスの著述を讀む時には、豫め其の科に關する特別の智識を讀者が持つて居ねば分らぬと云ふ約束がある。彼の法律であるとか醫學の書類であるとかは豫め其の方面の智識を讀者が持つて居なければ了解が出來ないと云ふ性質のものであるが、文學書はそれとは違つて普通の人情、普通の智識を持つて居る限りは誰れにも分る。美術と同じく其の性質が普通であると云ふ所が文學の特質である。

要するに、凡そ文學書は、約して云へば、情に始りて情に終る者、情より出でゝ情に訴ふるものと斯う解釋してよろしい。故に詩歌小說は無論文學に屬する。詩歌小說のみならず其の外にも文學の中に入れ得らるゝ著述があらう。歷史や傳記のやうなもの、純粹の科學的研究の結果として出來たのでなく寧ろ感情の方が主になつて出來たといふやうな歷史、さう云ふ歷史類は文學書の中に入れても差支ない。例へば『太平記』の如きは本當の歷史とは云へぬが歷史の形を持つて居る文學書で、さりとて眞の小說でないが、其の作者の心には想像が主と働いてゐたらしい。勿論亂離の有樣に慨する所あつて、言はゞ暗黑時代の現象に

深く感ずる所あつてあゝ云ふものが出來たのであらう。即ち感情が元で出來たので、其の事實が半分以上は虛で、而もそれに拘らず一種の歷史、國民性の歷史で、文學書の中に入れてよい。感情で出來た書物ゆゑ讀む者も感情を以て臨まなければ其の眞味は分らない。或はカーライルの書いた歷史の如き、勿論事實を調べて書いたのであるから純乎たる想像の作ではないが、作者が彼の作をかいた時の心持ちは感情的である、隨つてカーライルの歷史を會得しやうと思へば作者の心持と同樣な感情と想像とを以て臨まなければ本當の意味は分らぬ。だから十分に文學書たる性質を持つて居るものと云つて宜しい。

さてかう云ふ風に解釋すれば論文の中にも文學的のものがあらう。道理を說明するを主として、講義風に綴つたものなどは、智が主になつて、情が主になつて居らぬから文學には入れられぬが、理を說くと同時に燃ゆるが如き情熱、或は燃ゆるが如き信仰があつて情に訴ふることの多い論文は、幾分か文學の性質を持つて居るのである。要するに、縱令情が主にならぬ迄も、想像が多分を占めぬまでも、想像の素が著く加はり、感情の素が著く加はつてゐれば、之れを文學の中に入れてさしつかへない。

右の解釋は餘り疎略で、餘り漠としてゐるかも知れぬが、假に今いつたやうに、文學を情より出でゝ情に訴へるを本領とする者とすれば、こゝに一の疑問が起る。其の樣なものが果して吾々人間に取つて大切なものであるか。それは果して研究する程の價値のあるものかといふ疑問が起る。

本來情は旨目なものではないか。所謂想像は往々にして妄想たるに止まるで、はないか。其の妄想より出來た、旨目の感情より出來た著述、それを研究する必要があるか。さやうなものにそれ程の價値を置くことが出來るか。文學を賞、翫、するとか、美術を嗜、好、するとかいふことは勿論あるべきことだが、研、究、するといふは合點がゆかぬ。人間の理性が造り出したものならば成程研究すべき價値もあらう。動植物の研究とか、或は天文學の研究とか、或は物理學の研究とか、或は心理學の研究とか、倫理學の研究とか、哲學の研究とか云ふことは道理があると思はれる、これらは人間の理性が造り出したものであるから其等に就いて研究を費し、彼れの云ふ所が眞理なるか、此れの言ふ所が眞理なるかを研究するのは尤ものことだと思はれるが、人間の一時の想像、一時の妄想が造り出した文學を賞、翫、するのではなく、研、究、するといふは心得がたい、如何なる必要があることと

か、どうも其の理が分らぬといふ人もあらう。が、此の情から出來たものを情で研究すると云ふことが甚だ必要である。

私は所謂理智とか理性とか云ふ者にのみ餘り重きを置くとが出來ぬ。勿論輕んじはせぬ、輕蔑はせぬが、理智とか理性と云ふもの計りでは、迚も天地人三才間の大事因緣は悟り盡すことは出來ぬと思ふ。手輕な例を擧げて見やうに、假に私は林檎と云ふ果實を食つたことのないものだと假定する。丸で林檎を食べたことも見たこともないと假定する。そこで或人が私の處へ來て私に林檎といふものを會得させる手段を考へるとする。どう云ふ手段を取るか。理智と云ふもの計りで理解させるとが出來やうか。林檎の形を說明するに、或は物理學の科語に依つて說明したり、或は數學を利用して說明したり、色々骨が折れやう、併しそればかりでは中々合點がさせにくからう。さうなつた場合には據なく、譬喩を用ひねばなるまい。譬喩とは何であるぞ。之れが即ち情に訴へる一方便である。林檎は圓いと云つて足らぬ時には柿のやうだとか蜜柑のやうだとか譬を引く。即ち心の眼に訴へるやうに林檎の恰好は蜜柑のやうであるとか、それから皮の工合は瓜のやうなものであるとかいふ譬喩を用ひねばならぬ。

其の他、味はどうかと云ふと梨に似て居るとか甜瓜に似て居るとか、「如ク」「似タリ」と云ふ言葉を使つて私の心眼に訴へる、即ち想像に訴へると云ふ手段を取らなければなるまい。想像は始め妄想だとけなしてゐた者も其の妄想を利用しなければ說明が出來ぬ譯になる。さてかういふ鹽梅に譬喩で以て林檎の色、形等は畧〻會得させる段になつても、尙正眞正銘のところが合點させにくい。甜瓜の味だと云つても本當の味ひは分らぬ、本當の味ひ、本當の色合などは私が直接手で觸れて見ぬ間は會得は出來ぬ。尤も想像の力で畧〻の所は分らうが、畧〻の處を分らすにすら私の想像に訴へなければなるまい。即ち林檎一つを私に會得させるのですら分析的方法ばかりでは迚も會得させることが出來ぬ、私の直覺に訴へると云ふ綜合的手段を取らねばならぬ。

又水を知らぬ人に水と云ふものを會得させやうとする時分にも、如何に之れを學理的に說明しても、水と云ふ思想を水を知らぬものに會得させることは殆ど出來ぬ。水を實際手に觸れたものでなければ水の眞相は分らぬ。山國の者には全く海を知らぬ者がある。私など現に中學校の一年生に於て其の例を見る。高等二年を卒業して居ながら海と云ふことの合點がゆかぬ者が澤山ある。小

學校に居る時分に教員が懇切に教へるであらうが、よくは合點せぬものと見える。或は湖の大いやうなものと教へるであらうが、湖はよほど大きな湖でも周圍に界がある。近江の湖でも界があるから、本當の海とは趣きが違ふ。近所に湖がある地方はまだよいが、それがない地方では定めし比喩に困るであらう。河とは違ふ、池とも違ふ、沼でもいけぬ。さうかといつて如何ほど說いても智に訴へたばかりでは尙わからぬ。彼の茫々として大きな海と云ふ思想を十分に得させるには、矢張遠い海まで連れて往つて直覺させるより外に仕方があるまい。尠くとも其の大なること、茫々として際涯を知らぬと云ふ趣き、此の一種の趣き、此の一種の味と云ふもの、言ひ換へれば海の旨味は直覺に賴らざれば會得させることが出來ぬ。海の形容組織は畧〻會得させることも出來やうが、其の旨味は會得させることが出來ぬ。

此の旨味といふもの、之れを世間の人は忽せにして居るが、之れが最も大切なものではないか。化學の作用で玉子を拵へて本物にまがふやうに造つても、無形の魂と云ふ味が添はなければ、其の玉子が死物なるが如く、天地人三才の有らゆる事物の理は知つても其の旨味がわからぬうちは、知らぬも同然である。それ

がわからなければ一知半解で、まだ眞に知つたのでない。まかも此の旨味といふ者は何時でも直感に訴へなければ分らぬ、直覺でなくてはわからぬ。此の理合はもう少し例を擧げたら通じやう。例へば當世の豪傑の噂などをする。先づ明治維新前後の政治界では彼の人、教育界では彼の男こそ俊傑だなぞと噂をする場合に、多分まづ其人の平生の行爲、其の爲す所、其の由る所、其の安んずる所などを考へて其の人柄を論ずるであらう。但し本當に其の人々を知らんとするには、人の噂や傳聞などではいかぬ、中々合點がゆかぬものである、會つて見て始めて分る。聞いたばかりでは疑がはしかつたり、感服し過ぎたりしてどうも本當の處が得知られぬが、唯〻一度でもよい、一時間位でよい、直接に話して見ると眞の人柄がわかる。成程エライ人であるとか、缺點もあるが長所もあるとかわかる。說明を要せぬ眉宇の間に品性が現れる、忽ち分る。是れが其の人の旨味を知ると云ふのである。吾々が西鄕南洲など云ふ人の噂は書物の上や人傳手には聞いて居るが、定めし直接に會つて見たらば多少それとは違つた所があらうと思ふ。即ち書物や人傳手に聞く以外に直覺を要するので、直覺は感情と想像との力でするので、此の直覺に依らぬ以上は本當の物の旨味は分らぬ。區

々たる小事ならば、分らうが分るまいが打棄てゝおいてもよいが、一體「自然」と云ふものは如何なるものであるか、一體「此の人間」と云ふものはどう云ふものであるか、「人間」と「自然」との關係はどう云ふ風になつて居るのであるかと云ふやうな大問題に吾々が接着した時分に、彼のサイエンス、彼のフィロソフィー計りに依賴してそれを知ることが出來ればよし、出來ぬ時分には甚だ心元ない次第だ。今日迄の經驗で見ると、哲學、科學の教ふる所のみでは天地人三才の骨髓を知ることは出來ぬ。天地人三才の形容、組織位は分るが、其の骨髓の「旨味」を會得することは出來ぬ。どうしたら此の旨味を知ることが出來やうか。

按ふに、其の「旨味」を知らせるものは即ち美術及び文學である。美術、文學即ち情より出でゝ情に訴ふるものゝ力を藉らざる以上は自然と人間との眞味は知ることが出來ぬ。又縱令自分だけはどうかして知ることが出來ても他人にそれを傳へることが出來ぬ。教育の任に當る我々は是に於て美術、文學と云ふものを利用する工夫を凝らさねばならぬ次第となる。縱令自分だけは天地人三才の骨髓を會得するも人に傳へることは出來ぬ。美術、文學の力を藉らねばならぬ。前にもいふ通り美術、文學でなければ富士山を說明しやうと思つても數學

化學の如きものでは說明が出來ぬ。畫か文學かを藉らねばならぬ。畫を藉りて來ると直ぐ分る。或は「白扇倒懸東海天」と云へば分る。心眼に訴へる、想像に訴へる。此の手段を藉りなければ一寸したことすら本當に會得させることは出來ぬ、まして人生の眞旨味と云ふ樣なことを會得させやうとおもへば、文學か美術の力を藉らねば會得させることが到底出來ぬ。富士山なら畫の力だけでもよいが、親の恩、或は君の恩、國の恩とか云ふ無形の大きな情愛などはどうしたら其の經驗のない者に會得させることが出來やうか。倫理を講ずる場合に、親に向つて孝行をしろ、君に向つて忠を盡せ、國に向つて愛國の念怠るべからずと說く。道理上「さうしなければならぬ、さう行へ」と云つて分析的に說くのは六ケ敷ことでないが、經驗のない子供に、成程親と云ふ者は忝い難有いものであるから親に向つて孝行が盡したいと云ふ情を起させるは難い。どうして其の親の恩の莫大なることを會得させやうか。情に訴へて會得させるより外に法はないであらう。さて其の手段は如何すべきか。子供に向つてそれ火をイヂルと火傷する、火は人を燒く力を持つて居ると、化學の作用を說明したら、子供が火イヂリをやめるであらうか。成程今日の子供は才があるから理だけは會得し

やう、併し自分が眞に火傷して見なければ本當の火の味を知らぬ故、やめはすまい。火傷させると、始めて合點する。火をイヂレといつても、もうイヂラぬ。さてこゝだ。火傷させねばどうしてもこゝに至らぬ者であらうか。何か譬喩を用ひて火の恐ろしいことを悟らしむる事は出來まいか。之れを悟らしむるには火傷して苦しむ畫を生けるが如く描いて見せるか、然らざれば文學者の筆を藉りて火傷をして苦む情を寫すか、外に手段はあるまい。畢竟、當人の情に訴へて會得させなければ、智惠で會得したのは存外に効能が薄い。彼の「浮世は儘ならぬ者だ」と云ふ言葉は、昔からの言葉で、今日は小供も會得して居るが、此の世の中に出て來て煩悶し、苦惱し、失敗し、奮勵してからでなくては、其の眞義はわからぬ。或は「放蕩無賴は惡い」と云ふとはよう會得してゐる、加之、伯父にも意見された、而も放蕩無賴を止めない。自分に惡いと思ひ乍ら止めないのかと云ふと、さうでない。實は本當に惡と思はないからである。本當に惡いと思へば廢るのであるが、本當にはさう思はない。或倫理學者の云ふ如く、眞に惡と知れば惡をせぬ、眞に惡と思はないから、一知半解だから、良心で心持は惡いがナーニ惡くあるまいと云ふので、大概は惡を爲すので、ソクラテス程分つたら誰れが惡をしやう。未て見れば、情で會得させるのが一番必要ではないか。就中倫理教育上から見れば、一番必要ではないか。情で會得させなければ、百萬言の訓誡も一文の價値がない。然るに其の情で會得させる唯一の手段は何ぞといふと、それが即ち文學であらうと思ふ。若し爰に兩親が血の汗、血の涙を流して子の爲に苦勞をして居る趣を有りの儘眼の前に現るゝ如く畫き出す力ある文章があつたならば、不孝者も多少の孝の情を動かすであらうと思ふ。只さういふ文學が古往今來存外に乏しいと云ふだけで、文學にかゝる力のあることは疑ひもない事實だ。」聊か話が外れるが、例にはならうと思ふからいふが、彼の團十郎の芝居に往々不服なのは其處だ。芝居は美術であつて、眼に見えぬ所の情の味を有形にして見せるから之れを美術と云ふのである。例へば、英雄の苦しみは吾々どんなものだか知らぬ。匹夫匹婦の苦しむ樣子は表面に現はれるから分るが、英雄豪傑の苦しみは實際に於ては內に隱して現さぬから分らぬ。併し英雄でも煩悶はある筈、其の煩悶を有形にするのが美術の力である。美術は寫實が趣意で無い、實際に見られぬものを有形にして見せるのが美術の價値である。然るに團十郎は往々にして實際の通りやつて仕舞ふ。英雄が心の苦しみは斯う云ふものだ、

實際に見えぬが假に隱微を開いて見せれば斯うだと云つて、生きた解剖をして煩悶を見せてくれねばつまらぬではないか。文學も其の通りで寫實が趣意ではない。否普通の實際に於て見えない心の苦しみを生けるが如く眼前に浮いて出る樣に見せるのが主意である。如何なる不孝者も兩親が暗涙にむせんで子の事を心配して居る眞夜中の心の苦しみ、其の話の一伍一什を若し生けるがごとく書き出した著作を讀ましたならば、多少感ずる所があるであらうと思ふ。「子を持つて知る親の恩」とは自分が子を持つて見て煩悶苦惱して、我が親も此の通りであつたらうと云ふことを經驗するから分るので、子を持つて自分が經驗する時と同じやうな工合に鋭く同感を喚起し得る人情小說が出來たらば、實際經驗せずして多少經驗したと同樣な結果を得さうな者ではあるまいか。海嘯に遭はぬ人は海嘯の恐ろしさを知らぬ。地震に遭はぬ者は地震の恐ろしさを知らぬ。若し此處に畫があつて、大海嘯の畫が油畫で書いてあつて、すばらしい凄いありさまを書いてあつて、今にも浪が來るやうで、こゝに裸體の女が髮ふりみだして漂うて居る、あちらには老人が松の木に勞かれて居る、向うの岩には若い男がぶつかつて腦味噌がとび出してゐると云ふやうなのをみせられたら、今

まで海嘯に平氣なものも多少戰慄するであらう。それが即ち畫の魔力で、經驗したやうな感を起させる。例を擧げてゐると限りがないが、先づさう云ふやうな働をして經驗しないものに經驗したと同樣の感じを與へると云ふが文學の（必ずしも目的ではないが）たしかに其の主要なる効用である。美術の効用もまたそこにあるであらう。

果して然らば、文學の大なるもの、美術の大なるものをよく〳〵研究したならば、或は自然、人間の眞旨味即ち他の理化學、哲學などの未だ知り得ない所の眞旨味を或は知るに近くはあるまいか。但し美術家も、文學者も、專ら想像と感情とに賴つて天地人三才を見る者であつて、而して所謂情は旨目で、所謂想像は妄想に流れ易いものとして見れば、彼等の所爲所造は無論輕々しく信ずることは出來ぬ。兎角詩人や美術家には狂氣染みた者が多い。彼等は感情で出來て居る人間で、旨者が眼がない爲め「感」がよい如くに情ばかり發達して居る氣味がある。要するに美術家や小說家は感情で是非善惡を決する輩であるから、彼等のいふことは勿論輕々しくは信ぜられぬ。現に詩人などは厭世に傾き易い、蓋し感情が烈しいから世の中に出ると衝突する、すると克己力が薄弱だから、忽ち大に悲

傷し、挫折して此の世は厭ふべきものだとか、不義の輩ばかり住んで居るとか、惡魔の世界だとか云ふ。要するに自分定規の判斷が多いから當にならぬ。それ故或る一人の文學者又は一人の美術家の言つたことを其の儘に採用することは頗る危險である。取捨選擇しなければならぬ。さて然らばどう選んだらば宜いかといふに、是に至つて所謂代表的文學、代表的美術といふものを研究する必要が生じて來る譯になる。

代表的文學とは何であるか。例を擧げて云ふならば、日本でいふと、藤原氏權を專にした時代の代表文學は『源氏物語』、鎌倉時代の代表文學は『平家物語』、『源平盛衰記』、足利時代の代表文學は「謠曲」、德川時代に於ける代表文學は「近松」である、「芭蕉」である、「馬琴」であると云ふ鹽梅である。何故これらを代表文學と稱するかと云ふに、蓋し一番當時に持囃されたといふ文學は取りも直さず其の時代の人々に大概同感された文學だ。即ち『源語』に寫された人生は、獨り紫式部の味つた人生の味ひたるに止まらずして、其の時代の人々全體があゝ云ふ風に味つたればこそあの物語が持囃されたのであらう。扨又足利時代に「謠曲」と云ふ陰氣の物語が持囃されたのは、啻に「謠曲」作者自らがさう味つたのでなく、其の社會全體が

陰氣な風に人生を味つたものと見える。祇園精舍の鐘の聲諸行無常と告げ渡ると味つたのは『平家物語』の作者であるが、あれを持囃したのを見ると其の時代の人々皆厭世的に人生を味つて居たものと見える。是れが即ち代表文學である。要するに、一人の味つた所より衆人の味つた所に依る方が穩當であるから、吾々が文學を研究するに當りては先づ代表文學を取ることが必要である。文學研究と云ふは取りも直さず代表文學の研究と云ふことである。

偖本題に入つて文學の研究法と云ふことを話すに當つては、敢て新しいことをいふのではない。近頃英吉利や佛蘭西などの學者が普通に用ひて居る方法を話すに止まるので、私の發明でもなんでもない。私の嘗て讀んだ研究法のうちで英吉利のエドワード、ダウデンと云ふ人のは嘗て悅んで讀んだものゝ一つゆゑ、其の論を今日は紹介して置かうと思ふので、最もこゝでいふのはダウデン氏の言葉通りではない。大體はそれに縋つていふが、例を擧げたり註解を施すのは私の勝手である。且つまた私の考に依つて增減する所もあらう。それは含んで置いてもらひたい。

さて今がた言つたやうな趣意で代表文學の研究に取掛るに先つて豫備智識と

もいふべきものが二種どうしても要る。それ丈の智識は是非なければ文學研究は出來ぬ。其の豫備智識とは何かと云ふと、文學史の大體の智識で、世界の文學はどう云ふ風な變遷を今迄に經て來て居るかといふとで、歴史と云ふと大層のやうであるが、世界文學の大體の變遷丈は豫備智識として知つてゐて貰ひたい。從來我國の學者も隨分『源氏物語』の研究をしたり『徒々草』の研究をした者であるが、惜いかな唯〻日本斗りの文學を眼中に置いて、偶〻區域を廣めても漸く支那、支那まで十分廣げた人すら乏しい。日本の文學のみを土臺標準に置いて研究してゐるから、其の研究が甚だ狹隘淺膚である。初手から『源氏物語』程の大著述はないといふ。成程日本にはないのであるが、支那にはあるかも知れぬ。又西洋諸國にはあるかも知れぬ。世界文學の歴史思想が聊かもないから言ふことに價値がなくなる。兎に角西洋の文學はどう云ふ風に開けて來たのであるか、東洋の文學はどう云ふ風に開けて來たのであるかと云ふ位の大體は、研究にかゝる前に知つてゐて貰ひたい。希臘時代、羅馬時代の作者はどうであつたか、中古時代は如何、近世佛蘭西革命後の文學はどう云ふ方針を採つたか位は、どうしても知つて貰はなければならぬ。只此事を勸めるに當つて困るのはさう

云ふ本がないことで、それは甚だ結構だ、全世界文學の大體の智識を得たうございますから參考書をどうかと尋ねられると、辟易する。世界文學史といつてはスキントン程度でも何でも宜しいといつても、スキントンほどの世界文學史さへない。是れが甚だ困る譯であるが、兎に角本當に文學を研究しやうと云ふのならば、どうか云ふ手段で世界文學の大體の歴史を了知するとが必要である。さて第二には自分が特に調べやうと思ふ國の文學史、是れは出來るならば頗る精しく調べて貰ひたい。例へば、我國の文學『源氏物語』と云ふやうなものを研究するとする。即ち『源氏物語』に依つて藤原時代の宇宙觀、人生觀を知らうと云ふので、研究に取りかゝるとすると、是非日本文學史を豫め調べてさて着手して貰ひたい。古くは『古事記』時代から『萬葉』『古今』の流に沿つて調べて貰ひたい。尠くも鎌倉時代まで位は脈絡を通じて調べて貰ひたい。或はまた直に外國の文學例へば、英吉利のスペンサアの作又はシェークスピヤの作を研究せんとするには、英吉利文學の大體がどう云ふ潮流に沿つて變遷し來つたかと云ふことを豫め調べて、それから當の物の研究をして貰ひたい。是れが所謂豫備智識。まだ豫備の智識は色々あるが、先づそれ丈あつたら研究に掛かれぬことはない。

此處が文學が他の物と違ふ所で、他の動植物の學とか、或は天文學とか、或は法律學であれば、色々專門語と云ふものがあつて研究に掛る前に其の學問其物に就いての大體の專門語を學ばなければならぬが、文學にはそれは要らぬ。本當の肝腎なことは情を味ふのだから、專門語は要らぬ。今言つた大體の文學の流れさへわかれば研究に掛れるわけである。

偖是れから研究の第一着「文學を研究しやうと志すにはどうして宜いか」といふ問題に移るが、手當り放題に無闇に搔廻すわけにはゆかぬから、何か代表文學を一つ取つて見ねばならぬが、代表文學と云へば「馬琴」の作とか、「近松」の作とか、「紫式部」の作などが代表文學であるが、大きな代表文學を初手から悉く研究しやうとしても、近松の作も色々あり、馬琴に至つては尙澤山あるから、一度には出來ぬ。何か其の中の一つを取るがよい。作の中の代表的作物を取るが宜い。例へば、馬琴ならば『八犬傳』を取るがよい。蓋し其の一つは成るべく完備した作がよい。『美少年錄』『俠客傳』などはいけぬ、結局が付いて居らぬから。結局の付いて居ぬものを取つては本當の調べが出來ぬ。『夢想兵衞』のやうな小さな作でもよい、完備したものを取つて研究するがよい。「西鶴」ならば『一代男』とか『一代女』とかいよ

ろしい。色々一時に試みてはいけぬ。近松なら近松計り、馬琴なら馬琴計りを、一つに限つて、一時に一部と限つて、例へば、『夢想兵衞』ならばそれ計りがよい。『夢想兵衞』に『八犬傳』『俊寛島物語』など、一緒にやつてはいけぬ。

さて研究するにはどうすべきか。唯〻讀むのであるか。唯〻讀むのではない。是れには自から順序がある。

(一)表面上、形式上の研究である。これを細別すると

甲　訓詁註釋

乙　衍字、謬讀等の取調

丙　當時の風俗、習慣等の參酌

丁　由來の取調

先づ表面上、形式上の研究から始めるが順序である。能く本を讀むに、文字上の事はどうでもよい、精神を讀めなど云ふ人がある。如何さま精神を讀むのはよいことだ、併し文字を讀まずに精神が讀めるか。古の著述であれば寫し違へもあれば、讀み違へもある。『萬葉集』などには色々書き違へや誤讀がある。そんなのは一々正してかゝらねばならぬ。或は同じ言葉であつても古と今とでは意

味の違ふことがあらう。「モノカラ」と云ふ語なども今と昔とは違ふ。若しそれを今の意味で解釋すると全體に狂ひを生ずる。或は文章の中に當時の風俗に關することがある。「ツキン」と云つても「オビ」と云つても「ワン」と云つても皆今の品とは違ふことがあらう。『宇治拾遺』などに見えてゐる器具を吾々が今日用ふる器具調度と思ふと一毫の誤り千里の差を爲すことがないとも云へぬ。又當時の習慣に連關した言葉もある。當時の習慣と云ふものを會得しなければ其の言葉の本意が分らぬことがあらう。其等も注意しなければならぬ。又其の作がどう云ふ所から來つたのか、出來たのは全く其の作者の頭から想像で造り出したか、浦島の話の如きも支那の方から來たのか、或は日本固有の話かなどと云ふことまで研究をしなければ眞味がわかるまい。是等はほんの研究の初歩であるが、畢竟只管精神ばかり讀むといふ讀方ではいけぬ。其の說明に、此處に假に四箇條だけ並べたが、無論四箇條に止まらぬ。出來るならば四方八面から研究するがよい。さて之れが濟むと內部の研究に移ることになる。是れは

(二) 內面的精神的の研究と名づけるので

甲　修辭上の研究

乙　脚色(組織)の研究

丙　人物等の批判

修辭と云ふのは文章の善し惡しを論ずるので、此の文は頗るよく意を盡して居るとか、文情相伴つて居るとか云ふことの取調に及ぶので、それから仕組が能く出來て居るとか、段取が能く出來て居るとか、人物が如何にも實際の人物らしいとか、英雄らしいとか、當時の尙武時代、戰國時代の狀況は如何にも斯の如きものであらうと思はれるとかいふやうな評に及ぶ。乍併表面上の研究から內面上の研究に移る間に、まだ色々仕事がある。其の中一つは朗讀法である。是れは我國人が從來輕んじて居たことであつたが、頗る大切なことゝ思ふ。外の事には大切でないか知らぬが、文學を研究するには中々大切なをだ。蓋し朗讀法を利用しなければ文學の內面的研究、精神的研究は到底本當には行はれない。それは何故かと云ふと、前に言つた通り、總て文學書と云ふものは情に訴へるやうに出來て居るから、隨つてそこに用ひてある言葉は活きてゐる、就中傑作に至つては活きて居る。皆活きて居る言葉では、あるが、讀み方次第で死んで仕舞ふ。讀み方が惡ければ活きて居る言葉が死んで仕舞ふ。讀み方が死活の境を爲すの

である。就中小說、脚本に至つては讀み方次第で詰らぬものにもなれば面白いものにもなる。其の證據は……最もこの點は實際問題で、讀んで見ねば分らぬが、說明ばかりでは分らぬが、假に芝居で例を擧げて見やうならば

團十郎が先達て文覺上人を演じた。あれは依田學海さんが書かれたのである。文覺上人が仙洞の御所へ往つて亂暴を働いて衞士に縛られる、其の時侍が「亂暴な坊主め、今に酷い目に會してやる、今に泣面かゝして吳れる」と云ふ筋をいふと、團十郎の文覺が傲然として、只一言「覺束ない」と云ふ。唯〻讀むとつまらぬが、團十郎の口吻を藉りて、文覺上人の心持になつて、オボーツカーナイ……といふ樣なユトリのある冷嘲の意を含んだ調子でいふと活きてくる。まだある。爲朝であつたか、馬琴の作の爲朝が、島で凧を上げる所がある。小供を凧に縛り付けて上げて、刀を拔いて切ちうとする。家來や細君が狼狽して泣いて留める。どうぞ思ひ止まつて吳れと云つて留めるが、どうしても聞かぬ、鬼夜叉が附きまつて色々にいふが、どうしても聞かぬ。それでもシツコクいふと、爲朝が腹を立つて只一言「クドイ」といふ。只讀めばクドイ……何でもない。併しクドーイ……と太く强く長くいふと、向ふ正面まで唸らせる。團十郎にやらせれば畧〻さう

いふ讀方にやる。この心持で讀まねばいかぬ。私共の拵へる粗末な本でも其の氣で讀んでくれる慈善家があつたら多少面白からう。「ベンケイガナギナタヲモツテ」と云ふ風に讀まれたら、文學もヘチマもない。此處は緩に讀む、此處は急に讀む、此處は悲しく讀み、此處は面白く讀むと云ふ、其の區別が出來なければ本當の味は分らぬ。要するに內容の研究をしやうと云ふには、朗讀法の研究をもして貰ひたい。何も役者の聲色を使ふのではない、必ずしもお婆さんや女小供の聲色を使つて讀めと云ふのではないが、略〻其の心持を以て讀むのである。さて是れ丈ざつと濟むと、そこで始めて所謂批評に取りかゝることが出來る。そも〳〵批評と云ふものは普通人がするやうに强ちに善し惡しを云ふのが批評の正法ではない。何故かと云ふと一體吾々が文學を研究するのは善いか惡いかと云ふことを判定するよりも自然及び人間の眞味をその書がどの位まで正しく傳へて居るか、此の作者はどの位まで自然を解釋して居るか、人生を解釋して居るか、どの位まで描き得て居るかと云ふことを見るのが主であるから批評と云ふよりは解釋と云ふことを主とすべきである。例へば、馬琴はどう云ふ風に人生を見て居るか彼れは戀と云ふことをどう解釋して居るか、人間の一番

大切な者は何だとして居るかと云ふ風に、馬琴の心を解釋し、馬琴の味つた鹽梅を解釋するが研究の第二段である。之れを名けて批判及び解釋と云ふ。さて此の段階に入ると、又どうして馬琴は斯やうな風に解釋を下したか、如何して斯う巧に描き出したかと云ふ疑問が起る。即ち其の作の出來た源を知り盡したいと云ふ慾が起る。之れは自然の情である。吾々は一の武器を見て、良い器械だと思ふと、勢ひどうして出來たかと云ふことに遡らざるを得ぬ。蓋し根元まで遡らなければ本當のことは分らぬ。されば批判及び解釋の次に原因調べといふことが來る。

(三)原因研究

甲　內的比照(年代的研究)即ち性習閱歷(傳)の取調

乙　外的比照(他の同代作家との比較)當代の特質(史)の取調

馬琴なり、西鶴なり、近松なり、紫式部なりの作を吾々が取調べて其の一部丈を取調べて、非凡な作である、立派な作である、能く畫き出されてあると感服すると、又どうして斯う云ふ作を作り出したか、所謂天才の然らしむる所であるか、或は別に由つて來る所あるかと疑を抱く。それを調べるには內的比照即ち作者の內部に就いて較べて往く法がある。すべて作者の作は一つきりではない、幾つもあらうから其の作者の作を一々較べて見る。馬琴で云ふならば、若し『八犬傳』に感心するとすれば『八犬傳』に比照すべき『美少年錄』とか『俠客傳』とかを比べて、彼此相通ずる所があるならば其の相通ずる所を、相異る所あらば其の相異る所を精査する。それをするには年代的研究と云ふ法がある。何故年代研究法を用ふるかと云ふと、天才と雖も、全く偶然にさう云ふ傑作を拵へる者とも思はれぬ、天才の發達するにも順序があり、次第がありさうであるから、一番先の作から年代を追つて調べると、自から天才の發達又其の作の出來た樣子が分る譯である。西洋ではシェークスピヤ、ゲーテを研究するのに此の手段でやる。まづ傳を調べる。どう云ふ遺傳で、どう云ふ生れ付き、どう云ふ習慣で、どう云ふ周圍に育つたかと云ふことを調べる。さうして往かねば其の作者の本當の人生觀を見ることが出來ぬ。そも〳〵吾々が文學を研究するのは自然觀、人生觀を知らんが爲めである。哲學的思索のみでは分らぬから、文學に就いて自然觀、人生觀を得やうとするのであるが、唯〻其の人の一時の出來心、一時の偶感では詰らぬから、其の作者の一代に涉つて動かぬ所を調べなければならぬ。一代に涉つて調べるとゲ

ーテは斯う、シェークスピヤは斯う、ウォオヅヲオスは、バイロンは、シェリーは、ブラウニングはと、一々其の作者の人生觀及び自然觀が分るが、さて尙能く念を入れて考へて來ると、それは其の人一個の考か、或は其の時代の人皆の考か、或は其の時代の人が皆さう云ふ考を持つて居つた爲に、此の作者も一時の流行熱に浮されてかやうに歌つたのではないかと云ふ疑なども起らねばならぬ。そこでまた他の同時代の作者と較べて考へて見る必要が生ずる。外の著述との比照を行ふ必要が起る。例へば、近松を本當に吾々が知らんとする時分には、先づ近松の世話物から始めて世話物時代の近松を研究し、さて又時代物時代の近松を研究する。それでもまだ仕舞にはならぬ。近松が斯う云ふものを拵へたのは、何か時勢に由來する所がありはせぬかと、芭蕉と較べる。芭蕉と比べるには芭蕉を盡く調べる。それで尙滿足が出來なければ西鶴と比べる。西鶴の作を盡く調べる。それが外的比照である。比べて見ると、西鶴と近松、近松と芭蕉の間に通ずる所があり、異なる所があらう。どう云ふ譯で近松に斯う云ふ所があるが、西鶴に斯う云ふ所がないか、芭蕉に斯う云ふ所があるが、近松、西鶴には缺けて居るかと云ふことを知らんとすれば、當代の特質に調べ及んで來なければならぬ。斯う

一面異つて居ながら、一面相通ずる所があるのはどう云ふのか、元祿時代が然らしむるのであるか、然らば元祿時代とはどう云ふ時代であるかと考へ及んで來ると、當時の政治的歷史に迄及ばなければならぬやうになる。風俗にまでも及ばなければならぬやうになる。

前に普通の智識さへあれば文學の研究は出來ると云ひましたが、本當の文學研究となると色々の知識が入用になるので、修辭學も、心理學も、審美學も入用である。文學史は勿論、文明史も、風俗史も、政治史も入用である。元祿時代と云ふものは偶然出來たものでない。元祿時代は元龜天正の結果である。宜しい、シテその元龜、天正は如何して生じたかとかう尋ねる段になると、足利時代までも遡らなければ分らぬ。遂に日本歷史盡くを調べなければならぬ樣になる。殊に元祿時代にあゝ云ふ風に文化が進んだのは、何か外國との關係はないかと疑ひはじめ、外國の影響にまでも考へ及んで往かなければならぬやうになる。

今日から百年も後になつたならば、今の作家連が明治時代の代表文學者になるのであらうが、今の作家を我々の孫や曾孫が研究する場合には、英吉利の文學とはどう云ふ關係がある、佛蘭西とはどう、露西亞とはどう、獨乙とはどう、伊太利、西

班牙とはどうなどゝ、頗る複雜な外國の影響を調べなければなるまい。外國の影響感化と云ふことは文學研究法の一段階である。さてそれが濟んでも尙所謂哲學上から判斷を下さぬうちは眞の判斷が付かぬわけである。即ち研究はしたが締りが付かぬやうな具合だから、一番仕舞の大判斷は自分の持つて居る人生觀即ち哲學上の意見で判斷を加へねばならぬとなると中々大事業。

さて〳〵文學の研究は大變易いやうであつて、仕舞はとんだ六ヶ敷高尙なことになる。入り易くして至り難いのが文學の研究である。入り易ければこそ、學校で一年か二年學んでも文學の批評が出來る。併し後世までも傳はる批評は實にすくない、曉天の星の如くすくない。

以上述べたところは、主として文學を一種の研究すべき當對（オブヂエクト）として論じたので、文學の目的、本領等はこゝに言つたことに盡きてゐぬのは勿論のことであるゆゑ、その邊はよく合點しておいて貰ひたい。

さて尙研究法に關しても委しく言へば幾らも言ふことはあるが、大體は先づかやうで、研究法の順序だけは是れで盡きた。この話は一まづこの位で結局といたしませう。

（明治三十二年四月）

學說と私交

人々の思想は其の面の如く殊なり、意氣見解吻合せざればとて交を絕たば、天下の廣きも恐らくは一人の朋無からん、須からく正邪淑慝をこそ人を取舍する唯一の標準となすべけれ、意氣見解の逕庭の如きは私交に關係を及ぼすべきものにあらじ。例へば、學藝上の論爭は眞理の爲なり、絕對眞理の闡明せられざるや、個々論斷の相牴牾すべきは必然の結果にして、彼此相切磋するは究竟眞理に到るべき須要の手段なり。何者の愚か論爭の廢すべからざる理を認めざらん。理に悖り世を誤る虞れあらんか、親友の說も痛駁して可なり、只〻其の間に恩怨の私意を挾むとあらんを憚るべきのみ。隨うて敵者の意至理の闡明を期するに外ならざる限りは、假令其の說は謬妄にして或は世を誤る虞れあらんも、之れを目して故意に世を賊ふ者となし又は我が私交上の仇となす必要なし。其の本體より言へば學藝上の論爭は毫も私交上に關係を及ぼすべきものにあらざ

ればなり。

然るに世上の實際を觀れば、此の混ずべからざる分別の、或は全く破却せられて論敵即ち私仇たることあり、或は此の分別を口實として(?)筆には甚しき品性上に關する侮辱と嘲罵とを相報いながら、其の相會するや談笑舊の如く、恬然として相交るものあり。前者の固陋は世間或は之れを說く者あり、後者の矯飾は人或は之れを文明風の交際となして紳士的雅量となす。吾人は思ふ、此の矯飾の眞文明を蠱毒するや彼の固陋に異なることなしと。

蓋し按ふに、相論難するに當りて彼れ我れを駁して汝の說迂なりといひ、汝の論世を誤らんといふは見解の異なるより生ずる必然の結果なれば、言の論理上の非難に止まる間は我れ之れに對して憤怨を感ずべきに非ず、然れども彼我相激し相熱するに及びては、言論往々にして埒の外に逸し、非難或は品性上に及び、甚しきに至りては猜疑臆測、ほしいまゝに敵者の意を曲解して只管勝を論戰上に收めんと欲する者あり。此の場合に至らば、前に謂ふ所の分別を重んずる者は如何になすべきか。論の我が眞目的たる學藝の埒外に逸したるを認めて筆を投じ口を噤むべきか。將た敵の用ふる利器を取りて更に之れに應ずべきか。

筆を投じ口を噤むは學藝上以外には其の論敵に對して恩怨無く、隨うて相鬪はんと欲する意なきことを明かにする也。此の際に於て依然其の舊交を繼ぎ、相交り相歡笑する、何の非かあらん。敵者の心は知らず、我が情誼は尙依然たればなり。然れども敵の嘲罵に報ゆるに我れもまた同樣の嘲罵を以てし、彼れ我れを小人と罵れば我れまた彼れを賊子と詈らんか、是れ明かに學藝上の爭ひに非ずして人品上の論爭なり。古の武夫は「汝虛言す」と罵られては立地に劒を拔きにき。小人賊子と相罵りて後に尙能く相交るものあらば吾人は之れを矯飾と疑ひ、殆ど廉耻を重んぜざる者と疑ふの止むを得ざるに至らんとするなり。

汝の作は拙なりと言ひ、汝の論は迂なりといひ、汝の作意は不健全なりといひ、汝は老朽せりといふ、もとより未だ品性上の評となすべからず、されども汝が行ふ所は常に輕薄なりといひ、汝の性は鄙吝なりといひ、汝は常に私利の爲にすといふに至りては、是れ明かに品性上の評なり。彼れの我れを賤み我れを憎むの意明かなるにあらずや。此の際尙私交を繼がんと欲せんか、先づ公に其の誣妄を明かにし、且つ彼れをして明かに其の非を覺らしめ、或方法によりて其の罪を謝せしめざるべからず、然るに絕えて其の事無く、剩へ互ひに品性上の嘲罵を應酬

し、加之正邪を決するに及ばずして相歡晤し、恬として相交り相談笑するものあらんか、之れを評して士君子の雅量といふべきか、抑〻また小人の矯飾に類する者といふべきか。

凡そ論談に公、私の二あり。私とは閑室の批評又は論爭なり、こゝに其の知人又は友人を罵りて小人と言ふ、或は信友間の私語又は心友の激語と見るべく、若しくは一場の戯言となすを得んすなはち斯くの如きはこゝに是非すべき限りにあらず。然れども彼の新聞紙、雜誌上の論評、こは論評の公なるもの也、朋友間の戯談、私語を以て目すべからざる也譬へば公衆環睹すなる白日　頭の論爭のごとし。爰に相罵りて小人と做し、奸才子と言ふ、假令一時の激語に外ならずとするも、舌一たび逸しては駟もまた及ぶべからざるなり。罵りし者はいふまでもなく、其の言の責を負ふべく、要められなば其の的證を供せざるべからず、而して互ひに其の言の誣妄なりしを環睹の公衆に對つて明白にし、其の再び相和するに至りし所以を環睹の公衆に對つて明かにするにあらずば義として相和同すべからざる筈なり、何となれば所謂道義上の批判をして其の神聖なる威靈を失墜せし、輕々しく讒誣を口にするの弊を誘致せんことを患ふれ　なり。

私の論爭は、就中、其の意の忠誠に出づる場合には、或は甚しき激語を用ふるも尚相互の德をそこなはざることあれども、公の論爭は然らず、其の影響する所の當の人にのみとゞまらざるを思ひ、且つ其の相論爭するに至りし由來の世人には詳悉せられがたく、概して誤解せられ易く、加ふるに公衆の心に映ずる勝劣の必ずしも是非正邪の本體によりてのみ定められざることを思はゞ、所謂公の論爭には毎に最も言責を重んじ、其の筆を愼まざる可からざる勿論なり。然るに今の論者、或は此の理を逆まにし、私談に於ては言を愼み若しくは默從し、公談に於ては極言激語を使ひて妄斷臆測をほしいまゝにす。士の禮を紊る者にあらずや。之れを要するに、前に謂へるが如き矯飾的雅量にして跡を絶たざらんか、眞の雅量は之れと混同せられんことを病みて或は固陋に流るゝに至らんも知るべからず。今の論壇に成ずる所ありて此の文を作る。

（明治三十一年四月）

社會の制裁と讒誣の懲罰

法律以外に風紀、人倫を統理するもの丶殆ど存在せざるが如く思念せられんとする今日にありては、吾人は所謂社會的制裁の嚴として行はれんを欲することは甚だ切也。不義の實著く、敗德の證明かなる輩にして、單に法網をまぬかれ得たる故にのみ恬然として世間に位置を保ち、剩へ、紳士、學者として待遇せらるゝもの、政治界に實業界に、文藝界に、其の他あらゆる社會に其の人尠しとなすべからざる今の社會、之れを道義的制裁ある社會の狀態といふべきか。吾人は人間の性の脆弱なるを知る、過失は人の性の必然なるを知る、一旦の過失の爲の故に人を取舍せんとはせざるなり、然れども改悛の必要を感ぜしめざる寬大と懺悔の實を要求せざる仁恕と是非を曖昧に附する風習とは、一面當社會の風紀を紊り、一面、次ぎ來たるべき社會に惡感化を及ぼすこと較著なれば、前過の未だ償はれざるや、吾人は社會的制裁の嚴然有罪者の身上に行はれんを欲する也。假令法網には觸れざらんも、其の者の行爲にして明かに道義に戻らば、苟も士君子を以て居らんとする輩は之れと共に齒するを恥ぢ、相語るを憚り、相親しむを厭ふの

概あらまほしきなり。若し之れを今の全社會に望むべからずとせば、せめても、學者、文人、宗教家、美術家、即ち專ら精神界の事業に心身を獻ずる者の社會には此の般の覺悟あらまほしきなり。

されども眞に此の事をして行はれしめんとせば、他方に嚴重なる讒誣の懲罰法無かるべかず、讒誣を懲罰する法の行はれざる社會には輿論の制裁の行はるべき筈も無く、若しも行はるれば、弊害限りなく生じぬべし。我が今日の新聞紙、雜誌を見るに、士君子の筆にすべからざる罵詈誹謗の、而も或は全く本づく所無く、或は針小なるを棒大に誇張せる者の、殆ど毎號に、甚しきは毎ページに記さるゝこと珍らしからず。若し之れを實として取舍せんとせば、吾人は日ならずして、殆ど全世間の交際を脫離せざるを得ざる如く感ずるに至るべし。されど讒誣は我が今日の文壇にては無罪視せらるゝ特權なり、唯〻それ無罪なり、無罰なり、故に如何なる無責任なる讒誣を逞うするに至らんも測り知るべからず。或は之れに憤怒して名譽損害の訴訟を起さんか、手數失費は徒らに多くして毀れたる名譽は之れを復するに由なき例、比々として之れを實驗に見る。損害要償を巨額の金員によりて要求せざる我が國の習慣は當の讒誣者をして單に實質上

の損耗若しくは困厄をすらも感ぜしむる能はずして止むなり。此の闕典あるが故に稍〻斟酌ある局外者の心は、新聞紙上の罵詈誹謗を目にする毎に、必然の結果として、峻嚴なる能はず、若しくは半信半疑ならざるを得ず、是れ所謂社會的制裁をしてます〳〵行はれがたからしむる所以の一なり。

蓋し此の二闕典ならびに存するが爲に、慷慨の聲も讒誣と誤解せられ、雅量の君子も矯飾の小人と混同せらる。之れが爲に淺智は奸猾を重んじ、無經驗の少年は或は誤つて厭世の感を生ず。其の弊少しといふべからざる也。さ　あれ是くの如きは畢竟するに不具世態の常習、かく歎ずるは迂愚の至りならん、但我が純文學の文壇にだに此の種の讒誣をほしいまゝにする者、漸く將に增加せんとする、是れ果して何の徵ぞ。當代の最醇なる感情と最賢なる思想とを代表すべき純文壇が俗文壇の弊習を襲ふの時は、知らず、其の慶せらるべき時か、將た弔せらるべき時か。

（明治三十一年四月）

演劇刷新の唯一策

噂久しき芝居改良の音沙汰も今は跡かたなく立ち消えて、年ごとに建ち加はりゆく劇部の繁昌、役者も脚色も昔し乍ちなれど、新參の芝居好雲霞の如く、見物減少の懸念絶えて無ければ、彼の活歴黨といふ謀叛人も辛うじて殘喘を直垂水干の紐に繫ぎ、西洋劇崇拜の大將株もおひ〳〵洋行歸りのシャツポをぬいで歌舞伎の木戸口に降參申のけふこのごろ、當年とつて二十何歳の審美學者といふ荒事師ひとり繪招牌を斜に睨んで、支離滅裂を叱咤の聲黃河橋畔の和藤内ほどに剛勢なれど、南無三、一致の紊れたること恐らくは今日より甚しきはあらじ。まづは芝居道の潮流大沈澱の秋と評すべし。そも〳〵社會の改革も、所詮は止みがたき大惡弊の積りぬいて上の事なり、どうにかかうにか曲りなりにも運轉のきくうちは、まづ〳〵と落付くを通とも老成とも世評よし、一徹にどゝなる時は、世間見ずとそしられ、何か爲にする所あるであらうなど、痛くもなき肚さぐらるゝならひなり。まして客商賣の改良は容易になるものにあらず、大かたは大不景氣にぶつゝかつて、せう事なしの果に止むを得ず改革の火の手は揚がるなり、兎

もかくも小一月打通す見込立つうちは、七面倒の改良沙汰に、どこの氣まぐれ座主か氣を焦るべき。蓋し芝居大全盛の今日に、改良々々と管を卷くは、洋行歸りの大學者、大學校出の若紳士、學者まがひの半劇通、審美學から劇通へ養子となつた批評家仲間、さなくば學海先生に同感して陳腐の爛劇に欠伸をする連中のみ。大多數の觀客は上は八字鬚のゼントルマンより、下は地方出の細君、奴婢に至るまで、方今の劇に大滿足の爲體、棧敷より土間一通り瞥見あるべし、改革の道火ひとつ點ずべき螢ほどの火口も見るとなし。必ずしも觀劇眼の墮落せるにはあらず、見物が殖えたる也。維新以來、國民平等となりたる結果、借上生活一般となり、猫も杓子も共樂の當節がら、伯爵夫人の坐る棧敷に廣島猫香箱つくり、男爵のもたれる欄干にけふは地方の長者、議員、裏町の山の神も紋附に威嚴をつくつて柳盛座の鶉に奥さまを粧へば、榮座の東棧敷、時としては山高帽子の居酒屋の御亭を現ず。要するに、藝を觀んが爲にあらで遊山を旨意の芝居見物が今の觀客の八分を占む、活動寫眞と比較して團、菊、左、九を賞する者に、改良の相談はおあひだなり。最もかゝる事は我が明治の特象にはあらず、英國にても今より三十年ほど前かたより此の遊山見物おびたゞしく增加し、名優は出ず、大作者も出ず、劇

道大すたれの有樣、幸ひに近年に及び、役者にはア、ヂング、テリーの如き良い俳優いでたれども、作は尙大不振の姿にて、彼の學者劇通へンリー、リュキスが賴みをかけしテニソンが作も只一時のお慰みにとゞまり、ブラウニングの脚本も、空しく學者にほめたてられて机上戲曲となり了んぬ。畢竟するところ、これは十九世紀の大勢なり、見物はます〳〵俗になり、作者はます〳〵理窟になづみ、見物の好みもさま〴〵、作者の了簡は狹隘、十人十色の見物をアッと一網におつかぶせる大手腕の稀なれば、良い脚本の出來ぬもことわりぞかし。就中、我が今日の見物中には田舍者、ではない地方紳士及び其の令夫人、令嬢、其の多數を占めたれば、わるくすると忠臣藏の筋をも御存じなき芝居好尠からず、イヤわるくせずとも千代萩の筋書をはじめて讀んで案を打つ博士、學士も間〻ある世に、melodrama と drama の講釋、ハヤモやくたいもなき儀なり。幼年の折讀みし稗史に、アヽ何とやらいふ標題であつた、何でも列子を草體に書き崩したやうの畫入本に、或色好みの男、ふと仙術を習ひ浮かべ、好みの女を造りだす通力自在の身となつて、おのが好みの指圖のまゝ造るわ〳〵、とりかへひきかへ、一夜がはりの一夜妻、凡そ一月二月は、さて〳〵面白い目見たりしが、嫌て美人にほうと饜き、楊貴妃、小町に食

傷して、美人の美の字も厭になり、このたびは品をかへ、頻りに醜女を注文し、種々雑多のお多福を毎夜の伽としたりきといふ滑稽話の隠微の旨意を、今更にこそ思ひいだすなれ。按ふに陳腐爛熟の舊劇が、かういつまでも繁昌するは、新規の客の多くして古い美人を見慣かぬ故なり、箱庭のやうな西京も、はじめて見たる其の折はかたじけなさに涙こぼれ、盆石のやうな江の島にも新體詩人は歌をよむぞかし。向上の大慾心奬勵の唯一善巧方便は、まづ飽かしむるに如くことなきか。生中に演劇改良など唱ふるは反動を呼ぶ下策、新脚本の半熟を、膳の隅に進めたとて舊くちゝりに頬を叩く料理通多いうちは、西洋料理とくさがられてトンダ洋犬の餌食とならん、信長に腕を見せて斥けられし覆車の誡め、當分改良沙汰は廢止〳〵。新作一切廢止〳〵。大小劇場押通して、以來は悉く舊劇たるべし、上は近松、竹田は勿論、近くは瀬川、鶴屋、妙なり、默阿彌もとより上々也。爾後尠くとも十年の見込にて、取りかへ引きかへ、舊歌舞伎總ざらひ、今の新規の見物に、歌舞伎おくびをさせんと、改良唯一の方便なるべし。とはいへ今の見物は、本來遊山が目的なれば、筋を通すに及ぶべからず、イヤ通らぬが歌舞伎の持前、齣々おの〳〵別々にて支離滅裂が性なるを、強ひて通すは無駄な事なり。已に在來

の日本劇は、dramatic effect の上よりいへば、西洋劇に凌駕すと、學者のキハメがついたる位ぬ、齣によつては活動寫眞に三舎を避けしむる妙趣あれば、宜しく妙の粹をぬいて、『五三の桐』には、「山門」ばかり、『菅原』ならば「車引」乃至は「寺子屋」、『千代萩』には「床下」「御殿場」、『安達』は「袖萩」、『五十三次』は「猫寺」と、かう儉約してだす時は、ソレ一日の興行に、古劇の妙齣七つ八つはおんでもない事、道具かたも、俳優も、慣れた芝居の事なれば、幕合も早く、稽古も入らず、味ようまぬらば一日に十種位は易い事なるべし。昔ながらの獻立で、會席料理もオツなれど、儘になるならお好み次第御選擇とあつたはうが、當世好みにはまるべし。昔ながらの献立も名代なるは憎からぬど、山の手流の昔献立、いつも同じき紅白さしみ、酢のもの、吸ひもの、焼き肴と順を追つて持ちだされ、それでハ子が午後十時、なんぼ江戸料理が珍らしいとてたべがたかるべし、願はくはけふより後は會席流全廢の事、前にいへる如く、毎回一皿づゝ舊妙齣の展覽會、喩へば定席の義太夫同然、さしかへひきかへのこと。

(第一)一日の興行に大々的變化あらしむる大裨益

(第二)古劇の妙處を知りつくし、觀劇わづか一二ヶ月にして、上は近松、下は古河大通になる大裨益

(第三)古劇の短所たる支離滅裂を利用して長所に轉ずる好方便

(第四)高い役者を無駄にせず各自が特技を演ぜしめて當人も得意、見物も滿足

(第五)かくして古劇に見飽きすれば、自然に新劇のいで來べき稗益

(第六)新聞劇通連の仕事も以前に幾倍し、そも此の齣の前後にはかやう〳〵の筋あり」など、講釋をいふ張合あるべし

(第七)新參の審美學者連も、三年にして日本劇の大通となり、「そも我が演劇の特質たるや」と論ずる折の材料多く出來すべし

(第八)例の部分修正を劇通若しくは俳優が、自儘勝手に施すにも、前後との關係なければ、便宜甚だ多かるべし

かくて一二年つゞけなば、流石に多き舊劇も、段々種切れになり來たり、隨つて見物もやゝ飽きの氣味に近づくべし、然る時は更に定席の顰に倣ひ、毎日代りの興行とし、一日の興行に十種宛と定むべし。さある時は、一ヶ月には、ほゞ三百種以上の興行となるべし。さて毎月三百種を一ヶ年つゞくれば、三千六百種、自然『忠臣藏』、『天神記』、『千代萩』の如き呼物は、一年中に十たび以上も繰返さるゝことゝなり、如何なる新規の見物も右等名高き芝居には筋書不用の通となるべし。かやうなつたる曉こそ、按ふに新演劇のまことのまのゝめ、嗚呼、演劇の改良策、これに越す方便あらんや。とはいへかやうに古物ばかり展覽することゝならば、役者もよし、見物もよし、異論のでさうな星も見えねど、聊か懸念なるは作者部屋の雲氣なり。新作皆無となつたる時は、彼の人たちの鼻の下の或は乾あがる心配はなきか、イヤ、其の心配無用なり、前にいへる通り、一齣づゝ引きぬいての展覽ゆゑ、當分説明の必要あり、新聞讀まぬ見物もある世の中、新聞屋の劇通に一切を任す譯にもゆかねば、幕間々々に、作者部屋より一人づゝ幕外にまかりいで、手短かに面白く、筋を語るは妙ならずや。英國のむかし、シェークスピヤ時代に謂ふコーラスの役まはり、トンダ意氣な役前なり。最も此の口上のいひかたは團洲樓燕枝を師匠に、當分稽古肝要なり、さすれば是れ一擧兩得、自然にして作者が古劇通となり(只今でも通ではあらうが〳〵能辯になり)學者になり、此の口上の無用とならん其のころには、地方議員の競爭に、小あたりもまたをかしからずや。嗚呼、我れながらいしくも工夫しいだしたるかな。此の方案等の是非を、江湖の劇通に問はんとす。

(明治三十年四月)

默阿彌作『網模様燈籠菊桐』

默阿彌が最も得意とせし德川時代の世話物は、櫻田、鶴屋、瀨川以外に、兎も角も一歩を寫實へ進めたるものといふべく、性格劇としての缺點はいかさまにもあれ、他の時代物、活歴物に比ぶれば、枝葉々々に詩趣ありて、只讀みてすら興あれば、其の役々によく適りたる俳優等が、はじめて之れを舞臺にて演ぜし折の面白さ、然こそと思ひやらるゝなり。時代物にては、趣向も、筆も、澁りがちなる跡見えて氣の毒げなる默阿彌も、一たび世話物の世界に躍りいづれば、何のことはなし、まるで籠の鳥と只の鳥程の相違なり。脚色、着想こそは櫻田、鶴屋以來の病を享けて、細巧を求め、卑陋不自然に流れたれど、人物の性情などは或度までは寫實にて、科介、言動頗る滑脫の妙あり。脚本ばかり讀む時には取るに足らずとあざ笑ひし者も、其の舞臺に上りたるを觀ては、流石にとうなづかぬを得ざるべし。兎も角も默阿彌は狂言作者界の傑物なり。

默阿彌が世話物、明治に跨りたるをも合算すれば、尠くとも五六十篇に上るべく、其のうち、例の三題噺、噺風若しくは寄木細工流の作若干、時代を世話に引きなほしたる翻案風の作若干、例へば『契情廓龜鑑』『浮世清玄』『契情重の井』の如きもの、又は新事蹟を野史、新聞などによりて其のまゝに脚色したる『西南雲』の如き「高橋お傳」「醉月のお梅」の如きあり。又講釋、落語を適用したる「河内山」風の作もあり、南北を學びて怪談物即ち怨靈を眼目と綴りたる「小幡小平治」「宇都谷峠」「月/笠森」「新皿屋敷」若しくは此のたびの『網模様』の如きあり。其の他尙二三の種類あれど、こゝに聊かわきまへんと欲するは此の後の種類につきてなり。

嘗て『梨園の落葉』のうちに我が過去の脚本を論じたる條下にもいへる如く、我が國の劇は、早くより寄木細工風の結構を定例として幾多無緣故の筋をほんの縷の如き關係もて繫ぎ合はするを得意としたれば、若きより三題噺に妙を得たりし默阿彌に取りては、三題噺の筋立は存外に容易き程の業なりしなるべく、譬へば平凡の歌作りが題を得て後にはじめて感想を捏ちいだすが如く、却りて一種のヒントを得て首尾よく筋を纏め、其の思付が山となつて一時の喝采を博せしこともあるべし。時代を世話に引きなほすを將た同例にて是れまた思付が眼目なれば、好き思付さへ一定すれば、其の他はスル〳〵と纏まりつくべし。落語、講釋種は更に之れよりも容易し、大かたは場面の取舍と事件の伸縮ばかりに

て事濟むゆゑ、作に老錬なる默阿彌等狂言作者に取りては、是れ將たさしたる經營を要すまじきが、他の『網模樣』一流の怨念譚（はなし）因果ばなしには、比較的に多く纖細緻密なる用意の費やされたるが如き跡を見る。蓋し所謂因果の脈絡を周密に貫透せしめんと欲する爲伏線、照應、襯染などいふ例の支那小說一流の用心いと細やかに費やされたる如し。之れを美學、修辭學の上より見れば、細巧に過ぎて、一概につまらぬ骨折と貶せらるべきが、作者としては中々の苦心經營なるべし。彼の『三人吉三』は不評不入なりしにも係らず、作者默阿彌は其のいまは迄も私かに其の最愛兒となし、其の謙遜なる口頭にも間〻ほのかに誇るが如き氣味ありしは、畢竟最も苦心して作りし作なればならん。『三人吉三』は默阿彌が作中にて所謂因果ばなしとしては最も複雜を極め、また最も巧緻を盡したるもの也。

所謂因果とは德川期の小說、脚本に具通せる一種の觀念にて、其の源は小乘佛敎に所謂三世因果の說に出でたり、泰西に謂ふフェタリズム（宿命說）と其の徑行も結果も似たれど、全く其の因緣を殊にせるもの也。例へば前世の業因が後の世に應報して罪無き子孫が無慚なる死を遂ぐるが如き、更に例を擧げていへば、親の爲し〻惡業が罪なき其の子等に報いて不思議の災難を蒙むるが如き、若しくは

先の世の業盡きずして再び現世に生れいで殆ど前世同樣の苦患を經驗するがごとき、又は怨靈の祟りにて當の惡人のみか罪なき其の妻子までが非業の最期を遂ぐるが如き、其の筋立及び主動者の種類は樣々なれど、一種超自然の因果ありて此の人間界を支配すといふ觀念を基本となし、專ら之れに因りて筋を立つるもの、之れを總名して因果物語風といふも不可なかるべし。佛敎の流行せし當時にあつては、此の思想痛く公衆の意を牽きぬと見え、小說に在つてはお伽草子の昔しより、脚本樣のものにては、まづ謠曲に其の根張りて、近松以後枝葉繁茂し、延いて怪談ずきの鶴屋に至り、更に默阿彌の諸作に及び、殆ど其の複雜の頂點に達したり。こは詳かに言はずとも皆人の心附く所ならん。さて此の因果ばなしは、按ふに、脚本にては、默阿彌の作先づ其の極みなるべく、又之れを小說に見れば、曲亭馬琴の作其の表極なるべし。『松浦佐用姫石魂錄』の如き、『新累解脫物語』の如き、『八丈綺談』の如き、いづれも此の意味に謂ふ因果說の巧緻深刻を極めたるもの也。南北の後にいで〻淨瑠璃に精通せりし默阿彌ならずば、因果說をかまでに利用せんこと叶ふまじく、學識、見、群を拔きいでし曲亭ならでは、小乘因果を活寫してさばかりに周細なる能はざるべし。美學上よりの是非はさて置き、

一代の觀念、情操を描寫せし點よりいへば、小說に於ては馬琴、脚本に於ては默阿彌、此の位附は動かぬ所也、小乘因果は明かに德川時代の公衆を支配せし一大觀念なればなり。

されば此の觀念に成れる『網模樣燈籠菊桐』の生命は親の因果が子に報うといふ小乘因果の觀念にあること勿論也、さればまた若し此の觀念の脈破るゝ時は、此の作は殆ど何の見所も無く、さらぬだに不自然なる筋立は更に一段の不自然を加ふべし。舊幕時代の公衆とても、此の超自然の因果の觀念を離れたらば、米升的寫實の科介と此の不自然無慚の筋との間に幾多の不調和を發見して、恐らく見ることを悅ばざる感ありしならん、されど所謂三世因果の關係の免れがたきことを信ずる念は當時の人皆の心底にありしゆゑ、盲目の孝女が無慚の最期も、お熊が最期も、西念の最期も、げにことわりと觀察して、今の見物が感ずる如くに、只管horribleとは感ぜざりしならん。或は此の間に一種變則の詩趣を感得して無意識の間に腸を淨め心を洗ふの感の必ずしも無かりきとは斷ずる能はず。さすれば默阿彌の因果ばなしも今日の心目もて觀たるよりは一段悲劇的價値多かりしならんか。然るにこたびの歌舞伎座のは、例の如く種々の內幕の都合

ありてか、玉菊、新之丞の挿話（エピソード）を悉く除き、剩へ本筋の後半をもほしいまゝに削り去り、主人公七之助が發心後の二度の惡念、お熊が七之助道心に殺さるゝ慘劇、儀兵衞、西念が橫死の塲、又七五郎父子が入水の件、皆悉くかた無しとし、善心に立還るべきお坊吉三を惡人にて終らせ、飽くまでも惡人として終るべかりし七之助を梅幸好みの愛きやうある氣の知れぬ惡人にしてのけたり。これには例の內幕に種々の事情あるべければ、作者に苦情をいふべきならねど、根柢の觀念の通らぬだけに野卑、猥褻、殘忍の度は（餘人は知らず予にとりては幾倍も著く思はれたり。洲崎土堤の塲の瀧川、七之助、原本は南北好みにて思ひ切つて猥褻を極めたるを、こたびは其の筋に睨まれぬまでに改削し、隨うてうつかり見るか、又は我慢して見てゐればマア〳〵見るに堪へぬ程では無けれど、菊五郎の七之助、絕えず其の筋々々々と念じてゐるらしく、かゝる塲合の七之助らしくなく、手弱く遠慮がちにすべて氣込足らざれば（足つては甚だ閉口なれど）面白味もなし。アヽ添削する程ならばかゝる塲とても筆を入れて今少しく詩趣をもたせる工夫がありさうなものなり。このたびのやうにては氣込の加はらぬと詩趣の減じたるだけが相違にて猥褻の趣味は依然たり。考へて見れば下卑を極めたり。其

の筋の指がねのひたすら皮相にとゞまること之れによりてもさとるべし。

本來此の作は前に謂ふ因果の觀念を離るゝ時は、着想極めて下卑たるものにて、悲劇といへば悲劇なれど、壯烈なる所は殆ど無し、まだしも原本には玉菊といふ一箇意氣地ある娼婦を點綴し來り、以て幾分か本筋の卑陋を補ひたる氣味あるを、こたびは全く之れを除き、兼ねて結末をも滅茶にし、根柢の觀念を殺しゝゆゑ、どの幕も〳〵殆どノベッの下卑盡し、殘忍盡し、意氣とイナセの趣味はあれど、恐らく上品なる觀客にとりては、件の下卑を補ふに足らざるべし。猫化芝居が國民の恥辱ならば、かゝる芝居もあまり體のよいうちに入れがたし。女郎屋を世界とするゆゑといふにはあらず、何の主意もなく觀念もなくて只人殺しをノベッに見せ、强姦類似の醜狀をさながらに見する滅裂芝居は、南北時代の流產物、默阿彌全盛の三十年以前にだに屑しとせぬ所、況んや今日に於てをや。

七五郎父子の訣別は小團治好みの大愁歎なれど、これにも悲壯の趣味は空しく只〻ミジメ(miserable)の愁歎にて、眉はおのづから顰めらるれど、涙はほと〳〵出かぬるなり。それも米升のまたるまゝならば、飽くまで根づよき小猿道心の極惡に、一種の趣味籠りたれど、今度の如くにてはミジメといふ情味のみが此の卑陋劇の惣じめ、何ぼ劇作者の大飢饉とはいひながら、菊五郎、松助、八百藏、兎も角も福助、榮三郎、乃至は歌仙、其の他、勘太郎、みの助、梅助などいふ腕前ズラリとならべながら、いつまで草のいつまで、かゝる芝居の根が張るぞ。山出しの嫁鎌づかひ拙くば、姑小じうとおの〳〵自ら鎌を揮つて草を苅るべき時にあらずや。

（明治三十年夏、歌舞伎座停止前起稿）

劇壇の現在及び未來

上古より近代に亘りて世界に行はれたる演劇は其の種類いと〳〵多けれども、其のうち最も勢力あるものを擧ぐれば、蓋しわづかに三指を屈するに過ぎざるなり。第一は希臘の劇（所謂クラシック、ドラマ）なり、第二は歐洲の傳奇劇、即ちゴシック、ドラマ也。第三は樂劇也。方今歐米に行はるゝ劇は、直接若しくは間接に前の二者を融會したるが如き演劇か、まかりざれば多少樂劇を混用したるが如きパントマイム風の演劇に外ならざるなり、されば演劇の淵源として方今勢力ある者を求むれば、前の三者の外は殆ど絕無なりといふも誣言にあらじ。

然るに翻りて我が國の劇を觀るに、其の筋の多端にして不羈放縱なるところと其の叙事詩の性質を脱せざる所とは稍〻彼方の傳奇劇に似通ひ、又其の音樂を併用するところ及び科介の舞蹈に類するところは、稍〻彼の樂劇に似たりと雖も、尚其の由來と本質とは全く前にいへる三者と殊にて純然たる我が日本產の演劇なり。雜駁不醇の譏は或はまぬかるゝ能はざらんも、其の獨立の本質と其の成熟の度合とより言へば、優かに彼の三者と對峙して、世界の一殊劇と稱せらるゝに足りぬべし。論者或は我が國の劇を難じて、第一に其の叙事詩的性質を帶べるを非とし、第二に其の樂劇と正劇との間に彷徨して雙つながら其の善美を致さゞるを失とす。美學の上よりいへば、恐らく何人も此の非難を否拒するを得ざらん。げにも我が劇の瑕疵は此にあるべし、其の次第に墮落して寄木細工の如く、三題噺の如くなりたるも、一は其の體の正しからざるに由るべく、また其の樂劇的部分の爛熟して樂としては聽くべきの趣致無きに至れるも、將た或は同じ病源に由れるなるべし。されど且らく美學の誨ふるところを忘れて、劇史と常識との語る所を聽くに、是れにも幾分の味ふべきものあるに似たり。

常識は曰はく、演劇は美術の上乘なり、其の故は、詩の上乘たる劇の詩を活現すればなり、繪畫の美を景物に利用するの外に活人畫を躍らしめて舞蹈の美を併せ具ふればなり、音樂を利用して心耳目を同時に娛しますればなりと。奏樂室に奏する音樂も音樂には相違なけれど、若し不即不離の音樂を利用すること樂劇の如く、而も劇詩を利用することは正劇の如きを得ば、(其の成否は且らく措き)劇としては善美を盡せるに庶幾からずや。

又之れを沙翁の作劇史に徵す、はじめは單純なる筋をも取り、若しくは目に訴ふることに重きを置かざりし彼の作家も、其の技圓熟せし中晩年に於ては、頻に筋を複雜にし、また屢〻音樂を利用し、或は目に訴へ、或は耳に訴へ、時としては宛然として我が淨瑠璃劇を觀るの感あらしめたり、叙事詩的性質は、爲に彌〻加はれりと雖も、假面劇又は樂劇に似たる部分は爲に彌〻加はれりと雖も、又之れが爲に正劇の體は明かに痛く殘はれたりと雖も、觀者を娛まし、むるの力は必ずしも減じたりといふべからざるなり。讀み物としての脚本は恐らくは之れが爲に散漫となり、若しくは深刻の致を減じたらん、されど其の演劇としての效力は、寧ろ加はれりといはんかた中正穩當の評にはあらぬか。

又之れを近世英國の劇壇史に徵す、劇詩の次第に衰退するは大作家出でざるに

因るといふも一理なれど、方今行はるゝ演劇は日に漸く樂劇に接近し、若し此の儘にして永續せば、竟には正劇の面目を失ひ、さながら我が淨瑠璃劇の如き一種の夢幻劇に化し去らんとす。これ只〻大作家出でざるが爲の一時の現象と解釋すべきか。將た或論者等の言へる如く劇詩の本領は小說に移り、演劇の面目の爰に一新せらるべき機の到れるにあらぬか。特り我が國のみならず、世界の大勢を察するに、梨園と文壇とは日に月に隔たり來り、第二の沙翁を產すべき機は殆どまた望むべからざるもの〻如し。蓋し按ふに、今の觀客の多數は概して物質的文明の兒(チヤイルド)にして、現實に拘ひ、功利をよろこび、美術の製作を品評するにだに、往々にして理窟の尺度を用ふ、然らざれば只管精細ならんことを是れ求めて、所謂寫實の致の備はらんことを希ふ。或は人間美を喜ぶ者あり、されども其の喜ぶ人間美は主として個々人の心的現象なり。彼等は個人が內界の生活のさながら目に見るが如く描かれたるを喜ぶ。彼等は兇賊と良民との相鬪ふ樣を見ることを欲せずして邪念と良心との相鬪ふ樣を見んと欲す。彼等は王侯權家の沈淪零落する事蹟を見ることを好まずして個人が心の頹廢墮落する徑行を詳にせんと欲す。而して此等隱微なる心的事情は畢竟心理小說の好材料にし

て其の多くは筆に語るに容易くして態に演ずるに難きものなり。況んや寫實的傾向は日にます〻〻甚しくして或は傍白(アサイド)の不自然を非難し、或は誇張の言動を忌むをや。若し方今の劇壇に於て時尙に適すべき劇を作せんと欲せば、勢ひ多數の俗客を的(ねらひ)としてパントマイム風の劇を作るか、然らざれば彼の象徵主義(シムボリズム)を取りて、無形の深意を有形のうちに寓し、多少夢幻劇に類したるものを作せざるを得ざるべきを恐る。而して是くの如き作は其の形式の上より見れば前のパントマイムと殆ど兄弟の間にありて、正劇とは頗る趣を異にするものなちざるを得ざるべし。

正劇を永遠に持續すべきものとすればこそ醇雜の論も生ずれ、若し所謂正劇は彼の希臘の古劇に等しく、若しくは我國の能劇に等しき、過去の演劇と假定せば、未來の劇壇の方針は果して如何さまに定むべきか。尙かたくなに從來の劇學を株守して正劇樂劇の範疇を限定すべきか。世界劇場の大勢を假に二者を混合の運に向へりとせんに、我れは尙頑然として、偶然にして正樂二劇の素を合せる我が劇の特質を破壞し、既に廢(すた)れんとせる歐洲劇を今更に我國に輸入すべきか。若しくは彼方(かなた)の三大劇素を參照し、以て我が劇の利弊に鑑み、其の利を長じ、

其の弊を除き、以て前古未曾有の一新演劇を興し、世界の劇壇を一變すべきにあらざるか。我が一種特別なる雜駁の演劇は、印度哲學の雜駁なるが如く泰西の文明に貢獻するに足らざるべきか。彼の佛教哲學の、古くは希臘の哲學より、近くは日耳曼の哲學に至る諸種の思潮を含有せるが爲に、最も研鑽に値する如く、古くは希臘劇（クラシックドラマ）に似たる能劇より、近くは樂劇（オペラ）に似たる舞蹈に至る、諸種の劇の素を含めるゆゑに、我が雜駁なる特殊の劇は特に劇學者の研鑽を要せざるべきか。一卷の審美學と一冊のドラマツルギーとのみによりて、輕々しく我が劇の未來を定むるは、劇に忠實なるの所爲と稱すべきか、否か。過去現在の脚本のみを標準として我が劇の是非を斷ずるは、果して深切の批判なりや、否や。此等は皆一再應の考査を要すべき疑問にあらずや。

以上述ぶる所に就いて讀者の誤解なからん爲、あらためて一言せんに、正樂二劇融會の案は勿論疑案として提出せるなり、劇の方針をこゝに定むべしと議するにあらず。乞ふらくは尙次に我が劇壇の現在及び未來を論ずる條を參照せよ。

（明治三十年十月）

作の上より見たる我が劇壇の現在及び未來

作の上よりいふも、藝の上よりいふも、我が國劇の方に過渡の期に蒞みたるは明白なる事實也、作は明かに缺乏を告げ、藝もまた時尙に副はざらんとす。如何に梨園の當事者が恰好の新作の絕無なるが爲に、其の出し物に困窮せるかは、其の所謂一粒（ひとつぶ）えりとも稱すべき在來の淨瑠璃劇を幾回となく反覆して興行せるにもいとまゝるけく、又每に三四種の劇を一時に興行するの策を取り、通し狂言に安んずる能はざるに至りしにもまゝるけし。一時は名優にだに演ぜしむれば無差別に歡迎せられし默阿彌が世話物も、「網模樣」の失敗に歷然たるが如く、今は全く時尙に後れたり、活歷熱全盛の當時には見物を悅ばせし「關原」も今は僅に團十郎が老手によりて一部の愛顧を繫ぐにとゞまり、作全體としては何等の詩趣も無き平叙的史劇と見做さるゝに至れり。活歷劇の反動として一時盛んに歡迎せられし夢幻劇（舊淨瑠璃劇）も、實際時尙に適へるは存外に其の數乏しければ、必然の勢ひとして屢〻同一の劇を反覆するの拙を致す、其の墜かるゝに至る日も遠からざるべしと推せらるゝなり。「鏡山」や、「忠臣藏」や、「千代萩」や、「太閤記」や、「先陣館」や、

此等一粒えりの夢幻劇も、かくの如く屢〻せらるれば竟に家常の茶飯視せられて、目慣れざるが爲に歡迎せし彼の雷同の觀者をして、再び其の不自然と技巧とを非難せしめ、作意若しくは技藝の上に、又もや不調和なる修正を註文せしめ、其の大醇小疵を化して大疵小醇の不具劇とならしむるに丁らんの徵は既にほゞ現れたり。嗚呼、活歴劇も既に其の末路を見たり、默阿彌、南北の世話物も、其の慘刻と猥雜と卑陋とのゆゑに、恐らくはまた演じがたからん。「鎗持勘助」の作者たる今の狂言作者は、能く此の大缺處を補ふに足るべきか、「大森彦七」に成功したる櫻痴居士が一枝の筆は能く此の大空處を塡充するに足るか。

新作の需要は大旱の雲霓よりも甚し、而も新作の寥々たるは何故ぞ。今の文士中に劇を作する技倆の闕如たるが爲か。梨園が園外の新作を容れざるが爲か。吾人は雙つながら否と答へざるを得ざるなり。梨園の當事者が局量は、たとへ甚しく狹小なりとするも、其の局量の廣狹は毎に營業上の利害によりて自由に伸縮せられ得べきものなり、蓋し彼等が門外の作を採用せざるは偏執嫉妬の故にあらずして其の成功不成功を危疑するに因る也、然らざれば當局の作者等が自家の地位を奪はるゝに至らんかと恐るゝに因るのみ、されば若し門外の作家

にして、かゝる杞憂の要なきことを當局の作者等に會得せしめ、且つ成功のたしかなる由をほゞ當事者に信ぜしむるを得ば、作に窮困せる方今の梨園は必ずしも門外の新作を斥けざるべし。彼等の最も懸念するは營業上の利害に外ならざればなり。さらば新作上場の第一障碍は梨園の故障にはあらで寧ろ門外作家の技倆なるべし。さて此の點より見て今の文士中に其の人無きかと問はんに、吾人はまづこゝに二樣の觀察の必要あるを感ず。二樣の觀察とは、作の性質に二樣あるが故に、其の性質次第にて作し得る者あまたありともいひ得べく、殆ど絶無なりともいひ得べき事是れなり。

さて作の二樣とは淨瑠璃流、默阿彌流を第一種とし、美學者好みの新作を第二種とするなり。默阿彌流の作者を求めば、吾人は今の文士中、就中新聞社に關係せる文士中に、其の人十を以て數ふるに足るべしと信ずる也。而して彼等の文才學識は今の當局の作者に勝るを幾等なれば、其の作を場に上さば幾分かは我が劇を高雅ならしめんを必定なれど、要するに只〻數歩の相違にして其の根柢の着眼は明かに舊作家と等しければ、よし創新なる作意あるも、恐らくは枝葉若しくは皮相の脚色にとゞまらんのみ。且つや此等の作家は、深く在來の國劇に通

じたるだけに場面の得失に重きを置くと甚だしく、道具立書割、服裝又は鳴物等に一毫の誤謬あるも尙之れを大瑕疵と思惟して專ら末技に心を勞し、他を難ずるにも之れを主とし、我れを責むるにも之れを最とす。而して彼等の多數は近松、默阿彌の流れを汲むとは雖も、究理時代の風潮に浴せるが爲に、寫實、理窟、風、教といふ三種の桎梏に拘束せられ、彼の巢林子等の夢幻劇の如き大膽なる脚色を構ふるとも能くせず、扨又風教を重んずるが故に、南北、默阿彌等の作の如き下賤の作意にも安んずるを得ず、隨うて、史劇を作れば正史の事實を敷衍して能事終ると做し、世話物を作れば風俗の寫實と場面の斬新とに只管其の工夫を凝らさんと欲する傾きあり。吾人は彼等の作物をば實際には多く見ざる故に、かくの如く批判せんは太だ臆斷に過ぎたるが如しと雖も、所謂劇評に見えたる影と彼等が物する新聞の續物にあらはるゝ作意とを目安として其の理想の在る所を探るときは、上に臆測する所の必ずしも甚しき誣妄にあらざるを知るに足るなり。要するに、此等舊派の流れを汲める作家は大刷新の機緣を作る者にあらざるなり。

然らば新代の作家のうちに新代の劇を作り得べき者あるかといふに、尠くとも

當分は殆ど絕無なりといはざるを得ず。古藤庵も中道にして筆を絕ち、故透谷も、故湖白も劇に志篤かりしが共に其の遺篇に不成功の影を示し、高安氏の作は恐らくは時尙に迎へられざるべし。蓋し所謂新作家は、其の國劇の知識に於て所謂舊派に劣ること萬々なるが故に、直ちに場に上さんの目的を以て作する時は故障百端、到底演ずべからざるものを以て目せられざるを得ざるなり。さりとて上場の豫望なくして徒らに朗讀せられん爲に劇を作るは、小說全盛の現今に於ては甚しき迂愚の沙汰也。脚本の妙は演せられてこそ知らるべきを、舞臺の知識淺き小說讀者に、一種の小說として讀過せられて何の妙かあらん。彼の沙翁の作だに讀みて妙とせらるゝは其の辭意の傑特なるに因るとはいへども、一分は畢竟崇拜の餘勢にして一分は名家が評論の力也。況んや他の尋常の作は、只〻讀みたるのみにては殆ど興をも牽かざるもの比々是れ也。默阿彌の作の如きは概して然り、こたび明治座にて成功せし「大森彦七」の如きも然り。脚本の成功不成功は上場せしめずしては斷ずべからざるなり。然るを單に多少舞臺的知識に缺くる所あればとて直ちに演じがたきものとなして排斥せば、新作家たる者いつの日か舞臺の實際を學ぶを得ん。彼等は其の作する度毎に小

詞讀者の批判のみを聽くゆゑに、知らず〳〵ます〳〵舞臺の約束と遠ざかり、恰も彼のブラウニングのなし〻如く、次第に其の作をして純然たる朗讀戲曲たるに終らしむるに至るべし。東西共に新脚本の出でざるは、一面より言へば、かゝる事情にも基くなり。

更に今一の故障あり、こは東西を問はず熱心なる新作家には必ず伴へる事情なるが如し。即ち其の作の通し狂言風に作らるゝをなり。按ふに、新作意を十分に發揮せんとすれば、到底一幕二幕には其の作意を盡しがたきことゆゑ、五幕若しくは七幕の長篇となるは止むを得ざるべき結果なれど、一日の興行時間を成功の確かならぬ新作の爲に悉く供給して冒險することは、我が國のみならず何處の國の梨園の當事者も、恐らく能くせざる所なるべし。而も短き作の中に、新作の本領を發揚して觀者の心を牽くこともまた甚だ難き業也。この點は双方共に道理にして、調停の法殆ど空しといふべし。ましてや我が今の觀者は、其の種類雜駁を極め、隨うて其の劇に對する註文も過渡の時代なるだけに、古今未曾有に雜駁なれば、在來劇の折紙附、極め附なるものを除いては、通し狂言といふことは所詮行はるまじき有樣なるをや。此に於てか吾人は知る、演劇刷新の方案の

尙依然として舊位にとゞまり、一歩をだに進むる能はざるを。即ち新作家が更に一段の工夫を凝らして長くも三幕を限りとする新作を著し、而して梨園の當事者が之れに好意を寄せ、兎も角も舞臺上に成敗を試驗するの端を開くか、然らざれば新作家が新俳優の爲に其の力を專傾し、三幕五幕を限りとする明治の世話物を作する事に從ふか、策は此の二種の外にいでざるべし。要するに、演劇刷新の歩武は未だ一歩をだに進められざるなり、作の眞價値を月旦して眞刷新を論ずるの日はそも〳〵また遠かるべきかな。

（明治三十年十一月）

我が演劇の前途

流行は殆ど其の頂に達せんとして、進歩刷新の兆は殆ど絶無なる我が演劇界の前途を卜せんとすれば、先づ何故に然るかを檢し、斯界の如何なる方面に最も多く停滯の原分子を宿せるかを知るを要とす。語を換へて言へば、斯界を組織する有力なる要素の現質を檢して其の如何に異動すべきかを推測するを肝要とす。

所謂演劇界を組織する主なる要素は、之れを内にしては、第一に脚本即ち演劇の臺帳即ち作者、第二に俳優、第三に資本家即ち興行主、第四に劇壇主幹（マネージャー）。又之れを外にしては第一に觀客、第二に見功者即ち劇評家、以上六者の外にいでじ。此のうち正當に劇壇主幹と稱すべきものは未だ我が梨園に存せざれば、且らく之れを除き、今は只〻他の五者のみを觀察せん。

舊臺帳今や漸く時尚に後れて新脚本の時好に投ずべきものもなく、臺帳頗る缺乏せる由は既に屢〻之れを報じ又屢〻之れを論じき。按ふに、作者必ずしも絶無なるにはあらず、舞臺の約束を一變し、且つ所謂舊俳優の藝風及び其の他を一新して所謂新俳優以上のものたらしむるを得ば、或は新作を得ることも難からざらんか、然れども所課舊俳優をして我が演劇の最上位を占領せしむること今日の如く、所謂見功者即ち劇評家の舊劇に對する態度今日の如く、且つ演劇刷新に冷淡なること今日の如く、歌舞伎座、明治座の如き大劇場を舊演劇の專有に歸せしむること今日の如き間は、到底創新なる脚本は種々の理由によりて世に出づる能はざるべし。

第一　舊劇の舞臺上の諸條件と新意匠との不調和及び衝突。

第二　其の苦心の作をして下等劇場の臺帳たらしむるを甘んぜざる新作者の自尊心。

第三　新意匠を會得する能はざる舊俳優の無知識。

第四　梨園と文壇とが隔離せるが爲に舊演劇の諸慣例及び舞臺上の諸條件に新作家の通ずる能はざる不便。

第五　劇壇主幹無き爲に、梨園は譬へば、寡人政體の如きを成し、個々の俳優に權力ありて各〻ほしいまゝに役不足を唱ふ、故に嘗て一たび登場せしめて成功（あたり）を博せし臺帳の外は、假令略〻舞臺の約束に叶ふも、優人危疑して之れを演ずるを憚り、或は其の智識の足らざるために新意匠を解する能はず、又は解するも、之れに副ふの新工夫を出だすを難んじ、爲に大抵は之れを演ずることを甘諾せず。

第六　舊劇は概して準樂劇の性質を具へたるに、新作者は殆どすべて樂の知識に乏し。

第七　資本家即ち興行主は、いふまでも無く營利を主とし、只管利益の多からんを欲するのみ、演劇を美術として重んずるにあらねば聊かも改善を欲する意無し。

第八　文壇の傾向もまた劇詩に適せず、劇詩は客觀的なるを本志とする者なるに、方今の作物は概して主觀的、抒情的の傾きを有す、隨うて叙事詩的なるを其の本

尙他にもあるべけれど、畧〻右に謂へる理由あるによりて、作界如何に努力すとも、殆ど特立しては何事をも爲し得べき餘地を有せざるなり、換言すれば、他の四要素に變動を生ぜざるうちは、作界は如何に力むるも殆ど爲す所無かるべきなり。

さすれば他の四要素に將來異動すべき何等かの素因あるかと問はんに、資本家即ち興行主は前の第七に言へるが如き性質の者なれば、又改めて討査するの要なき者として除き、他の三要素を見るに、最も重きを置くべきは觀客と俳優となるが、觀客はた或意味に於て資本家に似たる所あり、彼等は只〻觀劇に一時の娛樂を求めんとするのみ、必ずしも美術として演劇其物を重んずるにあらねば、劇が彼等の耳目心を娛しませ得る間は、其の陳腐なると其の創新なると、其の高雅なると其の卑俗なるとは、必ずしも問ふ所にあらざる也。　或は觀客の好尙を改善し得てさて後始めて演劇を刷新すべしと說く者あれど、そは寧ろ迂濶の說たり。　方今の如く人口歲毎に加はり、日に生活の度の高まりゆく社會に在りては、觀客は絕えず交代し、前群の飽饜して退くところには後群は飢渴して競ひ至る。

現に目下の劇場に徵するに、十年以前の好劇家にして今は漸く舊劇に饜き、或は殆ど其の嗜好を忘れたるもの、十中七八の比例なり。　若し今日の東京をして舊幕全盛期の江戸たらしめば、必然の結果として、劇の面目は多少刷新せられつべし。　江戸の人口如何ばかり多しとも、三十年間一日の如き單調子に到底饜かざらんこと難かるべけれども今の東京は眞個全國の中樞神經なり、方今我が國內に活動せんとする者は、尠くも一たびは、短くも數月の間は、こゝに足を容れ、居を定むる必要あり、故に東京は全國人が往來の府となり、人口の新陳代謝眞に驚くべきものあり。　而してかゝる一時の寄寓者中屢〻多數の劇場觀客を出だす、故鄕土產に歌舞伎座に臨むの徒也。　忠臣藏』の筋書を要する者の夥しく殖えたるを以ても徵すべきに非ずや。　夫れ美術の鑑裁は一種の素養と修練とに俟つ、學識ある者未だ必ずしも美術の鑑裁に適せずとせば、如何にして此等土產見物の徒の好尙を進步せしむべき。　歲と共に交代するかゝる觀客の嗜好を改善して、さて後に劇を改善すべしといふは、頗る迂濶なる說にあらずや。

觀客は如何ともしがたしとせば俳優は如何。

俳優に二あり、歌舞伎を持續する舊俳優と書生より成りいでたる新俳優と、此の

二者のうち、舊俳優は殆ど望みなきに近し。彼等に三類あり、

第一　俄に品位の高くなれるため、技藝の爲に重んぜらるゝと人格の爲に重んぜらるゝとの區別を混同し、思ひあがり、高ぶり、加ふるに衣食足れるゆゑに自足、自負し、また大に精進せんの念なき者。

第二　俗尚に投ずれば足れりとして常に自ら安んじ、また他を願欲せざる者。

第三　向上の念、寧ろ新工夫によりて聲譽を博せんの覇氣無きにあらねど、學識足らざるが爲に、到底新精神に副ふ能ざはる者若しくは梨園に權力なきため、みづから主となりて運動する能はざる者。

此のうち第一、第二はもはや如何ともすべからず、第三の後者のみは稍〻望みあるに似たりと雖も、其の齢既に中年に達して學識就中斯道に必要なる美學上、文學上の思想乏しければ其の前途尚容易くは豫言しがたし。よし爲す所有るべしとするも、前途は尚遼遠なるが如し。加ふるに近來童劇流行して舊俳優が未來の候補をして其の最も大切なる修學時の教育を廢せしむるに至りたれば舊俳優の前途は殆ど望無きに近からんとす。

新俳優に至りては、覇氣は尚在り、學識また舊俳優に比すれば或は一日の長あるべし。されど其の審美學上の思想、好尚は學問に負ふ所も無く、經驗に負ふ所も

尚淺薄、技藝はた生硬未熟、加ふるに其の多數は放蕩遊惰の餘に此の境界に流れ入れる者のみ、彼等の多數は既に今日の小成にすら安んぜんとし、今日の聲譽にだに滿足せんとし、其の放肆の行爲舊俳優の汚行に讓らざる者比々たり。加ふるに彼等の大かたは只〻名利に惑溺す、而して其の口に唱ふる所だに勸懲若しくは矯風といふ事の外にいでず、其の美術としての演劇を意識せざるや勿論也。吾人は其の小成に安んずる傾向の歴々たるを見て常に彼等の與すべからざるを思ふ。さもあれこは新俳優の現在を言ふのみ、此の新俳優の繼嗣者中より或は眞の新劇を興すべき眞の俳優を生ぜんも知るべからず。創新の素は舊俳優に求むべからずして彼等の意氣と藝風とに求むべきを感ずればなり。

觀客の嗜好、既に前にいへるが如く新舊俳優の現情、正にかくの如しとせば、演劇刷新の端は果して如何にして發かるべきか。單に作者の手腕なきを責めんか。資本家の美術に忠ならざるを咎めんか。

吾人は前段に觀客の好尚の改善すべからざるを說けり。又更に考ふるに、資本家及び俳優は第一に「入」の多寡によりて動かさるゝ者、然らざれば屢〻「輿論」によりて動かさるゝ者なり。よし個々の好尚が進歩すとも輿論たる勢力を有せざ

る限りは、即ち「入」の多寡に影響せざる限りは、彼等は之れに對して何等の痛痒をも感ぜざるべければ、假令觀客の多數をして其の個々の嗜好を進歩せしむるを得とも、彼等が嗜好の幾分をして一致せしめ「輿論」を形成するに至らしめずば、刷新の目的には恐らく何等の裨補もなからん。而して嗜好は由來 indisputable なれば、何等かの學理によりて一定せざれば之れを調諧して輿論たらしむること殆ど難し。例へば、歌舞伎を好む觀客のうちにも、稍〻高等なる嗜好を有する者あり、壯士芝居の觀者のうちにも、緞帳の觀者のうちにも、「大阪俄」の見物のうちにも、多少の高等なる嗜好はあり、要するに今日の觀客とても、其の幾分について見れば嗜好強ちに下劣なるにあらざるなり、只〻新舊過渡時代の慣ひとして個々の嗜好相背馳するのみ、相一致せざるのみ。されば此の際に於ける第一策は、大多數の好尚を改善せんとするの迂を棄てゝ、及ぶべくば、此の少數の比較的高等なる嗜好を調諧し、演劇に對する新しき「輿論」を作るにあり。「輿論」は毎に讀みて字の如くなるにあらず、少數の聰明者及び有力者の一致して唱道する說は、やがて反響して輿論となるなり。例へば、時の名士、新聞記者、見功者（劇評家）、文學者の相大同して唱ふる所は早晩劇界を動かすに足りぬべし。二三新聞紙の非難だに歌舞伎座をして『網模樣』を中止せしめたるにあらずや。

彼の演劇改良會及び矯風會の如きも、幾分か此の精神より成りしならんが、其の手段と順序とは頗る吾人の所見に違へり。吾人は此等の人々をして一堂に會せしむるに先だちて、廣く劇評家者流の說をして大體上の一致を具へしむるを要とす。若し一致せしむる能はずんば互ひに激鬪して優劣を決し、優者を生存せしむるの策を講ずるの必要なるを思ふ。劇評家といふ名稱なく、或は劇評として其の說を新聞紙、雜誌等に揭ぐることなくば兎も角も、多少俳優にも影響し、多少觀客にも影響する今の所謂劇評は、前に謂ふ輿論を形成するに當りて小ならざる利害の關係を有するものなり。劇評家の演劇刷新に冷淡なること今日の如くば、彼等は多少の害は實に具へて些の益もなき長物なり。こゝに劇評家といふは、特り新聞社の劇評擔當者をのみ指せるにあらず、多少此の社會に勢力あるあらゆる好劇家及び見功者をおしなべていふなり。

さて之れと同時に吾人は舊劇場を目的とせざる大膽なる新作脚本を奬誘せんと欲す。吾人は言ふ、梨園の關門の開かれざる限りは、舊劇の諸約束を學ばんと欲して徒らに時間と勞力とを費す、何の要かある、假令諸約束に應じ得たりと

するも、今の舊俳優輩は恐らく諸子の新意匠に副ふ能はざらん。寧ろ輿論の定まる日と新々俳優の出づる日とを期して、我が想像の驅るまゝに、あらゆる埒の外に躍りいでよ。新舊調諧の策は今や殆ど望みなし、我が劇界の前途には只〻一の策あるのみ、曰はく、全然たる刷新と。

（明治三十一年一月）

問はずがたり

（一）劇詩家と狂言作者、見られぬ劇と讀まれぬ脚本

希臘のソホクリーズ、ユーリピデーズ等が『エヂポス』を作り、『エレクトラ』を物せしころには、劇詩家（ドラマチスト）と狂言作者（プレーライト）との差別無く、劇詩（ドラマ）と言へば只〻讀まるべきものならぬとは皆人の疑はざりし所なり、そは劇詩（ドラマ）といふ語の「爲」といふ義の希臘語より來れるにも明かなり。降りて中古の世となり、ゴシック劇の新に興隆せるころにも、劇の詩はすべて演ぜらるべき筈のものなりき。劇詩のいと盛なりし英國の處女王朝にも、時の好みに適はで空しく棄てられし作も若干かあらめど、尙狂言作者といふ名目を劇詩家の名の外に立てしことはなし。マーロー、シェークスピヤ等は狂言作者にして兼ねて劇詩家なりき。劇詩家といふ資格も今の世程に重んぜられざりし代りに、狂言作者といふ資格と劇詩家といふ資格との間に雅俗高下の差も無かりしなり。隨うて劇詩といへば目に見ても必ず興あるべく、また之れを劇としても抒情叙事の詩に比しておのづから別種の趣致あれは、只〻讀みても興味ありしを今尙傳はれる當時の諸名作に徵して知るに足る。すなはち舞臺に觀られぬ劇詩無く、詩として讀まれぬ脚本無きが其のころの常態なりき。かくありてこそ劇詩を詩の上乘ともたゝへ、劇詩家を詩家の王とも崇むべきなれど、降りての世の狂言作者の作の如く、只管優人の腕にすがりて人物の死活を定め、畫景（かきわり）大道具の助けによりて辛うじて其の場の風情を現さんは、彼の「閑室劇」、「机上脚本」などいふ（批評家が酌量の）特典に浴してまたり顏に後世の觀劇眼をそしる似而非（せ）劇詩家の似而非劇と共にいと淺ましき限りなり。既に演ぜざるものとせば何の爲にか地の文を省くぞ。省くは活人の活動と多少の粧飾とによりて之れを補はせん下心なるを、演ぜられずと知りながらも其の形式を固執するは嗚呼（を）ならずや。地の文の省かれたる形式に（就中散文に物せられたるには些の詩美もあるとなきをや。只〻讀まるべきものとして詩を作り尙

劇詩の精神を寓せんとならば、之れを散文にしては小說の禮を、之れを韻語としては叙事詩または我が淨瑠璃の體を取らんこそ至當なるべきをや。蓋し狂言作者と分離するに至りて所謂劇詩家の手腕は明かに幾分か萎えたるに、尙同稱を私するは僭に近し、寧ろ他の卑俗なる狂言作者の嘗て劇詩家と誇稱することもなくて只〻俗受に甘んずるを罪淺しとも言ひつべし。さりとて今の所謂狂言作者の作は英佛のも、我が國のも、只〻讀みては何の興なきが十中の七八なり。劇詩として大なる價値あるは殆ど絕無といはんも可なり。取りわけて我が國のは言語道斷なり。二十世紀は觀るべからざる劇詩と讀むべからざる脚本とのはびこるべき世か。劇詩家と狂言作者との分離は詩と音樂との分離の如く、人文進化の止むを得ざる結果なるか。予は今の所謂新國樂の演奏を聽くごとに屢〻此の疑問に想到するなり。

（二）脚本と小說

讀者に其の嗜讀の書を取舍選擇する自由あるは、取りも直さず小說作者の脚本作者よりも自由と便宜とに富める所以也。我が方今の市況より言へば、大概、小說は三千部の賣れ行きを中とし、壹萬部以上を上とす、而して四千萬の人口中三千の顧客を得るは難きことにあらず。新作家の輩出して相應の歡迎を受くるも宜ならずや。況んや其の下位なるは賣高僅かに一千部內外にして尙よく發行者を利するに足るをや。然るに演劇に至りては、興行數十日にして每日の觀者少きも數百人、而も皆おの〳〵其の嗜好を異にし、智識を異にし、加ふるに老少、賢愚、男女の差あり、彼の小說の專ら或婦女間に悅ばれ、或學生間に歡迎せられ、其の他或特殊なる讀書社會にのみもてはやされて尙ゆたかに成立つことを得るに比すれば、舞臺に上るべき脚本の資格は必然の結果としてやゝこしく、むつかしきものなり。小說の趣味は偏倚するも可なり、いづこにか同氣の讀者早晚一千を得るに難からざれど、同時に萬人に觀らるべき劇は是非とも其の主要件として普遍の興味を具へざるべからず、是れ其の作るに難く、作りて功を成すことの頗る容易ならぬ所以なり。小說就中、俗に小話（ストーリー）と呼び端物（スケッチ）と名づくるたぐひは、描寫の法だにめでたくば一概念又は一情操の發揮にのみ力を注げるも一種の美文として讀むに足るべく、若しくは唯一個の性格又は唯一條の珍事にのみ其の全卷を傾け盡くすも、同氣相求むる讀書社會の一隅に熱心なる顧客幾百若しくは幾千を得て、或は名を當時に成すことを得ん。小說家は首都の商家の如し、

其の一商品に專らなるの故に却りて大に名を成す事あり、脚本家は邊鄙の雜貨商に似たり、有ゆる物を備へざれば店に顧客の足跡を絶ちぬべし。又譬へば小說家は一種品の飯食店の如くなるも妨げなし、脚本家は大割烹店の如意に萬客の嗜好に應じ得るが如くならざるべからず。「大なる脚本は客觀的に作られざるべからずといふは此の故にて、大なる小說を劇詩的ならざるべからずといふも此の故なり。取りわけて我が國の劇は從來此の約束に重きを置きて客受を第一とし、力めて作者の私觀を斥け、脚色は叙事詩ぶりに客觀的とし、能ふ限りの異趣味を集め、能ふ限りの變化を盡くすことをもて劇の必然なる性質のやうに馴致し來たれるゆゑ、其の脚本の作し易からぬことは西洋列國の場合にも過ぎたり。彼なたにては昔は悲劇喜劇と截然と分れ、特に希臘の上代に在りては、劇詩も其の實は抒情詩ぶりにて、譬へば我が能の劇の如く、いと單純なるものなりしかば、當時の作家の技倆よりいへば之れを作することさまで難からざりしなるべく、又近古の歐米劇も古劇に摸倣したる作物は筋の單なるを佳とするゆゑ、脚色の上の困難ははるかに我が劇の下にあるべし。さなきも、喜劇、悲劇と別を立てゝ、或はをかしみを專一とし、或は悲しみをもつぱらにしたるは、何れも割合

にものし易き筈なれど、特り我が國の劇の如く悲喜混淆を常套とせるものゝすなはち其の脚色の鹽梅に於て頗る彼のシェークスピヤのに似たるものは、其の成功せる場合には尤も廣く觀者を悅ばしむる代りに、之れを作すること尤も難く、また尤も功を成し難し。されば近代の作家にしてシェークスピヤを學ばんとせるものは皆相つぎて失敗す、隨うて複雜なる劇を作るを(美學上の見地以外よりも)能ふまじきことゝして斥くる論者も生じぬれど、予は未だ謂ふ所の美學家の敎誨にも、他の實際家の忠告にも服する能はず、尙かたくなに「複雜なる脚本」の美を主張し、作し難く、成功し難きを理想とするをもて劇詩家の向上的欣求なりとするを也。夫れ劇は人生の縮圖也、其の傑れたるに至りては此の大なる人の世を只〻一日間の舞臺面に緊縮して其の明き面をも、其の暗き面をも、其の悲しみをも、をかしみをも、只〻さながらに見すればこそ、樂世の徒も玆に悅樂し、厭世の徒も玆に慰藉せられ、老少、賢愚、男女共に劇の詩の妙功力を感ずるなれど、若し其の舞臺に示すところ、僅に人生の一片面に限られ、或は老人に悅ばるゝも新代の心に遠く、或は學者に悅ばるゝも婦女俗客には些の旨味無く、一日の劇全く終りて興を感じたる者滿場の幾分にのみ止まるが如き者ならんか、其の衆詩歌の上乘

といふ資何の邊にかある。劇詩家を詩家の王となすは能く優人を使役する一點にのみ存ずとせんか、大なる小説とかゝる類ひの脚本との優劣果していづくにあるぞ。其の地位をいへば、抒情詩と叙事詩とは特殊科學に比すべく、劇詩は哲學に比すべきにはあらざるか。予はあくまでも劇詩の最大なるものは大なる小説だに善くなす能はざる所をなして普く衆人を悦ばする所にありと信ず。予は我が近松の傑作に此れを徵し、シェークスピヤが傑作に更に深く此れを徵す。要するに、海の如く濶く、世界の如く多様に、人を泣かしむるによく、人を笑はしむるによく、八面玲瓏、普遍平等なるところ、是れを予が理想の劇の詩の本相なりとす。其の作し易からざるは他の説くを俟たず、其の作して成功し易からざる將た辯を俟たずして之れを知る、而も無限向上を生命とすべき現未文壇の作家たるものが理想を此の至難なる(而も不合理ならざる)作物に置くことの非難せらるべき所以を知らざるなり。

(三) 理想的脚本

性、情、業の三要素は如何なる脚本にも必須なれど、上にいへるが如き複雑なる脚本を作らんとすれば、此の三要素の内質、例よりも複雑とならざるを得ず。茲に

「性」と謂ふは性格、即ち人物の事にして、「情」とは單純なる悲喜哀歡の情緒より戀愛嫉妬、復讐、功名等の複雑なる情慾、煩惱までを含めるものを謂ふ。さて「業」とは人間の所行なり、行動なり、作業なり。個々人の性格と種々の煩惱と種々の作業と、此の三者相結んで人生の活劇成る。之れを詩的に縮寫して一幅の活畫圖となすものは劇の詩なり。巧みに一個性を發揮したるも或は一の好抒情詩たらん、巧みに一作業の顛末を叙説したるも或は之れを好小話と名づくべし、然れども三者を悉具せざるもの未だ之れを劇の詩といふべからず。三者を悉具せるものに亦た單複の別あり。專ら一個性、一煩惱、一作業にのみ力を盡くせるものあり、或は作業を主位に置き個性を寫すにおろそかなるものあり。或は煩惱を描くに專らにして作業と性格とを賓位に置けるものあり。甲は能劇又は希臘劇の如く幾分か抒情詩風に傾くか、然らざれば彼の概念派の作風に流れ易く、乙は我が實錄劇の如く、又は沙翁時代の荒唐劇の如く散漫なる叙事詩風に傾き易く、丙は我が淨瑠璃劇若しくは彼方の樂劇の如く概して荒唐なる夢幻劇となる。抒情詩劇は深刻若しくは幽玄にして簡勁なれども單純にしてさびしく、叙事詩劇は賑かにして多趣なれども雜駁にして散漫、夢幻劇は詩趣ゆたかにして畵の

如く花やかなれども無稽にして荒唐なり。さていづれも其の妙なるものに至りては、頗る見るに足るや勿論にして詩的價値將た小ならずと雖も、之れを劇詩の理想上よりいふ時は、未だ其の圓滿なるものといふべからず。彼の沙翁の作や、其の叙事詩劇の弊を脱せざる所に若干の瑕疵なき能はずと雖も、其の美所に就いて之れを觀れば、巧みに三要素を併せ具へて、多趣は叙事詩劇に劣らず、深刻は抒情詩劇に劣らず、詩趣ゆたかに畫的なること將た夢幻劇に劣らざる概あり。又之れを我が淨瑠璃劇の美所に見る、其の蕪雜と散漫と荒唐と無稽とは眞に厭ふべき缺點なれども、其の多趣と畫的とは優かに沙翁の作を凌ぎ、且つ一面には、沙翁の晩年の傳奇劇がなしたる如く、巧みに樂劇の美所をも兼ね備へたり。只〻一の缺けたる所は抒情詩的幽邃即ち心理的深刻のみ、而してこは重に人物の個性を重んぜざる我が脚本の舊套の然らしめし所なり。今若し此の短を長うして彼の弊を除き、空前の脚本を未來に興さんと望まば如何。夫れ理想を欣求する者は由來前例の有無を問ふことなし。曾て人間の成し得ざりし事も或は遂に成し得らるゝの日到らんも知るべからず。現世的事業には詩人者流の容喙をゆるさゞる場合もあるべく、またあらゆる遼遠なる理想を

峻拒するもあるべし、然れども文學美術の事は之れとひとしなみにいふべからず。此れは、一面現世に密附し、他面當來に光被すべきもの、文學的若しくは美術的理想の是非に對しては世の功利の徒は須からく口を噤むべきなり。上にいへる如き理想的脚本は、人或は之れを空想的欲望の一塊たるに外ならずとして一嘘に附せんか、予は之れを意に介せざるなり。予は特り自家の爲に此の理想を立つるに非ず、日東未來の文壇の爲に此の理想を立つる也。二百年來の因襲は我が脚本と演劇とをして一種特別なる性質を具へしめたり。我が劇は半(なかば)は正劇、半(なかば)は樂劇、一分は叙事詩的、一分は抒情詩的、即ち觀るに宜しく、聽くによろしく、將た玩味瞑想するによろし。予が所謂理想的脚本の素を具備したる點に於ては古代劇に勝り、中古劇に勝り、將た樂劇及び近代の歐米劇をも凌がんとす。其の縱駁は惜むべしと雖も、其の豐富は愛すべきに非ずや。其の非有機體的滅裂と其の淺薄なる客觀性(オブジェクチヴィチ)と其の漠然たる心理趣味(サイコロジカル、インテレスト)とは共に憾むべき缺點なれども、之れを矯むる法必ずしも絶無となすべからず。只管に歐洲劇を學んで我が固有の素を棄てんか、我れ彼れの踵を追ふなり、然るに我が既有の素を利用し全然たる一新劇詩を興さんか、空前の劇詩を興すなり。沙翁を學ばゞ我が未

來の劇は似て非なるエリザ劇を演ずるにとゞまらん、近松、竹田等に拘泥せば我が未來の劇は似て非なる元祿、享保の劇を反覆するにとゞまらん。若しくは近代の歐米劇に摸する、將た似て非なる「第二」を作りいだすの外に何の益かあるべき。天然は同一を再びせず。醇なる第二の得がたかるべきを覺悟せば吾、人、は、何物をも摸すべからざるなり。否、理想の指す方向にむかつて長へに無窮に精進すべきなり。理想の指す方とは何ぞ。正劇と樂劇と叙事詩と抒情詩との素を尤も巧妙に融會せる劇詩是れなり。

かくの如き劇詩いつの日にか成らん。諸科學の綜統せられ融會せられて最後の一大哲學系統の成らん時に。

（四）　脚本の三要素

凡そ脚本を作するに當りて、先づ意を注ぐべき主なる要素は「性」「情」「業」の三なり。美學上の議論を離れて專ら作劇の實際を言ふも、第一に必要なるは人物なり。類型にもあれ、個性にもあれ、何等かの性格を具へたる人物を假設せぬうちは筆を下すべきよすがなければ、劇の要素の第一を人物即ち性格となすべきは勿論也。されば柳亭一流の草双紙作者だにも、筋を立つる前に、先づ主なる

人物若干を選びて、あらかじめ彼此の關係をば定めたりき。種彦が『田舍源氏』の筋を立つる前に翫具の土偶を騁べしなど思ひあはすべし。但し我が從來の劇は、淨瑠璃劇以來のならはしにて、專ら「業」と「情」とに重きを置くを常としたれば、所謂人物は偶人も同樣、ほんの「情」「業」を活動せしむる彈機程の用に供せられたり。まことを言へば、劇の人物の性格は、譬へば三絃のカンドコロの如く、カンドコロのかなへると然らぬとによりて總體の音色に狂ひを生じ、諸へる調子も妙趣を失ふ道理なれど、我が從來の作劇家は、之れを喩へば器用者の三絃を弄するが如く爪と撥との達者を主として、肝腎のカンドコロを誤りつゝ只〻よき程に奏で去りたる趣あり。近松の如き上手の作は、流石に此のカン加減に妙ありて、さながらにも樂譜に上らん價値あれど、それだにも其の大かたは偶中なるべし。彼の小春、梅川などの性情をいとむづかしく剖析して、心理に叶へるが如く打たゝふるも、所詮は此の不用意の妙に魅せられたる結果のみ。泰西の作とても、中古の作は大かた同じ趣なれど、大本の希臘劇が抒情詩風の劇なりしだけに、早く上代の劇に於て、單主人公を置くの習ひあり、延いて所謂擬古劇に此の單主人公の脈は傳はりたり。蓋し擬古劇は、喩へば一絃琴の樂などに比すべく、音色の波瀾

すべて唯〻一つの絃に由るなれば、此の唯一絃の音じめは自からいと大切と見做され、隨うて彼方の諸作は我が國劇の物語風に流れていと散漫なるとは痛く趣を殊にしたり。さて所謂中古劇即ちシェークスピヤ以前の英國劇の如きは、屢〻もいへる如く、ほゞ我が國のに似たりしが、主觀的なるマーローが(其の持前の自然の結果にて)單主人公風の脚本を作り、客觀的なるシェークスピヤいで〻、カンドコロの妙趣はマーローが一絃樂を學び、絃數の繁き面白味は他の作者の長所に做ひ、一種の多絃樂を奏でいづるに及びて、こゝに近世ドラマの素は作られたり。今彼方に行はるゝ脚本は、明かに、主人公は設けながらも、流石に三同を必要の事とするが如き過去の妄說に拘ふことなし。されば近時の作には、主人公の在ると同時に(複雜なる作には)尙許多の主なる人物ありて、皆及ばん限り、其の性格の明著にして個性的なるを要となせり。即ち劇の根本旨味を其の人物の性格に置くことは動かすべからざる原則なり。例へば『ルイ十一世』を面白しと感ずるも、其の根本は主人公ルイ十一世の性格の面白味なり。『エルナニ』を面白しと感ずるも、其の實は主人公エルナニの性格若しくは副人物たるドン、カルロスの性格に深き旨味を感ずればなり。上古若しくは中古の作にては此の性格

上の趣味、上に言へる理由によりて、主として一人物にのみ集まれることあり。希臘の古劇、マーローの諸作などはいふも更なり、ラシーヌ、コルネーユ等の作の如き、或はシェークスピヤの『ヘンリー五世』『リチャード三世』の如き皆此のたぐひなり。之れを單性格旨味と謂ふ。されど如何なる劇も到底純粹なる單性格旨味のみによりて成り得べきにあらねば(主人公あれば副人物あるべき筈なれば)こゝに複性格旨味といふこと伴ひ生ず。複性格旨味とは種々の性格を殊にせる人物の主人公を繞りて言動するより生ずる面白味なり。即ち性格の照繳より生ずる面白味なり。善人あれば惡人あり、豪放なるあれば小心なるあり、硬直なるあれば輕薄なるあり、相照繳してこゝに妙なる人生の一小畫圖を現ずる道理なり。而して其の性格にしていよ〳〵明著に、彌〻個性に近ければ、所謂性格旨味は更にいよ〳〵加はる理なり。我が劇のかなたのに比して何となく旨味淺きは此の性格旨味の淺ければなり。

性格に關する面白味は單、複、の二のみにあらず、尙別に發展上の旨味といふものあり。こは主人公などが品性上の遷轉を謂ふ。一幕又は三幕の短き劇にては

此の旨味を現ずべき機會なけれど、通し、狂言にては此に別樣の面白味を加へ來たる。はじめは善なりし主人公が種々の動機に促されて惡人に墮しゆく逕行の面白味、若しくははじめの惡漢が恩に感じ義に動かされて、竟に本善に歸する遷變など、孰れも性格發展の面白味なり。例へば、功名心及び罪惡の展開するにつれてマクベスの性格の移りゆく相疑惑、嫉妬の情に驅られて其の爲人の稍〻變りゆくオセロ、幾多の煩悶を經て多少其の性癖を變へ來たるハムレットなど、此等、其の本性は固より舊のまゝながらに、其の相の痛く變りゆく甚深の面白味は、通し狂言にあらざれば現じ難し。我が從來の作は大抵通しに物せられ、剩へ叙事詩の性質に作られたれば、此の旨味割合にゆたかなれど、もと性格に重きを置きてさて割り出したる發展ならねば、其の變移の鹽梅、大概は茫漠若しくは不自然にして、却りて旨味を毀ふ失あり。例へば『千本』の權太の如き、若し此の用心をもて描きたらば一層の妙味加はるべきに、作者は第一に脚色を求め、例の意外を旨とせるゆゑ、觀了りて後に興轉〻醒むるなり。また忠臣の少年が中ごろ俄に豹變して大奸臣となるなどいふ作意も、屢〻我が劇には見えたる所なるが、これも大概は脚色的にて、性格上より割りいださねば、旨味存外にあさ〳〵し。要するに、東西作意の大差別は主として性格、旨味の深淺にありといふべし。

されど謂ふ所性格は素と形無く、行動無く、坐りたるまゝのものなれば、何等か客觀の物に觸れて、何等かの煩惱を起さゞる限りは、君子も、小人も、賢者も、愚者も全く辨別の無かるべき筈なり。されば前に謂ふ性格の照徼といふこと、性格發揮の第一條件となり、或は相牽き、或は相排し、こゝに各殊性をして喜怒哀樂せしむべき端を發く。此の喜怒哀樂即ち情こそは性格を表現する必要の條件なれ。又名けて煩惱とも謂ふ。されど煩惱はた無形のものなれば、之れを外に表現せんとすれば何等か他の五感に觸れ得べき所作即ち業によらざるを得ず。言語も此の意味よりいへば所作なり、坐臥進退は言ふまでもなく所作なり、顏色眉目の働きも所作なり。すなはち內の煩惱と外の所作と相俟ちて後に人の性は現はるゝなれば「情」と「業」とは性格表現の必要條件なり。而して此の二條件より生ずる旨味を煩惱旨味及び所作旨味と謂ふ。

さて性格と性格と相觸るゝ場合に於ては、やがてそこに幾多の情感生じ、幾多の所作はた之れに隨ふ次第なれど、尙何等か異常の境遇若しくは異常の事件出來せざれば大なる煩惱は呼び起さるゝに及ばず、大なる煩惱呼び起されざれば性

格の眞を詳かにするよすが無きなり。所謂盤根錯節を俟たざれば利器の知られぬ道理なり。こゝに於てや、劇には筋を選ぶ必要生ず。

筋とは、例へば、復讐譚とか、敵どしの戀愛譚とかいふやうなる物語の筋にして、嚴密に言へば、筋といはるべき筋は、孰れも個人の性格が境に隱み、事に觸れて、自然に生み出だす結果たるに外ならぬ道理なれば、若し近時の實驗派作家例へばゾラの如き)の輩に倣はゝ、所謂筋は定めたる性格に關係無き他の出來事の中に就いて妄に求むべきものならねど、古今の作劇の實際を觀れば、我が作家は言ふも更なり、泰西の名ある作家だにも、大抵まづ眞假の物語に就いて多少恰好なる筋を擇び、さて其の筋に縋りて性情の旨味を發展せるが例なり。シェークスピヤの作の如きも筋は悉く借り物なり。其の他、尤も成功せる諸作家の劇は概ね筋を他所より借りたり。筋までを自家の想像に求めたるはおしなべて失敗せり。この理解しがたく奇なるに似たれど、一は天才の作用にも其の際限のあればなるべし。

但し筋(即ち譚(ストリー))と脚色(プロット)(即ち結構)とを同視すべからず。筋は假令餘所より借るとも脚色はあくまでも作家の所造なり。夫の性情旨味を表現するに尤も恰好な

るやうに脚色し、所謂「初」「中」「後」の聯絡を巧みにし、波瀾照應の妙、離合解結の工をほしいまゝにするは全く筋の外の工夫なり。

我が近代作者の脚本には、本を忘れて末に走り、此の方便に借り入れらるゝ筋を本旨の如く見做し、專ら譚又は脚色上の旨味に重きを置けるものいと多し。それらは物語を形のみ劇に翻せるものと評すべし。

筋を立つるにもおのづから單、複の別あり。筋の唯一を嚴守せしは古代劇と擬古劇とに其の例あり。幾筋も相纏綿せしめて其の歸結を一にせるは英のシェークスピヤ、我が近松、其の他近代の歐洲劇にも其の例あり、要は歸結の巧拙にあるべし。筋の唯一を嚴守することを正則とせしは過去の劇詩論なり。

さて、かくの如く筋を立つるは、畢竟性情の發揮を便にせんためなれば、次に尤も意を注ぐべきは人物の煩惱(パッション)なるが、此の煩惱にもおのづから本末の差別あり。作家によりては、むねと主人公の主煩惱(ルーリングパッション)のみに全力を注ぎて、例へば、主人公の戀愛、功名心、復讐の念、嫉妬の情などいふ單なる煩惱をのみ發揮せんと力めたるもあり。若し此の單、煩惱、旨味に重きを置くこと甚しきに過ぐる時は、往々個性

の發揮薄くなりゆき、一種の不具なる煩惱劇風に化するを常とす。或は必ずしも主煩惱を立てずして種々の煩惱の錯綜牴牾に旨味を求めて、父子の情、夫婦の情君臣の情、乃至は恐怖、悔恨憤怨、哀傷すべて切なる人情を發揮するを主とせるもあり。此の場合にも個性は概して薄くなりて、例へば、我が淨瑠璃劇の如くなるなり。蓋し眞個に性格を發揮せんとすれば、單に主煩惱をのみ表現して未だ盡したりとなすべからざると同時に、徒に種々の性情を錯綜せしめ、散漫なる情緒を相照らす、將た頗る當を矢す。此の二者を兼具して宜しきを得たるものをこそドラマの上乘となすべけれ。シェークスピヤの傑作の如きは是れなり。

尙此の單復の煩惱旨味に加へて煩、惱、變、轉、の旨味に一段の妙趣を現ぜる作あり、例へばマクベスが非望の次第に增長し發展するを寫せるより生ずる旨味の如きは所謂煩、惱、變、轉、の旨、味、なり。

上に筋を立つるは性情發揮の方便なりと言ひたるが、此の一概に筋と名けたるものゝみによりては性情を發揮せんよすが無ければ、其の筋の中に就いて何等か恰好の事件を選び來らざるべからず。之れを「珍事（インシデント）」と名づく。此の珍事（インシデント）の取舍は

作劇上の技倆なり。珍事とは、例へば、寶物の紛失、君家の沒落、突然の榮達などいふ事件を謂ふ。大星由良之助の性格は鹽谷家に一大珍事起れるによりてはじめて明かに發揮せらるゝ機會を得るなり。

されど只〻珍事のみを選び得たるも、其の珍事中の佳、境、を求めて、そを舞臺に活現する用心なければ、珍事も案外に何の旨味無きものとなる也、故に珍事を擇ぶについで大切なるは佳境（シチユエーション）の取舍なり。佳、境、は或は場、面、とも名づくべし、例へば、邂逅、離別、裁判、論爭、搭鬪等は東西の劇に於て古くより採用せらるゝ佳境なり。由良之助の性格も判官が自刄の際に驅けつけたればこそ一層著く發揮せられたる道理なれど、使者未だ來らざる閉門中に着せりとせば、旨味ははるかに減ずべし。發狂の場、惡事露見の場、だまし討の場なども同じ例なり。又我が劇に謂ふ場、面、の意味もこゝに加へて說くことを得べし、例へば、室內の事としては興なきを戸外の事とするが故に旨味著く加はるが如き是れなり。雷雨の場、深山の場、月夜、花下、雪中など、さま〳〵に場面を選ぶ皆同樣の手段なり。

佳、境、既に選定せられたるも、尙一つ大切なるは極感（カンドコロ）の利用なり。此の利用宜し

きを得ざれば折角の佳境も案外に効少くして終るなり。由良之助の驅けつけも判官全く瞑目したる後か、若しくは未だ自刄せざる以前ならば、感情の發揮に若干の差あるべし。此のキッカケの取捨恰好なるを極感（エッフェクト）の利用に妙なる者と謂ふ。而して極感は大抵科（シノプシス）に伴ふを常とす。所謂活歴劇の人をして倦ましむるは、第一は性情旨味の乏しきが爲なれど、第二の理由は佳境の選びかた拙く、極感の利用不妙なるに基く。就中、科（シノプシス）乏しく白繁（モリフ）く、坐すること多く、動くこと尠きに因る。子役の利用、小道具の利用など、將た此の極感を著くせしむる方便也。

以上筆に任せて述べたる所を一括して表とすれば左の如し。

劇詩
- 性格（性）
  - 單（主人公）
  - 複（副人物）
  - 發展
- 煩惱（情）
  - 單（主煩腦）
  - 複（錯綜牴牾）
  - 變轉
- 珍事（インシデント）
- 所業（業）
  - 筋
    - 主
    - 副
  - 話
  - 脚色
- 佳境（シチュエーション）
- 極感（エッフェクト）

（以上の論旨、モールトン氏の『シェークスピヤの作劇術』に負ふ所尠からず）

（五）かなたの舞臺面

かなたの脚本と我が脚本とを比べ論ずる折にも、シェークスピヤなどの作を講ずる折にも、舞臺の構造及び道具、飾附、出入口等の我れと彼れと頗る相異なる所あるを會得せざれば、優劣の標準も、長短の物さしも立たぬ事なり。勿論、此の道に志せる人々は夙にも知りたることなれど、つぎ〳〵に語ることの便宜の爲に、こゝに其の相違のあらましを言はん。さて觀客席のとは脚本に關係なければ悉く省き、只〻演劇に關係したる部分のみを語らんに、先づ第一に著きは、花道といふものゝ無きこと、殆ど常に内面より見たるやうにのみ舞臺面をまつらふこと、が、彼方（かなた）の舞臺面の我れのに異なる所なり。又彼方のには廻舞臺といふものも無し。されど此の最後の不足は彼方（かなた）の道具立と飾り附とが我れのに比して遙かに輕便なると迅速なることによりて十分に補はるゝを得べく、若しは如意に燭光を明滅して咄嗟に舞臺面を變換するなどいふ技巧もありて、此の點の便宜は我れと彼れとまづ五分々々なるべし。

さて花道といふものゝ無きことは、我が國のに目慣れたる心より想像すれば、何

かにつけて頗る便宜わるげなれど、其の實我れのとちがひて早く叙事詩ぶりを離れたる彼方の劇はこれが爲に不便を感ずることいと尠なし。又所謂傍白といふ便宜法の古くより用ひられて相接近したる人物が、敵者には聞えぬ積りにて、時々長々しくそが胸に思へることゞもを憚らで公言する習ひなれば、吾々が想ふほどには不自然をも不便宜をも感ずることなし。蓋し我が劇に花道ある は、一應は便宜なるが如く見ゆれど(例へば、途中の出來事を見せ、若しくは途中の感想としてのみ面白味あるべき或種の情懷を吐かしむるには妙なるに似たれど)、また之れが爲に舞臺面の構造のいと面倒となる不便もあり。近年は我が道具方もいろ〳〵に工夫して「例のところ」即ち門口、玄關口の設置段々巧みになり、流石に無理無法なるいにしへぶりとは趣異なるやうになりにたれど、尙何となく不自然にして無理なる結構多く、はじめて劇を觀る俗人氣質は、恐らくは、何故にあの垣若しくは格子の隙間より、此の男又は彼の女が走りこまぬかなど不審し疑惑すること間〻あるべし。よしやかゝる大俗氣質の注文は齒牙にかくるに足らずとするも、藝風の寫實に傾き且つ一切の構造が同じ方へ向ふにつれて、

成るべく尤らしく物したしといふ欲は、役者にも、作者にも、はた道具方にも起る筈なれば、道具立のやゝこしさは次第に加はるべく、幕間の之れが爲に一段と長びくは到底まぬかれがたき所、是れやがて我が舞臺面の短所なり。且つや兎角花道を利用したしといふ念がつきまばるゆゑに、本舞臺は概して外面より見たる趣又は場面となり、隨うて要もなきに種々の飾附を備へざるべからざることもあり、尤も、それが爲に、面白き畫模樣の生ずることもあればそを一概にあしといふにはあらねど、手數のかゝることは彼れのに比べて一倍なり。早晩此の點に何等か新工夫を費さずば、制限八時間のうちに通し狂言を演ずることおひ〳〵難義となりゆくべく、又恐らくは八時間の制限も、世の中の事繁く、生活の忙しくなりもてゆくにつれて一段とちゞめらるべき時來り、更に一層の不便宜と窮屈とを感ずべきか。臨時の催しならば知らず、二十日、三十日と連日同樣に興行する技藝にありながら、幕毎に二十分乃至三十分以上の猶豫を要すとは、公然の技藝として考ふれば、不手際千萬の話ならずや。

彼方のは花道無きために舞臺は全く觀客席と離れて特立の別天地をなす、即ち

「プロシニヤム」といふ舞臺前面の大木框は、觀者の世界と演劇の世界とを眞二つに截斷して、譬へば、觀者全體をして一大魔鏡に面するの感あらしむ。截然たることゝ整然たることゝの上よりいへば彼れは遙かに我れに勝るなり。假令ば我が花道はもとのまゝに存し置くとするも、尙此の「プロシニヤム」の構造は多少參酌すべきものなるべし。近年は長谷川の骨折にて、家體の裝置、山水の畫割等は何れもいみじく進みたれど、尙打仰ぎ見るときは興ほと〳〵醒むること多し。眞に逼れる山水の遠景と空洞なる空模樣と、若しくは金襖の奥御殿とあさましき黑段々の天井とは、餘りに釣合のわるければなり。

床及び囃子方の居所は必ずしも改むるを要せざるべし、但し出語りをば永く存せしむべき者とするも、所謂所作事(景事)にあらぬ限りは(彼方の樂室の如くなさば兎も角も、樂人の姿を見するは妙ならじ。今は正當の「プロシニヤム」あらぬゆゑ、却りて此の點に不便多く、奥御殿の杉戸、森林の一部分などを格子まがひにス、カスなどいふやうの窮策をも行ふなれど、若し花道の置き所を換へ、聊か新案を加へたらばかゝる不體裁はなさでも濟むべし。又所謂床は彼方の舞臺に於ける黑被の居所にひとしく、舞臺の左右なる陰に設くるも不便なかるべし。

予は近來我が劇の舞臺面の彼方のに比して遙かに原始的に、遙かに粗末なることを感ずるなり。原始的とは其の臨時の催したる原始の質を遺存せることなり、くはしくいへば、ほんの一時の遊興に催す素人演藝然たる影をとゞめたることなり。朴茂とか、純樸とかいふ點を美となさば、勿論取り所は我れの方にあれど、不整、不純、不備、不諧和などいふ上より言へば、殆ど未だ高き價を貪りて公の觀覽に供する程のものにあらずとも酷評すべし。例へば舞臺の天井に戸内、戸外の別なきも不備の一つ、觀者の目障りも憚らで黑被が、舞臺を往來し、甚しきは開場七八日の後までも優人の背に踞して後句をつくるなども不整の一つ、若しくは淺黃幕、黑幕などを振落す毎に一々技手の手の見ゆる、或は廻舞臺に醜き道具の裏見ゆるなど。そも〳〵これらは脚本にこそ關係せざれ、たしかに演劇の一部分にして、こゝに見物の目を牽く限りは、一種の賣物的技巧に屬するなれば、彼の手品師の技にひとしく種を隱してこそ當然なるべけれ、裏面を露に示さんは素人が工夫自慢の餘習か、不埒至極なり、大人が價だして見る

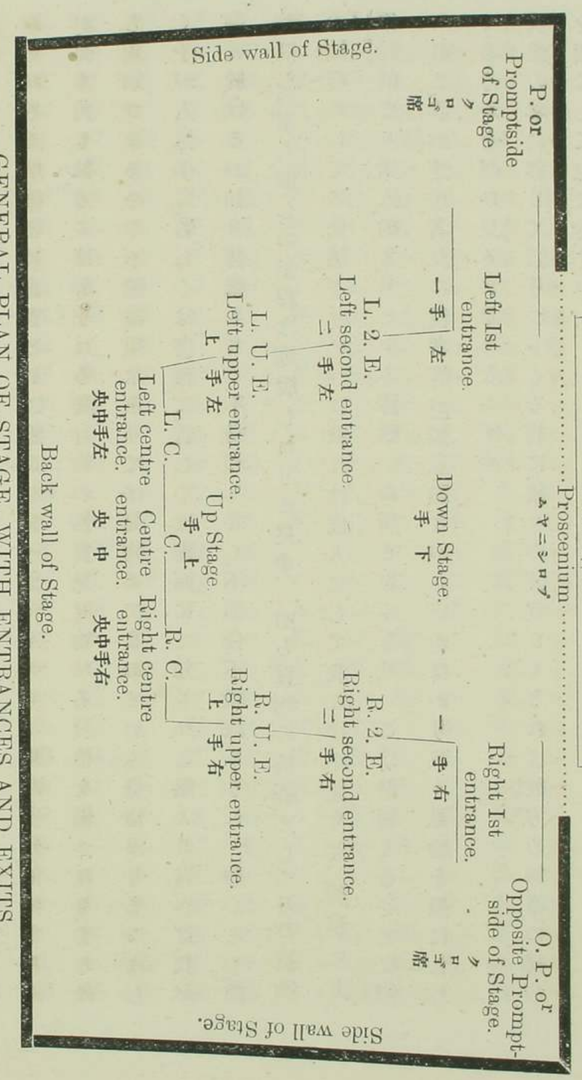
べき者かは。此の心より見るときは、大道具居所がはりなどいふものも、眞に兒輩の戯れ也。劇評家と言はるゝ際だに今尙かゝることに隨喜するはそも〳〵何の心ぞや。笑止の至極なり。

予はかくはいへど、總て舞臺面の裝置をば寫實的にせよといふにはあらず、商賣品を商賣品らしくせよといふことは寫實的にせよといふ意とは別なり。されば若し純樸を妙なりとせば、二十五座のごときも、能舞臺の如きも、又は所謂所作舞臺の如きも、必ずしも妙ならぬにあらず、さるは演者の本意次第、觀者の心の據次第にて妙なれば也。藝を見するが芝居方の本意ならば、觀者もまた藝を主として觀るべく、道具飾附はほんの景物として見るべし、されど道具を一種の呼物としてこゝに技巧ありと言はんとせば、十分技巧らしく物すべきは芝居方の義務なり。松旭齋ほどの手際は其のあらゆる進退に伴ふべき筈ならずや。然るにそれらの用意は些も無く、粗雜幼稚の技巧を物して、寫實呼はりはかたはら痛し。また之れが爲に幕間長びき、塲代舊時に幾倍すといふ事實あらんか、ツイ理窟も言つて見たく、癇癪も起りたくなる譯なり、彼方の舞臺面は、未だ肉眼にては見ざるゆゑ精確には評しがたきも、不自然、不理窟の伴ふは彼方のといへどもまぬかれざる所、嚴密に寫實といふ點より言へばマヤカシは東西多分伯仲ならんが、兎も角も彼方のは醇乎たる興行物の性質、見せ物たる資格を備へたり、すなはち親類づきあひの不體裁、粗末ありては見物にすまぬといふ覺悟ありとおぼしく、予が人傳手に、若しくは書藉に、若しくは畫面にて知りたる限より言へば、我が劇に於けるが如き蕪雜もなく、不諧和もなく、不都合、不體裁もなし。尠くとも「臨時催し」「素人催し」の影程は蟬脫したりと見ゆ。即ち「賣物」の技、藝、として及び「賣物」の技巧としての發達よりいへば、彼れは成人にして我れは小兒なり、幼稚なり、原始的なり、素人的なりといふ評動　ぬ所と思ふなり。こは些細なることに似たれど、我が芝居者及び役者等が(無意識ながら)いかばかり我々見物を愚にしつゝあるかを想ひ見るに足るならずや。

尙他の事に移りて語りつゝくる前に、後々の便宜ともなれば彼方の舞臺の構造を圖にして左に示すべし。

歐米劇の舞臺面の圖

觀者席



GENERAL PLAN OF STAGE, WITH ENTRANCES AND EXITS.

(六) 景色畫、道具畫

かなたの舞臺面のことを語りいでし序なれば、我が大道具畫割に當る所謂、景畫のことに就いても予が知れる限りを一わたり言ふべし。我が國の芝居にては毎齣の道具立大層にて、それがために幕間長びく次第なるが、畫のみにて(小道具以外の)一切を物するなる彼なたのまきたりは、手取ばやくていとめでたし。

さて、景畫にいろ〳〵あり、其の尤も單純なるものを、落し畫(drop scene)といふとぞ、こは幕果つると共に頂より振落す一種の景色幕にて、美しき風景、人物等を畫いたる上より言へば、形ほぼはほゞ我が道具幕、景色幕に類すれども、其の用を言へば、寧ろ我が引幕に同じく、主として舞臺面を消す爲に用ふる也。譬へば、新富座のグラント將軍の紀念幕の如く、其の座の存する限り幾たびも用ひ、また幾久しく用ふるを譽となす氣味なり。現に英國コヱント、ガーデンの「落し畫」の如きは一千八百〇九年再築以來の品なりといふ。さて此の「落し畫」は彼の「プロシニャム」の空間を塞ぐものなれば直に觀者の眼に接す、隨うて自然の必要より、丹青に精緻を盡すこと他の景畫よりも幾倍なりとか。げにや、奥深きところ又は小暗きあたりに掲ぐるは、言はゞ、團洲流の龕なる施彩にても事足るべきが、鼻の先に

垂るゝ畫は梅幸ぶりの精緻を俟たずば觀者の幻覺を促すに足らざるべし。「落し畫」につゞいて必要なるは、假に名けて「道具畫」又は「風景畫」とも稱すべきものなり。是れに種々の別あり、舞臺の左右に直立せしめて重に我が所謂「見切」の用に供するものを側畫(サイドシーンス)又は「翼畫(ウインゲス)」といふ、或は譯して「横畫」など名づくべくや。又「裏畫(うらえ)」と譯すべきものあり、原語にては hanging scenes 又は soffits と稱す。蒼空(そら)又は天井裏を摸して畫けるもの也。尚また back scenes といふあり、これ「背畫(うしろえ)」など譯すべし、奥の方に樹つる畫なり。此の「背畫」に二種ありて、頂より展べおろすものを「卷畫(まきえ)」(rolling scenes)といひ、左右より我が襖戸(ふすまど)の如く滑(すべ)り進みて中央に相合ふやうにまつらへるものを「平畫(ひらえ)」(flats)といふ。此の後のものは所謂出入(でいり)附の道具畫の要せらるゝ場合に用ひらる。出入附とは開閉自在の扉(ひらき)窓などをいふ也。又時としては此の「平畫」即ち滑(すべ)り畫を利用して咄嗟に舞臺面を變換するもあり、即ち我が臺帳に所謂道具を左右へ引いて取る)場合の用に供する也。右に言へる「平畫(ひらえ)」の外に「切抜平畫」(open flats)と譯すべきものあり、こは必要なる部分だけを切抜きて奥のかたの建物又は山水の景色などを見するやうにし、且つ自由に其の間を往來する也、深林の景色畫などに屢〻用ふ。鬱蒼と生ひ茂れ

る樹木の間より、かなたの湖水又は遠山などの見ゆるは皆此の畫の力也。時としては圓頂ぶり(まるてんぴやう)の宮殿の内部などにも用ふるとあり。此の外に尚「斜畫(はすえ)」と譯すべきものあり、かなたの通語にては pieces(片畫)といふ。細長き道具畫にて物置小屋、馬屋、又は其の他建物の一隅のみを見するためのものにて、舞臺の右又は左の隅に都合よきやう取附け置く也、必らず斜に取附くる例ゆゑ、予は「斜畫」と名づけたり。大概出入(でいり)附なり。

さて、最後にいふべきは「箱畫」といふものなり、こは近年やう〳〵用ひられそめたる新工夫の景畫なりとか、かなたの舞臺面は之れによりて一段體裁を整へたるが如し。蓋し從前の「景畫」のみにては、深林も宮殿も、横より見れば形(かた)無しなり、何となれば、所謂「景畫」は「横畫」も「平畫」も「斜畫」も「切抜」も、皆薄ぺらなる一枚畫なれば、之れを程よく組立てゝ舞臺面に取附けたる有樣は、譬へば、夥多の畫衝立(ついたて)を善き程の間を隔てゝ次第に奥深く樹てつらねたるが如く、眞正面より見ればこそ、深林とも、宮殿とも見ゆれ、稍〻斜に、又は眞横より見るときは、隙間(すきま)々々あらはになりて、幻影はおろか、興醒むべき景色なり。まだしも山野の景色などはさしもあらぬど、金殿玉樓の空洞然たるはいと〳〵をかしき限りなるべし。「箱畫」は

此の闕典を補ふために工夫せられたる也、普通の「横畫」のやうに、一枚々々に別々なるを相次いで排列することの代りに、前より奥までひたと連りたる一枚畫をもて左右の側面を見切る也、されぼおのづから凸凹して箱の形をなすなるべし、或は奥行附の「横畫」とも名づくべし。

景畫の種類は、ほゞ上にいへる如くなれど、此等景畫が觀者の幻覺を促す所以は、ひとり其のパノラマぶりなる丹青の力にのみ由るにあらで、他に細工火の助けあるなり、例の理化學の作用によりて、或は頂より、或は横より、或は足あかりの在るあたりより、種々の適宜なる光明を發射し、以て景畫の効用を助くるゆゑ、月光の林泉に映ずるさま、旭日の東山よりさし昇るさま、或は空のあらしだちて、雲起り電きらめく趣など、まことにさながらとも見ゆるなりとぞ。

尚一つ言ひ洩らしたることあり、そは上の「卷畫」の條にいふべかりしことなるが、例へば、競馬又は汽船汽車などが走りゆく有樣を見する場合には、頂より展べおろす「卷畫」の外に、横さまに開展する「卷畫」をも用ふるらし。舞臺なる船、馬、又は車は、只わづかに搖動するか、若しくは疾驅するらしき態勢を粧ふのみなるも、背景を見するなる件の「卷畫」が、譬へば、汽車の窓より見る山水の如くに、絶間なく走りつゝ轉換するゆゑ、打見たる所、船、馬、車などが眞に走る如く思はるゝなりとぞ。而して競馬場の背景などには、帽を振り、口を開き、手を擧げなどせる老若の人物畫、パノラマぶりに畫かれてありといふ、他は類推すべきなり。

細工火のこと、化粧法のことなど、語らば流石に興なきにあらねど、これらは予が尤も心をとゞむる脚本其の物の上にはあまり關係無きことゞもなれば、こたびはまづかばかりにして筆をとゞめ、次に又機を得ば、科介、白まはしに關して予が思ひ得たる所、及びかなたの俳優の藝風、覺悟、習慣等を語ることあるべし。

（明治三十一年四月—八月）

尋常の觀劇者と所謂劇評家

尋常の觀劇者のうちにも老功なる鑑賞家尠からずして優技を是非することの屢〻なる、所謂劇評家に相敵すとせば、二者の差別は其の專職なると然らざるとのみに存するか、若しくは品評の精粗、熱心、不熱心等にのみよりて二者の資格を分つべきものなるか。そも〳〵また別に二者の間をして截然たらしむべき資

格あるか。

吾人は思ふ、尋常の觀劇者は主として娯樂の爲に劇を觀るもの也、故に其の批評は如何ばかり細緻なるも、如何ばかり精覈なるも、要するに評者自身の好惡にのみ依據する也、自家若しくは其の同好の爲にするの外にはまた何の爲にする所もなかるべし、否、其の有無は兎も角も、其の娯樂外の目的に關しては他人之れに干渉すべき權利なき也。彼等が評にして美學の旨に叶はんか、吾人は其の鑑識の高きを稱ふべく、彼等が評にして臺帳の隱微を發揮する功あらんか、吾人は其の讀詩眼の明かなるを稱美すべし、而もこは彼等が吾人に與ふる豫望外の寄與なるのみ。或はひとへに荒唐を悅び、鄙俗を悅び、若しくは實感的演藝を悅ばんか、吾人は其の觀美眼の低きを憫むと同時に之れに半日の悅樂をほしいまゝにすることを得る彼等の幸福を羨まずんばあらず。蓋し彼等は娯樂の爲に劇場に臨む、其の目的を達し得れば足る。たとひ臺帳を度外にして俳優の技藝を品し、技藝を離れて優人の美醜を語り、役柄を解せずして當座のケレン、一時の場當りに隨喜すとも、吾人豈これに容喙する權利あらんや。

されど所謂劇評家は、之れを一事業となせる點より觀れば、單なる娯樂以外に何

等かの目的を具へざるべからざるに似たり。尠くとも演劇の改善若しくは奬勵などいふことは劇評が一事業となると共に伴ひ來らざるを得ざるべきものなちん。（但し吾人がこゝに劇評家といふは、彼の劇部の依賴と新聞社員たる職務との爲に義務上より劇評の筆を執る新聞劇評家のことにはあらず。彼等は寧ろ一種の案内者、紹介者として別種のものとなすかた穩かなるべし。）さて若しかゝる目的を具ふべきものとすれば、劇評家の批判には、必然の結果として、何等かの規律又は標準なかるべからず。必ずしも美學的立脚地などいふこちたき者を要すとは言はず、せめても脚本と優技との關係を了知して其の主賓の位置を顚倒せざる程の用意は無かるべからず。夫れすべての優伎は臺帳の再現なり。俳優は臺帳の解釋者たるに外ならず。臺帳に破綻あらば優伎を以てし、て之れを補ふは不可なるにあらず、而も其の補充の當否は毎に臺帳の批判と相俟ちてさて後に始めて定めらるべきもの也。則ち臺帳の主眼たるを認識することは劇評家の恪守すべき第一義なるべし、然るに或は批判の標準を爰に置かずして單に當面の劇的効果（ステージエッフエクト）のみを目安とし、自家の感銘と好惡とによりて優技を是非し、毫も臺帳の本旨を顧みざる者あり。かくの如きは他の尋常觀劇家の

好惡評と何の擇ぶ所かあらん。按ふに、臺帳其物の解釋だに、我が舊劇の臺帳の如く本來其の人物の性格を重んぜざるものに於ては、一に歸しがたきを例とするに、若し全く臺帳を離れて各自が主觀の偏向するがまゝに(方今の評論家の概して甚しく主觀的なるを記臆せよ)舞臺の諸人物を假想し來らんか、一由良之助も、評家の頭數だけに化現し、一師直の解釋も同じ數だけに殊別とならん。吾人は恐る、かゝる評家の團體を滿足せしむべき名優は彌勒の世までも出でざるべきを。故に吾人は劇評の第一則として臺帳を主位に置くの必要を主張す。さて之れに聯關して必要とすべきは、評家の觀劇に先だちて臺帳の旨に通ずることなり。こは殆ど言ふに及ばぬ自明の事たるが如くなれど、今の所謂評家中には此の用心いと鮮き者多きに似たり。例へば、臺帳に見えたる人物の性格を知らずして先づ舞臺に於ける性格を感銘し、其の先入主となれる感想を抱持して、さて後に臺帳の解釋に向ふとせんか、吾人は其の解釋及び批判の穩當を缺き易きを危まずんばあらず。彼の純然たる夢幻劇を準寫實劇の見地より評判し、若しくは時尙に媚びて物せる優人が筋の部分的修正を、其の臺帳の旨と衝突せるにも係らず、間〻激賞して措かざるが如き、亦た同源の誤謬なり。

今の劇評家中、或は專ら「型」及び慣例を重んずるゝあり。「型」及び慣習は古優人が熱心なる臺帳解釋の餘に成れるものも多ければ、其の大に參酌すべき價値あるや勿論なり、然れどもまた間〻臺帳と相關せざる一時の「思ひ付」に止まれるも許多あれば之れのみに重きを置きて舊劇を評判せんとするは往々にして迂愚の至極なることあり。「型」よりも重んずべきは臺帳の旨なり。

劇評の流行に於ては、其の起源の久しきよりいふも、我が國ばかり盛んなるは稀なるべしと思へど、臺帳を賓位に蹴落したることまた我が國ほど甚しきはなし、是れ俳優の技藝の割合に進歩して臺帳の文學的價値の次第に退歩せりし所以ならんか。故に演劇を改善せんと欲する未來の劇評家は、宜しく先づ專ら此の點に着目して此の主賓の顚倒を正し、臺帳の解釋に重きを置くべし。是れ一は眞に優伎をして進歩せしむべき媒介、一は臺帳の短長を詳かにして未來の好脚本を呼び起すべき良策ならん。近日帝國大學部內に學殖ある劇評家の一團體將に起らんとすと聞きてこゝに吾人が希望の一斑を陳すること爾り。

（明治三十一年六月）

史劇に就きての疑ひ

歴史上の事蹟、人物を主題として二三の拙作を試みし當時より、予は史劇といふものゝ本質につきて常に疑ひを抱きたり。曰はく、詩人は歴史家の侍婢にあらねば、頭に史の稱を戴くとも、そは只〻材の據を示すにとゞまり絶えて史の爲には拘束せられざるを得べき者なりや、否や。曰はく、所謂史劇は、我が從來の王代、物若しくは時代物と同義に解すべき只〻名と時とのみを過去に借りたる虚構の作物に外ならざるべきか、否か。或は史的と特稱する一種の劇には何等か特別の本領あるか。若しさる特殊の本領無くば、史劇といふ名稱は、彼の政事小説、航海小説、軍事小説などいふにひとしく、貸本屋者流の稱謂たるにとゞまり、美學上若しくは劇學上には秋毫の關係も無きものなるが如し、果して然解して當然なるべきか、否か。

嘗て二三の美學論を讀み、シルレル、シェークスピヤ等の史劇に關する諸家の評論を讀みし折には、此の疑惑ほゞ釋然たりしに、其の後みづから筆を執りて史劇を作せんとするに及び、疑團また新に生じたり。予はシルレルとシェークスピヤとの間に史劇の解釋に大差あるを感じ、且つシェークスピヤの國史劇には一種の特殊なる本領あることを感じたり。美學上より見れば、すべてシェークスピヤの史劇は痛く其の形式を誤れるに似たり、其の作大かたは叙事詩に近く、剩へ前作と後作と分離すべからざるやうに相聯關して、多きは八篇を以て一團となすべく、少きも三四篇を併せて以て一篇と見做さゞるべからず。シルレルにも trilogy の形式を取れる『ワレンスタイン』の劇あれども、彼れは希臘の三段曲を祖とせしにや、事は主としてワレンスタインといふ一人物の上に係れり、其の三段に分れたる所は尋常の悲劇に殊なるに似たれど、其の因果の聯關する所は一個の主人公の外に出でず、シェークスピヤの國史劇の瞑々のうちに前後相つながりて、或は八段曲をなし、或は十二段曲をなすとは同じからず。シルレルは哲學にも美學にも精通せりし作家、シェークスピヤは其の學理上の智識に於ては、はるかに當年の審美家たりしベンヂャミン、ヂョンソンにも劣りたる作家なり、劇の形式上より言へば、シェークスピヤの半叙事詩的史劇の不具なること今更に論を俟たざるべきなり。而も予は竊に疑ふ、他の五大悲劇に於ては、略〻悲劇的形式に瞑投するを得たるシェークスピヤが、何故に特り其の史劇に於てはかゝる背則の作をなしゝ

か。其の史劇は、通常其の壯年期の作と假定せらるゝ故に其の作劇的技倆の未だ圓熟せざりしが爲に然りとのみ斷ずべきか。其の國史劇の今尙列國の劇壇に歡迎せられて多數のシェークスピリヤンに激賞せらるゝは何故ぞ。シェークスピヤ崇拜の餘波とのみ見做すべきか。コールリッヂが庸劣なる國王を主人公とせるリチャード二世を激賞し、ハドソン、ダウデン、シュレーゲル、ゲルヰナス、ウルリチー等が多少形式上の缺陷を認めながら、卑劣の君を主人公とせるヂョン王の劇、悲喜いづれとも見做しがたく眞の結局さへ無きヘンリー四世の劇を稱美し、口を揃へて彼れが國史劇を回護するは、母好かれて其の子抱かるゝの一例たるに外ならざるか。或は史劇の本領は多少他の劇と殊なるが爲に、シェークスピヤの天才は之れを看破し、其の本領を發揮せんが爲に、態とかゝる特殊なる形式を取れるにはあらぬか。若しシェークスピヤの作意を不具なりとすれば、其の今も尙歡迎せらるゝは單に因襲の惰力に因るにや。濟々たるシェークスピリヤンの同音に彼れが作を讃美するは、單に渉翁崇拜の騎虎の餘勢か、予は尙ほ疑ひ無き能はざるなり。

按ふに、史劇とは、我が所謂活歴劇の如く、正史若しくは野史の事蹟を只〻そのまゝに安排して正史の地の文を科介に改め、人物の語を白（せりふ）として劇に物したるに非ざるとは元より多辯するを要せざるべし、さりとて近松等の淨瑠璃劇の如く、元和を建仁とし家康を時政とし、ほしいまゝに史上の名稱を用ひてほしいまゝに立案構思せるもの、即ち詩想の自在を得ん爲に名のみを過去に借れる空想の作も正當の史劇とは稱すべからず。前者は劇詩として取るべき所なく、後者は劇詩としては或は取るべきも、史としては一分の取るべき點無きに似たり。詩は史の侍婢にあらねども、史もまた詩の爲に濫用せられて故なく其の名稱を犧牲にせざるべからざる約束無し。史學上に寸功無くしてほしいまゝに史と稱する、亦た一種の妄稱ならん。ハドソン曰はく、劇詩をして眞の劇詩たらしめんとせば、史の皮相の事實に執着して其の本領たる劇詩の生命を防遏すべからず、劇詩の法則をば正史の事實よりも重んずべきなり。二者相容れざる時は、後者を棄てゝ前者に從ふを至當とす、されど二者能く兩立し得べくば決して其のいづれをも犧牲とすべからず、史に忠實なることは尠くとも其の作を圓滿ならしむるに肝要なりと。ウルリチーもまた曰はく、若し詩人にして或史的主題に於ける其の史的眞意を發見すること能はず、若しくはそを實現するに當たりて之

れを詩的に物すること能はずんば、彼れは其の作を名づけて史的といひ、又は其の人物及び事件に史名を附與するの權利無しと。蓋し按ふに、全く史の眞義を離れ、ほしいまゝに後代の心を以て過去の心を揣摩し、現時の情操を移して史上の人物に抱かしめ、甚しく史の事實を曲げ、偏に自家の感想を抒するも是れまた塲合によりては一種の好詩たるを得べし、而して其の詩たる上の特質によりて、或は之れを劇詩とも呼ぶべく、或は之れを叙事詩とも名づくべく、或は之れを抒情詩ともいふべく、主觀の劇詩又は叙事詩とも名づくべし、されど若しかゝる任意の作に、何の殊別なる處も無きに、史的といふ殊稱を擅有せしむべしといふものあらば、予は其の意を了する能はず。

更にウルリチーが史劇を論じたる意に曰はく、史劇の目的は史的事件の隱微なる眞意を描破するにあり、所謂史の眞意は啻り倫理的なるのみならず、其の倫理的なるところ、やがて其の詩的なるところ也。されば史の眞意を描くは、詩の本領に外づれたる事をなすにあらずと。又曰ふ、史劇の劇詩たることは他の劇詩に異なることなし、されども史的といふ約束ある限りは、之れを作ずるの法則は悉く他の劇と同一なるを得じ。他の空想より生みいだす作は、事件も、人物も、一

篇の主意も、すべて作者の任意なれば、人物を先きにして事件を後にし、個人の性行を以て事の發展の主因となすも自在なれど、史劇に至りては然らず、史には自然の大法に從へる一道の發展あり、此の發展は個々人の一生を貫き、延いては其の死後にまでも及ぶものなり。偉なる個々人の力は、往々にして大發展を左右し、幾分かそを進退することありといへども、要するにそは一時の作用たるのみ、史を通じて觀れば、個々人は末にして大勢は本なりと。

こゝに所謂大勢は、人間の存する限り、隱顯弛張して連續し、活動し、曾つて斷止することなきものを謂ふなれば、ウルリチーに從へば、史には段落無く結局無き道理なり。一代の業因は永く後代に纏綿して、或は隱れ、或は顯れ、時に數百年を經て後に其の業果を現ずることあり。はじめは喜劇として見るべかりし業果の、中ごろ忽然として悲劇の因となり、悲劇の業果として見るべかりし事蹟の、或は翻然として喜劇の緣となることあり。尋常の家庭悲劇（ドメスチック・トラヂディー）に於ては、個人の身死すると共に其の業因もこゝに絶滅す、其の人死すると共に其の業も死するなり。或は其の業因滅せずして永く其の子孫にも及ぶべしと豫想せらるゝ例もあらんが、要するに其の範圍いと〳〵狹し、また遠く追尾するを須ひざるなり。然るに

史上の偉人物、就中一國の政柄を掌れる如き人物の行爲は、其の應報の及ぶ所決して一代にのみとゞまらず、其の身は死しても其の行爲の果は死滅せざるを常とす。其の業因は綿々として世波の底に起伏し、或は數十年若しくは數百年の後に至りて、不可思議にも其の業果を現ずることあり。而して此の不可思議なる隱微の因果は、一面倫理的として見るべきと同時に、一面詩的として見るべきものなり、否、此の間に頗る大なる詩的消息ありと言はざるべからず。云々。

以上ウルリチーが史劇論の大旨なり。さて此の意にすがりて觀る時は彼のダウデン氏が國王を主人公としたるシェークスピヤが歴代史劇（シクリック、ドラマ）に一種の隱微あるを發見せるも宜なりといふべく、又諸批評家の既に言へる如く、シェークスピヤが其の國史劇を前後連絡したるものとして作したるは、豫めこゝらに意ありての沙汰なりとも推斷し得べきに似たり。

勿論、かくのごとき大題目は僅々五七齣を限りとする劇詩の恰好なる主題たらんよりは、むしろ叙事詩の本領たるべければ、史劇は必ずかくあるべしと言はんは恐らく不穩の說なるべし、まかも歴代史劇の法によれば必ずしも之れを能くしがたきにあらじ。只〻此の主意に成れる悲喜劇は、尋常の悲喜劇と異なるが

故に、多少叙事詩的性質を具へざるを得ざるべく、また毎に悲喜兩劇の性質を兼具して幾分か劇の正則に背く所なきを得ざるべけれど、一面に於ては叙事詩よりも深く、一面に於ては家庭劇よりも廣く、其の人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふるの點に於て他の作の能くし得ざる所を能くし、件の缺陷を補うて餘りあるにあらずや。シェークスピヤの歴代史劇は、種々の點に於て瑕疵ありと雖も、この點に其の功を成じたるに似たり。予は衆批評家と共にこゝに彼れが作の一特質を發見し、其の朗讀戲曲として彼れが史劇の今尙讀詩子に悅ばるゝ所以も、其の舞臺に演ぜられて苟も英國史に通じたる觀者に其の幾多の史的事實を豫想せしめざるを得ざる失あるに係らず、今尙歡迎せらるゝ所以も、共に此の點に存するならんと思ひき。是れ予が自ら惴らずして史劇に筆を染めし當時の覺悟なりき。

曩に『桐一葉』を著し、『牧の方』を公にするや、其の劇詩としての價値乏しきをは予みづから之れを知れりき。我が作劇の技倆の拙劣なるをも自から知れりき、其の舞臺上の約束に背馳する所のいと多くて脚色及び修辭の上に嘲罵せらるべき瑕疵あることも初めより豫期したりき。されど此等の缺點はたとへ能く

自識するも自ら矯治するの力なくば到底奈何ともしがたきものなり、ひとり其の形式上の缺點は、若し之れを矯正せんと欲せば(予にして改めんの心あらば)之れを正すを必ずしも難からざりしなり。されど前にいへる理由によりて、予は其の特殊なる形式上に一種の旨趣あるを信じたりしゆゑに、敢て美學家の說に背きて、竊かにはじめより數段曲を作ちんの腹案を抱きたり。史學に昏きこと予の如くにして、かゝる案を構ふるは僭越の沙汰なりしならんが、予の本意は、一は之れによりて我が所信を試み、二には史劇の形式に關する疑團を解くの機を得んとするにありき。拙著成るに及びて世上の批評家諸氏より果して種々の非難と教誨とを得たり。作の內容に關する非難及び教誨はすべて謹みて聽きにたれど、作の形式に關する非難は、前に陳じたる理由あれば、一段と心を傾けて聽きたりき。然るに諸批評家の此の點に關する非難は、聊か案外にも、殆ど悉くシェークスピヤの作に恰當すべきもの也、こは畢竟予の作の劇詩としての價値空しきため、虎を畫いて猫に類し、形をとゞめて神を逸したるに因るなるべし、然れども尙聊か疑はるゝは批評家諸氏の態度、口吻也。或は儀禮上若しくは好意上、作者をして拙劣の譏を受くること輕からしめん爲に、故意に重きを作の形式に置かれたるか、即ち作者の技倆足らざるが爲にはあらず、其の構案の法宜しきを得ざるが爲なりと言はんために、態と專ら形式の上を難ぜられたるか、其の眞意の在る所は未だ之れを知るを得ずと雖も、予が得たる教誨のうち最も力ありと思はるゝもの、悉く形式に關したるは、意外なりき。

教誨の第一に曰はく

蓋し戲曲は、一定の形式あり、是れ感興受發の理に本きて作者須要の制約を成すものなり、三曲部の如きは希臘以來の一體たるに相違なきも、之を分てば則ち支離、之を併すれば則ち疣贅、人物の數、事件の錯綜、場面の變化、時間の延長、皆共に膨大複雜に過ぎ、到底完全なる戲曲的効果を奏すること能はじ

と。高論まことに理あるが如し、只〻疑ふらくは、此の評は、直ちに移してシェークスピヤの國史劇全體の非難としても恰當なるが如し。如何。リチャード二世よりリチャード三世に至る八篇は、之れを八段曲と稱して不都合なく、又ヂョンよりヘンリー八世に至るまでを十二段曲と名づけても不可なきが如し、而して其のうちヘンリー八世、ヂョン、リチャード二世、及び同三世、ヘンリー八世の如きは、古今史劇中の上乘と稱せらるゝは何故ぞ。

教誨の第二に曰はく

戯曲とは場に上れる人物の言語と動作とによりて過ぎ去りたる事柄をまのあたりに表象する詩歌の一種なり、かく戯曲の中に現はる、事柄は全く曲中の人物のはたらきの中に終始すべきものなるが故に、其の由來經過を解せむが爲に局外に他の話說若しくは註釋を要するが如き事柄は未だ以て戯曲的とは稱しがたからむ、我等は常に戯曲小說をば一個の有機體に喩ふ、そは其の活動の因緣のすべて自家により說明し得らるべきを謂ふなり

高論まことにことわりなり。予も尋常の悲喜劇に於ては每にかくの如くならざるべからずと思へり。但し此の評は直に移してシェークスピヤの國史劇全體の非難としても恰當なるが如し。如何。一わたり英國史に通ぜざる者にして能く彼れが國史劇を了解し得べきか、疑はし。予が見る所によれば、シェークスピヤは明かにホリンシェッド又はモーア等當代普通に行はれたる國史的知識を普く世に知られたるものと假定して其の作を立案し、甚しきに至りては人口に膾炙したる事蹟の如きは、態と叙事白にだに詳言せしめずして觀者の取舍に打任したる所あり。今一々に例を擧げずとも、彼の歴代史劇中の二三を取り

て精讀せば自ら明瞭なるべし。恐らくは英國史に畧通せる學者とても詳かに彼れが史劇を了せんとせば、なにがしかの註釋を求めざるを得ざるべし。予は思ふ、かゝる特例は史劇就中、國史劇なるがゆゑに許さるべきなり、即ち國史劇の特權にして他の劇詩と異なる所こゝにありと。又思ふ、史劇の他の劇詩に比して作意に幾分か窮屈なる所あるも詩に因めるが故なれど、其の事件の幾分を豫想せしめて因果の複雜を恣いまゝにするを得るも、また是れ史に因めるが故の特權なりと。予が所見非ならばシェークスピヤの史劇就中、其の國史に關する者は、悉く非戯曲的作物ならん若し果して然らば、コールリッヂ以下數百のシェークスピリヤンは、概して皆旨目の評者也、と言はざるを得ざるべきか。如何。

第三の教誨は主人公の性格につきてなり。此の點に關しては諸家ほゞ見る所同じうして教誨を與へられたるが、其の一說に曰はく

蓋し悲曲の快感は其勇公(ヒーロー)に對する吾人の同情に職由す、彼が英邁なる氣質と剛健なる意志とを挾み、滔天の非運に反對し、抵抗し、煩悶し、沒落するの情狀は、洵に吾等の情想を激揚して吾等をして吾等が精神中に一種の異常にして高尚なる調趣を意識せしむ、吾れ悲曲を讀みて終宵卷を措かず、勇者と共に感動し、沈思し、嗟嘆し、憤慨し、天理

人道を敵として斃れて、而して已む、吾れ自ら顧みて恍惚として一種超絶の理想界に往住したるの思ひあり、是れ吾等がワレンスタインを讀み、マクベスを讀み、マリアー、スチュアルトを讀みたるの感情なり

と。然るに予が作する史劇の主人公は、尋常一樣の、智淺く、慮短く、意また強からざる女子にあらざれば逆境に處してあくまで志を貫かむとする大勇猛心もなく、恩に感じ義に勇み、死を以て節を全うする忠烈もなく、既往に鑑み未然を察し、機に先ちて算を制する智謀の士にもあらぬ因循姑息、意志不明の男子なり、云々。是れまた拙作の評としては當然なる非難なるべく且つ旨味深き教誨なり、嘗て美學論者等に教へられし所と殆ど符節を合するが如し。予も亦嘗てかくの如く信じ、又かくの如く主張せしをありき。只〻聊か疑ふは此の「勇者論」はあらゆる劇の詩に應用して穩妥なりとすべきかといふ事なり。シェークスピヤの國史劇の傑作たる『チョン王』の主人公は英邁の王なるか、意志剛健の君なるか。コールリッヂが激賞せし『リチャード二世』の主人公は淺智弱志の小人王にあらざるか。ヘンリー六世も薄志弱行の君主にはあらぬか。而も彼等は皆史的悲劇の主人公として描きいだされたるにあらずや。或はまた、喜劇的とも悲劇的とも定むべからざるヘンリー四世の性格は、何と評すべきか。かく考へ來りて予は大に惑はざるを得ざるなり。予は思ふ、史の悲劇と家庭悲劇（即ち個人の悲劇）とは、其の趣同じからず、隨うて其の主人公の性格もこゝに特例を生ぜざるを得ずと。予の見る所甚しく誤れるか。然らばシェークスピヤの史劇を稱美するの徒もまた同じく誤れるか。

第四の教誨に曰はく、正史の事實に拘泥する勿れ。主なる人物の性格は劇としての便宜によりて善惡共に著く誇張するをよしとす。例へば、主人公に同感せしめんと欲せば其の對手たる人物を惡人として寫すべし。總じて善惡不明なる人物多きは大なる不都合なり、云々と。是れまた味ふべき教誨なり、されどもかばかりの事は苟も劇に筆を執らん者のはじめより心得たることなるべし、偶〻志かせざることあらば、他にそれよりも一層重んずべき約束のあればならん。シルレルの『ヂャンダーク』に對する一派の非難は、世の只管自家腦中の詩趣のみを重しとして、自然にして史に存する大なる詩趣を度外視する一派の謬見を誡むるに足りぬべし。『冥途の飛脚』の八右衞門は其の惡人ならざる爲に却りて大なる意味に於て一段の詩趣を加へたるにあらずや。假に『リチャード三世』を除

きて、他のシェークスピヤの國史劇を見れば、善惡不明の人物幾何といふ數を知らず、而して其の不明なる所に更に一種の詩趣あるにあらずや。又其の國史劇は『チョン』の劇を除く外は、大概ホリンシェッドの史を其のまゝに採摭し、及ぶべきだけは史に違はざらんを力めたり、史の事實に詩趣ある限りは之れを襲用するは當然の事ならずや。或はかく思ふは予が誤解なるか。如何。

第五の非難は、予が作意は兎角に枝譚多端にして散漫に流れ、且つ其の描く所の性格は多くは舊型の人物に外ならずして、其の情操はた斬新なる所無し、といふにあり。此の非難の後半は作詩の技倆上に聯關せる非難なれば、爰に疑ひを提出するも、或は自家辯護の嫌あらん故に、只〻二三の疑ひのみを陳ぜん。

そも史劇中に現るゝ人物は、當代の人情を以て律すべきか、現時の人情を以て律すべきか。個人が死を欲する動機は古今同一なるべきか。戀愛の性質は古今同一なるべきか。封建期の人物を描くに封建期の理想を本とする、不當なるべきか。個性、類性の問題を離れて、單に形にあらはるゝ上を言はんに、形の舊型に類するは過去の人物を描くに當たりて止むを得ざる結果にはあらざるか。人物智愚の問題の如きも、其の時代に照らして決すべきにあらぬか。

されどこはシェークスピヤの劇に關せざることなれば之れを措く、たゞし前半の非難は彼れが作はた免かるべからず。尤も好評ある『ヘンリー』四世のごときは、一面フォールスタッフを主人公とせるの概ありて本筋は屢〻餘所になれるに、別に、ホットスパアの支談あり、若し之れを尋常一樣の悲喜劇を以て見るときは、支離と いひ、滅裂といふ、寔に當然の非難なるべし、而も予は衆批評家と共に其の支離滅裂と見ゆる史劇のうちに隱然一條の大脈絡ありて、そこに津々たる詩趣あるを認め、其の結局に近づくに及びては、さながら老練なる手品師の手に、紛糾せる亂絲の解きほぐされ忽然として掌理に歸するが如き概あるに感じ、同じく多端といひながらも我が夢幻劇の多端とは現夢の大差あるを覺えざるを得ず。又此の複雜なる詩趣の中に、予は最も興味を感じ、他の單純なる作物中に感得すべからざる隱微あるを覺ゆ。是れはた予が謬見なるか。

以上疑ひを陳じたるは、敢て予が作を回護せんが爲にあらず、史劇に關する予が疑義を決せんと欲するに外ならざるなり。されども若し我が批評家諸氏が予が此の疑義を讀みて、予がシェークスピヤを後援らしくせるを嘲り、シェークスピヤの如き天才は、如何なる形式を取るも、所謂往くところとして佳ならざるは

なき也汝の如きは宜しく形式を奉ずべきなり、と答へられんか、子は慚愧して口をつぐみ、退いて更に修行に力むべし、されど天外いづこにか聲ありて、尙ひそかに、つぶやくものあらん、曰はく、然らば美學上の形式論は到底天才ならざる小詩人者流の指南針たるに足らんのみ、眞の詩才にとりては所詮秋毫も益する所なき小乘教のみ、さすれば所謂批評家の嚆々は大なる文學には殆ど何等の影響も無きものならん。又諸君は天才の作に對しては一言も是非すべき權利無きものの也、天才に作詩の法を教ふることは諸君の能くせざる所なればなり、又妄に指導する勿れ、誤つて無要なる詩則を教へて天才を殘ふ悔あるべければなり、美學は作詩の法則を誨ふる程には才の大小を甄別する法を誨へざればなりと。是は或は妄言たるべし、されどかゝる妄言の謬妄を破りて世の味者の蒙を啓くも、亦た是れ深切なる批評家の任務ならん。

（明治三十一年十月）

史劇に關する疑ひを再び太陽記者に質す

さきの日物したる予が「史劇に就きての疑ひ」に對して『太陽』記者高山林次郎氏、去十月廿日の『太陽』紙上に答解を與へられたり、然れども、憾むらくは、或は質問の法宜しきを得ざりしが爲にや、予が疑團は尙聊かも釋然たる能はず、故に疑問の辭をあらためて更に高山氏に質す所あらんとす。

予が問はんと欲するは、史劇を作するに當りて史と詩と其の何れをか主とすべきといふ根本問題にはあらず。既に詩といふ、詩の主にして史の賓なるは論を須ひざる也。按ふに主賓といふと先後といふとは其の意おのづから殊なり、史詩、先後といふ事に關しては、予は初めより疑ひありしに、高山氏の論を讀みて更に一層の疑ひを加へたれば、此の點につきては後に別に質す所あるべし。さもあれ他の主賓の件は元來はじめより明かなり、されば、此の根本問題に關する辨析はすべて本質疑に要なきものとす。畢竟予が疑ひを陳ぜしや生中先輩の說を援引せしが爲高山氏をして種々の揣摩をなさしめたれど、此の意の明かに知らるゝからは、予は件の揣摩に對してこゝに辯解する要なきを感ず、故に直ちに質疑の本意に移らんとす。

予は沙翁の史劇に多少形式上の缺陷あることはじめより認識したり、故に形式上に於て彼れを學ぶの非に關しては、高山氏若しくはハルトマンの教誨を俟

つに及ばず。又史劇は、言ふまでも無く、必ずしも毎に叙事詩的たらしむべきの要なし、史劇の中に正劇の形質を具備せしめて當然なるものもあり、此の理もはじめより認識せり。予豈かゝる明白なる諸點に關して高山氏の答解を煩さんとせんや。予が問はんと欲せしは

（第一）沙翁の國史劇は氏の唱ふる所の劇詩の法則に悉く違背せるものゝ如し（a）其の數段曲の性質を具へたる點に於て（b）其の筋の一致を失ひ、支離滅裂の傾向に富める點に於て（c）觀者若しくは讀者をして本曲外の事件、因由等を豫想せしむる必要ある點に於て（d）其の主人公の性格の高山氏の所謂勇者ならざる點に於て（e）往々にして正史の事實に拘泥したる點に於て（f）曲中の人物に善惡不明の者多き點に於て等、何れも美學の法則に背けるものゝ如し、而して古今の批評家等が多少の非難を挿みながら尚且つ屢〻賞美して措かざるは偏に沙翁崇拜の餘りなるか、又は他に理由あるか、といふ事。

（第二）若し理由ありとせば、其の理由は、偏に之れを沙翁の天才に歸すべきか。若し天才に歸すべしとすれば、所謂天才は形式の缺陷を補うて餘りあるに似たり、さすれば、天才は本にして形式は末なり、天才にして形式の美を兼ねなば、

彌〻美にして更に善なるは言ふまでも無けれど、形式のみ具はりて根本の詩才の庸劣ならんは、譬へば人造の花の如く、生氣無く光澤無く、詩としての價値は闕如たるものならん。然らば作家を規戒するに專ら形式論を以てするの本意は何の邊にあるかといふ事。

（第三）按ふに、作家に規戒するに專ら形式論を以てするは該作家を多少詩才ありと假定し、若し之れをして形式の善美を具せしめば或は以て其の詩才の不足を補ふに足らんと思惟し、すなはち專ら形式の論に及べるにや。疑ふらくは、高山氏のみならず所謂審美學的批評家の本意はこゝに在るべし、此の時作家等曉ることと速かならずして、左の如き疑問を起さば如何。

（第四）教誨せらるゝ所理ありと覺ゆ、然れども敢て問はん、形式に於ては沙翁よりも優れる第二流の作家例へば兩チョンソン、アヂソン、ミルトン、バイロン等の作と沙翁の國史劇の傑作とを比ぶるに、先輩の說に由るも、吾人の見る所に由るも、後者のかた夐に前者よりも勝れるが如し、されば常才の形式を守れるは大才の形式を破りたるに如かざるが如し。（小說の上はさておく、劇に於てはかゝる例殊に夥し。）蓋し劇は最も詩の作し易からざるものなり、沙翁の成

功せしは、或は謂ふ、其の劇詩則に拘泥せざりしに因ると。嗚呼天才だに法則に縛せらるれば、進退自在ならずといふものを、吾人當才にして餘りに多く法則に縛せられなば、其の作いよ〳〵拙ならんは明白の結果なるべし。吾人にして詩才の到底暢びざるべきを悟らんか、今にして詩壇を退き、他の適當なる業務に從はんをむしろ公私の裨益たらん。只〻此の最後の決心をなすに當り、聽かまほしきは彼の羨むべき大才の特質なり、悉く形式を破りてだに他の形式を守り得たる小才、常才を凌ぐといふ其の大才とは如何なるものか。大切なる六箇條餘の劇詩則を悉く破了しても、尙古今人にもてはやさるゝシェークスピヤの妙は那邊にあるか。其の所謂妙所が神秘不可思議にして、到底言說を絕し、餘人の企及しがたきものならば是非も無し、若し修辭上或は其の他零碎なる部分の上の妙に止まらば、我れ將た力めて修練し、同じ方角に步武を進め、徒らに形式の窮屈に苦しめられてヂョンソン、アヂソンたるに終らんよりは、國史劇に於ける沙翁の次位に列せんと欲するは如何あるべき。

此の最後の問ひは予が問ふにあらず、假にかゝる問を發するものありたらば高山氏は如何に敎へらるゝかと問ふのみ。さて此等諸問に對する高山氏の答解

は其の精細なりしにも係らず只〻此の中の二三を抽きいだして答へられたるがゆゑに、予が質疑の本意は未だ殆ど徹せざりし也。

さてまた右の外に予の新に質さんと欲するは、前に言ひおきたる詩史先後問題なり。高山氏は曰はく。

戲曲にまれ、小說にまれ、もと空想によりて人を娛ましむるを旨とするものから、明に吾れ人の確實なる知識に背くものは、吾れ人の眞實なる同情を惹起するに賴りあし。うは同一の名稱、もしくは形式の下に、全く異種の內容を含ませむことは、やがて人心の統一に反すればなり、されば何人も熟知せる史上の事實をば、明らさまに作り換へて、以て戲曲の資料となさむは、戲曲家としていと〳〵拙き業なるべし。さらばとて一々史籍にたどりて、眞を寫すことのみ務めなば戲曲は遂に成りがたからむ。歷史は詩學の法則通りに經過するものに非ざればなり。

と。洵に然り。前なるは大才シルレルの『ヂャンダーク』すらもこゝに一分の失敗を釀したるに其の證を見るべく、後なるは我が活歷劇に其の失を見るべし。

然らば全く空想によりて事例を假作せむか、是れ所謂世話物に於て爲し得べきも、時代物には施し難きが常なり。そは如何にといふに、時代物は其資料として外面的形式の廣大なる事件を要するを以て、歲時と方處とに於て限られたる史的事實か、若し

くは有史以前の傳說に據るに非ざれば、吾れ人の依信を繫ぐに便りあしければなり。

是れはた必ずしも異存なし。

詩は其詩たる性質上全然空想の美術たるべきものなり。劇詩の一類に史劇なるものあり、吾人素より之を認む。然れども其人物事件等は正史中の人物及び事件として用ひらるべきものにあらず、其一度び詩中の物となるや、茲に全く史的眞實との約束を遮斷せられて、偏に空想の料として拈貼せらるべき也。

此の說また予が見る所と異なることなし。予が所謂史的眞意の歷史家の眼中より見いだし來たる史的眞意と、其の質に於ても、其の手續に於ても同一ならざる限りは、美學者が之れを名けて全然たる空想といふも不可なきなり。

一切の文學が人心を動かし得べき第一の制約は、實に其「實らしさ」にあり。（中略）今夫れ劇詩は縱に抒情詩の幽情微韻を提へ、橫に叙事詩の宏壯偉大を攝り、以て過去に於ける人生の活動を現在の舞臺に演出せむと擬す。其感興の大いなるを得むが爲めには、自ら事局の大いならむを必とす。是際劇的動作の「實らしさ」は如何にして支撐せらるゝことを得べきか。其內面的精神の自然の發展は、其動作の「實らしさ」に缺くべからざるは勿論なり。然れども是のみにては足らざらむ。そは家庭的劇詩の事一私人に係るものならむには、其歲時方處は之に關する固有名辭と共に全く空想

の所生たるを妨げじ、而も事、例へば邦家の興亡にあづかり、英雄の運命にかゝるが如きものならむには、正史の保障を待つに非ざれば吾人の依信を繫ぐに賴りしなからむ。何となれば吾人が有せる過去世の智識にして、苟も邦家の大事に關するものは正史之を塡充して、又尺寸の遺漏を貽さゞればなり。是を以て劇詩にして壯大なる事局を描破せむと欲するものは勢ひ史劇の形式を取らざるを得ず。

こゝに所謂史劇の形式といふ語意明かならねど、疑ふらくは「材を歷史に取る」といふ程の義なるべし。さて此の說に因るときは、史劇といふ一體は、壯大なる事局を描破する爲に止むことを得ずして採用する體式たるに止まる、即ち事の實らしさを支撐する爲の方便のみ、故に史劇は史的發展の隱微を傳ふるを旨とせず、又當代の人情風俗等を體現するを尙ぶべきものにも非ず。其の名稱及び（或塲合に）事實を正史より借り來たるも、要するに、只〻劇的動作の「實らしさ」を支撐せんと欲するのみ。即ち史といふ外被は或空想（詩想）成りて後に其の詩想を體現せん爲に外より附加せるもの〻如し、換言すれば、史劇に謂ふ史的部分は啻に賓位に在るのみにあらずして、先後の順序よりいふも、詩想成りて後に來たるものゝ如し。是れ果して眞理なるべきか。

予が平生考ふる所によれば、史を冠とせたる詩におのづから三種の別あり。

（第一）全く空想より成りたるものに過去の時、處、人名等を被らせたるもの、例へば巣林子の夢幻史劇若しくはスペンサア『の『神女王』の如きもの若しくは抒情詩人の手に成れる史的叙事詩又は史劇。

（第二）野史、正史の事實に多少の潤色を加へて殆ど其のまゝに劇となしたるもの、又は俗に小説と呼び做したるもの、例へば、我が活歴劇、又は『平家物語』の如きもの。

（第三）史を讀みて其の中に見えたる人物、事件の、詩人の、想像に、も、優りて、詩的なるに詩興を發し、其の興を本として案を構へ、詩としての適否に因りて材を淘汰し、且つ自在に想像を加へ、取捨伸縮して一篇の詩と成せるもの。

是れなり。第一を名けて史の衣を被りたる空想、又は史の衣を被せたる空想と呼ぶべく、第二を史に空想を附加したるもの、即ち空想の衣を被りたる野史と呼ぶべく、第三を史より生れたる空想と呼ぶべし。而して予は此の第三者を、史劇としても、歴史小説としても、最も正統なるものならんと思ひたりき。然るに今や高山氏の説によりて予が正統なりと思へりしものゝ、其の實は正統ならず

して、第一者、即ち史の衣を被せたる者の方が却りて正統の史詩たるべき所以を聽きぬ、而も其の然る所以に至りては大に疑ひなき能はざるなり。

高山氏の言の如くば、詩人は先づ偶然に何等かの感興を發し、其の感興を體現すべき舞臺及び道具を手に入れんと欲して、現世及び過去世中に其の材を探求せざるべからず。幸に現世の事情中に件の空想に適すべき材料あるを發見すればやがて世話物を作るべし、されども其の空想偉大にして現世間に適せざる時は、去りて過去の記録に就き「歴史上顯著の事實にして而も其の由來因縁の堙滅せる」（くはしくは其の首尾、殊に其の落着の悲壯なる形跡のみが著く世に知られて、而も其の徑行の餘りに通常人に明かならざるが如き）事實を求め、其の中に我が空想に恰好なるものあるか否かを探り、さて後に作に着手せざるべからず。

是れ豈暗室に入りて針の落ちたるを探るに等しき頗る困難なる業にあらずや。理論上は兎も角も、實際かゝる事をなし得べきか。幸ひに恰好の事蹟を探りあてたりとするも、かゝる手續きに依りて成れる作は、能く彼の翻案物に附帶するが如き牽强の瑕疵無きを得べきか。所謂歴史小説若しくは史劇の傑出したるものに果してかゝる手續によりて成れる作あるか。予は思ふ、詩人傳及び文學

史の客觀詩に關して語る所は畧〻此の手續の虛妄なることを證明するに足るものゝ如しと。如何。

かゝる手續によりて成れる詩も、其の出來榮だにめでたからば、之れを稱へて傑篇となし巧詩といふも、不可なかるべきは勿論なり。但し何故に史の稱を冠らせて他の空想の作と分つか。高山氏の謂へるが如く單に史の衣を被りたるが故なるか。將た他に理由あるか。是れ未だ釋然たらざる疑點なり。

詩人の所謂史的眞意は歷史家の謂ふ所のものと、其の性質に於ても、其の之れを知得する手續に於ても、一ならざるは、猶詩人の謂ふ眞と哲學者の謂ふ眞と一ならざるがごとし。故に詩人が正史、野史より得たる直覺、即ち感興が、果して史的眞意に叶ふにあらぬかは、斷言しがたしと雖も、詩人の直覺の侮蔑せられざる限りは、史に觸れて生れたる詩人の直覺と嚴正に謂ふ史的眞意との間に多少の關係あることは無視すべかざるに似たり。此の意味より見て、予は史より生れたる詩は史學に多少の關係ありと言ひ、其の關係の多少によりては間接に史學上に功ありと言はんとす。もとより史學上に功あらんとて作するにはあらず、かゝる不期の關係を生ずるは其の史より生れたる自然の結果なり。蓋し予は史

的といふ名稱を現世及び未來に對するものとして重きを置く也、政事的、商業的などいふ名稱とは混ずべからざる特殊の意義を含めるものなりと思ふ。

然るに高山氏はかゝる區別を笑ひ、只〻史の衣を被りたる故に史的と云ふのみ、史の衣は單に空想を實らしくせん爲のみ也といふ。高山氏の說の如くば、あらゆる過去の衣被たる敍事詩及び劇詩は史的と種して不可なきが如し。『テムペスト』も史劇なるべく、『ウィンタアス、テール』も史劇なるべく、近松の夢幻劇も史劇なるべし。是れ豈我が時代物、世話物の區別の如く、餘りに放埒なる區別に非ずや。即ち只〻皮一重の區別にて、皮を剝げば二者些の別ちなし。果して然るか。

假に史的といふ名稱は、外面の過去世らしきによりて與へられたる名なりとせんに、所謂らしきは、高山氏が言ふ如く、強ひて外より附加したるのみにて維持し得らるべきか。蒙者は或は欺かるべし、大人が能くかゝる作に同感し得べきか。內に一點の過去に因める誠無くして、過去らしといふ感の維持せらるべきか。人物の性格は現世のまゝ彼等の情操、云爲、亦悉く現世のまゝにして、過去らしきは僅に歲時、方處及び其の言語の皮相、衣服の外面のみならんに過去らしといふ感果して起り得べきか。若し過去といふ幻想生ぜずとせば、其の作は能く史詩

として成り立ち得べきか。若し史詩としては成り立ちがたからんに、之れを史詩と稱するは何の故ぞ。史らしくは無けれど史の衣を被たるが故と言はんか。猶女らしくは無けれど女の衣を被たるゆゑに女といふなりといふがごとく、殆ど無意義の名稱ならずや。

高山氏にして、史的といふ名稱を全然棄却すべしと言はゞそれまでなり、或約束を設けて之れを保存せん意あるからは、更に其の約束の詳細即ち「如何にして實らしさを維ぐべきか」を示さゞる可からず、然らざれば史劇に筆を着けんとする者、依然として其の歸趨に迷はん。

（明治三十年十二月）

藝術上に所謂歷史的といふ語の眞義如何

歷史畫の分類及び階級

歷史畫、歷史小說、又は歷史脚本などいふ場合に冠らする「歷史的」といふ言葉の眞義は、果して如何やうな意味であるかといふことは、即ち、之れを別の言葉でいへば、畫工又は作者たるものが、眞の歷史的と稱しても耻かしからぬ作品を製作せ

うと志したならば、先づ主として如何なる點に其の心を据ゑて作すべきであるかといふ問題は、歷史畫問題の稍〻世間の注意を牽かんとする今日に於いては、殊に、比較的に多く歷史的美術品を愛好する傾きある日本國民に取つては、是非とも一應の取調を要すべき問題と思はれる。何となれば、此の問題の決定鹽梅によつては、多分、批判家、賞玩家たちの標準にも多少の著き狂ひを生ずるであらうし、又作家たち自身の覺悟、手加減の上にも或は頗る大なる變動を生ずるやも圖られぬわけであるから、苟も我が國の繪畫、文學等の前途に關心せらるゝ人々は、是非とも一應は此の問題に注意を向けられたい。

さて、かゝる問題は、兎もすれば、其の主なる用語の、單に語義の解釋が行きちがつた爲に、同じ絲路を辿りながら果は解きほぐしのならぬ是非の縺れとなつて、議論の黑白を見失ふが習はしであるから、その不都合を避けん爲に、聊か煩瑣に流るゝの嫌ひもあれど、先づ「歷史的」といふ語義の辯解からはじめやう。

序に今一つ斷つておくべきは、自分は此の「歷史的」といふ名稱を、無論、あらゆる美術、就中、小說、脚本などの上にも當欲めて論ずる心得ではあれど、最初は用語の煩はしさ、管々しさを避けん爲の便宜上から、態と先づ「繪畫」の上にのみ當欲めて論

じ試みやうと思ふといふことである。

さて、繪畫其の他の美術品に冠らする時の「歴史的」といふ語の意義は、之れを先づ上つらより平つたく解釋する時は、「過去の事蹟若しくは人物を描きいだしたる」といふ意味に外ならざるをは明かである、隨うて只〻此の字面のみを見て不用意に考へた時分には、何等の異議も起らぬげに思はれるが、さて少しく立入つて取調べる場合になると、そこに忽ち歴史畫の四大系統ともいふべきものが伏在してゐるをを發見して、幾多の疑ひが生じ來る。蓋し、先づ第一に浮ぶ疑惑は

本來、畫工が過去の事蹟若しくは人物を畫くは、其の事蹟、人物をば其の畫の當の目的として描くのであるか。又は、美術本來の目的は別にあれども、只〻其の目的を遂ぐる爲の便宜上より、一時の方便として過去の事蹟若しくは人物を借り來るのであるか。何れであるか。さて、之れを問ふに當つて、美術家自身が實際行つてゐる所は、如何やうであつても、それはかまはぬ、假に右二樣の製作手續が現に成立つてゐるもの若しくは成立ち得べき筈のものとしたならば、其の何れの方に從ふが美術家たるもの〻眞諦であるか、眞の心得であるか。

といふ疑問で、尚言葉を簡にして之れをいへば

過去の事蹟、人物を描くことは、歴史畫を作る美術家の目的であるか、將た方便であるか。

といふ疑問で、之れを假に歴史畫の主賓問題と名づけ、便宜の爲、一方を目的、一方を方便と稱する。尤も、此の問題に關しては、既に『太陽』紙上に、文學士高山林次郎君の例の精緻なる議論及び解答があつた、さるによつて又候ふこゝに同じやうな疑問までも提出するのは、頗る重複の嫌もあるが、實は此の根本の疑問其の物の立てかたに於ても、自分と高山君とは、幾分か見解を異にしてゐるやうに思はれるから、次々に言ふ所を誤解せられぬ爲の用心かたゞ、態と根柢から論じはじめた次第である、何卒其の意を了せられたい。

さて、此の主賓問題も、ふと、大體の上から見て、大づかみに考へた時分には、ほとんど自明の問題で、初手から分つた話で、多く辯論する必要も無い事のやうにも思はれる。夫れ歴史は事實を傳ふることを務とするもので、美術は美を寫すことを職とするもの、美と事實とが同一ならぬ限りは、歴史と美術とは截然として其の目的を異にしてゐるのである。然るに若し美術家が過去の事蹟、人物其の物

を寫すことを當の目的としたならば、是れ取りも直さず過去の事實を傳錄することを主る歴史家の職分を侵したので、美其の物を寫すといふ自家の本職を遺却した次第となる。さすれば善くいつても歴史家の助手となつたので惡くいへば歴史家の奴隷となつたので、即ち所謂自由藝術たるの本領を失つたものであると言はねばならぬ。と、かやうに言つた日には、所謂方便說と所謂目的說との勝負は、容易く決定してしまふ仕宜であるが、尚退いて按ずれば、こゝが一考を要すべき處である。彼の「過去の事蹟人物を寫すことを目的とする」といふ言葉は、もと頗る曖昧な言葉で、尠くとも三樣の解釋を容れ得るやうに思ふ。果して然らば、其の解釋鹽梅によつては、所謂目的說の內容に著大なる變化を生じ、隨つて、目的說と方便說との勝敗は、さう輕々しう決定しがたいやうに相成るかも知れぬ。

蓋し按ふに、天地人三才間の事物は、取りわけて人間に密接したる事物は、おしなべて三樣の觀察點から評價することが出來るものである。他の言葉で言へば、三樣の態度を取つて觀察することが出來る。第一は「探究の態度」即ち哲學者、科學者などの態度で、是れは事物の眞僞虛實、合理不合理等を見分けるを主眼とする、第二は「鑑賞(觀照)の態度」即ち、詩人、美術家などの態度で、是れは事物の美醜、妍媸を見分けるのを目的とする。さて、第三は「應用の態度」即ち政治家、教育家若しくは其の他の實際家の態度で、是れは事物の利害、善惡、用不用等を見分けるのを第一とする。此の三樣の態度あるをは、今更取り立てゝ申さずとも、誰人もよう承知のことである筈然るに、取り立てゝ此の事を言ひいでたのは、此の三樣の態度が、大小を問はず、あらゆる觀察の場合に行はれるといふことを心得てもらひたいからである。只々一輪の菊の花、只々一顆の林檎を觀る場合にも之れが行はれ、一條の說話を聽く場合にも、現實の人物、事件に接觸する際にも之れが行はれる。同じ林檎を觀ながらも、甲は應用の態度で見て、其の食用の如何を思つてゐる時分に、乙は鑑賞の態度を取つて、只々其の格好又は色合の美しいのを賞てゐるともあらう。同じ一條の物語ながらに、甲の探究的頭腦には、其の眞僞如何といふ反響ばかりを生じ、乙の應用的頭腦には、主として「此の話は修身科用として適當である」といふやうな感銘を生ずることもあらう。此の理を推して考へた時分には、同じく「過去の事蹟人物を描くことを目的とする」といつても、其の描かうと思ふに到つた其の根本の心持即ち其の畫工の心の據方即ち觀察の態度

次第で、此の一句の解釋鹽梅が著くちがつて來ることがあらう。畫工が、若し歴史家と同じやうに、專ら探究的態度を取つて、事實を傳へやうと志したならば、それは明かに美術家が歴史家の助手となつて、畫を歴史の器具、方便と墮落せしめた場合であるが、若しそれに反して、單に鑑賞的態度を取つた結果、正史若しくは野史中に籠れる人事美に感興を發して、それを活ける如く描きいださうと志したのならば、それは決して歴史家の從隷では無いが、さりとて過去の事蹟に因緣が無いでもない。否自分の考へでは、殆ど拔くべからざる深い因緣を過去の事蹟に對して有つて居ると言ひたいのである。尤も、此の點が高山君の說をはじめ、其の他の或反對說と自分の說との相乖離する根柢であらうやうに思ふによつて、尙此の點に關してはおひ〳〵に詳論を加へることゝして、先づ取あへず目前の論だけを結ぶことにすれば、上に擧げた二樣の歴史畫の外に、通例今一種の歴史畫がある筈、また出來すべき筈である。それは、畫工が應用的態度を取つて、敎訓の爲にとて畫きいだした歴史畫で、是れ將た必ずしも歴史家の從隷では無いが、さりとて獨立の位置にあるものでもない。何となれば、敎訓の用に供するといふことが第一の目的となつて、美を寫すといふことは第二若しくは第三

の目的となるからである。

さて、以上の辯を一括すれば、同じく「過去の事蹟、人物を寫すことを目的とする」といつても、其の本意に三樣の別があることゝなる。

(一)過去の事蹟、人物の眞を描くを目的とするもの。

(二)過去の事蹟、人物の美を描くを目的とするもの。

(三)過去の事蹟、人物の善を描くを目的とするもの。

第一は單に眞を描くのでは無い、過去の人事に宿つてゐる特殊の眞を描かうと志すのである。第二も單に美を描くのでは無い、過去の人事に宿つてゐる特殊の美を寫さうと志すのである。第三とても其の通りで、單に善を描くのではない、過去の人事に籠つてゐる特殊の善を描かうと志すのである。第一と第二とは他の究竟目的の爲に縛らるゝ所があつて、第三の自由なのとは同じではないが、尙過去を寫すといふ當の目的だけは相一致してゐると言はねばならぬ。而も此の三者の內質は、其の實殆ど相容れざる程のもので、優かに歴史畫の三大系統を作りいだし得べきものゝやうに思はれる。

高山君は、此の中の第一と第三の存在だけを認めて、第二のものゝ存在をば認め

られなかつた。いや、むしろ、此の第二の目的說をば同君の所謂方便說のほうへ組み入れて、論を立てられたものらしい。加之、眞を描くを目的とするものと善を描くを目的とするものとを殆ど一緒にして論ぜられた故に、同君の說によると、議論の筋道が、事の外、單簡げに見えて、殆ど一刀兩斷に右か左かと、すぐにも裁決せられるげに感ぜらるゝが、併しながら、それは畢竟、同君の例の巧みな立論と筆才に由るので、其の實、此の問題は、存外に複雜で、さう容易には決しがたい問題である。

いかに複雜であるか、といふに、前に擧げた三派の如きも、其の實三派にはといまらぬ。周密に分析するときは、所謂眞を描くにも、稗史、野乘に據りて味者を滿足せしむるほどの程度に過去の事蹟、人物を描寫する野乘派の歷史畫もあれば、徹頭徹尾、古器物、古記錄に依據して、所謂史的事實、史的眞相をあなぐり穿鑿することに全力を傾ける正史派の歷史畫もある。剩へ、此の正史派の歷史畫もまた、尠くとも二つの派に分れる。一は我が國從來の歷史畫家の大多數の如く、主として過去に關する有形の事實（過去の服裝、器具、調度等）を目前（まのあたり）に見るやうに精寫して謬らざらんことを目的とするもので、之れを假に考證派又は古實派と呼ばう。

さて他の一は、此の十九世紀のはじめに歐洲の諸國に興つた、就中、獨逸、英吉利に起つた、例のロマンチック、スクール即ち所謂中古派の或畫工や作者がしたやうに、主として過去の感情、思想、理想、信仰等をさながらに再現することを目的とするもので、前の古實派が主として過去に關する外形の實を精寫せんと力むるに對して、此れは主として過去に關する內質の眞を再現せんと試るものとも評すべきである。蓋し、此の第二の正史畫派は、假に名づけて人文派ともいふべきもので、まだ我が國には存在せぬげに見えるが、是れが即ち高山君が非難せられた第二の目的說、即ち多少の醇化を許して歷史の眞相を發揮せんことを主眼とすとか言はれた一派に相當するらしい。

さてまた、善を寫すことを目的とする歷史畫の一派にも、前同樣の分派はあるべき次第、また現に東西の畫壇にあるらしい。但し、他の美を畫くを主眼とする歷史畫家に至つては、多少趣の異なる所がある。蓋し、美を畫くが本來の主眼であるによつて、其の美が過去の特殊なる美である限りは、即ち歷史的人事美である限りは、其れが野乘、傳說から來つたものであらうと、その點には、何等の上下をも、優劣をも附せぬのである。隨つて、是れ

には正史派、野乘派などいふ區別は無いものと見たはうが當然である。且つまた、此の派には古實派、人文派といふ分派も設けにくい。成程、此の派にも專ら過去の有形美、即ち、器具、服裝等に現れた風俗上の美に重きを置く茶人流の一分派があることは明かであるが、さりとて、それもまた飽迄も物の美其の物を鑑賞的態度で重んずるのであるから、前に擧げた眞、善二派の心持とは同じでない。されば古實考證派に對して此の種の歷史畫家を好古家派又は好事家派、數寄派などと稱すべきである。さてまた同じ筋の道理で、人文派に對して、假に精神派又は感想派とも名づくべき、主として過去時代の思想、感情、理想、信仰等の特質及び其の特殊なる活動幷びに反動の上に特殊なる人事美の存在することを認めて、之れを畫き出さんことを目的とする一派がある。此の派は、時としては、一時の便宜上より古實考證派の應援を乞ふこともあれば、人文派の助力を求むることもあらう。但し、それは眞を描かうが爲にではない、過去の美を寫す爲の一方便たるに過ぎぬのである。こゝが此の一派と所謂方便說の歷史畫派と惡くすると紛らはしくなる一點で、下に改めて辯明したいと思ふのは此の點である。

さて、右の次第であるによつて、單に目的說の方面ばかりに就いて見ても歷史畫の種類及び階級はさま〳〵であつて、高下、優劣、將た一樣でないから、漫りに「過去の事蹟、人物を目的とする」といふ其の言葉尻のみを捉へて、直ちに、輕々しく、此の複雜なる歷史畫の全種類、全階級を外道視し、異端視するのは、ちと氣早過ぎた沙汰ではあるまいかと、聊かあぶなかしく思ふ。尙、以上の區別及び階級を一層明かならしむる爲に、左に表にして示せば

- 歷史畫
  - 方便（美術の目的として）
    - 永遠の過去ラシサ
    - 一時の過去ラシサ
  - 美（美術の目的として）
    - 內質—精神派（感想派）
    - 外形—好古家派（數寄派）
  - 善（美術の目的として）
    - 野乘派
    - 正史派
      - 內質—人文派（文明史派）
      - 外形—古實派（考證派）
  - 眞（美術の目的として）
    - 野乘派

自分は、此の眞、善、美、三種の目的說に基ける三系統に加ふるに、高山君の所謂方便

説に基ける歴史畫の一派を加へて、之れを歴史畫の四大系統と名づけやうと思ふ。而して此の中、眞、善の二大系統は、或は高山君の痛擊に逢つて、すなはちそこに碎け去つたかも知れぬが、第三の系統、就中精神派の歴史畫に至つては、未だ聊かも其の壘壁をも搖かされない。加ふるに、所謂方便説に基ける歴史畫といふ者は、果して高山君の言はるゝが如く、堅固確實な基礎の上に立つてゐるものであるか、どうか。十分の取調をして見ぬうちは是れ將た輕々しくは決しがたい。高山君の言はるゝ所によれば、方便派の歴史畫家が歴史を借るのは、ほんの假面を借りて來るので、言はゞ、一時の瞞着手段たるに過ぎないのであるらしいが、さすれば、人文の開け進むにつれて、其の假面が剝落する時があるをを豫期せねばなるまいと思ふが、どうか。早い話が、近松の時代物も、其の當時にあつては、多分、歴史劇として待遇せられたであらうし、作者門左衛門も亦まさしく高山君の旨意を奉じて、ほんの一時の方便にとて過去の事蹟や人物を用ひたに相違ないのであるが、それは、ほんの元祿享保の一時代、否、其の一時代の昧者、俗衆を瞞着し得た許りで、最早明治の今日となつては中學校の子供とても、近松流の時代物を歴史劇としては待遇すまい。蓋し、これは、近松が方便説に依據した正當の因果應

報で必然の制裁だと言つてよからう。よしや、方便説の立脚地から見ればかやうに成り行くも當然の結果で、或は毫も介意するに足らぬことかも知れぬが、それにしても、人情の自然からいへば、殊に苦心經營して作をする美術家の心持から言へば、同じく瞞着する位ならば、成るべく久しく瞞着したいであらうと思ふが、いかゞか。高山君の言葉を借りて言へば、實らしさを成べく永く維ぎたい筈、義經らしさ、家康らしさ、重盛らしさをば成るべく長く維持したく思ふべき筈であらうと思ふ。さすればこゝに至つて忽ち方便説にも二派が生ずる譯となる。即ち近松の如く、只〻一時の瞞着に安立して作をする一時のラシサ派もあれば、頗る慾深く、及ぶべきだけ永遠に同胞を瞞着しやうといふ甚だ以て不屈なイヤ、念の入つたラシサ派もある譯である。若し果して然らば、此の第二のラシサ派は如何にして其のラシサをつながんとするであらうか。單に古實派、人文派の應援を借り來るのみで、長永に其の實らしさをつなぐことを得べきか、どうか。抑〻また歴史畫といふものは多少壽命の長短こそはあれ、到底、一時の瞞着物にして、他の山水畫、風俗畫の如く長永に珍重せらるべきものではないのであるか。果して然らば、何故そのやうな劣等な種類の美術品を、世人は兎もあれ、有識者ま

でが取囃して、皷吹し、奬勵せんと試るのであるか。甚だ以て不思議に思はれるでは無いか。

自分はまだ本論にはいらぬのである。まだこゝで議論らしいことを言ふ手筈ではないのである、然るにかばかり論じ試みたのは、方便說と目的說との優劣、言ひ換へれば所謂歷史畫の主賓論といふものは、高山君が一刀兩斷に裁決せられたやうに、恐らくあのやうに手輕には決しがたいものであらうといふことを一寸ほのめかしたいからであつた。その點さへほゞ解せられたならば先づ當面の荊棘だけは伐り開かれた次第であるから、緒論は此の位で切りあげて、改めて本論に立入らうと思ふ。

前に言つた理由で、自分の考では、所謂主賓論も未だ勝敗が決定せられたとは思はれんによつて、先づ第一に自分が見解を元として更に歷史畫の主賓論を提出し、それによつて方便說と目的說との是非を裁斷し、尙それのみでは十分には疑問を決し難からうと思ふから、別に自分が歷史畫の先後論と假稱する一問題を提出して、美の所在に關する二三の疑ひを質し、つゞいて、歷史畫と他の歷史的美術(例へば史劇歷史小說など)との異同に關しても一通り管見を述べやうと思ふ。

歷史畫の主賓論

同じ歷史上の畫題を取つて、同じやうに過去の人物、事蹟を畫くことを當面の目的とすると言つても、(前に表に示した通り)(第一)過去の眞相を描くことを目的とする者と、(第二)過去の善蹟を標示することを目的とする者と、(第三)過去の美趣を發揮することを目的とする者とは、其の間に大なる差別があつて、決して同樣に律せらるべきものでない。これは、第三が自由美術であるのに對して、第一と第二とが羈絆美術であるといふ明白な事實によつても知られることで、苟も美學の片端を心得た程の者で、よもや、第一と第二の目的說をば主張する者はあるまい。殊に、此の二派に對しては、既に高山君が頗る有力な批評をせられた後でもあるから(自分と高山君とは、此の二派に對する批評の手加減の上にも多少の相違はあれど)、此の二派に關する評論は、總べて此のたびは省くことゝする。隨つて、目的說と言つても、高山君の所謂「歷史上の人物及び時代を表現して其の眞相を說明する」を本領とするといふ目的說とは別で、只々「過去の美趣即ち歷史美を發揮する」ことを目的とする一派のみに限らるゝことゝ成る。其の邊の區別は、豫め承知せられたい。

さて、當面の問題はといふと

右に謂ふ所の目的說と所謂方便說、即ち高山君の所謂「歷史上の人物及び時代を假りて繪畫其の物の美を發揮することを本領とする」歷史畫論と、孰れが正、孰れが邪であるか。

といふことで、若し高山君の主張せらるゝ說が成立てば歷史畫の本領は汎義に謂ふ美其の物(?)を畫くことに在つて、過去の事蹟人物即ち歷史に因緣せる特殊なる美を畫くことに在るのでは無く、所謂歷史はほんの一時の借物で、畫の方便たるに外ならぬことゝなるが、若しまた萬一にも高山君の說が成立たなんだ時分には所謂目的說の方が成立つことになつて總じて歷史畫の本領は過去の美趣即ち所謂歷史美を發揮するに在り」といふことに成らう。孰れにもせよ、高山君の方便說の當否が本章の主眼であるによつて、先づ同君が主張せらるゝ議論の詳細を取調べることに取りかゝらう。

同君が言はれるには

歷史畫の表現せむと力むるは、飽迄繪畫其物の美にして、歷史上の事蹟には非ず、たゞ美を現ずる方便として、歷史上の事蹟を用ふるのみ。藝畫の美其物の外に何等の目

的無きもの、何が故に純然たる空想に依賴せざるか、何が故に待に歷史上の事蹟を假るか。是の問題に對する答は極めて簡單なるべし。人事及び人心に關する種々相は、最も好く歷史上の事蹟に現はる。是れ一の理由なり。云々。

又曰はれるに

歷史畫の本領は歷史の爲に畫くにあらずして、繪畫の爲に歷史を假るにあり。歷史は客なり、假なり繪畫は主なり、實なり。云々。

此の後のかたは、聊か說明を要すると思ふ。蓋しこゝに「歷史の爲」と言はれたは、精しく言へば、過去の眞相を表現する爲即ち「眞の爲」といふことに外ならぬらしく、さてまた「繪畫の爲」と言はれたは、上に所謂「繪畫其の物の美の爲」と言ふことに外ならぬらしい。さすれば、右の一斷案は、左の如く言ひかへても、意義に增減は無かるべき筈である。

歷史畫の本領は過去の眞相を表現せんが爲に、過去の事蹟、人物を畫くにあらずして、繪畫其の物の美を發揮せんが爲に、過去の事蹟、人物を畫くなり。

かやうであらうと思ふ。さて、自分が先づ第一に質したいと思ふことは、所謂「繪畫其の物の美」とは何物を指して言はれたのであるか、といふことである。按ふに、「人事及び人心に關する種々相は最も好く歷史上の事蹟に現はる」と言ひ、「人事

人心の活動を美しく表現する所に歴史畫の本領あり」など言はれたによつて考ふれば、こゝに謂ふ繪畫其の物の美とは、汎い意味で謂ふ人事上の美や人心上の美を指したものらしくも思はれる。果して然らば、こゝが即ち目的說と方便說との別かれる要點で、目的說は

歴史畫の本領は過去に關する人事美若しくは人心美を畫くにあり。

といひ、方便說、即ち高山君は

歴史畫の本領は汎義に謂ふ人事美若しくは人心美を畫くにあり。（其を過去の事蹟らしく寫すは方便の爲のみ。）

と言はれる。之れを要するに、高山君（即ち方便說）は、人事の美、人心の美に古今の別があることを認めぬのに目的說に於ては或差別が存することを認める。此の見解の分かるゝ所が、取りも直さず、二派の死活の分かゝる所であらう。

さて又、畫家が歴史（過去の事蹟、人物）を方便の爲に假り來る第二の理由を說明して、高山君の言はれるには

凡そ歴史畫が他の種類の繪畫に異なるところは、人事及び人心に關する種々相を現ずる所にあり。例へば、罪なくして流竄せられたる忠良の臣ありとせよ、而して尙ほ天

を怨みず、君を惡まず、前日の餘恩に感じて一身の榮落を重しとせざるものありとせよ、斯る貴むべき人情の發動は、如何にしてこれを現すべきか。この複雜なる因緣を一幅の畫中に現ぜむは、繪畫の性質の許さゞるところ、所詮は歴史上の事蹟を假るの外無かるべし、乃ち茲に菅原道眞と云ふが如き一人物を拉し來りて、太宰府遷居の狀を描かば、かゝる人情及び境遇を表現するに庶幾からずや。看るものは菅公流竄の圖と解す、素より可なり、唯かくの如く解するとによりて、人情の最も美しき活動を看取するを得ば、歴史畫の本領即ち達せりと謂ふべし。云々。

看る者がかやうな圖を觀て「菅公流竄の圖と解す、素より可なり」と言はれたが、「人情の最も美しき活動を看取するを得ば歴史の本領即ち達せり」と言はれたによつて考ふれば、必ずしも菅公と解する必要のないとも明かである、只々「謫せられても、天を怨みず、君を惡まず、寧ろ舊恩に感泣する忠良の臣」とさへ解せらるれば澤山であるらしい。即ち、高山君は、人事又は人心に關する複雜なる、但し抽象的なる概念に美を認め、且つ此の概念は古今を貫いて同一樣に表現せらるべきものと假定し、さて此の論を立てられたげに見える。恰も前年度の繪畫展覽會で評判の高かつた、下村觀山君の「嗣信最後」の圖が、必ずしも嗣信と解せられるを要とせずして、專ら「安心の死」といふ觀念をば表現せんことを要としたと同意見で

あるらしい。

同君の説によれば歴史畫に謂ふ所の菅公はツマリ只〻看覽者の目を牽かん爲の招牌(まねぎ)で、其の實は「一種の忠臣」といふ特別な、さやう、特別ではあるが何等の個性をも具へぬ、甚だ漠然たる概念を有形にしたものに外ならぬ。看覽者の目を牽く力さへ減ぜぬならば、菅公の代りに、チョン髷の老人をゑがくとも故障は無い。例へば、ヒーローの廣告が、竪にならうと、横にならうと、人形にならうと、横文字にならうと、目にさへ立てば賣口に故障がないやうなのであらう。要するに、高山君の眼中には、單に人間あつて個人が無く、單に世界があつて各國も時代も無い。寛平、延喜の忠臣も、元祿享保の忠臣も、明治現代の忠臣も、其の「天を怨みず、君を惡まず、舊恩に感泣する」底の衷情さへ同一であるならば、其の表現せらるゝ相(すがた)は(風俗上、被服上の差別はあるとして)悉皆同一であると見做されたものらしい。言葉を換へて言へば、高山君は王代、封建時代などいふ特殊の開化(カルチユーア)又は時勢(イポツク)が人心に及ぼす大影響を認められぬのみか、歴史上の事蹟、人物が(其の事蹟、人物の眞相如何は別問題として)我々共の心鏡に映しいだす一種特別の美妙の趣致を認められぬげに論ぜられた。自分等の見る所によると、菅原道眞といふ傳説的人物

が我々共の心に呼び起す感興は精しくいへば、結びいださしむる影象(イメージ)は、今一段複雜であるらしく思はれる。今一段特殊な、到底チョン髷の翁などゝは取り代へることの出來ぬ、兎も角も一種の特相を具へた、例へば學者風、殿上人風の、孰れかといへば、直(なお)きに過ぎて圭角のある見識は高いが活眼に乏しい、政事家といふ資格からいへば、遙に時平の下にある底の一忠臣が謫竄せられたときの一事蹟として(かゝる複雜な趣が畫にかゝれるかどうかは、畫にのみ關しての論にあらねば、別問題として)そこに一種の感興を覺えるのであると思ふ。猶ほ正當に劇詩を讀む眼を具へたものが、『ハムレット』の劇を讀み、『オセロ』、『マクベス』などを讀むときに(或獨逸の批評家連のやうに)單に抽象的概念のみを見出だしたり、小理窟にこだわつた批評や説明に流れることをせいで、ハムレット其の人の個性、オセロ、マクベス其の人の個性即ち個性其のものに附帶したる特殊の人心美を鑑賞(觀照)して、そこに批判家、鑑賞家としての感興を覺えるのと同じ振合であらうと思ふ。蓋し、彼のロバアト、ブラウニングが『テムペスト』のカリバンを鑑賞(觀照)して一種の感興を發し、彼れを主人公にして一篇の雅劇詩を試るに至つた其の心持若しくはゲーテがイフィゲニヤの劇を作するに至つた手續と、自分が所謂

目的派の歴史書家が菅原道眞を觀照して之れを畫かんと試みるに至る心持と、彼れは沙翁（シェークスピヤ）の脚本又は希臘劇などが種、此れは正史若しくば野史が種といふ差別こそはあれ、其の心持と手續とには、殆ど相違は無からうと思ふ。彼れに許さるゝことは、此れにも許さるべき筈であらう。さて、之れを許すとすれば、個々の人物に個々の人心美（即ち個性の美）あることが認めらるべきで、隨うて、又個々の時代に個々の人事美（高山君が最も得意に論ぜらるゝ時代の精神に附帶する特殊の美）あることも認めらるべき筈である。現に同君も、時代の精神に特殊の美あることを認められたればこそ、「時代の精神を描け〳〵」と現代の作家に向つて幾たびとなく勸告せられた次第であらう。序ながら同君は彼の過去の眞相を描かんとする目的説の妄を破せられた其の論の中に「歴史の精神、理想を寫すを目的とする」者を笑つて、どうして歴史の精神などいふものを捉へるぞと言はれたが、先方に言はせたならば、先生はそも如何にして時代の精神を捉へたまふぞと或は反問するかも圖られぬ。活動して休まざる時代の精神さへ捉へらるゝものならば、ありとあらゆる史籍、文學類に徴し、種々の紀念物に徴したならば、既に過ぎ去つて定着した各時代の精神程は必ずしも捕捉し難くはなからうやう

に思ふ。併し、これは寫眞派の歴史書家の主張すべき事で、自分が強ちに申し張るのではない。

畢竟ずるに、高山君は古今、遍通の人事美、人情美のあることを認めて、各國民、各時代、又は各個人に特有な人事美、人情美のあることをば認められぬげに見える。man の美を認めて men の美を認められぬげに見える。徳川時代の忠臣と寛平時代の忠臣との間にさへ人情美の差等あることを認められぬ位であるから、同じ時代の、同じやうな境遇の忠臣と忠臣、孝子と孝子などの間には、無論差等を認められぬのであらう。二十四孝の二十四子、忠臣藏の四十七士などは、いづれもひつくるめて一山百文、只〻一樣の人情美を發揮する底のものとならう。高山君の説によると、浪花の蘆と伊勢の濱荻、それは名前が違ふばかり。料理は山谷でも濱町でも山の手でも味噌は江戸でも岡崎でも仙臺でも、其の味にかはりはない。言はゞ賞翫（テースト）力が豪傑的なのである。イヤ、此の見解を推擴げてゆけば英國の人情美と日本の人情美との間にも、何等内質上の差違もない。更にそれを詮じつめれば、國粹とか、國風とか、大和魂とかいふことも、ほんの外相上の沙汰、言はゞ一時の空想となるべき筈で、（日本主義の高山君がコスモポリタンとは、

少々思ひがけなきやである！渉くとも、一人の畫工の筆では、同類の忠臣をば截然と畫きわけることは叶ふまい。彼の歌麿や豐國が畫いた美人畫は、藝者も、娼妓も、娘も、子守も、ちがふは只〻髷かたち、衣服、身のまはり計りで、顏はいつも只〻一つであるが、高山君の說に從つたならば、一切の歷史畫が取りも直さず、歌川流となつて、彼の國芳一派の浮世畫師が、幕府に憚つて畫いた武者畫と一般、本能寺の夜討の圖が、都合によつて堀川夜討と名宣つたり、三法師を抱いてゐる羽柴筑前守が表面だけは、安德天皇を抱き奉つてゐる平の宗盛に化けるなど〻いふ融通が利く次第となちう。それで思ひだした、西南戰爭の頃に、大久保內務卿が橫死の樣を佐久象山云々と畫解して似つこらしくかいた錦畫を見たことがあつたが、さしづめ、あれなどは兩天秤が利いて或は妙であちう。賣るためにも最も妙である。甲東崇拜の輩も買うであちうし、象山贔負の手合も買うであちう。展覽會の歷史畫は、以來此の振合でかくこと〻、利に敏い手合は或は賛成するかも知らぬが、自分は呑込まぬ。何となれば、か〻る皮相の變化だけであちこちの入換がつくものなら（流石に畫はまだしもなれど）此の理を小說、脚本に應用したならば、奇怪な結果が生ずるであちう。例へば、小說、脚本の飜案などは容易い、手輕な割のよい美術上の仕事で、人物の姓名、地名、物の名乃至口吻の幾らかをさへ日本化すれば、『オセロ』は、取りも直さず、日本の悲劇、『ハムレット』も、『リヤ王』も、『ロミオ、アンド、ヂュリエット』も、朝飯前の賃仕事で、ピタリと日本の人情にはまる美文學と變化すべき筈であるが、實際は（さほど鑑賞力の粗な讀書家が尠い爲、イヤ目のある讀者が多い爲）マサカ、さう手輕にもまゐらぬ。

尙また高山君は、歷史畫家が歷史畫を作る折の手順を論じて、大抵は先づ歷史を調べ、それから人事上の題目を想ひ浮ぶるが通例であるといふことを證明せられうとて、之れを他の風景畫家が風景畫を作る時の用心に比較して、さて言はれるに

> 彼れ（風景畫家）は何が故に一室內に籠居して思ふまゝの風景を描かざるや、何故に特に屋外に出で〻天然の寫生を力むるや。そは如何に想像力に富める畫家と雖も、變化あり種類ある天然の風景に優るべき意匠賦色を想像し難きが爲ならずや。

と斷定し

> 其の山、其の水を寫生するは、特に某の山、某の水を寫すが爲に非ず、其の目的は唯山水其の物の美を表現するに外ならざること、言ふまでもなきなり。

藝術上に所謂歷史的といふ語の眞義如何

と論じ、「歴史畫に於ても正に然り」と辯じて、歴史畫が其の假用せる歴史的事蹟と何等の關係をも有せざること

猶ほ風景畫がそが寫生せる某の山、某の水と何等特殊の關係無きが如くなるべし。

と言はれたが、同君が美學意見の、如何に平等的、無差別的であるかといふことは之れによつて彌〻明かに知られる。併し、此の絶對なる無差別見は正當であらうか。例へば、北海の風物と西南の山水とは、同じく山水の美ではあれど、決して混同すべからざるものではあるまいか。而して其の混同すべからざる所こそやがて特殊の美の存する所ではあるまいか。耶馬溪を畫き、月の瀬を畫き、嵐山を畫き、富士が根を畫き、奥の松島を畫き、越の海府を畫くに當つて、或一派の畫工のやうに、寫生〻〻とねらへばこそ、累を美術上に及ぼすこともあらうが、此等特殊の風物に對して自然に特殊の鑑賞をなして、そこに特殊の美象を結び、之れを發揮せんと力むるは、當然の話で、何の不思議も何の不都合も無いではないか。否、かやうにするより外に、山水美の種〻相を發揮する法はあるまいと思ふ。高山君の說によると、北氷洋の山水の美も、赤道直下の山水の美も、ほんの皮相の差別の外に、何の相違をも含まぬ理合となるらしいが、只〻同君に質したいは、所謂

山、水、其の、物の、美といはるゝは、そも〻〻如何やうな物を指さるゝであるか。某の山、某の水に「何等特殊の關係無き」平等遍通の山水美とやらんは、果して能く單一模型の弊に流れざるを得るものであらうか。常に山水美の唯一型をのみ胸底に藏する風景畫工の製る畫は、單に皮相にのみ變化を具へて、眞相はいつも〻〻同一であるやうなことはあるまいか。子供等が弄ぶ假鬘（かぶら）、かぶせの畫のやうに、着附と假鬘のみが其の都度にかはつて、顏はいつも〻〻同一であるやうのことはあるまいか。之れを要するに、當の山水其の物を外にして、畫工が特殊の想（觀念又は概念）のみを主とするときは、往々にしてかゝる弊を生ずる。バイロンの作の人物はどれも〻〻バイロンの面影をあらはし、ミルトンの作の人物はどれも〻〻ミルトンの肖像めくは、明かに此の理に基くのである。かゝるたぐひの作家を、畫に於ても、詩に於ても、通例主觀的作家と呼ぶ。高山君は此の種の派を賛成せらるゝのであるか。さすれば高山君は、所謂純粹主觀派即ち抽象理想派の美論家であるか。

按ふに、かゝる疑は全く無用であらう。時文壇唯一人の美學家たる高山君が、純粹主觀論などを唱へられう筈が無い。畢竟するに、高山君は世間の歴史畫論者

をば、聊かも美學思想の無いものとして、甚しく見貶されたのであらう。世間に行はれてゐる歴史畫論をば、すべて皆所謂眞、善二派の目的說のみである、と思ひ込まれたのがはじまりで、只管勸懲派及び寫實派の攻擊に力瘤を入れられた結果、「美は在りのまゝの客觀に在るにあらず、否、假象にあるなり、即ち主觀客觀交互の作用が結びいだし來たる影象にあるなり」などいふこゝろを右等蒙昧者に向つて示敎せられんとて、つひ〳〵これに力瘤を入れすぎて

「風景畫家が特に屋外にいで、天然の寫生を力むるは某の山、某の水を寫すが爲に非ず、そは如何に想像力に富める畫家と雖も、變化あり種類ある天然の風景に優るべき意匠賦色を想像し難きが爲なり」

と論斷し、さながら客觀は、單に或賦色、或意匠、すなはち或ヒントを供給するに過ぎぬものと言はぬばかりに言はれ、其の極、さながら客觀に接せざる其の以前に早く既に作家の心に何等か美的內容が成立つてゐるかのやうに言はれたではあるまいか。蓋し客觀界に接して觀照するの結果、そこに心に結びいださるゝ影象其の物が美で、在りのまゝなる客觀の事件、人物若しくは山水其の物が美ではないといふだけのことならば、初手からわかつたことで、これに對しては何等の異存も無いが、悉く客觀の山水を離れて、よしや其の意匠と賦色とは未だ全く出來あがつてゐぬにもせよ、初手から美術家の腦裏に成立つてゐるらしい山水美、其の物は、そも〳〵何物であるか。前の歴史畫論から推測すれば、豫め山水美の概念やうのものが成立つてゐるといふ意味のやうにも思はれるが、いかゞか。よもや今更にハルトマン先生の無意識哲學まで信仰して、エタイの知れぬ理想とやらん言ふものを荷ひいだされたのではあるまいと思ふが、いかゞか。

かやう論じ來つて見ると、歴史畫を畫くに當つては、畫が主であつて、歴史は客である、といふ議論は、呑込みかねる。彼の活歴派、考證派の歴史畫家に對する論としては今更らしく、自分の所謂歴史、美の論に對してならば、純粹主觀派の美論かと思はれ、さなくばハルトマン先生の說かと疑はれる。蓋し繪の目的が主として繪の美にあるといふ位のことは、中學生徒とても、今日では、ほゞ心得てゐべきことで、今更言ふ迄もあるまい。「歴史畫」の目的は「歴史」といふ特稱を附して問ふときは、譬へば、「軍人」又は「商人」の目的は「人」に「軍」又は「商」といふ特稱を附して問ふときと同じで、之れに對する答もまた、必然の勢ひとして、無論、特稱的でなくてはなるまい。然るに、汎義に謂ふ人間の目的を擧げて、是れ軍人の當面の目的と

答へたらば、何と、それは迂濶ではあるまいか。かるが故に自分は歴史畫の當面の目的は歴史美を畫くにある。即ち、鑑賞的に過去の事蹟、人物を看取するよりして心に結びいださるゝ影象を、丹青の力によつて、再現するにあるゆゑにあくまでも歴史的といふことが此の種の畫の主眼である、と斯う信ずる。されど、假に數歩を讓つて、所謂歴史畫、歴史小説若しくは歴史劇などといふものは、單に汎義に謂ふ古今遍通の人事美、人情美、若しくは、更に一層漠然たる劇其の物の美、繪畫其の物の美とやちんいふものを只〻都合よく表現する爲の一形式なるに外ならぬものとし、總じて歴史的彩色は單に幻影を呼び起す爲の方便で、假面で、「實らしい、誠らしい」といふ感じさへ維持し得れば、それで其の能事は畢るものであると假定した所で、さて實際の經驗が、果して此の説を保證するであらうか。はじめより歴史を方便と見做し、胸にあらかじめ成竹を畫いて、さて歴史畫を作るやうな作家が、果して能く、萬人の目に見て、歴史畫らしいものを作り得るであらうか。之れを小説や劇詩の製作に於ける經驗に照らして見るに、當の人物に全く同化したと思ふ程の夢心地に住して、作してすらも、兎角に我が影のみ結び出だされて、眞の遍通なる美影象は、兎角に結びがたいならひであるに、はじめより

冷かに方便〻〻と心に意識し、實らしくばそれでよい、「似つこらしくばそれでよい」と、(彼の三七日間、精進潔齋の美術家氣質とは反對に)言はゞ、看者を瞞着しやうの念を以て畫をかいて、それで眞眼者をも悦ばすことが出來るであらうか。甚だ以て心元ない。

高山君は

> 或人情美を表現せんと欲して而して後に歴史上の事蹟を當嵌めやうとも、又は預め歴史上の事蹟に成じて、而して後に該人情美に想到せるとも、用意の前後素より問ふ所にあらず

と言はれたが、自分はこの點が頗る取調ぶべき要點であると思ふ。自分の所謂

歴史畫の先後論

は此の見解の差違から起ると思ふ。蓋し、自分の考へでは、歴史を觀照するよりして(鑑賞的態度を取つて歴史の事蹟、人物に臨むよりして)映り來る影象其の物を畫にすると、人事美又は人情美の輪廓若しくは略畫やうのものを豫め心鏡に畫いて置いて、さて後、只〻其の彩色や、配置や、細かい意匠や、結構の材ばかりをば歴史に求めて畫にするとは、よしや外面は似たりよつたりであるにもせよ、それ

は一時俗眼を欺くのみで、其の實非常に逕庭があらうと思ふ。汎義に謂ふ美術品として此の二者の間に優劣があらうとは申さぬ、歴史的美術品と特稱すべきものとしては、歴史から思ひついて出來た作と、後に歴史を當嵌た作とは、殆ど雲泥の相違があつて、一は(出來榮次第で)歴史的と特稱せらるべき特權を有すれども、他は(十二分に出來てすらも)單に人物畫たるにとゞまつて、歴史畫としては勢ひ贋ひ物たるをまぬかれまいと思ふ。是れが先後といふことに重みを置く所以である。

嘗て高山君は歴史劇に就いても今度の歴史畫論と同樣の議論を主張せられ、歴史劇に於ける歴史といふ上被ひは、要するに、其の複雜若しくは壯大の筋立をば(見物人の幻想を呼び起すに足るやう)まことらしく見せん爲の方便たるに外ならぬ由を言はれた。當時自分は左の如き質問を試みた。

予が平生考ふる所によれば、史を冠としたる詩におのづから三種の別あり。(第一)全く空想より成りたるものに過去の時、處、人名等を被らせたるもの、例へば、巢林子の夢幻史劇、若しくはスペンサアの「神女王」の如きもの、若しくは抒情詩人の手に成れる史的叙事詩又は史劇。(第二)野史、正史の事實に多少の潤色を加へて殆と其の儘に劇と

なしたるもの、又は俗に小説と呼び做したるもの、例へば、我が活歴劇、又は『平家物語』の如きもの。(第三)史を讀みて其の中に見えたる人物及び事件の詩人の想像にも優りて詩的なるに詩興を發し、其の興を本として案を構へ、詩としての適否に因りて材を淘汰し、且つ自在に想像を加へ、取捨伸縮して一篇の詩と成せるもの、是れなり。第一を名づけて史の衣を被りたる空想、又は史の衣を被せたる空想と呼ぶべく、第二を史に空想を附加したるもの、即ち空想の衣を被りたる野史と呼ぶべく、第三を史より生れたる空想と呼ぶべし。

高山氏の言の如くば、詩人は先づ偶然に何等かの感興を發し、其の感興を體現すべき餌臺及び道具を手に入れんと欲して、現世及び過去世中に其の材を探求せざるべからず。幸ひに現世の事情中に件の空想に適すべき材料あるを發見すれば、やがて世話物を作るべし、されども其の空想偉大にして現世間に適せざる時は、去りて過去の記錄に就き、「歴史上顯著の事實にして、而も其由來因緣の堙滅せる(くはしくは其の首尾、殘に其の落着の悲壯なる形跡のみが著しく世に知られて、而も其の徑行の除りに通常人に明かならざるが如き)事實」を求め、其の中に我が空想に恰好なるものあるか否かを探り、さて後に作に着手せざるべからず。是れ豈暗室に入りて針の落ちたるを探るにひとしき頗る困難なる業にあらずや。理論上は兎も角も、實際かゝる事がなされ得べきか。幸ひに恰好の事蹟を探りあてたりとするも、かゝる手續に依りて

成れる作は、能く彼の醸案物に附帶するが如き牽强の瑕疵無きを得べきか。所謂歴史小說若しくは史劇の傑出したるものに、果してかゝる手續によりて成れる作あるか。予は思ふ、詩人傳及び文學史の客觀詩に關して語る所は、略〻此の手續の虚なることを證明するものゝ如しと。如何。

かゝる手續によりて成れる詩も、其の出來榮だにめでたからば、之れを稱へて傑篇となし、巧詩といふも、不可なかるべきは勿論也。但し、何故に史の稱を冠らせて他の空想の作と分つか。高山氏の謂へるが如く、單に史の衣を被りたるが故なるか。將た他に理由あるか。高山氏の說の如くば、あらゆる過去の衣被たる叙事詩及び劇詩は史的と稱して不可なきが如し。『テムペスト』も史劇なるべく、『ウィンタアス、テール』も史劇なるべく、近松の夢幻劇も史劇なるべし。是れ豈我が時代物、世話物の區別の如く、餘りに放埒なる區別にあらずや。すなはち只〻一重の區別にて、皮を剝げば二者些の別ちなし。果して然るか。（早稻田文學七年第三號三十年十二月の分）

かやうに質問いたしたつけが、此の疑ひは今もまだ氷解せぬ。併し、こゝにもまた數歩を讓つて、かゝる着想上の「用意の前後は、素より問ふ所にあらず」とするも、尙ほ頗る心懸りに思はれるは、其の一時の假物たる歴史といふ、上被、ひ歴史といふ假面、が、能く、いつ迄も破れず碎けずにあらうかといふことで、換言すれば、歴史

的美術品の壽命、即ち歴史的美術品として取扱はるゝ年月には限りがあるか、どうか、といふ一條である。例へば、山水畫とか、風俗畫とか、花鳥とか、純空想の畫とかいふものは、其の出來が絶妙であれば、言はゞ萬古不易で、價値はます〳〵加はるとも衰へるとはない。然るに、高山君の所謂歴史畫（若しくは歴史小說など）に至つては、よしや其の汎義に謂ふ美術品としての價値は失はぬにもせよ、文化が進み、人智が進むにつれて、尠くとも其の歴史的といふ特稱だけは、勢ひ失はねばならぬげに思はれる。近い例が、初手から方便と高を括つて作つた近松一派の時代物が、今は時代物としては遇せられぬが如く、若しくは主としておのが主觀的解釋を表白することを目的としたロマンチック、スクールの歴史小說や歴史脚本が、其の外面の粉飾だけは、殆ど考證派の作のやうに、あくまで穿鑿的であつたにも係らず（例へば、トマス、ムーアの作、サウジーの作など）もはや正當に謂ふ歴史的作物とは見做されぬがごとく、遲くも百年、速きは五十年、三十年で、化の皮がはがれ假面が落ちて、純空想ともつかず、風俗畫ともつかず、ちようど我が國の夢幻劇のやうな變妙來のものとなるが通例。所詮化の皮がはがれるものなら、何と、初手からして廢たはうがましではあるまいか。近松なども、手柄は多く世話物

にあつて、歴史ともつかず、世話ともつかぬ夢のやうな作物には取所がとぼしい。よしや何事も無常の世の中、彼れも一時、此れも一時、流行變遷は止むを得ぬとしたところが、人情の自然として、成ちうことなら三十年の壽命は五十年、五十年の壽命は百年、どうせまやかしものと定まつたにもせよ、せめてウォルタア、スコットの作程に、壽命も、瞞着力も長うありたいものと(作者みづからは)思ふべき筈である。果して然らば、そこに忽ち方便說に相對的に長壽ならんことを願ふ第二派が生ずる譯であるが、此の派はそも如何にして所謂過去らしき假面をば長く支撐せんと試みるであらうか。こゝが質問點である。此の故に、自分は嘗て高山君に問うた。

假に史的といふ名稱は、外面の過去世らしきによりて與へられたる名なりとせんも、所謂らしきは高山氏が言ふ如く、强ひて外より附加したるのみにて維持し得らるべきか。蒙者は或は欺かるべし、大人が能くかゝる作に同感し得べきか。內に一點の過去に因める誠無くして、過去らしといふ感の維持せらるべきか。人物の性格は現在のまゝ、彼等の情操、云爲、亦悉く現世のまゝにして、過去らしきは僅に歲時、方處、及び其の言語の皮相、衣服の外面のみならんに、過去らしと云ふ感果して起り得べきか。若し過去といふ幻想生ぜずとせば、其の作は能く史劇として成り立ち得べきか。史

詩としては成り立ちがたからんに、之れを史詩と稱するは何の故ぞ。史らしくは無けれど史の衣を被たる故にと言はんか、猶女らしくは無けれども女の衣を被たるゆゑに女といふなりといふが如く、殆ど無意義の名稱ならずや。

さて、かやうに問うたならば、高山君は、前段に一寸辯じ置いた如く、殆ど純粹の主觀論者ではないかと疑はれる程に、作家が主觀即ち觀念、橋本畵伯の所謂コヽロモチ?)に重きを置かるゝ見解よりして、

凡う作者輩が歴史を鑑賞するよりして結び出だすあらゆる心像は、畢竟は、作者の主觀が產みいだす空想たるに外ならぬものである、うれをば客觀より來る一種格別の物のやうに思ふは、俗人常識者の見解で、甚だしき謬妄である。

といふ例の美學上の純理論を提出せられるであらうと豫め推察致すが、それがそれ、繰返して前にも申した同君の無差別平等見と言ふものである。成程或意味から言へば、單に美が主觀の所產であるのみならず、眞も、善も、森羅萬象皆主觀の所產でもあらうから、之れを推究して、一二の同種の空想に歸するとも、必ずしも難くはあるまい。併しさやうに純理論の極端に走つて實際の事物を論じたならば、宇宙間の森羅萬象も甚だ單純な原理中に攝せらるべき譯で、前にも申し

た通り、manあつてmenなく、birdあつてbirdsなく、animalあつてanimalsなき次第ともならう。若夫れ同類中に異種を分つが致知格物の實際ならば、美術の實際、文學の實際、將たまた此等美術的作物を批判品隲する實際に於ても、同樣の辨別が行はるべき筈であると思ふ、イヤ、行はねばならぬと思ふ。若し此の辨別が行はれぬ物とすれば、抒情詩(主觀詩)と叙事詩(客觀詩)との區別は單に淺露(あさつゆ)い修辭上、結構上、形式上の差違たるにとゞまつて、從來の美學若しくは批判(クリチシズム)が認め來つた彼の甚深なる內容上の差別は、悉皆消滅してしまはねばならぬ。ゲーテが苦心經營の結果になつた純客觀詩に近い擬古の作も、ミルトンが述懷の方便として作つたマヤカシの希臘劇(クラシック、ドラマ)も、かやうな見解で見たならば、恰も是れ似(に)而非(せ)劇通の目に映(うつ)る二錢團洲と本團洲の技藝只〻目の玉の大小に違ひを發見する位のものであらう。シェークスピヤの如何にしても及びがたい第一點は、其の沒主觀的の特質にあることは、(嘗て自分が沒理想論に於て論じた通り)古今の批評家、評論家が口を揃へて主張する所であるのに、それもかくの如き沒差別見が行はれた曉には、殆ど無意義の稱讃と成つてしまふ譯である。而して自分は劇詩又は叙事詩に謂ふ客觀性の必要を認めぬ論者は、殆ど共に詩文を談ずべからざる者と思ふ

が、いかゞか。

按ふに、詮じつめて見れば、作家の空想に外ならぬものも、歷史から得來つたといふ肩書がある限りは、一種特別な即ち他の純空想の作に比すれば、大に客觀的性質を具へたもの、換言すれば、歷史若しくは傳說といふ(作家が一私見のみによつて流石にほしいまゝに顚倒し破壞することの出來ぬ)一種の制限ある客觀界より得來つた空想といふことが、特に歷史的と稱する一種の空想の本質ではないか。若し果して然らば、歷史又は傳說に一種の威權があることを忘れてはならぬ。或は高山君は同君が尤も私淑せらるゝ『ラオコオン』の第八章ヰナスの像を論じた條下にも、傳說の蔑にしがたき所以がほのめかしてあるにも拘らず)ふと此の道理を遺却せられたではあるまいか。夫れ歷史の解釋は、一面から見れば、十人十色で、黑くも、白くも、右とも、左とも、如何やうにも解釋がせらるゝに見ゆれど、それは史學の研究が今尙半途にあるからのことで、若しくは、人々が先入主となつた成心(プレヂユディス)を以て過去に臨むからのことで、全く虛心にして、科學的に過去を觀察したならば、現に或程度までは近世の科學的歷史家の解釋が一致する如く(よしや一致しないまでも、タカヾ蘇國女王メレーの場合に於ての如く、右か左かに

一致するがごとく)或程度までは一致するものと思ふ。よしやまた從來の傳說又は史論(即ち過去に關する解釋)は、すべて其の代〳〵の妄想、さなくば空想であるとするも、それは猶ほ彼の從來の哲學的議論の多分が往々にして個人の空想であつたと同樣の次第で、絕對的に純粹哲學をば成立ちがたいものと豫言することが出來ぬものならば、尙更以て歷史に關する解釋をば、決して、一致せぬものなどゝは、斷定せられがたき筈である。よしや科學的一致は望まれぬとしても、鑑賞上の一致程は望まるゝかも知れぬ。イヤ、今日に於てすらも、此の鑑賞上の一致程は、既にほゞ成立つてゐるとおもふ。其の證據は、前にいつたロマンチック、スクールの主觀的解釋に成れる歷史物が失敗したのにも、よう見えてある。彼のシュレーゲルが、其の『劇文學の講說』中で十八世紀の佛國史劇を痛く貶したのも此の理に基く。傳說に乖戾したり、世に行はれてゐる史的解釋に悖逆することは、取りも直さず、觀美意識の上に一種のshockを與へるので、取りも直さず、醜感を呼起す所以である。

よしやまた之れをも讓つて、過去に關する解釋は、要するに人々の思ひ〳〵で、決して定まらぬものであるによつて、作家は此の不一致、不一定の隙に乘じて、所謂

繪畫其の物の美を發揮せん爲に、歷史を利用するは自在である、と假定したところで、其の思ひ〳〵といふ事其の事が却つて、取りも直さず、件の歷史畫の美をそこなふ一種の條件となりはすまいか。畫工は方便の爲に道眞又は淸正と解せしめやうと思ふ。然るところ、觀者は畫工と此等人物の爲人に關して、見解を殊にするが爲に(否、むしろ觀者が鑑賞する時の心持と、畫工が之れを假用せし際の心持とは、其の心持を異にするが故に)到底淸正、道眞とは解しかねる。隨つて、目的の人情までがサッパリ活動せぬことゝなる。譬へば橫山大觀君の「屈原」に關する空想と高山君の同人物に關する見解とが異なつたなどは其の一例である。彼の純空想の畫ならば、殊なつた所が、畫の出來さへよくば、さしつかへはない。歷史畫に限つて、此の見解の異なるといふことが、大なる鑑賞上の邪魔となるは、そも〳〵如何なる故であるか。方便、說では此の點の說明がつくまい。

之れを要するに、空想(主觀)を先にし、歷史(客觀)を後にして、さて歷史畫を作らんと試みたならば、勢ひ主觀的作物となつてしまつて、あらゆる歷史的(即ちエポス的)作物に必須であると認められ來つた客觀的性質を失ふ虞れは無いかといふが質問の要點で、以上述べ來つた所を、あら〳〵統括すれば、ほゞ左の如くである。

一、美術上、文學上に謂ふ主觀的、客觀的の名稱は、二十世紀の今日に於ては、もはや撤去すべきものなりや、否や。（主觀的詩人としてのウォオヅヲオス、ミルトンと客觀的詩人としてのチョーサア、シェークスピヤとの別は論ずるに足らざるか、否か。）

二、人事美、人情美は古今遍通なりや。古今遍通の人事美、人情美は能く類型と化了せざることを得るや。

三、歴史美若しくは個性美などいふ特殊の美は、到底、成立つまじきものなりや。

四、方便の爲に被る歴史の假面は久しく剝落せざることを保し得べしや。内に誠なき贋物（鍍金物）の早晩、化の皮の剝がるゝ如く、方便の爲の歴史畫は、早晩、假面の脱落して興趣索然たる作物となるの虞れなしや。

五、かゝる虞れなからんとすれば、十二分に假面を被らざるべからず、而も僞君子の到底眞君子と同一ならざるを悟らば、竟には彼の大僞君子が眞君子とならんことを望むに至るが如く、まづ歴史に同化してさて後に空想を結成せんと企つるに至らざるを得べしや、否や。

やれ〳〵、思ひの外の長談義となつた。これはハヤ何としたものであらうぞ。

實はまだ先後論も、これでやつと半ばで、これから自分の所謂歴史美論の顯正門に移り、更に作家の性格論に及び、つゞいて批判家と作家とは、美を觀ずる上に於て、多少の差違なからざるを得ず、かるが故に美術製作の手心は、批判家的に純理の方面よりのみ見るべからずといふことを論じ、それから、レッシング先生とは全く別途の主意で、詩と畫との異同に關する卑見を提出し、高山君の論は、假に繪畫の上だけには應用せらるべしとするも、おそらく詩（散文詩をも含めて）の上には當嵌（あてはま）るまいと云ふことを論じ試みやう下心であつた所、さて〳〵、筆に慣れぬ淺ましさ、徒らに冗漫に流れ、重複に渉り、半途ですらも業に已に此の長談議、本誌の迷惑、讀者諸君の迷惑も嘸かし。幸ひに方便說に關する卑見と質疑だけは、ほゞ一通り述べ盡したによつて、今回は、兎も角も一まづこゝで切上げやう。畢竟、自分が述べやうと存ずる顯正門の方は、美學の上から申せば、無論全くの局外觀で、讀んで字の如き一私見、素人考へに過ぎぬものゆゑ、方便說に關する高山君が再度の說を承るに至つたならば、或は自分の謬妄を覺つて、もはや提出するにも及ばぬことゝならうやも圖られぬ。それこれ、こゝに筆をとゞめて、餘談は他日を期することに致さう。

（明治三十二年十一月『太陽』掲載）

再び歴史畫を論ず

第一　問題のぢたゝら

歴史畫問題は、高山君の再度の論文を得たれども、殆ど一歩をも進めずして同じ處に地蟠を踏み、同君が滔々たる辯論は、惜むらくは、概して要點の埒外に流れた。自分は主として質問に對する解答をば、請求したのであつたに、同君は主として辯疏論駁に力められた。同君は自分が提出した批評及び質問をば、如何さまに解せられてか、甚しき誤解に基く「斷定」と斷定せられて、所謂「甚しき誤解」の辯解に、前後十六ページの長論文の、殆ど半ほどを費された、而も肝腎の質問に對しては、前後只〻一二ページほど、隨つて

質問の要點は未だ一も解答せられず

依然もとのまゝに殘ることゝなつた。

同君が辯ぜられるには、予は未だ抽象理想論などは主張したことは無い、イヤ、予はハルトマン氏の批評、並びに自著『近世美學』のうちでも、抽象理想論に反對の意

見をさへ述べて置いた程のことだ。抽象理想論者などゝは甚しい誤解だ！足下は御ぞんじないか、予は二種の理想說即ち具象、抽象、二種の理想說に對しては、一種の新見解をすら抱いてゐる。其の仔細は、まか〳〵、かやう〳〵、と事細かに辯ぜられたが、是れは折角ながら、望む所の解答ではなかつた。蓋し、自分は同君をば、萬が一、抽象理想論者ではないか、とこそ疑つたれ、未だ曾て然りとは斷定せなんだ。「按ふに、かゝる疑ひは全く無用であらう。時文壇唯一人の美學者たる高山君が純粹主觀論などを唱へられう筈が無い、云〻」と辯解しておいたあたりを再讀して貰ひたい。所詮、同君が理論上の態度を疑つたのでは無くて、單に同君が實際上、鑑賞上の態度を疑つたのであつた。換言すれば、理論上に於ては抽象理想論者ならざると明々白々たる同君が、實際上、鑑賞上に於ては、往々にして、抽象理想論者には非ずやと疑はるゝやうなる影を示さるゝは、抑〻如何なる次第か、と不審したのであつた。さて、さる疑ひを起さしむる原因は、主として、歴史的、藝術に關する同君の見解であるによつて、そこで先づ主として歴史畫乃至歴史的脚本等に關して幾多の質問を提出し、それに對する解答を得て、件の疑ひを釋かうとしたので。されば同君が之れに對して、其の理論上の態度などを事細か

に辯ぜられたは、折角ながら、全く無用の辯論で、肝腎の質疑の解せられざる限りは、同君の鑑賞上の態度に對する自分が疑團は、尙聊かも氷解せず、隨つて不本意ながら折角の

高山君が辯解は無効

であつたと言はざるを得ぬ。鑑賞上に於ては、幾分か純粹主觀論に類似した說を奉ぜらるゝのではあるまいかといふ疑念は、今尙依然として釋けぬ。高山君が曰はるゝには（其の一）

歷史畵の本領は、歷史上の人物、又は事件の眞相を描くところに存せずして、人事、人心の複雜なる美的活動を丹靑によりて現ずる所に存す。

又、之れを補つて言はれるには（其の二）

歷史畵の表現せむと力むるは、飽迄繪畵其物の美（繪畵の表はし得べき美）にして、歷史上の事蹟には非ず、たゞ繪畵の美を現ずる一方便として歷史上の事蹟を用ふるのみ。

又、歷史上の事蹟を假るを須要とする所以の理由、二箇條を擧げて曰はれるには（其の三）

一、人事、人心に關する種々相は、最もよく歷史上の事蹟に現はるゝが故に、

二、時間中に繼起せる人事、人心の複雜なる因緣を一幅の畵中に現ぜむは、空間的藝術として當面の一刹那の外に現じ難き繪畵の性質の許し難き事なるが故に、換言すれば、歷史上の事蹟を假れば、此の如き因緣の知識を、觀る者の側に豫想し得べきが故に、

以上は歷史畵に對する同君が議論の眼目にして、自分が同君を主觀論者にあらずやと疑つたも、畢竟は右の三箇條以外に、何等の別解をも發見する能はなんだからで、而して再度の論文中にも、あらためて此の三箇條を揭出せられたるを見れば、同君の議論の要旨はこゝに盡きたと見てよろしからうと思ふが、さて此の三箇條を精査するの結果は、前日の疑を彌〻堅うするに足るのみである。

「歷史畵の本領は人事、人心の複雜なる美的活動を現ずる所に存す」と言はれるか、然らば廣義に謂ふ普通の人事畵、人物畵との區別は何處にあるぞ。「歷史畵の表現せんと力むるは飽迄も繪畵其物の美（精しくいへば、繪畵の表はし得べき美）歷史上の事蹟には非ず」と言はるゝか、所謂繪畵の表はし得べき美とは何であるぞ。「あらゆる繪畵（といふ美術）の表はし得べき美」と謂ふ意か。さすれば花鳥を主として畵き、山水を主として畵いたるをも、歷史畵と見做さうとせらるゝか。花鳥

山水は、たしかに繪畫の表はし得べき美である。或は「人事畫の表はし得べき美」と謂ふ意か。然らば歴史畫と、廣義に謂ふ人事畫、人物畫との差別は何處にあるか。現在の社會畫、外國の浮世畫、お伽噺、又は『八犬傳』乃至『西遊記』中の人物、事件などもたしかに人事畫の表はし得べき美ではないか。さて〳〵、漠然たる定義！歴史畫と社會畫との差別、歴史畫と風俗畫との差別は何處に在るか。此の疑ひよりすれば、自分が其のはじめ

高山君が見解は無差別、平等的

隨つて、殆ど純粹主觀論者の見解ではないか、と疑つたも、何と理由あることではないか。尤も同君が歴史畫論には、前に擧げた二箇條の但し書もあり、且つ再度の論文中には、更に此の但し書を敷衍したる一條の説明をも添へられたれば、それが如何ほどの貫目のものか、原文のまゝを引抄せんに、同君が言はれるに

歴史的ならざる繪畫、例へは、風俗畫、社會畫、或は理想畫の如きは、僅かに當面一局の事柄又形態を現じ得るのみ、されはその中に表はし得べきものは、主として空間上の物象にして、時間に關はれるもの、例へば、事件の經過、人情の發動等は、是を表はすに由無し、歴史畫は然らず、そが丹青の上に現ずる所は當面の一刹那のみなれども、是の一刹那の因緣應報は豫め觀る者の胸中に會得せられあるべきを以て其の内容隨つて其の感興は、他の種類の繪畫に比して大に豐富且つ痛切なるものあるべし。

この解に對しては何等の異議も無い、但し、これは――さて〳〵が要點だが――歴史畫の本領の論と言はうよりは、寧ろ歴史畫の一特質を説明せられたに過ぎぬ。その理は後に申す。同君又曰はれるに

歴史畫の歴史畫たる本領は、當面の繪畫に時間上の内容を有せしむるにあり、當面の事態の由つて生起せらるべき應報等に就いて觀者に感興を與ふるにあり、更に語を換へて言へば、人事、人心の複雜なる美的活動を一幅の畫面によりて代表するにあり、歴史畫の本領は此處にのみ存し、他の何處にも存せざるべき也。

歴史上の事蹟、人物を假り來るのは單に作畫上の一方便に外ならずといふ見解に立脚せらるゝからは、右の如くに斷言せらるゝも常然の事で何等の不思議も無いことだが、而も此の説明は此方の見解より言へば、單に歴史畫の一特長若しくは一特質ともいふべき點を説明せられたに止まる。歴史畫の本領に關する疑ひは、之れが爲に一絲一毫をも增減するに至らぬ。歴史畫は「特別知識」を觀る

者の心に豫期し、之れに賴るが故に複雜なる人事上、人心上の活動を現じ得るなりと言はれるか。然らば、叙事詩または小說、劇詩、乃至脚本の筋（ストリー）に基ける繪畫、所謂芝居繪（役者肖貌畫）などは如何であるぞ。彼等もまた（其の時代物たり、世話物たるに論なく）頗る複雜な、時としては所謂歷史畫を凌ぐほどの複雜な、靈活な、多趣多樣の聯想や感興を喚び起すではないか。小說、脚本ばかりでは無い、新聞紙の三面に美名又は醜名を轟かした男女の情事、又は殺人、强盜の事件なども、尠くとも其の評判の刻下に於ては、只〻一葉の浮世繪に畫かれて複雜なる聯想を惹き起すためし。何と此等の事實は、高山君の所謂「當面の繪畫に時間上の內容を有せしむる」とはあらゆる複雜なる人事の通有質で、特り「歷史畫のみの本領でないことを證明し得て餘りあるではないか。所詮、同君が所謂歷史畫の本領は、本領ではなうて、其の實、歷史畫のほんの一特質たるに過ぎぬのみか、世に小說、脚本等の繪畫ある限りは、イヤ世に新聞浮世畫などいふものある限りは、決して其の獨占をすらも誇る能はざる一特質たるとも明かである。要するに、歷史畫の本領をば「只〻單に「複雜なる人事、人心の美的活動を表現する」といふ點のみに据ゑんと試みる結果は、歷史畫と他の複雜なる人事畫との間に、何等の差別をも設けぬ論となつて（高山君が說明の語、義、文、面を追つてゆく論理上の結果）遂に「歷史畫＝小說脚本の畫＝新聞に因む浮世繪」といふが如き奇怪な結論に達せざるを得ぬ、がこれは畢竟、論者の本意を酌まずして說明の文面に拘泥するからのことで、同君の主意はこゝに存せぬこと勿論であらう。現に二度目の論文中に

歷史畫といひ、歷史小說といふは、作者が想ひ着ける材料の出所より名けたるべきものの、內容上より見れば何等差別の特徵を有せざるなり。

然るに、それを根本的に繪畫詩歌に差別あるやうに感ずるは「俗人の見解」と言はれた。由是觀之、所詮、

高山君の歷史畫論の全體

は左の如く總收してもよからう思とふ。曰はく、

歷史畫とは、複雜なる人事及び人心の美的活動を表現せる一種の人事畫なり。其の內容上よりいへば、他の小說畫、新聞の浮世繪などゝ些も異なる所なし。其の特に歷史的と稱するは材料の出所を示すに過ぎず、即ち單に名稱上、形式上の沙汰たるのみ。

これが同君の歴史畫論の要旨であると思ふ。さて彼の「特別知識」とか「時間上の内容を有せしむる」などいふことは(前にもいつた通り)他の小說畫、浮世繪等に共通なれば特に歴史畫の特徴として提出すべからずとすれば、歴史畫の歴史畫たる本領若しくは特質は、單に(一)其の「材料の出所」が歴史、傳說であるといふ事と(二)人物の服裝、風采、乃至其の周邊の景物が現在の物で無いといふ事、此の二箇條にのみ因緣する次第となる。而して此の二箇條のうち第一の方は、同君の見解よりすれば、ほんの只彩色の出所といふ程の義、且つ第二と相俟つてやがてはじめて効力を生ずる所のものである。而して同君の見解よりするも、明治の服裝を被り明治の屋舍の内に座したる一老翁を畫いて、(よしや其の材料は傳說に基くとも)之れを菅公と見做す能はざるは言ふまでも無いによつて、そこで詰る所同君が主旨は單に左の如くなる。

歴史畫の特徴は(其の内容には存せずして)單に其の外形の過去の事蹟、人物らしく見ゆる所にあり。

而してこは同君が曾てみづから反覆して唱へられたる所、此の一點こそは同君が歴史畫論の生命にして、自分が質問するに及んだる根本の論點であるに、同君

が其の再度の論文中に於て、何故か此の點を一層明かにするの勞を吝まれたは甚だ殘念なことであつた。それは兎もあれ、以上の取調によつてやはり同君の議論の根據は、件の一點に外ならぬと分つた以上は、更めて此の點に向つて再度の質問をすべきだが、さて之れをなすに當つて提出する質問は上に辯じたるが如き譯柄ゆゑ、前回提出したるものと甚しくは異ならぬ。要するに、再應もお互ひに論じあつたなれど、議論は徒らに地蘢を踏んで、此の問題の要旨は、その爲に一歩も進めなんだ。かるが故に重複ながら、今一度、前度の質問を掲出する、念の爲多少の補述を加へて。

(甲) 總じて藝術上に用ふる歴史的事件、人物、乃至歴史的服裝、景物等は、單に「過去の事蹟らし、人物らし」といふ幻覺(例へば、道具らし、清正らしなどいふ幻覺)を喚び起さん爲の方便即ち假面に過ぎざるか。然らば歴史畫の本領は果して那邊にあるぞ。

(乙) 假に右の一條を確實なりとするも、方便の爲に(即ち一時を瞞着せん爲に)被むる歴史の「假面」は、果して久しく剝落せざるを保し得べしや、否や。内に誠無き贋物(鍍金物)の早晩化の皮の剝がるゝ如く、方便の爲の歴史畫は早晩假面の剝落して(其の内容の彼れ此れ同一なるだけに)小說畫ともつかず、新聞浮世

繪ともつかず、風俗畫ともつかず、理想畫ともつかぬ雜種の人事畫となりて、作者が豫期せし聯想、感興を喚び起さんやうもなく、興趣索然たる者とならざるを得べしや、否や。

（丙）通例、歷史畫を作る者が（其の歷史の本領に對する見解の如何やうなるかに論なく）多少（傳說、歷史、i.e.世の史蹟觀（歷史上の事蹟、人物に對する通例信受せられたる見解といふ程の義）に依據するの必要を感ずるは、蓋し觀美意識の上にshockを與へまじき爲の用心にして、之れを行はざれば假面すらも（假に假面を被むることが歷史畫の本領なりとするも）殆ど片時も支撐しがたかるべければなり、而して之れを行ふの必要を認むるは、取りも直さず、傳說、歷史、i.e. 世の史蹟觀に多少一致する所あるを認め、隨つて其の一致に一種の犯し易からざる威權あることを認むるにひとしからずや、如何。

假にかゝる威權ありとせんか、世の史蹟畫に悖戻して、歷史畫に對する觀美意識の上にshockを與へながら（尙能く史的幻影（道眞らし、清正らしといふ感想）を支撐する の法ありや。（若しさる法なしとせば、所謂歷史的の本領は滅却してエタイの知れぬ人事畫となり了るべし）。

或はかゝる威權あることを認めざらんか、さるは過去に對する說明解釋をば、全く人々の思ひ〳〵なりと斷定して、かゝる解釋に一致あることを否定するにひとし。然るに史蹟觀の一致を否定するの結果は歷史的假面の不成立を是定するに終らざるを得ざるべし、何となれば何等か豫め一致する所なかちんか、作者は道眞の積りにて寫したるをも觀る者は或は道長或は藤房と觀るべく、到底衆を瞞着すべき假面の成立つべき筈なければ也。此の理は繪畫のみに就いていへばこそ力弱きに似たれど一層高等なる作物、小說、脚本に適用して其の頗る力あるを知るべし。方便派は如何にして此の困難に克たんとするか。

（丁）さてまた、歷史畫と他の人事畫（小說畫、新聞の浮世繪等）との間に內容上には何等の差別も無しと斷定するは、過去の人事、人情が與ふる感銘と、現在の人事、人情が與ふる感銘との間に些の差別無しと認めたるにひとし。過去の人事美の內容と、現在の人事美の內容との間に差違なしと認めたるにひとし。寬平時代の一忠臣の個性に附屬する美と、明治時代の一忠僕の個性に附屬する美との間に差別なしといふにひとし。果してかく解して

可なりや。

差別ありとせんか、歴史畫が社會畫又は新聞浮世繪と相異なる一點は或はこの點に存することゝなるべく、隨つて過去に關する解釋が歴史畫を製る上に重要なる關係を有するに至るべし。差別無しとせんか、さすれば人情美、人事美の内容は古今遍通なりといふにひとし。彼の時代〳〵に特殊なる人情美、特殊なる人事美、所謂時代の精神が生みいだしたる特殊の人事美、若しくは特殊の人物の行動に附帶する特殊の人事美などいふものは、到底成立つまじきものなりや、否や。

(戊) 人事美、人情美に古今の差別無しと認めたる結果は、常に人事美、人情美の唯一型をのみ胸底に藏することゝならずや。人物に於ては毎に一類型而も現代の或人物、往々にして作家自身を畫くことにのみ流れ、時代に於ても、毎に一時代、即ち作家が現住せる時代の特質のみを畫きいだすの弊に墮ちずや。よしや抽象理想派の畫工たらざるまでも、所謂主觀的作家となり了らざるを得るや、否や。

(己) 所謂主觀的作家と客觀的作家との區別に關する高山君の見解は如何。

以上諸條就中、丁、戊、二箇條に對する同君の態度は、人をして高山君は純粹の主觀論者(抽象理想論者)然らざれば主觀的作家と客觀的作家との區別を無視するの論者にはあらずやと疑はしむ。

美學家たる同君が抽象理想論の僻したる說などを奉ぜらるべくもないことは言ふを俟たぬ。而も前に擧げた諸條の解答を得ざる間は、鑑賞上に於ける同君が態度を疑ふの念は、今も尙依然として氷釋せぬ。

第二　ゆきちがひの數箇條

右に提出した質疑の釋けざる間は、論を進むるに由無き次第なれば、高山君が明答に接するまでは、寧ろ此のまゝ差控へ居べき筈なれども、同君が前度の長論文は辯難論駁にも力を致されただけに、多少答辯の責任を負つたかのやうにも存ぜらるれば、左に一應。同君は「汎義に謂ふ人事美若しくは人心美」といへる場合の汎義といふ意味を抽象的といふ意味と解せられたものと覺しく、意外にも左の如く反問せられた。

歴史に關せざる人事美、人心美は、凡て是れ抽象美なりや。詩人美術家が其の空想中

に於て構成し、鑄鑄したる影象は、それが歴史と實の關係を有せざる限り、即ち坪内氏の所謂歴史的ならざる限り、凡て抽象的もしくは汎義的(概念的)たるを免れざるものなりや、云々

誤解！自分の所謂汎義とは狹く歴史的と特稱する人事美、人心美に對して廣く普通に謂ふ人事美、人情美を指したので、換言すれば、特殊なる時代又は特殊なる人物に係らざる人事美、人情美の謂であつた。若し夫れ歴史に關せざる人事美、人情美のうちにも具象の美あることは言ふまでもない。何でかゝる反問をせられたることやら。

それは兎もあれ、此の點に關する同君の反問は、此方に何等の痛痒をも與へぬ。但し、あらためて此方より反問をする、「歴史に關せざる人事美、人情美も優かに具象の美となり得ることについては、自分も毛頭異存はないが、只〻聞きたいは、聊かも歴史に關せざる人事美、人情美を、して優かに、霊活に歴史的と認められしめ、並びに歴史的と稱せられしむる所以の因縁は果していづこより來たるのであるか」と。

同君はまた「歴史畫の目的は鑑賞的に過去の事蹟、人物を看取するよりして心に結び出ださるゝ影象を丹青の力によつて再現するにあり」と言つた自分が論の主旨を解析して、この意は

約言すれば、歴史より想ひ着ける美的影象の義に外ならざるべし、是の如き美的影象あることは予是れを了す、然れどもこゝに重大なる問題あり、是の如き影象の美なるは、歴史的即ち單に過去世に實際ありし事柄なるが爲か、又は審美上より見て人事人心の美しき活動なるが爲か、是れ問題なり、坪内氏と予の説の死活は茲に分るべし。

と言はれた。此の圈點を施した部分は同君が都合によつて下された歴史的といふ語の解釋で、自分の下した同じ語の解釋ではない。自分は歴史的といふ語を「過去の時代の特質を帶べる」若しくは「現代とは異なれる趣味を有する」など謂ふ意味、即ち、時代に因みて特殊なる」といふ意味にこそ解したれ、未だ曾て「實在的」若しくは「過去世に實際有りし」など謂ふ意味に解した覺えは無い。若し之れを疑はるゝならば、先度の論文中について、其の證文を擧げて見られよ、よもや擧げられまい。然るに何としてやら頻に此の自製の解釋をば、さながら此の方が主張した解釋でゞもあるかのやうに反覆して提出し、「足下の鑑賞は純粹でない、足下の立場からは落付き場所が二つしか無い。ヘーゲルの理想即歴史説に逃げ

込むか、或は美意識に道徳的はた實際的の興味もはいり得ると言ひ出すか、其の外に立ち塲は無い」など言はるゝは、此方に取つて些ばかり迷惑であつた。

高山君はまた「名稱威權說の誤謬」と表題して傳說の一條を論ぜられ、且つ抹殺博士が出て來て、當の事實、當の人物を抹殺したならば何とする、といふやうなことをも言はれたが、是れ將た當の的を外れた。何となれば、世間の史蹟觀に威權ありとこそは申したれ、事實の有無には何等の價値をも置かなんだ。史蹟觀を重んずるは、畢竟ずるに、鑑賞の一致あらしめんが爲で、實在、不實在は本來相關する所で無い。寛平時代といふ一時代の特殊なる精神にこそ一種特殊なる美を認むれ、又件の特殊なる時代精神を代表するものとして菅原道眞の特殊なる品性に特殊なる美をも認むれ、其の人物の實在、不實在は、毛頭も問ふ所で無い。あくまでも「再びしがたき特殊の美」といふことが眼目である。二つには、其の所謂特殊の美が傳說、歷史、即ち世間の史蹟觀の爲に多少羈絆せらるゝ所あつて、他の人事畫の美の如くに、作者のほしいまゝに成らぬといふ點、それらが歷史畫の特質と斯やう言ふのが此方の初手からの意見ながら、かく斷片的に言ふときは、また〳〵解し誤らるゝ恐れもあれば(專門家の高山君に對してではない、『太陽』の讀者の或階級に對しての說明として)鑑賞上及び理論上の(ほんの當座用的の)

第三　藝術に對する我が立脚地

を辯じて置かう。

先づ最初に辯じおくべきは、自分の美の論は、彼の獨逸流の純理哲學に基く美學說に毛頭も關係が無いといふこと、即ちヘーゲルにも、ハルトマンにも無緣だと言ふこと、第二には下に言ふ所は、幾分か英米の生理派及び心理派の美論に負ふ所無きにあらず、而して內外二要素の說の如きはチュキー氏、フォーブス氏などより緒を得た次第ながら、さりとて自分は右の大家をも、アレン氏をも、マーシャル氏をも、サリー氏をも、サンタヤーナ氏をも、決して全體としては奉するのではない、隨つて自分が說を難駁せらるゝならば、何卒下の論說其の物に就いて叱正せられたいと言ふこと、即ちゆめ〳〵右の諸家を論難して以て舁見の水の手を切つた積りになられぬやう、其の邊あらかじめ請求いたしおく。さて、

志ばらく抽象、具象、個性、類性などいふ獨逸流の科語を殘りなく打棄てゝ、及ぶべき限り常識用の通俗な言葉にすがつて、「美」といふ感想の性質及び成立を(自分が

考ふる所によつて)一通り說き試み申さうに、先づ此の感想は、內界即ち「心」のみの產んだものにもあらねば、外界即ち「心以外」の事物に刺戟せられてのみ產れたものでもなく、所詮は、內外二種の要素から成り立つものと觀るが穩當であらうと思ふ。內外の二要素とは、(一)心外に存する要素(二)心內に存する要素——此の外の要素を客觀的要素と名け、內の要素を主觀的要素と名けても、必ずしも惡しくはなけれど、自分は、客觀、主觀の二語を、下に別樣の意味に用ふる所存であるから、態と通俗風にこゝでは內外といふ語を用ふることにした。

夫れ月や、星や、花や、雪などは、古往今來、內外を問はず、老若を論ぜず、人々の見て美しいものとする所なれども、少しく俗の見解を離れて、といふよりも、むしろあらゆる知解、聯想を解脫して、單に月、星、花、雪、其の物のみを觀るときは、月も、花も、星も、雪も格別に美とすべき特質はない、イヤ殆ど何等の美もあらう筈が無い。月、星、花、雪は吾々どもの心のうちに、何等かの感覺を誘起する原因となることは爭ふべからざる事實なれども、其の物の自體が直ちに美なるでもなければ、また其の何等かの感覺、其の物がやがて、所謂美感でもない。さすれば、所謂「美」と名づくべき影象はそも〳〵如何にして結び出ださるゝかといふに、是れは主として俗に

謂ふ分別の作用で、取りわけ、觀る者めい〳〵の心のうちに働く比較作用、分別作用、聯想作用などの然らしむる所と言ふべきだ。例へば、吾々共が月や星に對した時の最初の刹那の感覺は、美感でも無く、醜感でもない。只〻何となく「きら〳〵しい」などいふ名稱すらも附けられうやうもない。只〻その只〻何となく感じたゞけである。若し人間には只〻感覺力のみがあつて、比較力も、聯想力も、分別力も、毛頭無い筈のものであらうなら、所謂鑑賞といふ作用は起るまい。而して鑑賞といふ作用がなかつたならば、世の中に詩人も、美術家も、哲學者も、天文家も有つたものでない。皆乳のみ子同樣皆阿呆同樣、皆數ざはの權太郎兵衛同樣に、若しくは猫や犬やのやうに、たかゞ今夜もピカ〳〵するな位の感じで、月や星を一生見送つてしまうであらう。然るに分別作用、聯想作用などがあればこそ、鑑賞といふ心の作用がはじまつて、やれ月光美だの、星光美だのと、言はゞ自分で趣味をつけて、かたじけながり、をかしがり、美しがる。換言すれば、無意義の感覺に智惠、分別の作用で意味をつけて、あはれ〳〵と詠めるので、言はゞ、種々の解釋を與へるので、即ち此の解釋が因で咨嗟咏歎が起るのである、それが(少々大まか過ぎた說明ながら)彼の「美なる影象」の結びいだ

さるゝ主な因緣「美」といふ感想の結成せらるゝ主な因緣であらう。

併しながら、此の感興、此般の咨嗟咏歎は、偶然には(因緣なしには)起らぬ。徹頭徹尾、外界の事物と絶緣して全く獨立してゐる時分には、到底かゝる感興の浮ぶべき機緣が無い。即ち、何か外から吾が心を刺戟して、初手に先づ何等かの感覺を呼起して呉れいでは、何ぼ分別力や聯想力が解釋をしやうとて手ぐすね引いて待構へてゐたとても、敵手のない碁のうたれぬやうなもので如何ともしがたい。こゝに於てか、美感を結成するには内外二種の作用を要する、外より我が感覺を誘發する作用と、内に在つて件の感覺を解釋する作用、即ち外來の刺戟を只ゞ無意味のものとして感覺するばかりでなく、有意、有趣のものとして鑑賞する作用、即ち、外界の事物に存する誘發力と、個々人が心内に働く鑑賞力と、此の二者相合してそこにはじめて美感が生じ、美象が結ばるゝと解するが淺近ではあらうが穩當ではあるまいか。

月や、星や、花や、雪や、前にも言つた通り、權太郎兵衞や、乳のみ子や、犬や、猫やの目から見れば、「何の人をつけ、只ゞキラ〳〵するもの」たるに過ぎない物象、然るに其の同じ物象を、人丸や赤人が見たら如何か。白樂天や李太白が見たら如何か。シェリーやウォオヅヲォスが見たら如何か。誰れが見やうとも、感覺一邊の上からいへば、同じく是れ、ほんの只ゞキラ〳〵としたものたるに外なかるべきだが、而も尙詩人若しくは美術家などは、之れに對して咨嗟咏嘆することを禁ずる能はざるに至るは何が故であるぞ。他無し、彼等の知解力、比較力、聯想力、i. e. 鑑賞力が、權太郎兵衞や、乳のみ子や、犬や猫のやうでないからのことで、そこでそれ、彼れはとんと鑑賞せぬが、此れは落淚するほどに鑑賞するといふ程の差別を生ずる。是れ即ち自然及び美術品に對する鑑賞力は、教育及び修養の度合次第で、品質が著しく違ふといふ事實の説明である。

尤も、右にいふが如く、誘發力が果して外界に存在するや否や、換言すれば、人々の意識から離れて儼として客觀界(外界)に實在するや否やといふことは、恐らくは今日の科學及び哲學力を以てしては、未だ(些少の爭議をも容れぬほどに)確實には斷定しがたい問題であらう。月や、星や、花や、雪やが何等かの感覺を我々の心に誘ひ起すといふは、其の實我々の心のうちに、其の刺戟を迎へて、或は冷し、或は苦し、或は快しと、前度の經驗を準緣にして、おぼろげながらも意識する作用があればこそで、月星をきら〳〵しと感ずるも、雪花を色香ありと感ずるも、畢竟は度

々の經驗の結果で、いつとなくさやうに感ずることに無意識の間に自分で取定めたに外ならぬのである、故に此れ將た外來的ではなく內製的である、それゆゑ足下の二要素論は其の實一要素に歸着する、など言ふ反對論も或は起らうが、論が若し此の枝に分れては、生理上、心理上、否、純理哲學上の大難問となつて、到底雜誌上などでは決しがたくなるによつて、そこで先づ此の誘發力ほどは、假に客觀即ち外界の事物に存在するもの、例へば、月や、花や、星や、雪やがおの〳〵殊別なる誘發力を有つてゐるとする。さて假にさう定たのではあるが、尙斯程のことは立派に主張せらるべき筈であると思ふ。月や、花や、星や、雪の吾々の感覺を誘發する力がおの〳〵特別である以上は(即ち吾々の心を以て如何ともしがたきやうにおの〳〵特別である以上は)此の誘發力は心の妄に產みいだす所にあらず、i. e. たしかに外界に存するものなりと、かう言つてもよろしからうと思ふ。よしや誘發力は、本は心の所產であつたにもせよ、所謂反射作用で以て、いつしか心を左右するほどのものとなり、今では心を以てしても如何ともする能はざるやうになつたからは、心以外の實在と解してもよろしいのである。

さて、此の美の二要素の說を、繪畫、就中、歷史畫の上に適用して、自分が論旨を明かにするに先だち、一通り辨へおかねばならぬことは文藝上に謂ふ

主觀的作物と客觀的作物

と、此の二種の作物の區別、換言すれば、かゝる場合に用ふる主觀、客觀、此の二語の眞義如何といふことである。主觀といへば通例は「心內の」といふ意味、客觀といへば「外界の」といふ意味、或時は後者の「實在的」に對して、前者は「概念的」又は「理想的」若しくは後者の「非我」に對して「我」の意、また時としては「能觀」「所觀」などとも譯する。かく哲學上では用ひ處によつて意味が一樣でない言葉ながら、文學上などに用ふる時には、大概、主觀的は「自家の感銘に基く」若しくは「おのが感想を主として抒する」若しくは「私觀的」乃至は「作家一個の特殊の感想に外ならざる」などいふ意味に用ひる。さて又客觀的は之れに對して「世間一般の感想を寫せる」若しくは「無私公平的」「有りのまゝ」「自然的」などいふ意味に用ひる。而して文學上では、主觀的といふ名稱は、間〻貶詆の意味を含む。これはまた如何した仔細か。客觀的と稱する作物とても、要するに作家の感想の結果で、狹い、廣いの度合の差はあらうが、詰まる處は皆主觀の產物、「有りのまゝ」といひ、「自然のまゝ」といふ、畢竟は作家

の感想、作家が一家の人生觀、世界觀、自然觀、煎じつめて見れば、彼れも此れも似たりよつたりではあるまいか。然るに其の間にさながら超えがたげなる優劣を設けて、やれシェークスピヤは客觀的詩人だが、シェリーやバイロンは主觀的詩人だによつて數等劣るの、此の歷史畫は客觀的に出來てゐるが、そちのは主觀的だによつて賞牌はやられぬなど、刺り貶しめるは何事ぞ、など言ふ論者もある、したが、これは畢竟、主觀、客觀二語の解がまち〳〵なるがゆゑに起る疑惑で、それを嚴重に定めて置いての上ならば隨分「云々の場合は客觀的ならざるが爲に非なり」など宣告することも出來やうかと思ふ。これは此方の歷史畫論には緊要な關係ある論點ゆゑ、今少しく細說せんに、自分は、先づ此の二語を左の如く解する。

主觀的作物とは、著く作家が特色を發揮したるの作、くはしくいへば、作の上に現はれたる感想が餘りに作家獨得の特殊なる感想たるが爲に、兎角に世俗の感想（若しくは見解）と相容れざるやうの結果を生ずるが如き作物、例へば、詩歌、小說、脚本のたぐひで言へば、主として作家獨得の感想を寫し出だしたるが如き作家が一家言、作家が特殊の人生觀、自然觀、世界觀、宗敎觀などを寫しいだしたるたぐひを謂ふので、尤も其の形式は、叙事詩體であらうと、抒情詩體であらうと、劇詩體であらうと、敢て問はぬ。之れを繪畫の上に見るも同じことで、其の畫かれたる感想が、「殊」か、「通」か、廣く世間に通ずるか、單に同臭間にのみ通ずるか、といふ點が目安で、作者と同臭味の人々の間にのみもてはやさるゝやうな作物は「殊」なる感想の作物と見做して、主觀的作物と名づける。但し、自分は主觀的といふ名稱を必ずしも貶しめた意味には用ひぬ。

然らば客觀的とは如何。客觀的感想とは、作家が特殊の感想たると同時に、多數の見解（若しくは感想）をも容れて餘りある、差別兼平等の感想といふ意、言ひ換ふれば、作者や其の同臭が特に看取し得る所の人生、自然の玄妙なる趣致を描破し得たると同時に、ほゞ聰明と稱すべき世間多數の人々が、通常看取する人情、風俗の趣致即ち世間の人生觀、自然觀、世界觀、宗敎觀をも優かに包容し得て寫し出したる作物――かゝる作物をば客觀的作物とは名づくる。是れ將た必ずしも褒美の意味をば含まぬ。何となれば、作物としての價値は畢竟作家が特殊の感想の如何に高く、如何に深く、如何に强大なるかといふ點、二つには、如何にそれが活けるが如く發揮せられ、描寫せられたかといふ點にあるなれば、其の橫幅のみの廣きとが、決して其の價値を定むる第一の標準ではない。彼の廣く俗衆に悅ば

る丶新聞小說などが客觀的といふ點は十分なるにも拘らず美文學としての價値の少いは、職として此の理に因る。また此の客觀的といふことは、あらゆる藝術上の作物に向つて要求すべき資格でもない。文學の上にていへば、抒情詩は正當に主觀的であるべきで、客觀的たるを要せぬ。畫でいへば、理想畫の大概、空想畫の大概は、著く主觀的であつて却つて妙、イヤ主觀的ならざるべからざる場合が多い。人物畫、山水畫とても、主觀的にして妙なるべき場合屢丶ある。但し彼の小說や、脚本や、歷史畫名勝畫、風俗畫、花鳥畫などに至つては、客觀的といふ一資格を缺く爲に其の本領滅却し、散文の叙事詩たるべき筈の小說は、叙事詩の假面を被れる散文の叙情詩となり、散文の劇詩たるべき筈の脚本は、劇詩の假面を被れる散文の叙情詩となり、歷史畫名勝畫以下、將た同種の贋物と墮し去る例、古今に其の數夥しい。作物の壽命は抒情的作物ならざる限りは主として此の客觀性の有無と多少とによつて消長する。或は單に同臭間にのみ賞翫されて果てる叙事詩もあれば、一代的にして一國的なるもある。全世界的なるもあれば萬古不易なるもある。何故にホーマア、シェークスピヤ等の作は、今も尙叙事詩、劇詩として貴重せられ、何故にミルトン、バイロン等の作は同じく叙事詩、劇詩にあ

りながらも單に抒情詩としてのみ珍重せらるゝか、此の理を考へて貰ひたい。叙事詩、劇詩に客觀性の必要なることは、近くはショーペンハウエル、ヘーゲルをはじめ獨逸の諸家の美論にも見え、チョーサア、シェークスピヤ、ホーマアなどいふ大客觀詩人の作に對する諸名家の批判中にも見え、今日では殆ど平凡通理とも見做さるゝほどのことなれば、其の理を只〻一轉して繪畫に應用した場合の適不適は、敢て管々しく辯ずるにも及ぶまいかとも思ふが、尙念の爲に動物畫、風俗畫、乃至

歷史畫は何故に客觀的ならざるべからざるか

其の理を今一わたり說明せんに、

假に動物、名勝、風俗、史蹟等は、要するに作家が感想を發揮する爲の方便に外ならぬものと見做し、主觀的、客觀的などいふ區別は全く無要のものと定め、即ち獅子や、虎や、松島の景や、南洋の風俗や、道眞の風丰は、いづれも作家の概念を具象にする爲の方便即ち假面即ち標號に過ぎぬものと定め、(以上は高山君の論旨)さて鑑賞の實際を取調べたならば如何樣な結果を生ずるであらうか。論より證據であ

れば、先づ例を擧げて言はんに、こゝに一畫工あつて、松島の景を畫き、虎の圖を畫く、然るに其の所謂コ、ロモチ（自家の感想）に重きを置いた結果、如何にしても常人の目もて見ては、松島の景とは解しがたく、虎とは解しにくい場合あらば如何。かゝる場合にも尙能く件の畫作家の豫期したる感想は發揮し得らるゝであらうか。若しくは「菅原道眞が恩賜の御衣に感泣するの圖」を（高山君が主張せらるゝ如く）或一種の複雜なる概念を具象にせん爲の方便にとて畫く、而も其の所謂コ、ロモチ（自家が特殊なる觀察の一面）を發揮するに專らなりし結果、常人の目より見れば、其の圖は、如何にしても「道眞の圖」とは解せられざるやうのをあらば如何。譬へて言はゞ、鬼面を被つて小兒を威さうと試みた折に、小兒が聊かもおぢなんだやうなもので、大分間がぬけやうではあるまいか。蓋し「道眞の畫」なるものはまづ眞先に「道眞であるな」といふ靈活なる幻影を觀る者の心鏡に浮べさせねばならぬ道理、さなくんば作家が（高山君が）期望するやうな複雜な人事美は決して觀る者の心に誘ひ起さるゝに至らずして、只〻漠然神主の樣な老人が着物を貰つて泣いてゐる」といふことを思ひ浮べしむるに止まるであらう。作家の特殊なる見解のみによつて歷史畫を畫いてよいとするの結果は、めい〳〵思ひ

〳〵の道眞を畫くといふことになり、而して其の結果は、一々附箋して「これは誰れ〳〵」「これは何々の事蹟」と繪釋明細書を添へざれば、觀る者の見解將た思ひ〳〵なるべきが爲に、何が何やら、一切見當のつかぬ次第とならう。果してかくの如くにして可なるものならば、彼の猫に類したる虎を畫き、さてその傍に竹を畫いた畫工などは、歷とした動物畫家で、此の見解からいへば、畫を以て畫を釋したは一段の好工夫、善巧方便であつたと言はねばならぬ。

然ちば如何にせば衆人をして道眞と解せしむること（作者は成るべく多數に道眞と解せしめやうと期すべき筈）が叶ふかといふに、これやがて客觀性の必要を證明する問題で、これがまた世間の史蹟觀に一種の威權（オーソリチー）を生ずる所以で、美術上、文學上に謂ふ理想と寫實の結んで解けざる宿題も、或は此の解を擴充すれば、多少釋然たるに至るかとも思ふ程であるが、今は論旨の散漫にならんを恐れて、單に歷史畫の上のみについて申さうに、前段一通り辯じ置いた通り、凡そ「美なる影象」の結び出ださるゝに至るには是非とも內外の二要素が必要ぢやが、歷史畫の場合に於ては、所謂外に存する要素は傳說、歷史、くはしくいへば、世間の史蹟觀即ち世間に最も有力に行はるゝ過去に對する解釋より外には無い。（此の所謂史蹟觀が世と共に多少推移るべきものたるは勿論認めける。）悉く傳說

に背き又は悉く歴史を離れて、歴史に關する「美なる影象」が結成せられやう筈のないは、猶全く虎の形や松島の景を(實物でも、畫でも)見たことが無うて、虎の畫や松島の圖が作られぬやうなもの、作つたとて其の物とは見えぬやうなものである。果して然らば、歴史畫とても、其の内に存する要素即ち鑑賞の性質に於てはあらゆる他の人事畫、イヤあらゆる繪畫に異なることなけれど、其の外に存する要素即ち誘發物の性質に至つては嚴として特別なる所があつて、他と混ずべからざるものたるを見る。言ふまでもなく、歴史及び傳説が誘ひ起す所の感覺を分別し、解釋し、鑑賞するは、作家が特殊なる心の作用たること勿論なれども、さりとて件の心の作用は多少の羈絆、多少の束縛を被らざるを得ざる心の作用である、即ち世間に行はるゝ最も有力なる史蹟觀と相矛盾せざる解釋に立脚して、さて美象を結ばざれば、其の畫は單に史の衣を被つたる人事畫と解せらるゝとも、正眞の歴史畫とはならず、隨つて作家が期望せる感興をば生じがたいであらう。こゝに於てか

作家の側より見たる歴史畫

は、鑑賞的に過去の事蹟、人物を看取するよりして心に結びいださるゝ影象を、更に精しくいへば、歴史及び傳説が作家の心に誘ひ發す所の感覺を分別し、解釋し、鑑賞するよりして結び出ださるゝ人事美を)丹青の力によつて再現する一種特別なる人事畫である」と言ふべく、而して

批判家の側より見たる歴史畫

は、前段反覆して説明したる通り、叶ふべくんば、成るだけ多數の觀者の心に歴史上の聯想を誘ひ發す力の具はつてゐることを要する。道眞の畫にていへば、大概の人(勿論聰明なる人)の見るとやがて「道眞の圖だな」といふ靈活な感銘を得んことを要する。さなくんば之れを寛平の忠臣と鑑賞するに至るに由なく、隨つて作家が期待したる幻影も、感興も起る能はざる次第であらう。即ち其の畫に存する誘發力の多少と強弱と廣狹とは取りも直さず、其の畫が歴史畫といふ効用を具ふるか將た然らざるかの分れ目であるが、所謂主觀的の歴史畫には、前に説明し置いた道理によつて、此の誘發力が甚だ乏しく、イヤ時としては皆無であるべき理合ぢやによつて、そこで歴史畫は是非客觀的、即ち多少傳説や世間の史

蹟觀に羈絆せられねばならぬと言つたのである。さてこゝが即ち歴史畫の本領で、特質で、自由藝術としては稍〻不具(かたは)ではないかと疑はるゝ點で、而もまた其の長所の宿る所である。蓋し

人事畫としての歴史畫の得失

は、或意味からいへば、ほゞ相當るとも見做さるべき恐れがある、一面から見れば、歴史畫は准羈絆美術だと評せられてもせうことが無い仔細がある。外でもない、傳說や世間の史蹟觀に多少服從せんければならぬといふ一條。是れは慥かに若干の不自由に相違ないが、其の代りには他の普通の人事畫類の企て及ばざる所の一大便宜を具へてゐる。それは彼の、高山君も說明せられ、自分もまた前年歴史劇のことを論じた折に說き述べて置いた一種の特質即ち時間上の內容を與へて、複雜な因緣果報を聯念せしむるといふ特質——此の特質、此の大便宜のあればこそ彼の若干の羈絆、不自由も生ずるのである。而も後の小不自由は前の大便宜の爲に償はれ得て餘ありと自分は思ふ。

かゝる次第であるによつて、世間の史蹟觀を重んずると言つても、それは畢竟史的感興を幅廣く且つ命長く誘發するの力を當の畫に有せしめん爲の必要上から生じたことで、當の

事件、人物の實在と不實在は毛頭も問ふ所にあらず

此の理は既に最初の論文中に明かにして置いた心得だが、今また更めて辨へ置く。高山君は彼の菅公の畫の例に關して、

> 菅公の事蹟の美なるは、菅原道眞といふ人物、寬平、昌泰といふ時世、もしくは京都、太宰府といふが如き土地の實在せるが爲に美なるか、若し茲に抹殺博士の如き歴史家あり、菅公に關するすべての事柄は後世の造り話にて、歴史上全く痕跡無き事を確證せむには、菅公に關して美なりとせられたる事蹟は、是れと同時に其の美的價値を失ふべき乎

と反問せられたが、とつてもないこと！ 自分は聊かも實在、不實在などいふことをば眼中には置かぬ。むしろ時としては事實(歴史家が事實として主張することと)に背いても、歴史畫たるの本領よりいへば、傳說に從つたはうが正當であると

思ふ。兒島高德が櫻樹を白して詩を題したことは全くの作り話であらうが、櫻井の訣別や如意輪堂の辭世が根無しごとであらうが、從來の傳說史蹟觀が故もと如く誘發力を失はざる以上は、それに順ふを、歷史畫の本領よりいへば、正當とする。事實には背かうとも、其の人、其の時代とを鑑賞せざるを得ざるやうな幻影を誘發する力だにあらば、それを稱して歷史畫と呼ぶ。謂はゞ事實よりも傳說の方を重んずるのである。こゝが彼の眞を描くことを目的とする歷史畫派と截然として相分かるゝ要點であると了せられたい。かるがゆゑにまた、此の客觀的といふ特質より觀て、歷史畫と小說との間に別あるを認めぬ。自分は

小說に基く畫もまた客觀的ならざるべからず

と定むる。例へば、爰に一畫工あつて、馬琴の『八犬傳』を種に一種の人事畫を畫くとせんに、八犬士と名宣らず、伏姬と名づけずば兎も角も、假にも其の名を負うて、i. e. 其の名に緣つて時間上の內容を作り、複雜なる聯想を誘起せんと企圖しながら、尙且つ作者(曲亭)の主觀に同化することを力めず、單に名のみを假りて自分が杜撰の感想に基ける八犬士若しくは伏姬を畫かんか、例へば虎と名を負ふ怪獸の畫を見たる時と一般、生中に虎と名づけられたるだけに猫と見る自由をも失ひ、さりとて虎と見做さんを我が觀美意識の許さゞる所、さらば理想畫、標號畫と見做さんか、是れ將た竹を畫き添へたる爲に心咎め、憮然自失、感興轉〻索然たるを覺ゆるであらうと思ふ。蓋し『八犬傳』の人物を畫かんと欲せば、先づ主として馬琴の意匠の在る所、其の理想の宿る所を洞察し、そを發揮再現せんことを力むべきである。戊年の『讀賣』附錄の如きは、此の意味より見て、失敗であつた。

第四　總收

之れを要するに、多數の人は(聰明者流をも含めて)當の畫を歷史畫(例へば、菅公の像とは見做さゞれども、作家は私かに菅公といふ幻影を生ぜしめんと期待して畫き、且つ其の被服、身のまはり、幷びに其の周邊の景物は、明かに寬平、昌泰の趣なれば、說明無しにては、否、多少の說明を加へてだに、大概の觀者は首肯せずと雖も、尙且つ此の畫をば歷史畫と見做すべきであるぞ、と言ひ張るは、而して以上は高山君の主張せらるゝ所、譬へば、數竿の竹が畫き添へてあつてだに、虎とは思はれぬ虎の畫に對して、sublime の感興を起せよと迫り、且つその畫を虎の畫と見做す

べしと強ふるに等しき牽強ではあるまいか。成程、さる惡畫に對しても、女子供は說明次第、附箋次第で、虎とも、猫とも思ふべく、菅公とも、楠公とも思ふべきなれども、眞の美感は果してかくの如くして支撐し得らるべきものであらうか。虎といふ感銘を誘發する力は具へざれども、此の畫は竹あるゆゑに虎なりといふと、其の時代とも、其の人とも見えねども、被服、調度、周邊の景物が其の時代らしく、將た其の人らしきゆゑに道眞ぢやといふと、何の邊にか差別があるぞ。前者が女子供の見解、大俗の見解ならば、更にそれを一轉して、後者即ち

高山君の見解も大俗の見解に遠からぬ見解

といふ甚だ奇怪な疑團が浮ぶ。さて論理の結果かやうには成つたものゝ、かゝる結論が事實となるべき理は無かるべきだ、而も尙自分の分別を以てしては、先入主となつた僻見の所爲でもあらうが、未だ此の疑團を碎くをが出來ぬ。願はくは前の六箇條（甲、乙、丙、丁、戊、己）と共に、此等の幾條の質疑に對しての明白なる解答が聽きたいものだ。

さて彌〻此の論を結ぶに先だち、高山君の見解に對して今一言謂ひ添へたいと思ふ批判は

高山君の見解は作家の見解

即ち主として作家の都合上、便宜上より立案せられたかと思はるゝ影があるが、願はくは今少しく賞翫者、批判家、及び普通一般の觀者の心になつて、所謂主觀的作物が果して能く歷史的感興を誘起し得べきか、どうかといふことを、虛心して考へて下されたいといふこと、二つには自分は論を進むるの都度、成るべく證例を擧ぐるやうにと力めた心得なれど、同君は、兎角、抽象的に辯論せられて、寧ろ證例を客まれた氣味ぢやが、

論より證據

局外者にも分り易いは證例によつての說明なれば、希はくは古今の名作畫より二三、小說、脚本より三四の例を取り出だされて、此れは正眞、此れは似而非と明白に指示說明せられたい。例へば、彼の第六、第七回の共進會に於ける美術院派の歷史畫は如何。彼の繪畫中に同君の理想に適つたものはあつたか、なかつたか。

よしや十分には適はぬまでも、幾分か適つたのがあつたか。如何なる點までが不合格で、如何なる點までが合格であつたか。これは自分の爲ばかりではない、世には味者もあるによつて、所謂實物的教示が願はしい。

但しはまた、最初ほのかに疑つた如く、史の衣だに被たる以上は、其の內容には係らず、總じて歷史畫と見做さるゝのであるか。かりそめにも歷史の假面を被れるは、其の假面の出來のわるきと出來よきと、薄ぺらなると千枚張なると、剝げたると剝げざると、鍍金も、アルミも、本塗も、膠ひも一つちに、只〻見た所が似つこらしくばそれが即ち歷史的ぢやと言はるゝか。鬚むしや面に女帶、振袖を被たる俄師は、毛頭女とは見えざれども被服が女の物であれば、見物一同に當惑ながらも、女であると言はねば成らぬか。若し果してさうならば見物人こそ迷惑なれ、役者や畫工は圖無い仕合せで、女形ほど演易い藝は無く、歷史畫ほど畫き易い畫は無い道理となる！

終に臨んで、

自分が意見の綱領

を總括すれば、ほゞ左の如くである。

（一）歷史畫とは（其の派の何たるを問はず）觀者をして歷史上の聯想を起さしむるを、兎も角も、其の當面の目的となすものなり。

（二）尠くとも此の當面の目的にして遂げられざれば、所謂方便說（高山君の說）すらも成立たず。

（三）然るに、歷史、傳說は作家獨創の「空想」にあらずして、「常識」即ち世間通有の「實想」（實在の事物に對する觀念又は概念といふ程の義）なり、猶虎、猿などいふ思想が、作家の「空想」にあらずして、「常識」即ち世間の「實想」なるが如し（實在か不實在かは要點にあらざる故に事實と言はずして實想といふ）。

（四）此の世間通有の「實想」即ち「常識」を、作家が「空想」を以てして、醇化するは自由なり、但し之れと矛盾する能はず。

世人の虎の畫を見るや、必ず先づ虎に關する常識即ち「實想」と比照す、畫に現れたる「想」にして常識（實想）以上 i. e. plus gonnet something なるは可也、其の以外、又は以下なるときは、虎といふ感興を呼ばざるべし。

方便派の畫工は虎を畫くに當りて、或は虎に對する常識をば其の空想の誘發物とはせざるべし、而もそは作家の側より見たる歷史畫製作の手續のみ。賞翫家、批判再び歷史畫を論ず

家、及び普通の世間人が虎の畫を觀るに當りては、多少虎に對する常識(實想)を標準として判斷し、解釋し、鑑賞すべきや勿論也。

(五) 故に曰はく、總じて常識的解釋又は判斷を容るゝ性質の藝術、即ち事實、實物を名に負へる藝術(歷史畫、歷史劇、動物畫、名勝畫、小說畫等)は、客觀的なるを上乘とす、i. e. 世間通有の「實想」即ち「常識」を包容して餘りあらんを要す。

(六) 歷史畫にして當の史蹟に關する世間の「常識」を包容して餘りあらんか、當の畫が誘起する歷史上の聯想は、豐かなるべく、幅廣かるべく、壽がるべし。

(七) されど、之れをほしいまゝにせんとすれば、世間の史に關する「常識」(世間に信受せられたる史蹟觀)に多少羈絆せらるゝことをまぬかるゝ能はず、故に歷史的と稱する諸藝術は、一面より見れば准羈絆藝術也。

(八) さもあれ、此の羈絆は空間藝術に時間上の內容を與ふる爲に納むる稅たるに外ならず。複雜なる聯念を誘起するの便宜に對する租稅也。

(九) 作家が歷史に依從するは、一面は役せらるゝが如くにして、一面は役する也、即ち己が作物の誘起力をして歷史、傳說の一とならしめて、全國民の信受、鑑賞を博せんが爲也。

(十) 而して此の目的を遂げんとすれば、其の製作の初めに於て、殆ど歷史中の人物と同化する程に深く、切に、歷史、傳說中の事蹟人物を鑑賞するを要す。

(十一) 之れを要するに、歷史畫家は歷史、傳說中より感得したる具象美を丹青の力によりて再現することをば其の第一の目的となすべき也(高山君の謂はるゝ如く、概念を具象にする爲に歷史的彩色を施すにはあらず)。

(十二) 故に曰はく、歷史畫は歷史美を畫くことを以て其の目的となすものなりと。

(明治三十三年一月十六日稿)

第五　追加

以上の卑見は、前號掲載の分(以上の論文の前半を指す)と共に、一度に掲げ盡さるべき筈で、去一月中旬『太陽』雜誌に寄送したところ、編輯上の間違とかにてちようど眞中ごろより切斷せられ、一氣呵成が一息ついた次第であつたが、それが言はゞ仕合となつて、こゝに卑見の追加をするの便宜を得たゆゑ、前號掲載の高山君が美學意見「抽象美の價値に就いて」といふ論文に就いて、更に三四箇條の質疑を提出して置かうと思ふ。

件の論文中に於いて、同君は

(一) 具象といふことゝ寫實といふことゝを殆ど同義の如く、また非寫實と抽象と殆ど同義の如く論ぜられたるが、そは果して當然の說なりや否や。

(二) また抽象美をば類想美にあらずと斷定せられたるが、抽象美は果して類想美と同一ならざるを得べしや、否や。よしや二者の本質は同一ならざるまでも、鑑賞上の實際は、二者をして同樣ならしむるに至らざるを得べしや、否や。蓋し、類想美の類想美たる所以は、(尠くとも其の類想美たる特質の一箇條は)其の個想美の如く內質の上に於て千變萬化する能はずして、單に外形の上にのみ千變萬化する所にあらざるか。例へば豐國、北齋などの美人畫は類想畫なり、類想に據りて美婦を畫く故に、百美婦を畫くも其の內質上に現じ得る所は、所詮、唯一型のみ。千變萬化するは其の外形のみ。所謂抽象美(尠くとも雪舟一流の作に見えたる抽象美は將た同例に墮せざることを得べしや、否や。佛畫佛像に現れたる抽象美將た同例ならざるを得るや。(若し然らざるを得ば、そはやがて其の美が抽象的ならずして具象的なるが爲にはあらぬか。(具象と寫實とは同義にあらずと信ず)。

(三) さてまた抽象美と具象美とをば美としての價値同等也と斷定し、具象美を尙ぶと抽象美を尙ぶとは吾人が美意識の兩面也。即ち先天の渴仰也。と言はれたるが、果して然りや、否や。吾人が右二種の美を喜ぶことを事實なりとするも、果して同等に喜ぶや否やは隨分研究を要する問題なるべく、隨つて輕々しく二者の價値を同等なりと見做すことは論理上嚴正なる判斷と見做すべきものなりや、否や。ハルトマン氏が美の階級論は、高山君が拂拭的辯難(スポーヒング)だけにては、流石に未だ崩れ果てたりとも見做しがたしと思ふが、如何。

若し假に、單に抽象美を喜ぶ心ありといふのみの事實によりて、抽象美の價値を具象美(高山君の所謂具象美の義疑はしけれど假に個性を表現せる美といふ義に解して)と同等と見做すことを得べきものと假定せんか、さすれば同じ論理によりて、類想美(抽象美と假に分ちて)をも羈絆美術品の美をも具象美と同價値と見做すことも叶ふべきにあらずや、若し果して然らば、以上四種の美を攝收して「抽象美と具象美と類想美と羈絆美とを尙ぶは吾人が美意識の四面の渴仰也」とも言ひ得べきにあらずや。否、更に此の理を擴充して十面、二十面の渴仰を主張するも難きにあら

じ。

假に以上の諸論點は、總て高山君が言はるゝが道理にして、自分の疑惑は悉く不條理なりとするも、尙件の抽象美の論は歷史畫論には何等の關係も無い。何となれば、具象といふことが寫實と同義ならば知らず、さなくば歷史畫は（兎も角も）具象的ならざるべからざると、本論に細論した通りの理合で、抽象美と具象美との優劣は之れに何の影響をも與へぬからである。雪舟が山水の筆法に成れる歷史畫は一種の理想畫（歷史の衣）としては見るを得べきも、到底歷史畫としては見るべからざること、本論既に詳かに辯じ置いたる通りであるからである。かくいふは甚だ不本意ながら、高山君が態度は、啻に鑑賞上のみならずして、其の理論上のまでが頗る疑はしく成つて來たと言はねばならぬ。（同年二月十七日）

新聞小說鑑裁の標準

凡そ小說取りわけて新聞小說の直段附を定めんとせば、尠くとも左の條々を參照するの必要あることを忘るべからず。

第一、其の文章は一通り語法（グラムマアレトリック）修辭法に叶へりや否や。換言すれば、兎も角も美文たるの資格を有せりや否や。

古來東西ともに破格の名文といふべきものも間〻あれども、そは畢竟嚴格なる穿鑿上よりの沙汰にて、兎も角も一通り語法（グラムマアレトリック）修辭法に叶はざる文章にして名文などゝもてはやされたるは古今に無し。普通のてには、すら覺束なく、衍字、訛語、杜撰、不熟語百出し、勝手次第の前後矛盾の假名遣、語法、よろづ手前勘づくめの、殆ど當座の意味をすら達し得ざるやうの不束の文章は、到底美文として見るべからざるゆゑに、よしや其の意匠、脚色、觀念等に幾分か取りえありとも、讀むべからず、解すべからずといふ廉（かど）を以て落第とす。猶彼の不熟の果實の、其の色如何に美なるも食卓に上すべからざるがごとし。

第二、其の意匠は、兎も角も人の意を牽くに足れりや否や。兎も角も首尾整ひて完成せられたる一作品たるの資格を有せりや否や。

かくいふは彼の所謂美學者輩の立てたる物々しき理窟の標準乃至獨斷的原則に叶へりや否やといふ意にはあらず。普通美學者の標準に照らせば、古今の傑作といふとも、或は落第をえまぬがれぬことあるべし、況んや普通の作物をや。

こゝに問ふは、さるむね〳〵しき際には非ず。半出來又はかたは又は「平々凡々の徒事を主意もなく結構もなく、只〻だら〳〵と綴りたる」のみにては、流石に賣物とはなるまじきためしゆゑ、多少の意匠ありや、せめても首尾纏まりてありやといふ問の意なり。所謂尻切蜻蛉の作又は辻褄の合はぬ無駄話の如きもの、獨合點の自慢話乃至愚痴話などは、他人が讀みて聊かも面白からぬものなり、ゆゑに廣く讀まるゝ作(即ち賣物即ち新聞小說)たるに叶はんと欲せば、是非とも多少の脚色、尠くとも讀者を牽きて讀了らしむる程の意匠は無かるべからず。而して此の目的に副はんとすれば尠くとも左の二箇條を具備するを要す。

(甲) 初、中、後の結構ありて、兎も角も其の一部中にて纏まりのつくやう綴られたること、後譚を綴り添ふることを要し若しくは讀者をして豫想し期待せしむるやうの失無きこと。換言すれば、其の作だけにて完結せられたること。

(乙) 何等か捉へたる所あること。之れを凡そ八種となす、左の如し。

(一) 篇中或奇異なる事蹟(インシデント)の多少讀者を悅ばすに足るものあるか、否か。例へば、せめても探偵小說、冒險小說として讀まるゝ價値ありや、否や

(二) 讀了の後何等か斬新なる若しくは不易なる訓誡を讀者の心に與ふるの力ありや、否や。即ちせめても教訓小說として見らるゝの價値ありや、否や。

(三) 或社會經營上又は政治上の主義、主張等の寓せられたるか、否か。例へば政治小說、狹義に謂ふ宗教小說、社會主義小說など稱せらるべき資を有せりや、否や。

(四) 前人未發の或寄異なる自然界の事實が發明若しくは暗示せられたる點などに特質ありや。例へば、科學小說若しくは哲理小說など稱せらるべき特質ありや。

(五) 該作家が特得の或觀念若しくは理想が、前の二、三とは異なる意味に於て寓せられたるか。例へば、特に觀念小說、理想小說など稱謂せらるべき特質ありや。

(六) 專ら光明面に就きて樂觀的又は滑稽的に人生を觀じたる所などに特質あるか。

(七) 主として暗黑面に就きて哀觀的又は諷刺的又は嘲謔的に人生を觀

じたる所に特質あるか。

八）さなくば、せめても或特色ある且つ兎も角も多數者の同感を呼ぶに足るべき事件又は人物を捉へ得たるか、否か。

以上八種のうちいづれか一を具へ得たるは名づけて tale worth telling と謂ふ。

さて右の（一）（二）二箇條を兼ね備へたる作あらば、よしや文章は巧妙ならずとも、記叙法は宜しきを得ずとも、先づ兎も角も及第せしむべし、百點を最上點と假定せば、かゝらんは六十點程を與へて可ならん。かくはいへど、よし意匠は一通り整ひて人をして讀了らしむるに足るも、讀了りて氣のぬけたるブランデー又は香の消えたるコヒーを飲みたらんが如くならば、かりそめにも美術品とは見做しがたかるべし。（いかに新聞小說なればとて幾らか文學的即ち美術的ならざるべからざる理なり）。

こゝに於てや、第一と第二との外に第三、讀者を感動せしむる力ありや。

といふ一條件、鑑裁上の主要なる標準の一とならざるべからざるなり。然るに

感動力の有無は主として記叙法の巧拙に由る、故に感動力問題は要するに記叙法問題なり。

夫れ材料は佳良にして眞に山海の珍たりとも割烹調理拙くして其の味ひ薄かちんか、到底珍客には薦むべくもあらず。其の筋立か、其の訓誡か、其の主張か、其の發明か、其の觀念か、其の理想か、其の諷諧か、其の哀觀か、其の想像力か、其の觀察法かに何等の一癖あるにもせよ、之れを發表し、記述し、叙說し、狀寫する筆の力にしてほゞ之れに副ふに足るものならずんば、到底廣く悅び讀まれんこと難し。

こゝに於てや其の

記叙法の巧拙如何

即ち話鹽梅如何、話上手か話下手かといふことが肝要なる問題となり來る也。くはしくいへば、其の地の文は繁簡精粗果して宜しきを得たりや、否や。其の對問は死活緩急ほゞ其の法に叶ひたりや、否や。寫景狀物の伎倆は如何。省筆法、側寫法などを利用し得る筆才ありや、否や。冗雜なる記事、叙事、何の趣味も無き閑問答、無要なる岐談、本筋を忘れしむる虞れある挿話などの爲に、小說としての體裁を失へるやうのことはあらずや。或は理を談ずるの弊に流れ、若しくは學

を衒ひ知識を誇示するやうの失に陷りてはあらずや。よしや景物、風采等の客観的描寫にはやゝ習熟せる趣ありとも、小説として最も肝要なる主観的描寫の筆力、即ち品性の隱微、人情の精細を活寫生描するの筆致に於て拙劣見るに足らざること文化文政度以下などいふ失はなしや。或は以上の諸點に於て甚しく缺けたる處はなきも、總體に生硬若しくは粗茅、幼稚若しくは淺膚、纖弱若しくは野俗などいふ病はなきか。餘りに巧を弄して文章あくどく、いやらしく、甘たるきか、然らざれば餘りに簡ならんことを欲して舌たらずの物言ひの如く、意義往々にして含に過ぎて殆ど謎言葉のやうなる一種のイヤミに墮してはあらぬか。或は強ひて古雅ならんを欲して廢語の濫用に流れてはあらぬか。或は斬新ならんを欲して比喩も用語もすべて杜撰の新鑄をほしいまゝにし、若しくは卑俗語の濫用にながれてはあらぬか。或は乾燥無味の科學的記叙に墮せんとしたる失はなきか。よしや言ひまはしはほゞ佳なりとするも耳に打聞きたる調はいかに。作家が音樂的能力は如何、是等皆等閑視すべからざる要點にて、此等の美所を悉く具へざるは未だ以て記叙の圓滿なる作となすべからず。隨うて此の標準に照らして批難せらるゝ點の多き作は（よしや新聞小説なりとも）七十點

以下に据ゑおくべきものなり。ましてや眞に嚴密に批判する場合に於ては此の標準に甚しく相背く作物は正則的には落第也、畫に喩ふれば下畫同然のもの、其の道の人は下畫たりとも名人の意匠に成りたらんは珍重すべし、されど美術品として廣く世にもてはやさすべしと主張せんはいかゞあるべき。況んや凡作の下畫的なるをや。要するに第一と第二との標準はあらゆる小説の及落、かひを示し、第三の標準は其の兎も角も世に出で得べきものたるを示す。併しながら同じく世に出づるにも、新聞小説として毎日きれ〳〵に掲げられて世に出づると、一冊子に纏められて一氣一度に讀み續けらるゝ運命を有して世にいづるとは其の鹽梅同一なる能はず、こゝに於てや一月以上連載すべき新聞小説として作物を鑑裁せんとするときには、必ず先づ此の區別に留心してさて後に裁決を下さんを最も大切なることとなり、然るに鑑裁者の用心こゝにあらずして、一に美學的標準などに拘泥して新聞の懸賞小説などを批判せば、かゝる用心ありて作せし作者其の人に對しては氣の毒、其の作によりて紙面を飾らんと企圖せし新聞社に取りては寧ろ迷惑の結果を生ずべきなり。

故に第四の條件として

第四、新聞小說として適否如何。

といふ一標準を掲げ來ること必要なるべし。さて如何なるが新聞小說として適當なるか、是れまた一の複雜なる問題にて到底簡畧には說きがたけれど、其の斷離(ちぎれ)〳〵に讀まるゝが爲に其の回〳〵に當り塲(山)あらんことを要し、長びくが爲の故に事件の波瀾を要し、あとを引かしむる爲に plot interest (脚色の面白味)を專とせざるを得ざるなどの諸點は稍〻新聞小說を讀みなれたらん何人の心にも浮ぶ所の條件なるべし。予は信ず、其の條件は何にもせよ、新聞小說たるの資格なきは懸賞の目的に副はざるべければ、他の點やゝすぐれたるも、到底八十點以上を與ふべからず、然るに其の反對に此の第三の條件に叶ひたるは、よし他に幾らかの失ありとも此の點に於て及第せるを廉に或は八十點以上、時としては次に述ぶる第四、第五の條件に照して甚しく不合格なる所あるも九十點程を與へて不可なるなしと。

之れを要するに、以上四條件は苟も小說の列に入れられんと欲する作の是非とも具備せざるべからざるたぐひの資格とも稱すべく、言はゞ「必需條件」なり。件の條件さへあればそれにて可なりといふ次第にもあらねど、兎に角一時にもてはやされ、あはよくば永く俗受を博するに足りぬべしといふのみ。

此の「必要條件」に對して「榮耀條件」とも綽號(あだな)すべき二箇條の約束あり、此の二箇條に及第したるは兎も角も銀牌以上、九十點以上、多少壽命の永かるべき作なり。

所謂二箇條とは

第五、其の作意自然の致を得たりや、否や。換言すれば、脚色、事件、人物の性格等の一々の上に、不自然、不論理等の失無しや、否や。

第六、著者が人生觀は穩當健全なりや、否や。人生の縮圖として誤謬を弘傳するの虞なしや、否や。

右のうち第五條は頗る複雜なる內容を有す、故に左に之れが細論をなすべし、すなはち。

其の作意自然の致を得たりや、否や。換言すれば、脚色、事件、人物の性格等の一々の上に、不自然、不論理等の失無しや、否や。

といふ一約束中の「不自然」といふ一語には是非二樣の解を容れざるべからず。其の一は尋常普通の意味に謂ふ「自然」なり、即ち常識が見て「尤らし」「實際らし」「有るらし」の意、即ち俗に謂ふ寫生寫實の義なり。第二は沒矛盾的「沒衝突的」「調和的」「渾

然無縫的」などの義なり。而して第二の解に據れる「自然」は第一の解に據れる「自然」と方圓相容れざること屢〻あり。蓋し前者は俗見の「自然」にして後者は美術上の「自然」なり。純粹なる美術上の見解は總じて美術品を俗世界より引離して其の物だけにて別天地を做せるものとして鑑賞する習ひなり、かゝる場合には、其の作にあらはれたる意匠が如何ばかり奇怪なりとも、荒唐なりとも、其の作たるの別乾坤内に於て調和を有し、敢て觀者、讀者をして矛盾を感ぜしめ、感興を殺がしむる等の弊なく、兎も角も一種の幻興を覺えしむるだけの魔力だにあるならば、そを褒めて「自然の致」を得たりといふなり。すなはち此の際に謂ふ「自然」は「寫實」「寫生」などの義とは大に違へり、殆ど相反すとも謂ふを得べし。

之れを要するに、總じて美術的作品は必ずしも寫生的なるを要とせざる也、「自然的なれ」と謂ふ要求は必須なれども、そは「寫實的なれ」の義と同じからず。之れを小説に適用して言はんに荒唐なる怪談必ずしも非ならず、神秘不可思議の物語必ずしも不可ならず。ロマンチシズムの復興もよし、怪譚の蘇生も面白かるべし。只〻缺くべからざるは「調和的」の義にて謂ふ「自然」の趣致なり、其の作の首尾をして初中後をして渾然調和せしむるやうに綴られざるべからず。其の前提の怪又は不可思議を是認すれば、其の餘は論理的(ロジカル)にして尤らしく、有るらしく、當然らしく感ぜらるゝやう綴られざるべからず。此の理につきては今より七年ほど前『早稲田文學』にて劇を論ぜし折細論せしことあり、新しからぬ説なれど今尚此の理をだに辨へぬ鑑賞家ありげなれば、聊か長けれど其の一節だけを左に引抄す、一讀して「自然」といふ語の第二義を會得せられよ。

夫れ人生は一場の大夢に似たり、皮相の變幻よりいへば夢と現と擇ぶ所なし。誰れか現(うつ)には理脈あれど、夢には條理なしといふものぞ。科學よく因果の理を講ずれども、未だ大元を究むる能はず、宗教よく大元を信ぜしむれども、因と果とを繋ぐを難(かたん)ず、人生は一大夢幻に似たり、現(うつ)と夢と、豈辨別し易からんや。夢幻は人生の實相か、然らば我が夢幻劇は、此の大夢幻の縮圖にあらずや、夢幻劇の妄誕豈必ずしも斥くべけんや。

然かしながら、夢と現(うつ)とが相似たるは、只〻其の皮相の狀態のみ、思ふに、夢裡の言動は、悉く荒唐無稽にして、些少の因果をだに現ぜざれば(現(うつ))との關係を斷離すれば)到底釋するを能はざれど、現(うつ)の諸顯象は必ずしも然らず、まことに其の大元こそ知りがたけれ、其の前後の關係、其の相待の因緣果報は之れを究むること難からざるなり。夢は矛盾の塊(かたまり)なれども、現(うつ)は條理の紛錯(もつれ)なり。夢は碎かば悉く散裂すべし、現(うつ)は解(ほぐ)さば理

緒を現じ、黯くとも吾人をして理脈の存すべきを感ぜしむべし。夢は深夜の如く暗黒にして、前後悉く混沌たり、かるが故に狀說しがたし、現は猶黎明のごとし、東方微かに光明あり、黒白必ずしも辨じ難からず、畢竟、夢には理脈ありとも、之れを繹ぬるに由なけれど、現に貫通せる一種の規律は模糊隱約の間に、髣髴として認め得べし。人生は實に夢幻に似たれど、人生はやがて夢幻にあらず。吾人が現に見る矛盾と無常とはいまだ解かれざるの隱語なれども、夢中に見る矛盾と無常とは到底解くべからざるの謎語なり。夢現相同じとすべけんや。

然らば我が所謂夢幻劇は、條理の紛錯せる現に似たるか、はた矛盾の塊たる夢に似たるか。夢幻劇は、幻燈畫の連續なり、夢の肖相なり。此の純然たる夢の縮圖、之れを美文と稱すべきか。ひとへに夢の肖相を悅ぶもの、之れを鑑賞家と稱すべきか。夫れ術の美は夢幻に似たれど、夢幻はやがて術の美にあらず、夢幻を夢幻として悅ぶものは、狂人にあらざれば愚人にあらずや。

按ずるに、世人の夢幻劇を美とするは、夢幻其のものを悅ぶが爲にあらで、夢幻の間に横はれる理外の理を悅ぶが爲ならん、語を換へていへば、其の全體の結構の支離滅裂なるにも係らず、又其の事件、人物の荒唐奇怪なるにも係らず、一齣一齣として含味すれば、背理の裏に至醇潛み、不自然の底に至理籠り、深く人情の骨髓を穿ち人を感動するものあればならん。之れを要するに、夢幻劇の美は其の神にありて、其の貌にあらず、其の部分の神にありて、其の全分の神にあらず、即ち夢幻劇の美は其の齣々の至醇に在りて、其の夢幻的結構にあらず。所詮夢幻は其の外形たるに外ならず、其の美もこゝにあらず、其の醜もまたこゝに存せず。されば其の夢幻の貌を愛して夢幻劇の結構を保存すべしといふも、其の夢幻の貌を惡みてすべて夢幻劇を廢すべしといふも、共に正鵠を誤れるもの、共に外形を是非する者なり。夢幻劇の利弊は精神にあり、其の弊は全分に神なき也、其の利は一分に神ある也。神を忘れて貌を是非す、二者共に誤れりといふべし。何となれば、夢幻劇の貌に何の非かある、ひとり外形の上よりいへば、夢現擇ぶ所無し。夢幻劇の貌に何の美かある、夢幻は夢幻のみ、混沌のみ。ひとしく夢幻劇と稱すれども、舊淨瑠璃の傑作と、後の摸倣的夢幻劇とは、日を同じうして談じがたきものあり。彼れは夢幻劇の醇粹なるもの、此れは其の醇ならざるものなり。古淨瑠璃は終始夢なり、悉皆夢なり、徹頭徹尾夢幻の世界なり。彼れははじめより狂言綺語の別天地を假設す、事物尋常と異なり。見よ其の人物を。其の顏色、其の態度、其の言動、其の服裝、何ぞ其れ亦か甚しく常の物に似ざる。見よ其の事變を。其の時間の緊縮、其の場處の變換、其の出來事の凝集、其の異類の應接、何ぞ其れ亦か甚しく常の物に異なる。所謂一の口の現象は、まづ豫め觀者をして異常の別天地を覺悟せしむ、うれ唯々覺悟して場に臨む、故に其の甚しき荒唐無稽も、また其の甚しき支離滅裂も、大に背感を呼ぶに及ばず、否、其の甚しき妄誕誇張を、看る者醜しとなさゞる

のみか、興醒なる刹那に至れば、そゞろに同感して喜び悲しむ。かくの如きの結構法を名けて先づ derationalize して而して後に rationalize するの法といふ、即ち先づ理外の物、とない、しよりて以て合理らしく感ぜしむるの法なり。譬へば、シェークスピヤの作『テムペスト』の劇を見よ。開場目に觸るゝは人間を離れたる絶海の孤島なり、折しも雷轟き電ひらめき、烈風怒號し激浪さかまく、此のすさまじき孤島の岸頭に、忽然として現るゝものは、仙骨清く痩せ、長髪ゆたかに肩に垂れたる一道士、容顏花の如き一少女、嗚呼、これ神か、人か、觀る者まづ彼等の人間の物にあらざらんを疑ふ。此の神怪不可思議のカリバン、彼の覆りて覆らざる船、彼の聞こえて見えざる樂人、其の他、百般の怪異續き起る、悉く不自然、悉く背理、宛然たる夢中の觀なれども、一たび序幕の不自然を容るゝ時は、理脈おのづから其處に成りて、看る者不自然を感ずることなからん、事と人と境遇と諧然として調和すれば也。若しくは『マクベス』に於ける妖婆の怪異『ハムレット』に於ける亡靈の出現、いづれか此の調和を利用せざる。若しくはゲエテの大夢幻劇、其の傳說既に荒唐、其の人物既に異常、而してゲエテのそを畫くや、更に人をして大異常の人たらしめ、更に事をして大異常の事たらしむ。吾人はファウストが獨白を聽くうちに、早く既に超自然の感あり、鬱くとも凡俗を離れたるの感あり、されば、彼の地精あらはれ、メフィストフィリーズのあらはるゝや、吾人はほゞかゝる事あらんを豫期し

たり。

吾人はなかば夢幻界に入れり、此の世の尋常の世界にあらざるを意識す。彼の回春や、妖婆の庖厨や、之れを怪異とするに遑あらんや。其のはじめに於てだに既に然り、況んや黑馬空を馳せて、彼の二個の異人の、天外雲表に逸し去りし後の事をや。ヘレナのさながらに出現する、人造の怪物のよく言動する、三千年の太古の依然として再現する、毫も奇異とするに足らざるなり。そも〳〵虛靈と現實とは、常識をもて論ずる時は、其の差霄壤の如くなれど、一たび些の虛靈を容す時は、萬の虛靈はた容すにかたからず。蓋し、夢幻劇の秘訣はこゝに在り、固より『ファウスト』と淨瑠璃劇とは其の旨甚しく異なりと雖も、其の覩の上よりいへば、共に是れ幻燈畫なり、まづ理外の物と做し、さて合理の物とするの法は、自然の必要によりて彼此ともに具はれり。『ファウスト』の劇の激賞せらるゝは、更に殊なる故あれども、我が古淨瑠璃の愛せらるゝは屢〻此の調和の妙なるに職由す。蓋し、此の靈妙の調和は、そゞろに觀る者をして理外に理覺えざらしむ、苟も夢幻劇を作らん者は決してこあることを感ぜしめ、夢幻の妄誕を覺えざらしむ、苟も夢幻劇を作らん者は決してこの訣を忘るべからず。而して巢林子の如きは最もよく此の訣を得たり、彼れの作支離滅裂、其の全篇に通旨なく、條理を繹ねんと試る時は、毎に吾人をして失望せしむるにも係らず、よく其の演劇の當座に於て(若しくは續讀の刹那に於て)は吾人の心を感ぜしむるもの、ひとへに此の秘訣を得たるに因る、然るに彼の夢幻劇家(即ち摸倣的夢

幻劇家」は、此の調和の必要を忘れ、知らず〳〵時勢の變移に驅られて、強ひて扮裝を實に近かせ、科白動作を實に近かせ、而も尙全體に於ては夢幻的結構を保存せんとす。誤れりとせざらんや。然り、種々の夢幻的隈取を廢し、種々の夢現的科介を廢し、而も夢幻劇を演ぜんとする俳優、若しくは夢幻劇のうちに條理を求め、其の夢幻的結構を取捨し、相和合すべからざるの原素を相混加し、以て新史劇を作らんとする作家、若しくは夢幻劇を激賞して、演劇はもと狂言綺語、理窟の評判を加ふべからずと唱へながら、尙服裝の時代ちがひを難じ、科白の背實を責むるが如き批評家、彼等皆誤れる者に非ずや。就中最も誤れる者あり、彼等は時勢の變移に驅られて、なかば寫實主義に傾きながら、尙夢幻劇の外貌を愛して、其の變化の自在なるをよろこび、所謂活歴派の平板を嘲り、目先の變換を主張し、明治二十七年の理窟時代に立ちてさながらに夢幻劇を再興せんとす。彼等はいまだ實力となりて今の文壇にあらはれずと雖も、諸劇場の傾向と隱然たる潛勢とを觀察すれば、此の派の出現する、恐らくは遠からざるべし。彼等は、巢林子の如く、巧に調和の法を利用し虛實の境に遊ぶと能はず、又シェークスピヤ、ゲエテの如く言外に隱微を藏する能はず、彼等は夢幻劇の利弊を明かにせず。彼等は齣々の美を現ずる能はず、さりとて全曲の旨を觀念する能はず。要するに、彼等は不具の作家也、其の半心は寫實に傾き、其の半心は夢幻に傾く、彼等は時あつて栩々然として蝴蝶となり、巢林子の跡を追はんと欲すれども、

又時あつて遽々然として明治二十七年の大俗となる。彼等は理外の世界を作り、理外の現象によりて宇宙の至醇を發揮するものにあらず、否、彼等は寫實の餘臺に、強ひて夢幻の素を加へんとする者なり、譬へば、木に竹を接がんとする者の如し、是れ豈劇界の外道なるなからんや。

さて「自然」の第一の解、即ち普通の常識的見解の方も十九世紀以來は美術上にも強大の勢力を有し來りたり。所謂寫實主義の大勃興は此の意味の「自然」が推重歡迎せられたるによるなり。

然るに此の意味の「自然」もまた其の內容頗る複雜なり。今こゝに其の一々を辯ぜんはいとうるさく、且つ本論の主意上より言へば肝要なるにもあらず、それこれ只〻其の大旨をほのめかし置くに止むべきがほゞ左の如し。

(a) 曰はく、其の話は兎も角も人間世界に有るらしく、實らしく、道理らしく讀まるゝや、否や。是れ「自然」の最下級也。

(b) 曰はく、其の時代、其の國の風俗、人情に照らして、有り得べく、實らしく、道理らしく讀まるゝや、否や。

(c) 曰はく、其の時代、其の國としては有り得べきも、其の特別なる一地方の風俗、

習慣に照らして、さる事件、さる人物が有り得べく、實らしく、道理らしく思はるゝや、否や。

(d) 曰はく、其の地方の特質には叶ひたりとするも、其の人物の職業柄、遺傳、教育、境遇、天禀等より考へて、さる事有り得べく、實らしく、云々。

(e) 曰はく、よしや其の特別なる畸人の振舞としてはさる事もあり得べきが、人間の本性として、人生の本來より見て、さる事が有り得べく實らしく、云々。

さるかたはものを寫すことが小說の本願なりや、否や。不具なる人間を當然らしく寫したるを自然の致を得たるものと稱すべしや、否やなど。

こゝに至れば例の寫實主義、理想主義などの爭ひに戻り來らざるを得ざれば事おのづから別問題となるべし。

さてまた第六條の人生觀問題、こは必ずしも作者の人生觀を道學者的に是非せんとにはあらず、言はゞ第五條の敷衍とも見るべき自然の意味にて、偏せず倚せざる描寫即ち所謂客觀性が叙事詩の本體として缺くべからざる由を注意せしめんための箇條たるのみ。暗黑面を主眼に寫したればとて、作家の見識だに高からば、敢て非なりといふにあらず、されば淺薄に光明面を專らとしたるを健全と做さぬことと勿論なり。否、只〻作家が描く「人生旨味」の眞ならんことを欲するのみ。酸味苦味を畫く可なり、希くは甘味を食してのみの酸味談、苦味談たらざれ。酒の味、煙草の味を說くも可なり、只〻乞ふ、其の評をしてひとへに酒癖家、煙癖家の一家言たるにとゞまらしむる勿れ。此の意のみ。其の以上は今節に說かんすべもなし。

最後に、或は一條を加へて

第七、其の作最も進歩したる美學の標準に叶へりや、否や。

といふ一標準を立つる、更に妙なるべし、只〻恐る、此の標準は美術文學の究竟目的の定まらざる今日に於ては頗る立し易からざるものなることを。

（明治三十五年二月）

讀書雜感

△書籍は觀念の眼鏡なり。我が智惠の眼のみにては、如何に自ら恃む心の厚き者も、天地人の理趣の、流石に得見ぬかれぬと心元なく思ふゆゑにこそ過現古今、

東西の賢者、智者の見置きたるを眼鏡に借りて、我が狹き、偏れる、曲れる、曇れる、濁れる、萬の不束を補ふなれ。されば、また彼の近視眼の度の進むやうに、我が觀念の進むにつれては、昨日の眼鏡今日の度に適はぬは必然の結果なるべきに、尙其の古眼鏡を袋に藏めて、我れも用ひず人にも貸し惜む、何の心なるらん。

△近視眼の用ふると遠視眼の用ふると眼鏡の品の異なるやうに、書籍も人の品性によりて取舍すべきは勿論なるべし、然るに遠視眼の痛く褒めたればとて、近視眼の直ちにそれを購ひ求めて我が鼻頭に懸け試みたる、そればかりにても見當ちがひなるを、只〻其の効なきを訴るのみにて、嬾て危害の來るべきを慮らざるは愚なちずや。彼の十八九世紀の交に有益の名ありし書を二十世紀の今日に愛讀するが如き、其の一例なり。同じ十九世紀も前半、後半の大差別あるを悟らずして、今尙カーライルを豫言者と激賞し、ルーソー、バイロン等を甚しくもてはやす、將た此の例に近からざらんや。

△論語、バイブルの不易なるも、佛典の廣大なるも、プレトー集乃至獨逸哲學の幽玄なるも、畢竟は皆相對の產物なり、國民性を離れ、時勢を離れ、作家の特質を離れては其の眞旨を會得せんよすがもなし。如何なる書も須からく先づ其の由來、

を明かにして後讀まるべきなり。如何にして此の書は成りしか、如何なる性癖の人が此の書を作りしか、如何なる時代精神の所產なるか、按ふに其の書の良否を定めん前に先づ問はるべきは此の三問なるべし。詭辯家橫行の當時には智卽德」と說きしソクラテス一流の敎訓も八分の眞理なるべし、希臘哲學の常に此の理脈を傳へたる、豈怪むに足らんや。彼れも一時、此れも一時なり、同じく凸鏡と名づくとも其の用は時、處、位に隨ふためしなり。

△同時に多數の師に從ふと同時に種々の書を讀むと、其の不利相似たり。夫の雜誌類の濫讀の如きは私立學校を流れわたるに喩ふべし。人の姿したる師を選び、友を選ぶには用意の周匝なる者古今に尠からず。書の姿したる師友に至りては全然選ぶことを爲さずして親炙し、自ら惡感化を招致して悔いず、怪しむべきにあらずや。妻を娶るに、昔は父母の鑑裁に俟てりき、今は初對面にして思慕し、惑溺し、父母に謀らず、媒を俟たず、血統、性癖をもたゞさずして娶り、累を後生に遺して憾む所なきが如し。讀書界將た其のたぐひの嫁娶に富めり。ルーソー、ショーペンハウエルを娶りてみづから誤り、他を誤りしもの近世其の人幾百千ぞ。

△讀書は方(メソッド)を要し又節約(エコノミー)を要す。各專門の書のおの〳〵一大圖書館を成すに足る二十世紀は濫讀を學者の最大過失となす。悉く書を讀まんと欲するの妄は言ふを俟たず、廣く讀まんと欲するだにも無信、無歸着に終らざるを得るは稀なり。選擇と方法とは讀書家が刻下當面の必需也。或種類の書は齒をくひしばりても讀までおく克己、忍耐を要す。是れ正に學者的勇氣の一側面なり。

△同氣相求むる書は急ぎて讀むの必要なし。むしろ我れと直反對なるを繙くべし。他山の石のためもなり。おのが非をおほふの料を書に求めて我が短を助長するの非を知らぬ者のあさましさよ。自分勝手の不平を遣らんとて混成酒に胃腸を傷ふたぐひなり。

△書籍は觀念の滋養物なり。學問する者の書庫に臨むや、須からく老猫の群鼠の巢に臨むが如くなるべし。及ぶべくんば殘りなく咀嚼し、消化し、徐かに其の腹を肥やすべき也。悉く食ふ能はざらんか、最も旨かるべきを擇ばんは性能のおのづから誨導すべき所ならずや。然るに爰に耄(ほけ)たる猫あり、群鼠を食はんとして群鼠に噬まるゝか、若しくは餘りに食ひあきて動く能はず、却りてそこに斃れ死なんか、與太郎、お鍋といふとも其の逆まに驚くべし。而も今いにしへかゝ

る例尠からず。彼の所謂煩瑣學者や、彼の十八世紀の英佛の博覽家、我が明治にもあり。これらは二枚兜かぶりてへたばりし老朽武士か、さなくば薪炭あまりに多うして火の消えたるに譬へつべし。

△書籍は手習草紙に比すべし。天地人三才の輪廓を智惠の筆にて畫き習はん爲のものなり。濃淡と彩色とを施さんは體認躬踐の結果なるべし。さすれば同じ草紙の既に黑うなりたるにのみ習はんは筆法上達の道ならぬことは明かなるべきを、いつまでも同じ草紙かき抱きて清書せんともせぬ人あるはいかにぞや。一字の師恩をも重しと荷ふ義理堅さもさることながら、肉筆にて書いたると今の印刷物とをひとしなみに扱はんは杓子定木の沙汰に近し。

△同じく讀書家藏書家と謂へるに種類あり。其のうち最も劣れるは、何故ともなく、何といふわいだめもなく、只〻集めに集むる藏書家、心理學者の謂ふ收蓄(アキユミレチーナ)、欲(インスチンクト)に驅られて半無意識に物するかとも見ゆるたぐひなり。かゝるは集むる當人にも裨益なく、就いて借覽せんとする者も之れが爲に益せらるゝこと無かるべし。其の收藏玉瓦同架にして、瓦礫其の多きを占むればなり。

△それに比ぶればやゝ優りたれど、讀書の眞義には尙幾段か隔たりたるがあり。

彼の誇衒的藏書家と威嚇的藏書家とは是れなり。前者は博覽の虚譽を得んことに專念す、其の書齋は東西古今の堅き、柔き、種々の雜籍にて塡充せらる。主人が立脚の地、比喩的にも文字通りにもなし。蓋し萬能足りて一信無しと言ふはまだ可なり、此れは萬卷備はりて一得もなく、甚しきは彼の古書肆の小僧と相擇ぶ所なきもあり。但し誇衒家は人を欺瞞して一時の虚譽を得ば足れりとす、其の罪尙淺々し、彼の半可通の青年の通がりに比すべし。名聞(ナニチ)は書籍にのみは限らず、大かたの人は老いくつるまでも何等かの名聞のやまぬならひなるを、深く咎むべけんや。それよりも罪深く、兎角に恕しにくきは威嚇的藏書家なり。これは似而非豪傑に比すべし、其の專門の書籍類を見よがしに陳ぬるは、主として敵者を威さん爲なり、我れはかばかり書を讀めるぞ、我が議論は一として依據なきはなしといふ意を暗示して恫喝を試むるなり。憎し。自らすら名も知らぬ異樣奇態の武器、戎具を處せきまで陳列し、つねに機先を制して敵者の荒膽をひしがんとす。智と言はゞ智なるべし。援兵英國より十萬人、佛國より八万人など呼號せば、老將軍といふとも或は初度の手合せにはたちろぐことのあるべきを、只〻旗數、槍數、人數にのみ勝負をトする野人をや、木の葉武者をや。恫喝的藏

書、恫喝的論文の行はるゝもゆゑありけり。宜にこそあちこちの雜誌面にも獨逸語、羅甸語、希臘語の行列、固有名詞の行列、專門語、科語の行列。

△前の三者にくらぶれば珍書道樂ははるかによし、眞の鑑識ありて取舍選擇したるは更によし。世の好學の貧しきを保護し、そが文學上の大檀那(パトロン)たらんには更にいよ〳〵よかるべし。

△おぼつかなきは、ぬき讀、あとさき讀、索引讀。英才の讀書家はさてもあるべし、常才の此の類にならふや自他を誤らざること稀なり。時としては梗概抄譯、拔粹等に一時の用を充す、必ずしもあしからず、之れによりて直ちに原著を是非するの輕佻は慎みても更に慎むべきなり。

△今の世の學者の多くは滊車旅行家の如し。廣く輿地を知るといふ、必ずしもその足跡の實に遍きにはあらず。大かたは哲學史、文學史、藝術史、宗教史等に乘込みて横目にチラと走り見してすますなり。殊勝なるは重立てるステーション毎に必ず下車して少くとも三四時を費す。

△知新の用を離れて古書を讀むの要はおぼつかなし。温古の爲に温古して、其の古びにかぶれ、想も文致もかびくさくなりゆく、氣の毒なり。筆に古色は生ず

れど、引喩、比喩、一句隻言までが悉く由來つきなる、いとうるさし。

（明治三十五年一月）

學校に於ける學生の演劇

新潟師範學校の學生演劇事件は、他の學界の風紀問題と相觸れて、端無く教育論壇の物議を惹き起しぬ。其の論者の多くは之れを以て教育壇の神聖を冒瀆せる行爲となし、學紀廢頽の一徴なりとなせり。或は曰はく、演劇類似の遊戯をなす、必ずしも非なるにあらず、紅粉を施し假髪を被りて演ぜしが故に非なりと。或は曰はく、其の演ぜし所の劇が所謂河原者の劇なるが故に非なりと。前者は主として紅粉假髪を醜しとなせるなり。後者は重に聯想を以て其の非難の根據となせるなり。

按ふに、此の種の評の、此の種の事件に對して下さるゝは、今に始れるにあらず、こは歴史的及び其の他多少當然の理由ありて演劇を美術視せざる、又美術視する能はざりし、我が在來の輿論を代表せるものにて、今更異とするに足らざるものなり。只〻こゝに注意すべきは、珍らしくも此の輿論に反對して學校演劇を

辯護せる說の二三雜誌上に散見せること也。『太陽』記者は其の一にして、『日本主義』記者、『反省雜誌』記者は其の二、三なり。彼等は演劇の本質より立論して其の教育と牴觸せざるべきを辯じ、或は其の情育美育の上に效果あるべきを說き、以て世のピューリタン的排劇家の妄を破せり。吾人はかゝる辯護の世に現るゝに至りしは明かに時の好尚の其の學說と共に進歩し來れる一徴なりとなし、我が學藝の前途の爲に多少の祝意を表すると同時に、目下の問題として、こゝに此の兩說のいづれが最も穩當なるべきかを檢せんと欲す。

吾人はもと演劇を以て一種の美術となすものなり、故に彼の音樂、繪畫等が高雅清淨なる娯樂の具としてあらゆる社會に歡迎せらるゝ權理を有するが如く、又屢〻教育上の方便として利用せらるゝが如く、演劇はた同等に遇せらるべきものたるを信ずること、殆ど自明の理を信ずると一般なり。すなはち此の點までは彼の辯護者の說と異なる所なし。何となれば單に物の本質に就きて論を立つるに當りては、其の質の醇醨及び其の時宜、影響の如何は措いて之れを問はざるを正則とすればなり。

されど更に一歩を進めて、演劇の質に醇醨の別あるを思ひ、公衆的娯樂としての

演劇と教育的方便としての演劇との間に用意の一ならざるものあるを想へば、吾人は輕卒に彼の辯護說に同する能はず。夫れ普通の娛樂としての演劇は必ずしも教化的效用あらんことを要とせざるなり、如何なる陋拙なる演劇も其の風紀を壞亂するの恐れ生ぜざる間は、又其の當面の公衆を娛樂せしめ得る間は、之れを何處にて興行せしむるも、もとより非難するに當らざるべし。單に娛樂を目的とすればなり。若し之れを然らずとせば、旅役者の或演劇、又は社日に於ける村芝居の如きは、恐らく之れを禁ぜざるを得ざるに至るべし、彼等の演ずる所は情育の上に殆ど些の裨益をだに與へざればなり。されど學校、就中、中學若しくは師範學校程度の學校に於ける學生自身の演劇は、頗る之れと趣を殊にす。此の場合に於ては、まづ第一に平生の教育的目的及び方針と相背馳せざらんことを懸念せざるべからず、學校の唯一目的は教化薫陶にあればなり。即ち先づ學生の風紀上に害無からんことを慮るべきは勿論、次には何等かの用あらんことを要すべきなり。例へば、單に娛樂を主とするも、尙學校的若しくは教育的といふ特殊の用に伴ふ娛樂たるを要すべきなり。詳言せば、無邪淸淨の娛樂を與へんため、即ち美育、情育の手段たらしめんため、または文藝研究の媒助たらしめんため、若しくは此の二者を兼ねしめんため等の如き是れなり。然るに、若し此等の用意聊かも無くして、殊更に輿論に背き、其の準備の爲に若干の日子を費し、若干の財を費し、只〻半夕の戲謔の爲に拙劣なる演劇を演ずるものあらば如何。吾人は思へらく、他時は知らず、我が多事多難なる方今の教育界、就中、藝術の研究を主とせざる師範學校に於ける催しとしては、多少當然に非難せらるべき行爲なりと。乞ふ更に其の然る所以を說明せん。

夫れ演劇の美は、彼の音樂の美の如く高雅純粹なるものにあらざるがゆゑに、如何なる初心者にだも其の眞旨味の得て解せらるべきが如くにも思はるれど、其の實は決して然らず。普通の觀劇者は大低實感を持して演劇に對するなり、其の偶〻感動して醇なる美感に撲たるゝは、或は詞句の妙に因るか、然らざれば優技の妙に因るのみ。されば俳優の顏色不揚なるが爲に好男子の幻影破るゝとあり、詞の妙なるが爲に技の拙を補ふことあり、技の巧みなるが爲に醜をも美と欺くことあり、而も文學研究者以外の心は主として優技と容姿とによりて左右せらる。故に平生文學的方面若しくは美術的方面に於て何等の修養も無き輩が、突然未熟なる、恐らくは甚だ拙劣なる素人演劇に對したらん時に於て、果して

能く美感を起し得べしや否やは先づ一の疑問也。次に專ら下流の好尚に適するやうに作られたりし舊劇を、宛然旅役者風の陋型に依りて演出したちん塡合に、尙よく美感を起し得べきか、否か、是れ第二の疑問なり。蓋し、素人俳優の科白ほど不自然にして聞苦しきは無く、又其の女性的風姿ほど不細工なるは無く、又平素化粧することに慣れざる面の粉黛ほど怪醜いふべからざるものは無し。素人演劇就中、夢幻劇的素人演劇の醜怪と拙劣とは吾人好劇の徒をだにも往々にして辟易數里ならしめんとする習ひ也。されば多少素養ある者は之れに對して(他に何等かの目的あらば知らず)恐らくは顰縮して所謂乞食芝居の醜を聯想せざるを得ざるべく、又全く素養無き者は單に一種の實感を起し來たるか、然らざれば只〻無意味に馬鹿笑ひすべく、而して他の全く劇を好まざる者に至りては、爲に一種の不快を感じ、或は嘲笑し、或は竟に憤怒するに至るべし。師範學校生の演劇は能く此の如くならざるを得たりしや、否や、是れ第三の疑問也。素養無き者の美術に對するや、概ね或聯想に縋りて之れを是非す。所謂聯想は先入の僻見なり、而も彼等素養無き者の心より觀れば聯想は殆ど萬能なり。されば或藝術にして不快の聯想を惹くものならんか、彼等の觀美心眼は間〻之れが爲に盲し去ることあり、故に最初に此の種聯想を取除くことを力めずして直ちに美感を呼ばんとするは、猶耳を掩はしめて强ひて美聲を聽かしめんとするが如し、其の效無かるべきは必然なり。夫の夢幻劇風の女性の媚態、驟雨後の冬瓜の如き顏色、派役者風の不自然なる科白、彼等は果して何事をか聯想せしむらん。吾人は謂ふ所の美育、情育の效果の甚だかすかなるべきを豫想せずんばあらざるなり。

要するに、文藝的素養無き學舍に於ける遊戲的演劇は、目下の狀態よりいへば明かに無益なり。其の弊の恐るべきものは之れあらん、其の利に至りては吾人は未だ之れを保證する能はざるなり。

此の意味に於て、吾人は新潟演劇事件を當事者の一失策なりと斷定するを憚らざるものなり。

（明治三十一年五月）

學課としての朗讀法

文學美術が情育の一助たるは今更に辯を要せざるなり。演劇類似の遊戲はた

明かに此の用に叶ふべきもの、適當の注意を加へて利用するときは害絶えて無くして裨益意外に多かるべきは、吾人も信じて疑はざるところなり。されど事の順序より言へば、まづ文學的作物の審美的批判を以て其の端を發かざるべからず、例へば、作中に現るゝ人物の性格を剖析する事、該人物の情操に同感同化する事、其の同感を有形にして表現する事(即ち表情術等、此等の修練を先にする必要あり。此の素養を經ざる演劇は單に拙劣なる醜戯たるにとゞまるか、さなくば賤しむべき一種の摸倣戯たるに終るべし。

吾人は我が國に眞成の朗讀術無きを憾めるや久し、一面は上述の用を助けんがため、一面は廣く世の朗讀術に益せんがためにや、高等なる學校には朗讀課の設置せられんことを願望す。朗讀術は其の必要件として語學、修辭學の智識を要し、且つ審美的鑑識を要す、其の情育、美育に裨益する點より言へば、素養なき臨時演劇の效能に勝ること數等なるべし。朗讀術に關する大要は、嘗て『小羊漫言』に掲げたる所に盡きたれば、今こゝに贅せず。

(明治三十一年五月)

中學年齡の男女に小說を讀ましむるの可否に關して教員某に答ふる書

前略、お尋ねの一條は、聊かも教育上の經驗無き小說作者及び批評家、若しくは文學上の知識乏しき專門の教育家たちの通例思ひ寄られ候よりは、遙かに込入つたる斟酌を要すべき、隨つて輕々しくは可否を決しがたき問題なるべく存じ候。先づ此の件を取調べ候には、取敢ず左の數箇條の疑問などは豫め解答するの必要あるべく、さなきときは議論徒らに岐路に流れ、若しくは兎角に言葉の上の行違ひと相成りて得る所尠なかるべく候。

(第一) こゝに謂ふ所の小說とは如何なるものを指すにや。あらゆる作り物語をば總べて小說と見做しての論にや。若しくは嚴密なる意味に謂ふ小說即ちノヱルのみを指せるにや。小說を讀ましむべしとは、其の種類を限りて讀ましむべしと謂ふ意なるか、無制限に讀ましめても可なりと謂ふ意なるか。要するに、所謂小說の定義若しくは範圍は如何。

(第二) 中學年齡の男女に小說を讀ましむべからずと謂ふは、言ふまでもなく、何

等かの弊害あるを認むればならんが、其の弊害とは何ぞ。

（第三）又、之れに反して、讀ましむべしと主張するは何等かの利益あるを認むればならんが、其の所謂利益とは何ぞ。

右の三箇條のうち、第一條即ち小説の定義、種類、若しくは範圍を明かにすることは、此の取調の第一歩として最も肝要なる事なるべし。新聞紙雜誌などに散見せる此の件に關する論爭は、往々にして的ちがひの射術くらべ、道具外れの擊劍に類し、甲論者が眼中の小説と乙論者が眼中の小説と、其の名は同じうして其の實は異なれる例多し。

小説の名目は、其の尤も廣く、締りなく用ひられたる場合には『平家物語』、『太平記』、『三國誌』、『漢楚軍談』などいふ野史がゝりたるものを首として、俗に實録物と稱するお家騷動記、武人、俠客の傳などいふ虚實相半する物語を拙劣なる文辭にて綴りたるもの、又は『紅樓夢』、『水滸傳』の如き、『イリヤッド』の如き、『八犬傳』の如き、奇異荒唐なる人物、事件を趣向面白く、花やかなる筆にて綴りたるもの、若しくは近世に謂ふ所の寫實小説若しくは心理小説の如く、切なる人情の隱微、複雜なる人間の因緣果報を宛がら見る樣に描きいだせる作、或はまた只管好奇心を催さしむ

るを專一として綴りたる探偵小説、冒險小説のたぐひ、或はまた子弟を教訓するの方便にとて、明かに勸誡の主意を含めて作りたる小説、其の他、お伽噺、落語、集などまでをも含む次第なるが、斯くては小説の範圍餘りに漠々然として、可といふにも、否といふにも、其の目安の置き處に迷はざるを得ず。何となれば其の名は同じく小説ながらに、其の讀者に於ける感銘の性質に至りては此れと彼れと全く相反するものあればなり。

按ふに、如何に小説好きの教育家といふとも、何等の制限をも置かで、あらゆる種類の小説を讀ましめて可なりとはいふまじく、尠くとも猥褻卑陋なる小説、殘忍刻薄なる事件をのみ語れる小説、餘りに荒唐無稽なる事を叙せる怪談やうの小説、之れを要するに、青年者流の美感よりも寧ろ實感を挑發するらしく認めらるゝたぐひの小説は、よもや可とは主張すまじ。且つまた「讀ましむべからず」と主張する論者とても、全く文學の性質及び效用を知らざる沒分曉漢にあらざる限りは、彼の主として教訓の爲にとて綴られたる小説、例へばエッヂヲオス女史が傑作の數篇の如き、若しくは『ロビンソン、クルーソー』、『天路歷程』などゝ旨意を同じうせる作物の如き、或はスコット、ヂッケンス等の作中の最も穩健なるものに相當す

るやうの物語の如きをさへ、一切不可なりと程には斷言すまじ。要するに、可と言ふも、否と言ふも、或制限内の沙汰にて(或は「讀ましむべからず」を主張する論者中には絶對的にまか唱ふるもあらんかなれど)兎も角も、此の制限の如何なる點に存するかを取調ぶることが、第一着かと思はるゝなり。換言すれば、定義の穿鑿よりも種類の詮議、種類の詮議よりも範圍の取調が當面の要事なり。

蓋し、如何なる種類の小説こそは青年者流に讀ましむべきものなるか」と問はんに、苟も教育家たるの立脚地に立ちて答ふる以上は、無害にして、多少何等かの利益あるべき小説を」と答へざるを得ざるべく、さてまた「如何なるが無害にして有益なる小説か」と再び問はゞ、「斯樣〳〵云々の利益を與へ得るたぐひの小説」と所謂利益の幾箇條かを擧げて、讀ましめて可なるべき小説の範圍を限るが最も手輕き解答なるべし。爰に利益といふは、必ずしも實用上の利益には非ず、さりとて小説を讀ましむることに、何等かの效用伴はざる限りは、他の「讀ましむべからず」といふ論に反抗して、強ひて讀ましむべし」を主張する必要あるまじ。所詮「讀ましむべし」は積極、「讀ましむべからず」は消極。前者は主、後者は客なり。

通例、少年者流に讀ましめても可なりとせらるゝ小説は、概して左の條々を具備

したる底の作らしく、最も熱心に小説を推薦する積極論者も、左の條々の闕如せる場合には、流石に推薦を躊躇するものゝ如し。

(一)夫れ小説は散文の詩歌にして、美文中の尤も俗に通じ易く、解せられ易きたぐひなれば、彼の詩歌が天地を感ぜしめ、鬼神を泣かしむるが如く、自我以外を知らぬ少年等にも物の哀れといふことを知らしめ、我儘勝手に傾き易き頑なゝる心をも和らげ、同情、同感の念を涵養するの效用あり、即ち美育、情育の好方便たり。

(二)凡そ小説は人生の眞相を巧みに縮寫して示すものなるが故に、年少者をしてまだ見ぬ浮世の善惡をほのかながらも窺はしめて、人情、世態の片影を捉へしめ、理論若しくは抽象的訓誡を以てしては到底會得せしむべからざる人生の知識を會得せしむるの效用あり。即ち身みづから其の境に臨みて實際に經驗し閲歷せざる間は、到底會得し難き筈の人生の味ひ、若しくは因緣果報の複雜微妙なる關係の、曰はく言ひがたき概略を、不完全ながらも、多少具象的に描き出だして、說明し若しくは批判し、或は指導し、或は奬誡し、時としては時勢の趨向を指示し、其の尤も傑出せるものに至りては人間が運命の歸趨をも暗示

す。

(三)總じて小説は一種の美術品にして、精神上智力上の鑑賞より生ずる高雅なる快樂を供するが故に、年少者が動もすれば陷らんとする肉體上の陋しき快樂を貪るの心を防ぎ、若しくは減じ、兼ねて氣格を高尚にするの效用あり。

(四)小説は知らず〳〵の間に多く事物の名目を知らしめ、文字、辭法等を知らしむるの效用あり、即ち學問上、修辭上の裨益あり、云々。

尚あなぐり求めなば此の他にもあるべけれど、重なるは先づ右の四箇條なるべし。

さて此のうち、第一と第三と第四とは、げに小説の重なる效能の隨一には相違無きも、また必ずしも特に小説にのみ附帶せる效能にはあらず、これらは寧ろ通例情の文と呼びならはせる美文學全體の特質ともいふべきものにて、小説の特有には非ず、即ち優美高尚なる華文、韻語、人情、風俗又は自然の風物等を詠じたる長篇又は短篇の詩歌に依りても、又は華やかなる筆に綴り做したる紀行文、記事文、叙事文等に依りても、若しくは小説風の巧緻靈活なる筆に成りたる正史、實傳などによりても件の三箇條ほどは必ずしも領得し難きにあらず。且つや美育の方便としては、小説などを用ふるよりも、繪畫、音樂などいふ他の美術を利用するかた一層完全に近かるべし、それこれ、小説を讀ましむるよりして生ずる眞の特別の效用はと言へば、主として第二條に存するものと見做すが當然らしく、隨つて此の一箇條の實效如何は、本問題を決するに當りて、最も大なる關係を有すべしと思はるゝなり。

蓋し按ふに、小説を年少者流に讀ましむべしといふを、只〻「別段に害無きが故に」といふ消極の主意に出でたらば知らず、苟も「有益なるが故に」といふ主意に基いたる以上は、是非とも右に擧げたる一箇條(第二條)に大なる重みを置かざるを得ざるべく、また此の點に重みを置かねば位ならば、何もヤッキとなりて「讀ましむべし」を主張する程の必要もあるまじく思はるゝなり。何となれば、右の一條こそは、近世に謂ふ寫實小説、心理小説、其の他尤も高尚なる小説の、利用上に於ける生命なればなり。

併しながら、右の一箇條を眼目と立つると同時に、通例は小説と見做されたりし作のうちに、此の一條に副はざるもの夥多出來すべく、隨つて、所詮は、近世に謂ふ小説のみが採用せらるゝことに相成らずやと疑はるゝ仔細あり、例へば、彼の探

偵小說、冒險小說の如き、人情の奥秘世態の隱微などいふことには、殆ど何等の重きをも置かで、只〻事柄の珍らしきをば專一に寫しいだせる作物は此の眼目の條件に不適當なるべく、『水滸傳』、『西遊記』、『三國誌』、『太平記』、『平家物語』、乃至實錄物の類ひも、此の主意には叶はぬらしく、曲亭の諸作なども、其の思想、感情などかちが時勢おくれなるのみか、其の寫せる事柄も無稽荒唐なるが多ければ、是れは又は或種類の傾向小說(敎訓の意を具して作れる小說)などのみにはあらざるかと思はるればなり。

但し、立入つて此の疑問を決定するに先だつて、他の「讀ましむべからず」を主張する論者らは、果して如何やうなる論據に立つて其の議を呈出せるかを一瞥すべし。

件の消極論者の論據も、一々に數へ立つれば夥しかるべけれど、爰には其の精粹のみを擧ぐ、ほゞ左の如し。

(一) 總じて小說は、殊に人情、世態を寫すことを眼目とせる小說に至りては、多少、否、大抵は、主として男女相思ふの關係を寫さゞるは無し。按ふに、既に人情の

眞旨を會得したる者の心より觀れば、男女の切なる相思、及びそれより生ずる種々の事相は、或は美しく、或は貴く、或は畏敬すべくも思はるべきが、未だ人情の眞旨を解せず、且つ美術、文學を鑑賞するの素養無き年少者に取りては、戀、愛は、即ち、色、慾と解せられ、美感を促がすべき筈のものはやがて實感を挑發する底のものとなりて、何等の利益を與へざるのみか、案外にも劣情の誘引となることあるべし、是れ小說を讀むよりして生ずる害の最も怖るべきものなり。

(二) 然らば情話ならざる物語、無邪氣の小說、勇ましき小說等にのみ限らば差閊なからんかと言ふに、情話を斥くるの結果は、前に謂へる眼目の一箇條に副はざるの失を生ずべく、若しくは彼のあるまじき事をあるらしく寫すたぐひの脚色小說、即ち年少者の好奇心を挑發する空想小說のみを玩讀するの弊に陷るべし。さらぬだに年少の頃は空想若しくは一時の感情に趨り易き習ひなるに、あるまじき事をあるらしく寫して、頻りに空想を鼓吹するが如き小說を讀ましむるは薪に油をそゝぐが如く、害の頗る恐るべきものあり。

(三) 總じて中學年齡の男女は、智の發達も意思の發達も不完全にして、學問も、經驗も、尙甚だ淺々しく、常識に乏しく、世事に迂濶なれば、些細の刺戟にも感激し

易く、妄誕なる事柄をさへも輕信する傾きあり。彼等が小說を讀む間に覺ゆる興味は、主として事件上、脚色上、又は大まかなる皮相上又は文章上の面白味のみ、人情の隱微、人生の理法などは、よしや巧みに寫しいだされてありといふとも、之れを正當に咀嚼合味するの力量はなかるべし。假に此の般の面白味をも多少合味するの力量あるべしとするも、未だ曾て實際の經驗無き身なれば、いづこまでが作家の虛誕にして、いづこまでが人生の眞相なるか、即ち眞の人情世態と僞の人情世態とを見分くるの明無きゆゑに、好んで小說を玩讀するの結果は、偶〻以て生中なる人生觀、無きに劣れる曲れる知識、觀念などを揑造するに終るべし。

消極論者の論點は、尙此の外にもあるべけれど、今は只〻尤も力ありと認めたるものゝみを擧ぐ。

さて此の二箇條と前の積極論者が提出せる一箇條との輕重は如何。此の權衡こそは兎も角も本問題の中心點なるべく存じ候。

消極論者(小說をば中學年齡の男女に讀ましむべからずと主張する人々)が提出せる三箇條のうち第一と第二とは、其の重みと價値とに於ては、積極論者が提出

せる彼の四箇條中の第一、第三、第四の三箇條に相當るべく、要するに、彼れにも一理、此れにも一理、彼れを取るに足らぬ條件として排斥せんとすれば、此れをも必ずしも懸念するに及ばぬ條件として輕視するをは難きにあらず。何となれば「小說は男女の情話なるが故に讀ましむべからず」といふは、「小說は一種の美術品にして美育、情育に有益なるが故に讀ましむべし」といふにひとしく、其の主張に道理あることは慥かなれども、前者は「小說は必ずしも男女の情話を語らず」といふ一辯駁を得て直ちに破れ去るべく、後者は「あらゆる美文學及び美術は同樣の效用を具ふ、必ずしも小說を用ふるを要せんや」といふ一反擊を得て退縮せざるを得ざるべく、所詮は五分と五分との引分相撲なるべければなり。

さてまた消極論者の第二の故障情話を斥くるの結果は積極論者が眼目の要旨たる人生の理法、人情の隱微を默會せしむるの效用無かるべきのみならず、兎角に空想小說をのみ玩讀するの弊に陷らん」といふ一條も、其の實、小說の全類を詳悉せざるより出でたる大ざつぱの斷論にして、存外に重み無し。蓋し、小說の種類はいと多し、空想小說、冒險小說の範圍外に於て、情事に關せざる小說の種類夥多あるべく、且つ多少積極論者が眼目の要旨にも適當すべきもの幾ちもあるべ

し。例へば、エッヂヲオスが教訓小説、ヂッケンスが「クリスマス、シリーズ」、トマス、ヒューズが『トム、ブラウン』、アアボング、ホーソオン、キングスレー、エリオット、キップリング等の或作、乃至(所謂情話の弊無き限りは多少男女間の物語をも許すとすれば)スコット、ヂッケンス、オースチン、エリオット、リード等の作中、少年が讀みて差閊無きもの許多あらん。されば此の故障の貫目無きは、小説は學問上、修辭上の裨益を與ふるが故に讀ましむべし」といふ積極論者の脆弱なる一箇條の貫目輕きと伯仲なり。

かやうに詮じつめて見れば、積極論の眼目の議論は、彼の「まだ見ぬ浮世の是非をほのかながらも窺はしめて、理論又は抽象的訓誡を以てしては會得せしむべからざる事柄を會得せしむ」といふ一點にとゞまり、消極論の眼目は「かゝる隱微の旨味は、到底幼稚なる頭腦の會得し得る所にあらず、中學年齢の男女は單に事件、脚色、文章等の上に就いて、大まかなる感與を感じ得るのみ」といふ一點に歸着すべし。

按ふに、此の二論點の輕重如何が、前にもいへる如く、本問題の中心點なるべし。

さて此の問題の是非を嚴正なる科學的立脚地より裁決するの務めは、しばらく之れを兒童學の專門家乃至應用心理學の老練家等に讓りて、今は只〻自分が從

來の(文學研究上及び子弟教育上の)經驗のみに徵して　定の裁斷を試むべし。

但し、此の管見の判斷とても、十分詳かに述べんとすれば、勢ひ長き議論と成るべく、さすれば綴る此方も太儀、讀まるゝ貴方も御太儀なるべければ、大旨意さへ分かれば可として、簡單を專一に、あら〳〵要點だけを左に一つ書に致すべし。

一、一を見聞して後にこそ二三をも類推すれ、如何なる英才も未だ曾て些も經驗せざるたぐひの事柄に關しては(指導者、說明者、無き限りは)到底正當なる領解を爲す能はず。年少者が小說を讀みて人生を知らんと欲するの結果は往々にして揣摩し、臆測し、邪推し、誤解し、あるまじき人生觀を立て、歪みたる社會觀、乃至世界觀を作りいだすに終ること十中八九の例なり。

二、凡そ年少者が小說類を繙く當面の目的は(將來小說作者にならんと企圖する者の外は)主として娛樂を求むるにあるべきや論なし。即ち一種の心の play(遊び)として讀むなり、心の work(仕事)として讀むにあらず。かるが故に、讀むに骨の折るゝやうなる作は讀みはじめても中途にして廢し、又は我が好尙に叶へる部分のみを拔讀す。例へば、搭鬪の條、男女對問の條(勇ましき箇所又はなまめかしき箇所)(要するに寶感挑發的なる部分をのみ拔讀する

例多し。中には前後の聯絡には關係なく、單にさる箇所のみを抄錄して諳記する者あり

三、年少者の批判眼はおしなべて幼稚なるがゆゑに、作家が本意は當の人物を ば敢て賞美するの意にあらざる場合にも（おのが批判の標準の卑きために）件の人物を推重し、甚しきは之れに倣はんとす。るに至ることあり。例へば、魯智深又は黑旋風の如きは言ふまでもなく、血氣一邊の不具者として寫されたるなるに、年少讀者は宋公明よりも、柴進よりも寧ろ先づ彼等の如き人物を愛して、切に之れに摸擬せんと企圖することあり。而して方今行はるゝが如き小說（所謂寫實小說）中の人物に至りては、一段凡近的、實際的なるが故に、摸し易く、倣ひ易く、隨うて此の種の誤解より生ずる弊害一段多し。

四、近年謂ふ所の理想小說、寫實小說、乃至心理小說などは、之れを讀む者の解釋力次第にて、昔時の小說などが到底企及する能はざる敎訓を與ふるの力を有することあれども、而も昔時の小說とはちがひて、其の表面に打出だして露骨的に敎訓を垂れざるが故に、所謂理想小說の眞旨すらも年少者には解し易からざることあり。況んや力めて揷評を避け、及ぶべきだけ有りのまゝに敍寫することを第一義とする寫實派の小說に至りては、眞意の捉へ易からざること勿論なり。例へば、トルストイ又はゾラのに徵せよ、二者共に其の眞意は敎訓誨導を與ふるにありとも評すべきなれども、其の敎誨の眞意を解する者は、之れを年少者中に望むべからずして、特り人情の隱微、世故の詳細に通じたる老成の讀者中にのみ求むべきが如し。

五、古今の美文學中、人生の智識及び處世上、倫理上の敎訓を與ふるの資格に於て、前後匹敵無しとまでに稱揚せられたるは、彼のシェークスピヤの諸作に越えたるは無かるべし、而して此等諸作の評釋類即ちシェークスピヤが隱微の敎訓を發揮闡明せん爲に綴られたる評論（解釋類）は眞に汗牛充棟なり。されば道理上より考ふれば、シェークスピヤの諸作は、多少敎化上にも效用あるべき筈なり、然るに實際を檢すれば、シェークスピヤに啓發せられ、敎誨せられたりと言ひ得る青年は、恐らく千人中に一兩人ほどか、否、其の一兩人すらも（適當なる指導者を得ざる限りは）歪める人性觀や社會觀時としては、無きに劣る人生觀を得るに止まるべし。

以上五箇條は、自分が此の年ごろ社交上、敎育上、幾多の青年子に接觸し、いつとな

く感得したる感銘の結果なるが、こは必ずしも彼の消極說に左袒するの意を發表したるものには非ず。何となれば、右に擧げたる五箇條は大概適當なる指導者を得ざる限りは」といふ條件付なるがゆゑに、若し此の條件にして具備したらんには、自分は必ずしも「讀ましむべからず」を主張せんとせざればなり。之れを要するに、本問題の可否を決する最後の目安は左の數箇條に存すべし。

(一)適當なる指導者ありや否や。くはしくいへば、作の良否を選擇するの權力、責任を有すると同時に能く本文の眞旨を會得し、之れを解釋し、之れを批判し、其の心理上、倫理上、實際上等に於ける價値、效用の輕重を敎示する案內者ありや否や。

(二)善良なる小說のみを讀むことを許したる場合に、此の許可を濫用して窃に不良なる小說を玩讀するものあらば如何にして之れを防がんとするか。初手より玉石の差別も無く悉く小說を禁制せば、却りて禁制を實行し易かるべし、同じく小說と稱するもの丶中に就いて、甲を許し乙を禁ずるは、其の質の相似たるだけに、實際は頗る困難なるべし。同じ作家の作ながらに許すべからざるものあるべく、許すべきものあるべく、監督者、指導者の手數夥しかるべし。

尤も、此のうち後の一條は、始めより作の種類を制限し、若しくは其の表題までも指定して、豫め十種若しくは二十種と限りなば故障なかるべく、且つ又主として敎訓の爲に作られたる小說の如きは(エッヂワオスの作の如きは)指導者をすらも要せざること勿論なり。但し、其の他の諸作に對しては、右の指導者たる有無の問題が頗る大なる力を有すべく、消極論と積極論の優劣はこゝに在るべし。然るに自分の見る所誤らずば、今の諸學校、就中、中學程度の學校などには、此の種の指導者(即ち美文學の解釋者)たるに適當なる敎員、若しくは舍監は、先づ殆ど得がたかるべし、否、今の文壇の批評家中にだに此の資格に恰當せん鑑賞家は僅々屈指するに過ぎざるべしと疑ふなり。

件の事情は不本意ながらも、自分をして尠くとも當分の間は消極論者の說に左袒せざるを得ざるが如く感ぜしむるなり。尤も、彼の無邪氣なる「お伽噺」のたぐひ、乃至ははじめより敎訓の爲にとて綴りたる小說の如きは其の限りにあらずと知るべし。かくはいへど自分が消極說に左袒せしは、實を言へば、單に指導者其の人の得易からざるが爲ばかりにはあらず、今の諸作家に對しては、聊か無遠慮なる言に似たれど、實は西洋列國とはちがひて、我が國には未だ立派なる作が

只〻の一篇も無き故なり。我が國の小説類は維新前のは何れも無稽荒唐に非ざれば猥雜卑陋、然らざれば殘忍殺伐にして、頭から教訓用として讀ましむべきものたるに叶はず。然らば維新以後の諸作、就中近年の諸作は如何にといふに、是れ將た單に美文として見れば隨分立派なるもあれど、教訓上の一具として、取りたて〻讀ましむべき性質の作物には非ず。さるは作意が必ずしも拙しといふ意にはあらねど、何分にも人生に對する觀察が教訓用としては今一息も二息も未だしき所あり。大まかに評すれば、どの作もおしなべてセンチメンタルにして針程の苦しみをば棒ほどに誇張したる筆づかひ、小苦を忍ぶことを誨ふるよりは愚癡の火の手を煽動するやうなる作意多く、到底處世の指南車たるに適せざるものなり。加ふるに大かたの觀察が自分定規の勝手判斷とも評すべく、イゴイスチックにしてイゴチスチックなれば、間〻我意や我慢を推奬するの助けとはなれども、眞の同情、眞の忠恕、眞の博愛を皷吹するの力はなし。要するに今の諸作はサブヂェクチーヴ(主觀的)の作物中の、まかも大ならざるたぐひのものなれば、之れをオブヂェクチーヴ、ウォオルド(客觀世界)の肖相と見做さんこと、頗る不當の沙汰なるに、況んや之れを以て處世上の參考となさんとするなどは、頗る危險也と言はざるべからず。此の邊の精しき理合は、今こゝに詳悉せずといへども、宜しく御推察なされたく候。

終りに臨みて、念の爲に一言申添へて置くべきは、最先に讀むをを許さるべき小説の範圍の中に、彼の『三國誌』『水滸傳』などいふ作物『佳人の奇遇』などいふ慷慨小説の加へられざらんことなり。前者は其の理想といひ、其の記事といひ、文致といひ總體の着眼といひ、總じて陳腐にして、さしたる裨益なきのみか、間接に殺伐をよろこぶの情を養ふの弊もあり。而して後者に至りては、動もすれば空想を煽動し、實感を挑發す、加ふるに文の華に過ぎて虚飾に流れたる、厭ふべし、讀ましめざるを可とす。こは右の三書を取りわけて惡むが故に指摘するにはあらず一概にかゝるたぐひの作物をば、勇ましきが故に弊なしとのみ心得ちるゝ人々もありげなれば、手近き實例に引用したるのみ。

貴下が質問の要點は、以上に盡きたりとも存ぜざれど、折節繁忙、取急ぎ卑意の一斑をのみ申述べ候、不一。

（明治三十二年一月）

倫理觀の障魔

何事の理をも知らざりし未開時代と科學、哲學の進歩したる今日の有樣とを比ぶれば、人間の智惠の力はいと〳〵偉大なるものゝ如く見ゆれど、人の心の內外に大小の障魔夥しく纏綿して、醇正の知識の得易からざることを思へば、人の智惠ほど賴まれぬものは無し。哲學といふも大抵は大きなる理窟、悟道といふも大かたは自分定規の安心惣じては對待境を離れざること勿論なり。人心の骨髓にまつはれる本具の障魔は是非に及ばずとするも、せめても其の皮膚にまつはれる障魔ほどだに除かずば、人の思ふこと、考ふること、いつも〳〵理窟に墮して、自他をそこなふ媒とはなるとも、世を益するを微々たるべし。されば心あるは夙にこゝに心をとゞめて、此の皮膚上の障魔を攘ふことの必要を敎へたるも間〻ありしが、おのが眼は見られぬ例にて、かく敎へたりし人々だにもおのが心邊の障魔をば知らず〳〵攘ひ殘したりし程なれば、今尙大かたの思想家が此等の魔物につまゝれて直なる知識をえ捉らへぬは是非もなき次第なり。さて、知識と一概にいふうちにも、純正哲學などに關する思索は實世間の行爲に密接す

るものならねば、直なればとて、歪みたればとて、直ちには大利害を感ずることも無けれど、倫理道德上の知識に至りては日常の行住に關係すること密なれば、此等障魔の弊頗る甚し。近ごろ故ありて古今の倫理說を取調ぶるにつれて、甞て思へりしよりも一しほ切に此等障魔の弊を感じたり、公にすべきほどの所感にはあらねど、試に思ひつけるまゝを左にかぞへ見るべし。

先づあらゆる思索に伴ふ知識の障魔は遠くはベーコンの擧げたる四偶像、近くはスチュワートが擧げたる七障碍なるべし。其の第一は、吾々のもちふる言語、其のものが不完全にして十分に用をなさぬこと、くはしくいへば、致知格物の道具としても、思想を傳達する媒介としても、言語其の物が甚だ不十分なること是れなり。第二は、吾々が心の働きに伴ふ惡癖なり、即ち、兎角に輕々しく推斷せんとする癖あること、くはしくいへば、殊別なる事實を精檢細査するに及ばずして動もすれば手輕く歸納する癖あること、又は自分定規の原理を土臺としてほしいまゝに演繹推斷する癖あること、(但し此の後の分はスチュワートは擧げず)。第三は、人間の經驗する範圍に限りある爲に事實か事實ならざるかを確證する能はざること、即ち之れより生ずる不便是れなり。さて第四は、人皆其の一生の多分

を徒らに文字を讀み習ふこと、及び使ひ習ふこと等に費すが爲に、肝腎の考査及び思索の爲めには十分の力を盡す能はざること。第五は、人皆に兎もすれば奇異なる說を歡び迎へんとする好奇心あること、隨うて兎角に偏見僻說に傾き易きこと。第六は、次第に人智の進むに隨ひ、かくもあらじ、さかもあらじと疑ふ念いやましに增長し、果は無限の懷疑におちいらんとする傾向あること。第七は、古への賢人、哲士を景慕崇尊するより生ずる偏見、又は其の地、其の國の制度、文物を愛重するより、又は之れに養成せられたるより生ずる偏見、是れなり。げにや此等は皆、古往今來、人心に纏綿せる眞知識の障魔なれど、尙かばかりにては未だ盡したりといふべからず。予が倫理觀の障魔と思べるは、此の外にも尙あまたあり、其のうち一二、前の七魔中の或者と相出入するものもあれど、わざと取り除かで其のまゝに左に掲ぐべし。

（一）他律觀

倫理、道德の源は內に在るか、將た外に在るか、他が課するか、自ら課するかは、致知格物の最後の結果として定まるべき筈なるべきを、豫め超自然の他力あることを假定し、專ら信仰のみを基礎として建立したる倫理觀はこゝに惣稱して他律的倫理觀となす。而して此のうちに究理智の殆ど未だ働かざりしHyth時代の倫理觀をも、稍〻開明に進みたる世の宗敎的倫理觀をも攝入す。今の進步したる宗敎的倫理觀とても、若し善惡正邪等の說明を曖昧に附して、只〻神意に旨從するをのみ道なり、善なりと說くが如きものあらば、是れはた同じく倫理知識上の一障魔と見做さゞるを得ざるべし。さはいへど、予はあらゆる宗敎、觀若しくは有神論を一概に障魔と見做すにはあらず。

（二）古聖崇拜

人情の自然として、古への賢哲を景慕崇尊する情念の盛んなるが爲に、一意古說外に出づることを憚り、時勢推移し、適用宜しきを得がたきに至りても、尙舊套を脫することを悅ばずして、或は語義の解釋を新たにし、或は强ひて新說を攙入して其の傳說を承繼せんとするものあり、此の種の倫理觀古今に多し。例へば儒學に於ける性理論的倫理觀の如きは此の種の一例となすを得べし。別に新倫理觀を立つることゝせば或はまぬかれ得べき牽强の弊を、承述の體を失はざらんとするが爲に夥しく自招するは、此の種倫理觀に伴ふ失なり。

（三）萬靈長觀

あらかじめ人間を萬靈の長なりと假定して倫理觀を立つる故に、其の自然の結果として、有意或は無意に、先天的知能を假定することゝなり、或は良心、或は理性等を先定することゝなる。尤もこゝに假定といふは獨斷說風の假定のみを指せるにあらず、むしろ古今の倫理論者が無意不識の間に懷抱せる一種の先入見を含めていふ也。換言すれば、人間を他の下等動物と同視するに忍びざる一種の感情が生みいだす先入見が本となりて、兎もすれば强ひて人間を萬靈の長たらしむるやうに論を立てんとする傾向ある、之れを障魔と見做すなり。予は一概に直覺說を謬見といはんとするにもあらず、將た强ちに理性の存在を拒否せんとするにもあらねど、豫め人間を萬靈の長と假定せんとする傾向が幾多從來の倫理觀に障碍を與へしは事實なりと思ふ。さて此の萬靈長觀に附隨する一種の偏見あり、之れを

（四）排情欲觀

となす。こは理性をもて人間の特性となすより、若しくは情欲を卑しきもの、惡しきものと豫め假定するより生ずる僻見也。佛敎があらゆる煩惱を排するも其の一因はこゝにもとづき、カントが悉く情を斥けしも其の主因はこゝにあり。

其の他あらゆる主智派の倫理觀も、要するにこの理に因緣するが如し。德の爲に德を修め、義務の爲に義務を盡すといふことを、豫め最高尙の事と假定するより、かゝる論は起るにはあらざるか。案ずるに、かゝる倫理觀の存外に古今に勢力あるは、畢竟ずるに目前の或利害に拘束せらるゝに由るものゝ如し。無意、有意の別無く、目前の或利害を主として立つる倫理觀を

（五）方便說

と假稱す。こは按ふに、古今の倫理觀をして歪ましめたる、又常に歪ましむる尤も勢力ある障魔なるが如し。彼の時處の宜しきに應ぜんとする倫理觀當面の社會若しくは個人を敎化せんと欲する念切なるより生るゝ倫理說の如きは是れなり。勿論大概の倫理觀は時勢の必要に迫られて生れいでたるには相違なけれど、中には有意識にして方便觀を立てしものも尠からず見ゆ。佛陀の敎說の如きも、或派の解釋に從へば半以上方便說なるが如く、仲尼の弟子に對する答もおしなべて方便的也。之れを大にしては、國家經營の便宜上より方便觀を立てたる場合もあるべく、又は敎育上の便宜よりまばらく方便觀に住したる場合もあるべし。此の種方便觀は其の當面の對手を益することなか〳〵に大なる

ことはあり、されど其の方便觀が、さながらに文字のまゝに祖述せられ、承傳せらるゝに及びては、明かに一種の障魔となり、後の倫理觀の障碍たるや明かなり。はじめは一種の倫理說を抑へんためにのみ唱へられたる反對の倫理說が、年を經るに去たがひて漸く極端の(而も方便的ならぬ)倫理觀たるに終ること、古今に其の例尠からず。「人の性や直」とほのめかしたる仲尼の敎が、孟子に至りて明言せられたる性善說となれるなども其の一例ならんか、近ごろ流行る國家至上主義なども、能く此の弊におちいらざるを得るや、おぼつかなし。

(六) 客在に究竟目的を求むること

人に究竟目的の所在を我れ以外即ち客在界、就中高き處若しくは遠き處に求めんと欲する意向あることは、無意不識の間に其の思索の方針を豫め外にのみ向かはむしる傾きある故に、其の思索の手段の科學的なると然らざるとに論なく、幾分か其の倫理觀を歪ましむる虞れあり。蓋し究竟目的の、內に在るか將た外に在るかは容易に決すべからざる問題なるを、外に在るものゝ如く豫定するは穩かならざる獨斷也、然るに此の傾向は古へより甚だ盛んなり。他界若しくは未來に道德の極致を求むるが如きも、一は此の種先入見に基くなるべし。

(七) 現在の苦樂

現身の苦痛、刻下の煩惱に克つ能はざるより、三世を達觀する底の餘裕なく、現世によりてほしいまゝに過當を律し、竟に一切の人間世を苦觀するに至り、ついで多少の方便觀之れに添はり、果は人世を穢土と見做し、一切の煩惱を罪惡視する傾向は古へより屢〻あることなり。佛敎及び中世の基督敎に其の例あり。而して之れと相纏綿して離れざるものを

(八) 時勢境遇(上代に在りては風土、氣候、文物等)の影響

となす。春秋時代の魯楚學派に於ける影響、ペリクリーズ以後の時代のストア、エピキュラス派等に於ける影響若しくは歐洲の暗黑時代又は十八世紀の社會が當時の學者、思想家に及ぼせる感化など。

(九) 反動の作用

魯楚兩學派の對峙、ストア、エピキュラス兩學派の對峙など、又は佛蘭西革命前に於ける唯物的倫理觀がルーソーの唯情的倫理觀を呼び起しゝ例など。いづれも一方の遺漏を補ふ功はありしも、殊に後にいでたる者に在りては、折伏の念おのづから盛んなるを得ざるが爲に、其の說く所中庸を失するを常とせり。

（十）自家標準

大概の倫理説は、論者が性に率うて立てられざるはなし。尙情の人は一切の人間をおのが尙情の性によりて、尙智の人は其の尙智の性によりて律せんとす。其の推理の方法は如何ばかり科學的なるも、究竟の判斷は兎角に自家の性がするなれば、此の主觀的ならざるを得ざる所に多少の障魔は存する也。且つや所謂思想家、就中倫理、道德に熱衷する肌合の人物は、大概神經性、而も主觀的神經性の人なるを通例となす故に、此の虞れはことに多し、

（十一）詩人、哲學者の不具

倫理觀は活きたる人間の行爲、目的に關するものなれば、天然界の事を議する時の如くに單に條理のみを追求すべきにあらず、即ち理智を主とする哲學家の研究に俟つべきと同時に、直覺を主とする詩人、美術家の觀察をも參酌すべき必要あり、言はゞ、眞正の倫理觀は詩人と哲學家とが協同研究によりて定まるべきものならん。然るに此の二者は古來動もすれば相合しがたく且つ大かたは不具也。哲學者は兎もすれば世故に疎く、詩人は兎もすれば常識を缺く。哲學家には妻を迎へず、子を有たず、隨うて人情の極意を、理智を以ての外は會し得ざりしものも多く、詩人には理智殆ど缺けたるもあり。此の二種の專任取調係が不具なる所、一大障魔の宿る所にはあらざるか。

（十二）未意識界を度外視する事

人間の究竟目的を其の主觀に求めんとする場合に、在りては、先づ之れを其の有意識界に尋ぬるはもとより當然の順序ながら、ひとへに之れを有意識の欲又は知識若しくは爲我、爲他等の情念にのみ限るは、恐らく盡したる沙汰といふべからざるべし。或は究竟目的を自他の快樂を求むるにありとし、或は自他の精神上の幸福を求むるにありとす、げにこれもさることなり、此等は人々が其の自意識に反問して、げにもと頷き得る限りの事共なり、是れ其の割合に世間に勢力ある所以ならん。されどかく有意識界にのみ究竟目的の所在を限るは思索の至極といふべしや否や。はじめより目的を客在界にのみ求めんとするは、前段に言へる如く慥に倫理觀の一障魔なれど、強ひて主在界、就中、有意識界にのみ執着せんも、同じく知識の一障礙にはあらざるか。小兒が食を求むるは營養欲の自然の結果にて、其の有意識界には何の目的もあることなし、また野蠻が配を求むるも其の生殖欲の自然の結果なり、其のはじめに當りては何等の目的もあること

となし。若しあらば、目前の欲を滿さんと欲するの念の外にあらじ。畢竟、生殖を目的とするなりと見るは後智の判斷上より見下しての批判なるのみ。之れによりて考ふる時は、今日は自利の爲若しくは利他の爲と見らるゝことも、其の實は自利にも利他にもあらで、別種の目的の爲にするなるかも圖るべからず。自利、利他等を目的と見るは、今智の判斷に外ならずとせば、近時の或倫理說の如く無下に未意識界の沙汰を參酌せざる倫理觀は、頗る不具なるものにあらぬか。かくいへばとて予は必ずしも、神秘說に立戻れといふには非ず、進化說、經驗說のみにては未だ倫理觀を掩ひ盡す能はざる趣あるを言ふのみ。以上列擧したる諸條は、ふと思ひついたる一時の所感たるに過ぎず、隨うて辭意共にふつゝかなれど、志ばらく識しておのが反省の料となし、兼ねて世の識者の示敎を俟つ。

（明治三十一年八月）

方今の小中學の德育及び其の弊

實際に於ける倫理敎育の振はざること、恐らく我が今日の敎育界より甚しきはあらじ。德育問題の筆舌に上ること日にます〳〵繁きを加ふるは、やがて其の實際的方針の確定せざるを示し、且つ其の實效の甚だ擧がらざるを證するにあらずや。我が未來の元氣たるべき今の小中學の少年は、總べて此の混沌の裡に人となり、此の動搖の間に陶冶せらるゝなりと想像せば、誰れか悚然として其の結果の寒心すべきに想ひ到らざらん。

今の小中學の倫理敎育は、概して形式的、實利的、皮相的也。要するに塗飾的也。惟ふに、明治二十三年の敎育に關する聖勅は主として我が國の師父兄たらん者に國民敎育の大方針を訓諭したまへるなれば、小中學に師たらん者は、宜しく聖旨の在る所を服膺し、專ら陶冶の實效に意を注ぐべきなり。徒らに勅語の字義に拘泥し、句々の例話を說き、さながら直譯的に勅旨を傳へて、以て德育の能事畢れりとなすが如きは、形式的德育の甚しきものにあらずや。今の小中學の敎員の多數は聖勅の辭を追うて先づ孝を說き忠を語る。孝は衆德の根本にして忠は國民的道德の大礎なり、此の二德を講ずるもとより不可なし。但し彼等の之れを說くや、偏に其の修めざるべからざる所以を命令的に說きて、其の行はざるを得ざるに至らしむる所以の道德的感情を誘發するをを力めず。彼等は只管

忠孝に關する智識のみを注入して、以て子弟の德性を陶冶せんとする也。蓋し知は竟に行と合すべく、智育の至れるはやがて德育の至れるものなるべし、而も智能未熟なる少年時代に於ける智育的德育は、偶〻以て智德を分離せしむるの弊を生ず。今の子弟の實際を觀るに、彼等の大かたは忠孝仁義の名目にのみ飽饜して聊かも其の眞旨味を解せざるが如し。今や十二三歳の兒童も尙能く公利、公益を口にし、忠孝仁義を辯說す、而も漠然其の行はざるべからざるを知識せるのみにして、之れを行はんと欲するの念若しくは行はざるに忍びざるの念は殆ど蕩乎として見いだすを能はざるなり。彼等も忠孝の尊むべきを思はざるに非ず、されども敎師旣に之れを客在の理想として說くが故に、彼等將た之れを客在の理想として受銘す、即ち早晩行ふべき者となして現に行ふべきものとはなさず。蓋し敎師の忠孝を講ずるや、其の例として援引するは槪ね非常の場合に於ける非常の忠孝也、敎師みづからも未だ曾て經驗せざるが如き場合の忠孝也。其の宛から望遠鏡中の山水の如くに、若しくは美しき遠景畫の如くに少年子弟の心眼に映ずべきは必然の結果ならずや。子弟の怜悧にして溫厚なる者だに以爲へらく「先生だに未だかゝる美德に令聞なし、機會到らざればならん、ま

してや我々少年をや」と。修身敎室の訓誡と倫理講堂の講說とは、大槪かくの如くに受銘し去られて客在的理想と化了するなり。是れ豈注入的、智育的德育の弊にあらずや。

孝を百行の本なりと言ふは爭ふべからざる穩妥の說なれども、是はむしろ倫理敎育法の本末を定めたる確言にして敎師みづからの覺悟なるのみ。實際兒輩を訓誨するに當りては更に一段の功夫なかるべかず。抑も孝の出づる泉源は何ぞや。至親を思ふ情の泉源は何ぞや。孝の泉源となるべき根本の性情を養はずして强ひて命令的、智育的に親に孝ならんことを勸めんか、其の弊や徒らに孝を矯飾する者を生ずべきなり。今の子弟の忠孝を修めんと欲するや槪して之れを人間たるの體面上より、即ち世間に對する一種の名譽心に基く、其の夷心の必需として之れを行はんと欲する者に至りては殆ど稀なり。要するに、今の忠孝には常に幾分か利己の素の伴ふことあるを免れざるが如し、而してこは畢竟師の訓誨鹽梅の然らしむる所也。孝に關してだに旣に然り、其の他の諸德はた推して知るべきなり。皆內より自然に誘發せられたるにあらずして外より强ひて注入せられたるなり。即ち塗飾的にして淺膚的なり。今の敎育に從

事する者或は意志即ち廣き意味に謂ふ「勇」の德の重んずべきを思ふ、すなはち意育の主とせざるべからざるを感じ、立志を說き、忍耐を說き、果敢を說き、剛毅を說く、而して其の結果は徒らに兒童輩の爲我的功名心を挑發するに止まる例、比々是れなり。今の敎育者の多くは「義を見てせざるは勇無きなり」の意を其の根本義によりて釋せざるものゝ如し。故に勇を講ずるの結果は往々にして我意を養ふの媒となり、大概爲我心を盛んならしむるに了る。予の信ずる所によれば、敎育は廣義にいふ仁を養ふを本とし、最も廣き意味に謂ふ義を知らしむるを體とし、仁義を行はしむるを目的とすべき也。情育は本の爲也、智育は體の爲也、意育は目的の爲也。此の三者はまばらくも相離るべからざるものなり。仁の爲にせざる勇何の要かある。情育に伴はざる意育は害あらんのみ。今の所謂意育は功利的なり、動もすれば爲我的、甚しきは利己一邊的也。予は此の點に關して福澤翁の功績に怨みなき能はず、故敬宇翁の『立志編』に對しても多少の遺恨無き能はざるなり。

或は『中庸』、『論語』を敎科用書として章を逐うて其の字義を釋するあり、其の任に當れる者は概ね老いたる經學者なり。或は死字、死句に關する自家が創見を案

說するに忙しくして、席末なる惡生徒が活きたる敗禮を看過すと噂す。按ふに、『語』、『庸』は假に之れを以て現時に適切なる敎科書なりとするも、師範學校以上の用にのみ備ふべきもの也。之れを辯ずるを要するか。由賜回等が聽いて旨ありとせし所を直ちに移して成童前後の學生に授くる、誰れか其の妄を覺えざらんや。夫の端倪すべからざる孔夫子が陶冶の手加減は、成人だに或は疑惑する所なるをや。而して其の爭ふべからざる回顧的傾向は、到底前に理想を立つる現代の傾向と稱和しがたし。所詮『論』、『庸』は、就中『論語』に至りては、敎員の參考として若しくは經世家の參考としてこそ不易の價値を有する者、多少の閱歷と相照らして後にこそはじめて其の眞光明を發し得べきものなれ、之れを未成童に授けんは、猶齒の未だ生へそろはざる嬰孩に牛羊の肉を與へて以て其の滋養に稗益あらしめんと欲するが如し。況んや師みづからだに之れを消化するに至らずして、强ひて生硬なるまゝに嚥下せしめんと欲するをや。學童等の仁義忠信等の字義名目に飽饜して其の旨味を覺えざる宜ならずや。今の子弟をして仁義を理想視せしめ、さながら客在的のものゝ如く思はしめ、其の活德たること即ち現に行はざるべからざる者、又如何なる者と雖も其の境遇に相應する限り

に於て容易に行ひ得べき德たるを忘れしめたる因、一にこゝに存す。かゝる德育法は智育的、注入的としても其の宜しきを失へるものなり。何となれば智育は最も用語例の正しく定まれるを要とするに、『論語』に見えたる諸德の意義は、孔夫子が時宜に從へるの訓言に因めるなれば、其の必然の特質として語は同じきも意屢〻殊に、廣狹深淺往々にして逕庭あり。所謂仁や、義や、或時は近きが如く、或時は遠きが如く、或時は回も尚仁に遠きが如く、或時は木訥も既に仁を得たるが如し。此の理、成人は之れを知了するに難からざるも、能く之れを成童に會せしむべしや、非科學的なる『論語』に依りて能く之れを會せしむべしや。予は其の至難なるを思はずんばあらざるなり。予が今の子弟について實際稽査せるところによれば、彼等の念頭にとゞまれる『論語』の感銘は極めて漠然たり。漠然、仁義の重んずべきを感じたる如くなれども、仁義とは果して如何なるものなるかは彼等決して會得せざるなり。彼等は仁義を以て、身を立て、名を揚げ、家を興して後に行ふべきものと思惟するに似たり。按ふに、理想を未來に供するもまた德育の良法たらざるに非ず、而も其の本を養ふを主とせずして直ちに其の末に走らんは德育の本意を得たるものにあらず、況んや仁義は客在的理想とすべきものにあらずして直ちに本體となすべきものなるをや。孔子の仁、佛陀の仁、基督の仁、即ち個人の形したる仁、之れを理想として子弟に供するは不可なからん、然れども廣義にいふ仁義の素は人間の固より有する所なり、苟も人情あらん者にして其の私情を脱したる瞬間に、誰れか仁を難しとする。苟も理性を具へたらん者にして其の愛他の念動く刹那に、誰れか義を難しとする。仁、理想ならんや。義、理想ならんや。仁義を理想として說く漢學者流は一面孔夫子の本意を誤り、一面今の倫理教育をそこなふ者たるに近し。

或は頻に温良忠順の德を誨ふ、而も其の德性の根本を會得せしめざるなり。故に其の弊や矯飾にあらざれば無氣力。或は力めて內外の時勢を說き、主として對外尚武の精神を鼓舞し、愛國奉公の志操を奬勵す、而も其の根本的德育に疎なるが爲に、其の所謂尚武は誤つて衒武の弊を生じ、其の所謂愛國は誤つて固陋の病を釀す。前者は消極的、姑息的に流れ易く、後者は排外的、戰略的に傾き易く、共に文野兩面の失あり。

或は此等諸種の失を避けて力めて德育の中道に依據せんと欲し、其の生徒を誡むるや、「莫れ」幾十條を列ぬる者あり。此の消極的戒律は偶〻以て生徒等をして

無言又無爲たらざるを得ざるが如くに感ぜしめ、茫として其の歸趨する所を知らざらしむ。是れ將た外に發露せる所に就いてはじめて德育を施さんとする者か。內を陶冶し根を培養するを德育の本意とせば、其の本づくところ既に當を得ざるもの也、況んや單純なる少年の頭腦に幾多繁縟なる戒律を注入して、集注專念の便宜を失はしむるをや。

要するに、我が方今の德育の失は其の訓誡の、本に主ならずして末に主なるに在り、まづ其の根に培ふ(つちか)ことをせずして直ちに枝葉の苅除修整に忙しきに在り。換言すれば、聖勅の旨意を只管文字に拘泥して直ちに其の子弟に傳へんとするがゆゑに、小學に於ても彼の勅語に見えたる限りの諸德を悉く講授し、中學に於ても更に再び同事を反覆す。修めざるべからざる德の名はいと多くして、之れを修めんとする德性の根は殆ど未だ動かざる也。さるからに子弟等、德の名の應接に眩惑し、之れを諳んずるの外に殆ど些の餘裕なからんとする也。孔夫子をして其の任に當たらしむるも、當局者の要求かくの如くんば、智育的、注入的の外に亦た德育の法なきを歎じぬべし。予は信ず、德育の本意は德性の根本を養ふにあり、而して二十三年の聖勅は國民の資格を定めさせ賜へるなりと。小中學

の教育を經て普通國民の資格成就すとせば、宜しく此の間に於ける諸科の教育をして次第に此の資格を成就せしむべきなり、就中讀本科の如きは情育、德育の用を助けしむべし、特に枝葉の諸德に關するものは其の根だに固からば之れを齊ふるに難からざる者なれば、或は之れを臨時の講話に一任し、若しくは之れを國文及び英語の讀本科に補はしむるも可ならずや。毎週僅かに一時乃至二時間の修身倫理の課、殊に國民的諸道德を授け盡さんとする、如何ぞ智育的に流れざらん、淺膚的に終らざらんや。煩瑣と繁縟とは實に我が德育の大弊なり。

今の小中學に講授する所の德は、上に謂へるが如く廣大なり、而して眞成に此等諸德を具備したる者は小學教員に其の人殆ど絶無、中學教員にも其の人殆ど絶無、すなはち今の倫理教員は大概はみづから未だ實踐し得ざる所を其の子弟に訓諭しつゝあるなり。其の智育的に流るゝも此の故にして、其の感化力の薄弱なる將た此の故なり、彼等の大かたは虛言の惡德たるを說き言行の一致せざるべからざるを言ふ、而も彼等の言行は理想的國民の道德と、即ち聖勅に見えたる國民的資格と或は時に相背かざるを得ざること、若しくは未だ遙かに相及ばざること、或は甚しきは明かに相矛盾することあるなり。而して其の背乖の影は

往々にして子弟の目に映じ、或は其の耳朶に觸れ、近隣の人口にも膾炙することあり。其の眞に破廉耻若しくは不義不德と名づくべきは論ずるに足らず、其の單に德の圓滿ならざるが爲の故にのみ子弟の信仰を毀損し、隨うて其の平生の講話の功を一簣に缺かしむる悔ありとせば、其の罪は教員其の人にあるべきか、將た其の德育法の宜しきを得ざるにあるべきか。予は今の小中學の教員に君子を求むるの空想たるを恐るゝが故に、主として其の罪を其の德育法の宜しからざるに歸せんとするなり。

予が關係せる某中學に於て嘗て一問題を提出し、四年三年の二級に問ひけらく「嘗て在學せし學校にて授かりし倫理科によりて卿等の深く感銘し今尙忘れざる修身上の訓誡ありや」と、答ふる者種々ありし中に、教師の言行一致せざるが爲に何等の感銘の留まれるもの無しと答へしもの各級におの〳〵一人、教員屢〻交代せしため深く感銘せしことゝては殆ど無しと答へしもの二級に通じて三名、其の訓諭高尙に過ざて明確には會得せし所無しと答へしもの一名、其の他は形式的又は漠然たる感情のまゝに答へたるが多く、取りいでゝ言ふに足らず。前に擧げたる少數の答にこそ却りて參考に資すべき價値はあるなれ。又嘗て

一年級、各級八十名、通じて百五十餘名の兒童に問うて曰はく、虛言は善事か惡事か。惡事ならば何故に惡事ぞ」と。彼等の十中七までは語を異にして同義の答をなせり、曰はく「信用を失ふが故に」と。予は覺えず悚然たりき。利己的、實利的思潮の洽く無邪の少年が頭腦にも漲らんとしたるを認めたればなり。彼等奸智の比較的に長く非を飾るに足るを知らば如何。彼等教員の行爲の之れに副はずして頻りに偉德を口にし尙能く教師たるの位置を保つを思はゞ如何。

夫れ虛言の衆惡德の根本なるは猶忠恕の衆善德の根本なるがごとし。此の不德一つあらば他の諸德幾何あるも皆空名と化しぬべし。然るに小中學の此の兩極に力を注がざる、眞個に意外の事たり。恕を誘發せずして如何にして孝を養ふぞ。忠を力めしめずして徒らに倫理智識を注入するは、偶〻以て僞善矯飾を誘致するの媒ならざるか。或は虛言食言の惡德なる由を誨ふるもあるが如し、只〻慨むらくは之れを德育の一大根本として講ぜざる也。或は言行の一致を嚴訓するものあり、只〻慨むらくは其の講授する所の德あまりに廣大なる爲に師みづからだに悉くは之れを實踐する能はず、隨うて其の言と行とが或は消極的には一致するも、積極的には相副ふ能はず、竟に所謂諸德をして尠くとも子

弟の心には客在的理想の如く思惟せしむるに終ることを。論者口を開けば曰はく、今の德育の弊源は師其の人を得ざるにありと。こは爭ふべからざる事實なれども、更に下りて第二の弊源を探れば、其の講ずる所のあまりに高尙若しくは廣大なるに在るが如し、試に忠恕と忠恕を實行するの勇とを根本要義とせしめよ、今の小學にも之れを實踐して誤らざるの人必ずしも尠しといふべからず。夫れ德化の效は其の說く所の目ざましく花々しきがために擧がらずして其の說く所の根柢ありて堅實なるが爲に擧がる。予は今の小中學に良師其の人を擇ばしめんことを望むと同時に、平素に實行し得べき德よりはじめて師先づ之れを實踐し、子弟にも之れを實踐せしめんことを望む。而して他の大なる德行に至りては師は之れを刻下に成就せんと力めつゝある實を示し、兼ねて子弟をして次第に之れを成就せんと志さしむべきや勿論なり。こは他の諸種の德を理想化するにひとしけれど、年少の子弟に取りては、齊家奉公の諸德は當然に理想的たるべきものなれば、彼の仁義を高義に解してあらゆる道德を理想化するものとは同日にして談ずべからざるなり。

今や諸の德敎萎靡して振はず、或は儀式形體の是非目まぐるしくして道義の精髓は屢〻全く見失はれんとし、或は枝葉の修飾に忙しうして根幹の枯るゝことを知らざらんとす。仁や、愛や、慈悲や、何れか其の礎を忠恕に置かざるぞ。種々樣の建築式の果しなき爭論は、多少有爲なる衆工人をして空しく其の手を束ねしめ、其の可憐なる兒孫をして精神上の飢餓に死なしめんとす。嗚呼、斷として其の礎に復るべきの機睫下に迫れるにあらずや。

（明治三十一年三月）

方今の倫理教育を論ず

（上）倫理教育上の根本問題

小學校に於ける修身科も、中學校に於ける倫理科も、其の第一の目的は品性の陶冶、即ち感化の實效に在ることは今更言ふを俟たぬ所なれど、又所謂德育は一種の情育たるに外ならねば、尠くとも其の端を發く初に當りては、主として先づ情育的手段を取るべく、彼の智育的手段の如きは寧ろ賓位にのみ置かるべきものなること、是れ將た殆ど爭議せらるまじき程の通理なれど、尙方今の小中學に就きて其の倫理教育の實際を觀來れば、事實は全く此の理と相反す。小學修身科

のことは暫く措く、尋常中學の倫理科に至りては概して純然たる倫理智識の教授たり、甚しきに至りては漢文の教授たるに止まれるもあり。いづれにもせよ、倫理教育の第一目的たる品性陶冶の實效を擧ぐるを能はざるや一なり。彼の泰西倫理書の飜譯若しくは抄譯に類するもの、若しくは常識的倫理論又は普通國民心得ともいふべき類の教科書に依りて、毎週一時づゝ何等の熱もなき乾燥なる講話をなすもの、或は教育勅語の字句にすがりて教訓を設け、何等の統一も無く、聯絡も無く、只々勅語に見えたる儘の順序に因りて種々德を說明し講述するもの、或は『論語』『中庸』をさながらに教科用書として字句の解釋に拘々たるもの等は、いづれも皆一種の智識教授たるに外ならざるものなり、就中最後のもの、如きは往々にして純乎たる漢文教授の、倫理教育の效果の擧がらざるは宜ならずや。

さるにても、理論上に於ては、倫理教育の目的の主として品性陶冶に在ることを了解したるらしき當事者、且つ其の第一着手段の多少情育的なるべきをも會得したるらしき當事者が、何故に其の實際に當るに及びては斯く相反せる手段を取れるぞ。是れ第一の疑問なり。或は彼等の或者は、學校に於ける倫理教育の

目的は品性陶冶に在るよりは寧ろ倫理知識の教授に在りとなせるか。子輩は往々にして、眞の德育は到底學校にては行ひがたしと論ずる者あるを傳聞す。かゝる論者は曰ふ、薰陶感化などいふことは家庭若しくは私塾に於てのみ行はるべきことも也。學校は何事に關しても畢竟ずるところ教授屋のみと。彼等は此の理に準據して頻りに種々の注文を提出す、曰はく、尋常中學は尋常國民たるに適する諸の知識を授くべき所なれば、總じて國民たるに必要なる限りの心得は前後五年間の中學倫理科に於て教授すべきなり、曰はく、親たるの心得、曰はく、夫たるの心得、曰はく、臣民たるの心得、曰はく、立憲國民たるの心得、曰はく、法律思想、曰はく、經濟思想、曰はく、海國民たるの心得、曰はく、商工國民たるの心得と。尋常中學倫理科の負擔もまた太だ重からずや。

方今の諸中學を觀るに、或は此の種の注文に應ずることを以て其の理想となせるが如く見ゆるものも無きにあらず。それらは只々種々の訓戒、種々の條目を臚列的に說明し、疾走的に講說して毎週一時五年間を終る。其の效果の純乎たる智育即ち倫理智識の教授たるに止まるや勿論なり。

されどもかくの如きはむしろ今の中學中の異例なり。十中の八九までの中學

は感化薫陶の實效を第一位に置きて、教授よりも教訓を主とし、智識よりも感銘を主となすや疑ひなし。而も其の效の擧がらざるは、既に屢〻も論ぜられたる如く、要するに教師其の人を得ざると教訓の法宜しきを得ざるとに因る也。

教師其の人を得ざるために德育の效の擧がらざる由は既に幾たびも唱へられたる所にして、げに是れこそは方今德教の振はざる第一根本の理由なれど、これぱかりは今直ちに如何ともすべきやうなし。大賢、大才、大豪傑などは人力にて造らるゝものならねば、淡水に鯛を釣らんずべなき如く、世が世ならば、良師の得がたきも是非なかるべし。まして(かゝることは俸給に拘はれることならずとはいへ)僅々數十圓の中學教師に眞の德化力ある君子人、而も十を以て數ふる程の多數君子人を得まほしとは、如何に聖代なればとて甚だ無理なる注文なるをや。仁齋、藤樹、益軒等がこゝの中學、かしこの中學に倫理科を受持つやうにならばいとも賀すべき儀なれども、さることは到底むづかしかるべし。それこれ、教師の人柄にのみ科を負はするは出來ぬ相談のねだりごとゝも評すべし。況んや現社會の實狀より察すれば、たとへ藤樹、益軒の如き君子人輩出して教化の事に當るとも、單に品性行實の力のみにては尚不足なる趣もあるをや。換言すれば、倫理教育の方案に幾多未釋の疑問ありて、それを定めて掛らねば效果の擧がるまじき仔細あるをや。

倫理教育の方案に關する幾多未釋の疑問とは何々ぞ。先づ念頭に浮ぶものを擧げんに左の如し。

(一) 眞の情育的倫理教育は或論者等が唱ふる如く、要するに家庭若しくは私塾にのみ行はるべきものにはあらぬか。學校に於ける倫理教育は、要するに智育的倫理教育即ち倫理智識の教授たるに外ならざるものにはあらぬか。

(二) よしや幾分の情育は學校に於ても行はるべしとするも、毎週僅かに一時間を以て定規とせる今の尋常中學の倫理科が、果して能く之れを行ふに堪ふべしや否や。

(三) よしや之れを行ふに堪ふべしとするも、斯く情育に重きを置くの結果は、殆ど悉く倫理的智育(即ち倫理智識を授くること)を度外視するの止むを得ざるに至るべく、さすれば現時の教育方針即ち現社會の注文に違背する嫌あるべし、かくてもさしつかへなきか。

(四) さて以上の故障を參酌して考ふれば、中學倫理科なるものは、其の間接即ち漸次の效能は兎も角もあれ、其の直接即時の效用に至りては、所詮之れを普通倫理智識の啓發に止めざるを得ざるにはあらざるか。即ち其の主なる效用は、要するに智育的なるべきものにはあらざるか。

(五) 若し右に言へる如く、智育的に流るゝは勢ひ止むを得ざる結果なりとすれば、如何なる方法によりて智育を施さば可なるべきか。現に行はるゝが如き西洋倫理書の義譯めく講話、若しくは東西倫理說の概要、又は普通國民心得ともいふべき常識的倫理論、又は敎育勅語逐辭解釋、又は沒系統的隨時敎訓又は『論』『庸』の釋義など、此等を授くるをもて足れりとすべきか、否か。

(六) 若し右に擧げたる諸種の方法は倫理敎育の究竟目的(品性陶冶)の上に好果無きが故に(若しくは十分の效果無きが故に)不可なりとすれば、如何なる新方案、新手段を以て之れに代ふべきか。

(七) 今現に行はるゝ諸方法の最も著き缺典は何ぞ。彼等が十分の效果を擧げ得ざるは、そも〳〵如何なる缺典に職由せるか。

(八) 要するに、今の倫理敎育に伴へる缺典のうち、人即ち敎師の資格に關する分は前に辯じたれば之れを措く、方案即ち其の敎訓上若しくは敎授上の方案又は手段に缺典ありとせば、そは果して如何なることなるか。

總じて此等數條の疑問は、凡そ倫理敎育に從事せんほどの者が、其の實際に當るに先ち、是非とも精到に取調べ且つ十分なる解答を與へ、さて後ち人の子の品性陶冶、即ち情育的德育に取りかゝるべき筈なるに、予が甚だ心得難く思ふは、此等緊要なる疑問の、未だ嘗て敎育專門の雜誌などにてだに、其の緊要の度が要するほどの精到なる研鑽を經たることもなく、偶〻當事者に質疑するも未だ嘗て滿足すべきほどの確答明解を得ざることなり。例へば、前に擧げたる前二三條の疑問の如きは、試に習慣上の先入見を離れ虛心平氣に考ふれば、隨分爭議せらるべき性質の疑問にあらずや。よしや假に數步を讓りて、第五條の疑問までは從來略〻注意せられ、理論上は兎も角も、實際上略〻決定せられたる趣もありて、今更爭議する必要なしとするも、第六、第七に至りては、確に緊要なる疑問にして而も未釋の大疑問なり。げにや此の數年以來德敎不振の因緣につきては既に幾たびも論ぜられたり、また其の弊源も議せられたるべし。且つや其の救治策の多少參酌の値あるものも時々立案せられざりしにあらね

と概するにそれらは皮相末端の救治策にあらざれば頗る迂濶なる局外者の机上案にして所謂出來ぬ相談に類するものか、然らざれば一時彌縫の姑息策にして實際の效用には乏しきものゝみ。

之れを要するに、我が方今の德育に關して議論や批評は盛んなれども大概は其の表面に浮べる缺點(短處を)漫然指摘して罵るのみにて、眞の根本的救治法を講究せんとする熱心家はなく、或は只〻徒らに慨歎し、或は只〻徒らに揚言するのみ。例へば、彼の徒らに宗教心の我が國民に薄弱なるを打歎き、宗教心を基礎とせる歐米各國の倫理教育を羨むが如きは、無き者ねだりの愚痴とも云ふべく、儒教の時勢に後れたるを今も尙ほ覺らで、頻りに維新前の私塾を賞美し、其の今の世に廻らし難きを繰言らしくかこつ、是れはた死兒の年算へ、愚にもつかぬ慨歎也。或は德教の萎靡したるは職として禮儀の弛廢、就中師道、弟道の衰へたるに由るとなし、紀律と禮法とを根本に立てゝ倫理教育を行はんとするものあり。今の小學校及び中學校が實際行ふ所を觀れば(隱然若しくは顯然)大概此の主義に則らざるはなし。所謂形式的德育とは是れなり。さもあれ此の如きは、言ふまでもなく甚しく本末先後を誤りたる德育なり、

何となれば道念未だ動かざるに頻りに外より禮讓を强ひ、若しくは未だ心服せざるに强ひて紀律もて束縛するは、偶〻以て僞善を敎へ、若しくは矯飾を勸むるにひとしく害ありて益なければなり。況んやその所謂禮法は往々にして瑣屑繁縟なる死儀式なるをや。或はまた世界主義、日本主義、海國主義、尙武主義などいふいと〳〵漠然たる一種の套語を振り閃かして、見事實際の救治策を立て得たりとなし、得々然として反覆空論を唱ふるものあり。蓋し此のごときは殆ど實地德育の何物たるを知らざる人々とも評すべく、未だ倶に倫理教育を語るに足らざる也。夫れ今の德育の振はざるは主義の好名目なきが爲にあらずして堅固確實なる德育方案、生命ある教育手段のなきが爲なり。彼の精確なる學理に基ける教だにも其の手段宜しきを得ざるときは何の感化力をも有せざることあり。まして一向に時尙に媚びて匆卒に立案せる方便論などをや。

之れを要するに、今の倫理教育を論ずる人々の大概は、最も肝要なる取調を度外視せるとは前に擧げたる第六問、第七問の解答を怠れること、即ち今の德育方案の最大缺典は何ぞといふ疑問に對して精確なる解答を與へざること是れなり。若し夫れ我が國民の宗教に對して熱心

薄きが如きは、もと時勢の然らしむるところ、今更是非もなき次第なり。また神、儒佛、耶、諸教のいづれも今日の德教たるに適せざる、是れはた同樣に是非もなき次第なり。將又師弟の道の衰へたる、或は教師が不德にして生徒が之れに心服せざる、いづれも歎ずべき弊にはあれど、是れはた是非もなき次第ならずや。夫れ是非も無き事はいつまで論議するも益なし。などて論議して益あるべき缺點に議し及ばざるぞ。是等諸缺點は歎くも詮なしとせばなどて方案上の缺點に議し及ばざるぞ。所謂方案上の缺點にて十分に明著なるもの無きが爲か。焉ぞ然らんや。焉ぞ然らんや。

(中) 現行德育方案の根本的缺陷

方今小中學校に行はるゝ、種々の倫理教育方案に附隨せる種々の缺點を指摘して、其の根本的誤謬の、果して如何なる邊に宿れるかを判斷するに先だち、是非とも一わたり批評し置く必要あるは、彼の二十三年の聖勅に對する甚だ心得がたき、現教育社會の見解及び態度なりとす。都鄙の小學校の當事者等が現に行ひつゝある所を觀るに、彼等は大祭祝日の來る毎に必ず全校の生徒等を集めて、いと嚴肅なる勅語、捧讀式といふ事を行ふことを以て缺くべからざる恒例となせるのみか、且つ勅語を大書し若しくは金字摺に物したるを、一大額面に認めて、校長室、教員室、又時としては倫理講堂に掲げ置きて、生徒等の目に觸れ易からしめ以て其の記誦に便にす。或は又打つけに勅語の本文につきて解釋を施し、例話を附し、其のまゝ移して教科書とし、又は講話の材料として、毎週教訓の用に供す。かくても尚足れりとせずして、或は閉校式に、開校式に、或は卒業式に、甚しきは運動會に、茶話會に、機會ある毎に勅語を引用し、忠、孝、和、信、義、勇、奉公の訓誡を反覆して以て教訓を垂るゝを常とす。聖諭を釋述し、敷衍し、傳達するに於ては、頗る力めたりと稱すべからずや。若し機械的に反覆して種々德の名目、釋義、例話、論賛等を注入することが、最も有效なる倫理教育の手段ならんか、今の小中學生徒等は、此の種注入の功德によりて、其の長ずるや擧げて大々善なる良國民とならざるを得ざるべく、またかくの如く直譯的に聖諭の有りのまゝを口傳することを以て教育家が爲し得べき唯一無上の能事とせば、今の小中學の教職員こそはげに十二分に其の職責を盡し得たるものと言ふべけれ。されどかくの如き直譯的事業は果して教育當事者の眞正の任務なるべしや否や。國民教育に關して下し

賜はりし陛下の聖旨は果してかくの如くにして貫徹し得らるべしや否や。

彼等教育當事者は、二十三年の聖訓をばそも〳〵如何さまの性質の物とか心得たるぞや。言ふまでもなく彼の聖諭は、先づ主として全國の教育當事者、即ち師、父兄、若しくは母、姉、伯叔父たらん者に向はせて下し賜はりたる聖訓なりとは、御本文の文脈にも明かならずや。すなはち大日本帝國の教育上の國是、教育政策の大方針を定めさせられたる大詔也。我々教育に從事せん者が爰に實際教育の理想を置き、準據を求め、原案、原則を見いだすべきは今更言ふを俟たぬ次第ながら、さりとて原則は原則にして實際方案は實際方案なり、否、此の教育上の理想を實現し、此の教育上の原則を貫徹せんと欲すれば、是非とも別に恰好なる實際方案、即ち「如何にせば最も完全に聖慮に副ひ奉るを得べきか」といふ精緻の考案を要すべきは當然の沙汰ならずや。蓋し此の實際方案の良否次第にて原則の死活も、理想の消長も決定せらるべき次第なれば實際教育の上よりいへば、所謂實際方案ほど大切至極なるは無き道理ならずや。

然るに方今の當事者等は深くは此の邊に注意することなく、往々にして教育の原則と其の實際の方案とを同一に見做し、勅語をさながら解釋することの外には、何等實際の方案も無しとやうに思ひ込みたるらしき輩の多き、そも〳〵何等の不穿鑿不心得の至りぞや。若し夫れ直覺說に立脚して勅語の旨を貫かんと力むると、功利說に準據して然せんと欲すると、二者ながら實際方案たるを得べしとせんに、彼等は二者の間に些の優劣なく、些の長短なしと思惟せるにや。或はまた、國家主義に立脚すると人道主義に立脚すると、解釋次第によりて共に聖諭に副ひながらも、尙其の發端に於て、將た其の窮極の目的に於て著大の懸隔を生じ來るべく、隨つて利弊相同じからざるは明かなるに、彼等は此の理を想はざるか。或はまた行爲の結果に就きて是非すると、其の動機に就きて褒貶すると、實際教訓の方案として其の得失固より大に相背くべきが、彼等直譯家者流は曾て此の點を考査し得たりや否や。若しくはまた、智育手段を取ると情育的方案に因ると其の結果同じからざるべきが、彼等の之れを辨知したる果して如何程に精到なるべき。予は彼等當事者等の大半が此等大切なる實際的疑問に關して存外に冷淡、存外に無知なるに驚き入るなり。迂濶なるか、愚魯なるか、不能なるか、懶惰なるか。いづれにもせよ、皇室に對しては甚だ不忠、國民に對しては不深切至極、不勉强千萬、下世話に所謂雇人根性、奉公人肌の行き方なり。之れを

名づけて機械的教育とも、ほんの儀式的薫陶ともいふ。

蓋しかくの如きは甚だ劣等なる教育法たると同時に、また甚だ危險なる教育法なり。何故ぞといふに、結構なる理想、原則、大方針が生中に直譯的に、露骨にありのまゝに、歴々、麗々と現されてある場合ほど、短視家者流、淺見者流的、即ち普通國民の目より見て、立派らしく見ゆる場合はなく、且つ有難げに、貴げに、如何にも萬事萬端が具備整頓したらしく思はるゝ場合はなきゆゑ、否、隨分と見識ある人々と雖も、往々にして外見の善美なるに眼眩みて內面の腐爛頽敗には心附かず、生中形式の備はれるが爲に精神の空乏を看過するはありうちの事ゆゑ、さてこそかゝる教育を甚だ恐ろしとは思ふなれ。而もかゝる形式流が今尙八面に行はるゝとは洵に歎息の至りなり。

詮ずるに、所謂形式流は、全く前に謂へる勅語直譯流に原因し、勅語直譯流は全く前に說明せる原則と方案との無差別混同に胚胎す。是れ、取も直さず、方今の倫理教育界に横たはれる根本的誤謬の隨一なり。

之れを要するに、此の種勅語直譯流の倫理教育は、一方に於ては品性陶冶の活事業を死儀式的、機械的事業とならしむると同時に、他方に於ては隱然、無意の間に

勅語の神聖を冒瀆しつゝあるの惡教育と評すべし。何となれば、年齡やう〳〵に十三四歲、單純なる七情の區別すらも未だ十分には會得しかぬる小學、中學の未成童に向ひて結婚を說き、夫婦の和を說き、若しくは出產を說き、師父たるの任務を說くがごときは、無用なるはいふまでもなく、兼ねては皇室に對し奉りて不敬千萬の振舞なり。無用なりと意識しながら、ふんだんに勅語を濫用し、無我夢中の兒輩をして粗末にふんだんに記誦せしむるは、譬へば奧深く厨子の裡に安置し奉るべき黃金佛を、屢〻開帳して不信徒の玩弄に打任すと一般信心の上よりいへば大不敬なるべく、方策の上よりいふも甚だ愚劣の振舞なり。さるにても其の初め、かく勅語を濫用するの俑を作りしは誰れなりけん、今更其の人を追求する要はなけれど、思ふに小才覺ある、但しほんの鼻元思案の似て非なる教育家なりしならん。何となれば、主として師父兄にとて下し賜はりたる教育勅語を(抽象的に宣らせたまひし聖訓を)、彼の世界の衆生に向つて說法したる宗教上の經文又はをさなごにも會得し易き鬼神譚やうの物語など(たとへばバイブル)と同じ效力のものと思ひ、之れを小中學の童年輩に授けて(而も直譯的に通辯して)以て德育の實際上に效あらしめんと企圖せしが如きは、鼻元思案の一證にて

頗る迂闊の沙汰なればなり。

さて上に謂へる直譯流が今の小中學に行はるゝ倫理教育法の多分を占め、隨うて德育不振の一原因は先づこゝもとに伏在せること、及び他の現行の德育方案も大抵幾分かは此の流義に因緣せる故、件の根本的誤謬をだに破却しなば、今の倫理教育の第一障魔はほゞ先づ除くことを得べしといふこと、此の二箇條は此の數年間の觀察と經驗とによりて予がほゞ信じ來りたる所なれど、さりとて現行の德育法は流石に上に謂へる勅語直譯流一點張にもあらず、否、都鄙に行はるゝ諸種の倫理教育方案を其の形式の上より見て分類せば、或は十指を僕へても尙まだ餘る程に樣々なるべし。例へば、彼の『論語』、『小學』、『中庸』等を其のまゝに、若しくは此等の書中よりほゞ勅諭の旨に適ふべき確言、訓言だけを抄出し、程よく分類して編纂したるものを修身科、倫理科の教科書となせる場合、或は何等の秩序も無く、系統も無く、隨時に教訓し、隨時に講話するを例とせる場合或は近世の一倫理學書に準據して、若しくは一宗教、一主義に立脚して、稍〻系統ある倫理觀を注入せんと試みる場合の如き是れなり。さて此等諸方案は其の形式の一樣ならざると共に、其の得失も亦た一樣ならず、隨うて其の缺點にだに多少段等

の差あること勿論也さもあれ徐ろに剖析し見れば、此等諸方案を一貫すべき缺點は、要するに左の三箇條に歸着するものゝ如し。

(一) 其の教育方案に系統無く、其の日々の講話に聯絡無きが爲に、其の教訓に何等の歸着(中心點)も無く、隨うて生徒等の心を鑄陶するの力薄弱なること。

(二) 教訓の中心點は設けられたれども、餘りに抽象的なるが爲に若しくは餘りに重智的(インテレクチュアル)なるが爲に、到底幼稚なる生徒等に會得せしめがたく若しくは誤解せられ易きこと。

(三) 中心點の頗る平易にして、明晰にして、而も稍〻具象的なるもの幸にして設けられたれども、尙慽むらくは非根本的なるが爲に、道念の眞要素を養ふの效薄きのみか、生徒をして形式道德即ち矯飾僞善に流れしむる弊あること。

予は此の三箇條を以てほゞ今の諸方案に橫はれる諸種の失病を蔽ひ得べしと信ずるが故に、先づ第一の缺點よりはじめて下に聊か評論を試むべし。

夫れ沒系統と沒歸着とは、最も普通なる現行倫理教育案の宿弊なり。試に小學校につきて、所謂修身擔當の教員が日々に生徒等に教訓する所を聽け。假に第

一日に語りし所は鹽原多助に關する逸事なりとせよ。即ち勤儉の美德を敎ふる訓話たり。第二日に語る所は何ぞ。楠正成の略傳にして勤王、忠君の美談たり。第三日は何ぞ。曰はく北條時宗が剛毅果斷。第四日は何ぞ。曰はく二宮尊德の苦學孝行。第五日は忍耐、第六日は廉潔、第七日には勇邁、第八日には大膽、第九日には謹愼、第十日には冒險、第十一日には温厚、第十二日には克己。前話と後話との間に脈絡なく、前訓と後訓との間に關聯無く、又歸着點なく、中心點無し。第十三日には博愛、第十四日には愛國、曰はく自信、曰はく恭謙、曰はく博學、曰はく雅量、曰はく公益、曰はく報恩、曰はく養生、曰はく献身と。美德の名目もまた繁褥なるかな、煩瑣なるかな。

小學に於てだに既にかくの如し。況んや此の種教育方案を是認する當事者一輩が中學校倫理科を擔當せる場合に於てをや。其の德行條目の繁多なるや、十分事理を解し、世故人情に通じたる成年だに、或は應接に狼狽して去就取舍に迷ひぬべし。まして十三以上未成年以下の中學生は、名目の送迎に忙殺せられて良心恐らくは痲痺し去らざるを得ざるべし。

此の種沒系統の德育法は、主として彼の訓詁釋述を第一法とする漢學家者流、又は勅語の直譯的解釋を第一義とする形式的教育家、若しくは隨時講話を事とする非科學的教訓家等の平生履行する所なるが、是れ實に方今行はるゝ諸方案中の最劣最惡なる一方案也。然り、かく差別特殊の善行枝葉の德を奬勵するとにのみ忙しくして、却りて平等遍通の道德、根本的道念を涵養啓發するとを等閑に附する德育法、かく無脈絡の種々德を浪りに一時に注入して、徒らに生徒等をして多岐亡羊の觀あらしむる德育法、多少の經驗と相俟たざれば殆ど會得ずる能はざるべき(若しくは僅かに字義、大意程を知解するに過ぎざるべき)教訓を、强ひて形式的に講授する德育法(例へば戸主とならざる間は何の痛痒をも感ぜざるべき事どもを、未成童の少年に向ひて反覆するが如き教訓)、講者みづからすら行ひ得べからざる又は曾て躬行せんとも企てざる底の德行を、强ひて生徒等にのみ奬勵するが如き德育法、乃至は勇、氣と、智、慧との如き相出入すべき美德をすち一貫の根本的を以て綜接する能はざる底の德育法は、是等は實に諸德育法中の最劣最惡なる者にして、恐らく生徒等が心識の上に何等の感銘をも與へ得ざるべき德育の方法なり。

所詮、生徒等は其の聽くを愈〻多くして其の感銘愈〻散漫となり、薄弱となり、何

の得る所もなかるべし、一貫の旨即ち中心點闕如たれば也。未だ感銘だに得ず、焉ぞ實踐することを得ん。感銘せしめずして實行を強ふる、恐らくは僞善、矯飾を行はしむるの媒たらんのみ。蓋し此の種の德育者は智育的にだにも倫理教育の任を盡す能はず、焉ぞ情意育の本領を解せんや。彼等が訓誨は愈〻出でゝ愈々多端なり、子弟は多岐に迷ひて歸趨を失ひ、十年の訓示一德の實蹟をだに見ることなくして了らんとす。否、偶〻律義なる良生徒あるも、恐らく彼の子路と共に「聞くことあらんをを恐るゝ」の感あるべきのみ。窃に思ふ、若し教育家として孔夫子に失ありとせば、そは其の訓誡の餘りに差別に過ぎたる所にあるべしと。況んや後の學者之れを敷衍し、之れに蛇足し、愈〻差別の相を加へ、剩へ泰西學說の斷片をも容れて雜然、漫然と講說し去れるをや。嗚呼かゝる蕪雜の教訓をも謹聽して、間〻健氣にも實踐を企圖する無邪の少年もあるを知らずや。

さて此の惡方案の短を補ひ、兎も角も一歩を進め得たる倫理教育の方案あり。例へば、功利主義などに立脚して普通國民心得といふやうなる通俗倫理說を講授する場合の如き、若しくは中庸(至誠)の德を中心點としてこゝに種々德を綜接し、以て百行を統理せんと試むる場合の如き、若しくは禮といふことを第一位に置き、之れによりて作法、行儀を律し、先づ形式の門より入りてやがて道德の室に昇らしめんと試みる場合の如き、是れなり。(是れは前に擧げたる缺點第二條に相當する場合なり。)

按ずるに、夫の中庸の德は儒家も深く崇尊する所、希臘の碩學も夙に稱美したる所なれば、之れを以て品行の尺度標準たらしむることは、もとより論なし。されど此の標準は純然たる抽象の尺度なれば、喩へば代數の方式のごとく、只〻これのみにては何等の實用にも供しがたきものなるべし。「中庸」とは適宜の義か。過不及無きの義か。過不及無しとは如何なる度合ぞ。何處までが温順にして何處からが無氣力なるぞ。何處までが活潑にして何處からが亂暴なるぞ。將た又「中庸」とは至誠の義か。意を正しうするの義か。若し前の二者ならば、到底、閲歷なく經驗なき小中學の幼年輩が、決して〳〵利用し得ざるべき尺度なるべく、後の至誠の意義ならば、更にまた其の解を要すべく、而して此の至誠の解は甚だ以て困難なるべし。誠を解して信となさんか、尙甚だ足らざるべく、之れに忠の一字を加へんか、信と忠との先後本末は如何。假に明瞭に解釋することを得て、ほゞ訓誨の中心たらしむるに堪ふべしとせんも、講者みづからの覺悟は如何。

能く直覺說に安立して講を遂ぐることを得べしや、如何に。理性說に立脚して果して能く毅然たるを得べしや、如何に。

よしや自家の信念程は十分堅固なるを得たりとするも、正意、無邪、公明、純良などいふ茫然漠然たる標準は、果して少年が去就進退を規律するに足るべしや否や。例へば「正を蹈みて怖るゝ勿れ」と誨へんか、「おのが心に屑しと思はぬことは行ふなかれ」と訓へんか、(多分かくの如きも至誠の一部分なるべしと思ふ)其の時生徒師に向ひて、如何なるが善正にして如何なるが邪惡なるか、先づ其區別を敎へよと乞はゞ如何。若し至誠の外に善を立てなば、至誠は最上善即ち德行の中心點たる資格を失ひ、勢ひ第二位に墮せざるを得ざるべく、若しまた至誠を至善と立てんか、(成年に對してならばいざ知らず)幼童輩に對しては、「虛言せず」、「違約せず」、「欺かず」、「誣ひず」などいふ消極的善行の外は、殆ど奬勵するに術なからんとするのゝ虞れは無きか。蓋し至誠、中庸などの眞意義は幾多の世故を經てのみ會得せらるべく、少年には到底誨へがたきにはあらざるか。

若し夫れ禮を以て行儀を律するの法は、其の實行の點よりいへば、至誠又は中庸をば規誡の中心となすには優りて、一應便宜なるが如く見らるゝ也。故に此の

機械的敎訓法は往々にして都鄙の小中學校に用ひられ、就中小學校は、其の如何なる德育法を取るにも拘らず大概幾分か此の法を併用す。多數の頑童等を引廻はす場合には、かゝる押付わざもげに止むを得ざることあるべく、また甚だ重寶なる場合もあるべし。中學などにすら(例へば官立の學校などには)只管此の「禮」といふものを振かざして生徒をおさへつけ、强ひて秩序を整ふる向きもあり。これを勸工場向きの敎育と名づくべし、一寸見づらがよきばかりなり。予曾てさる中學の新入生等に「おことらが曾て在學せし學校にては、倫理科の時間に如何なる講話を授けられしか。或は何等か敎科書を用ひたりしや否や。師は如何なる人にて、其の最も力を入れて訓誡せられたるは如何なる事なりしぞ。而しておこゝとらが最も深く心に染みて、今も尙記憶せる美德の名若しくは訓誡は何なるか。」といふ意を臨時試驗の問題にして出だし置き、やがてゝもしいだす答案を讀み見しに、首都の學校より來れるも地方より來れるもある多くの生徒の中にて、答はもとよりくさ〳〵ながら、其のうち心にとまりて忘られぬは首都のさる中學より轉じたる生徒なりき。其の答の意によれば、師は知名の老漢學先生にして、敎科書は『論語』なりとあり。而して其の深く心に染みて忘られぬは、德

は禮、又先生が最も力を入れて講ぜられしも禮と答へてありき。『論語』ならば仁とか、孝悌とかありげなるにと聊か訝しみて、答案者の貌を何心なく見れば、見るからいかにも頑童らしく、さてふと思ひ廻らせば件の老漢學家先生は聞えたる傲岸の先生なりき、さては『論語』を利用してきびしくまつけられけるならんと、我れ知らずほゝ笑まれし事もありき。

總じて禮を屬行するの結果は、怯懦の生徒をば畏縮せしめ、臆病にならしめ、小才覺ある生徒をば矯飾せしめ、狡猾にならしめ、有爲の氣概ある生徒をして二樣に其の性の美所を失はしむ。或は激しく反撥するの餘り其の心ねじけ、或はこれが爲に意氣挫け銷沈して、不活潑となり、悒鬱となるなど。官立學校の生徒などに間〻かくの如き實例あるを知るなり、うれふべき事と謂ふべし。併しながら是は當然の結果のみ。到底幼年輩には會得し難き多面多樣の禮を、世故人情に通ぜざる者より見れば殆ど端倪すべからざる臨機應變の規律を、孔門の十哲すらも屢〻十分に會得しかねて迷惑したるらしき此の物をば、強ひて幼年者に課せんとすれば、勢ひ強制的、威令的となり、全く機械的とならざるを得ず。最も肝要なる禮の應用は殆んど誨ふるに由無きが故に、只管貴人長者の敬すべきこと

を說きて、恰も擊劍家が試合の式を教ふる時の如く、出入行住の禮式など、眞の道德の修練には何の用も無き徒ら事に心意を勞せしめ時間を消費せしむ。浪費徒勞、まことに勿體無きことなり。

流石に中學校に從事するほどの教師等は、殊に彼なたの教育書類乃至倫理書類などを幾何か讀み浮べたる向きの師は、かゝる非科學的統一の實際に何等の效用も無きことを看破し、稀れには泰西の倫理教科書を翻譯し、若しくは勅語の旨は體しつゝも脚を功利主義などの上に立てゝ、倫道の大意を講ずるもあり。此等は其の科學的なる點に於ては遙かに上述の諸方案に優り、尠くとも智育的德育方案としては先づ立派なるものとも評すべし。されどこゝに一つの困難は、相手が未成年の少年なるが爲に、例の最大數の最大幸福の說明若しくは幸福と快樂との辨別、利他と利己との關係の說明などいづれもむづかしく、兎もすれば功利主義又は進化主義をば純粹の利己主義又は快樂說とわいだめなきものゝやうに誤解するの傾きを生ずることは是れなり。省思すれば、げに是れも無理ならぬ譯なり。隨分立派なる紳士中にすら、功利主義と快樂說とをごつたになせる人も間〻あるをや。中學校の少年等に功利主義のほのめかしは荷が勝つ筈

也。要するに、かゝる教へは假に其の主義を至理とするも德育法案としてはふさはしからず、況んや其の說に弱所尙多かるをや。

かくいはゞ一部の論者は言はん、單に功利主義などに準據して倫理を講ずるやうなる者、今はもはやあるべき筈なし、さる必要は無き筈也。目に見えぬ時代の精神は頻に吾人を促して所謂國家主義の唱道に從はしむ。將來の國是はあらゆる方面に向つて國家的ならざるべからず。國民教育の理想の如きも勿論國家的ならざるべからず。德育方案の系統もかくの如くにしてこそおのづから成るべけれ。組織せられ、其の教訓の中心點も此くの如くにしてこそおのづから成るべけれ。何を苦しみてか他に準據を求めんや。功利主義、進化論に美所あらば、其の美は取つて我れに攝すべく、權力說に美所あらば、將た奪うて我が實となすべきのみと。此の說は彼の中學倫理科細目取調の結果と相結びて今大に行はる。

此の種の論者の鐵壁は、萬世一系、君民同祖、無比の國體といふことなり。就中君民同祖といふことを中心の要義として、爰に國民道德の根據を据ゑ、倫道を說くに當りては、孝を發起點となすと同時に忠孝一致といふことを唱へて、いみじくも私德と公德とを綜接す、かるが故に秩序整然として加ふるに一理貫透の妙致

あり。前掲諸方案に勝ること萬々、現行德育諸方案中の白眉とも評すべし。

近時新撰の倫理教科書類は、大抵此の說に則りて編著せらる。例へば井上哲次郎、高山林次郎兩氏共著の『倫理教科書』の如き、明かに此の種の意見に基きて著されたる者と云べく、若しくは井上圓了氏撰の『中等倫理書』、是れも根柢は同じ說に存するもの、取りわけ秋山四郎氏編『中學倫理書』に至りては、簡短に件の旨を代表し得て最も通俗に平明也。下に其の數節を抄錄して評判し、さて後に此の種方案の是非に及ばん。

(下) 教訓の發起點を定めざるべからず

秋山四郎氏編『中學倫理書』は、其の出版主意書に見えたる所によれば、曩に文部省にて調査せられたる尋常中學校倫理科細目に準據し、每學年一卷づゝの配當にして第一學年より第三學年に至るまで三學年の教科書に供ふる爲に編述せられたるにて、其の上、中の二卷には二宮尊德、熊澤蕃山、伊能忠敬など名士八人の傳記を揭げ、其の間に往々賢哲の嘉言を援引し、何等の系統をも立てず、只〻「機に臨み類に觸れて人倫道德の要旨」をほのめかし、さて下の卷即ち第三年級の卷に至

りて稍〻一定の系統を立て人倫道德の要旨を論じたり。上、中の二卷は本論に用無ければ除き、只〻下の卷の倫理論のみを考査すべし。

編者は先づ、共同團結の人類に必要なること、團結の原因の一ならざること、中に就いて血統團結即ち血統を同じくするよりして生ずる團結の最も鞏固なる團結たること、我が國體は實に此の血統團結より成れること、故に我が國體は萬國に匹儔無き良國體たる所以を略說し、さて曰はく、

我が國體は血統團結より成れるを以て列聖の臣民を愛撫し給ふこと御子の如く、臣民も亦列聖を愛敬すること親父の如し。我が忠孝の大道は全く此の自然の愛情より發生したるものなり。故に我が國の忠孝と異邦の忠孝とは大に其趣を異にす。異邦に在りては君臣の血脈異なるを以て忠ならんと欲すれば則孝ならず、孝ならんと欲すれば則忠ならず、往々忠孝兩全せざる事あり。我が國にては則然らず、君と父母との血脈同一なるを以て君に忠なるは即父母に孝なる所以にして、父母に孝なるは即君に忠なる所以なり。忠と孝とは其の名異なれども其の實は一なり。

げにいみじくも辯ぜられたりけり。我が國民的道德史を簡叙せるものとしては、又我が國民的道德理想をほのめかしたるものとしては、何人も此の說に異存無かるべき也。井上圓了氏も其の著『中等倫理書』第三に說いて曰はく、

夫我國の萬國に卓絕する所以は皇統一系、君臣一家なるにあり。故に一國の道德を論するにも、一家の人倫を論ずるにも先づ皇室より始めざるべからず、而して我等臣民が皇室に對する道は忠孝一致の大道に外ならず。

又曰はく、

他國にありては忠孝其途を異にし、我國にありては忠孝其致一なる國風なれば、君に事へて忠なるは即ち親に事へて孝なるものとす。

と。井上哲次郎、高山林次郎兩氏共著の『新編倫理教科書』首卷にも亦た曰はく、

他邦にありては國家と主權と必ずしも一ならず。君主は單に人民の代表者の如きもの多しと雖も、我邦にありては即ち然らず。國家と皇室とは其名は即ち二なりと雖も其實は即ち一なり。（中略）我邦は是の如き萬國に比類無き國體なれば其道德も實際に施す上に於ては亦自ら此國體に從て一國の特色を有せざるべからず。特色とは何ぞや。忠孝の二德是なり。（又略）忠孝二道は我國固有の道德にして所謂國民的道德と稱すべきもの（又略）將來益〻國勢の皇張を圖り宇內をして我威德を畏敬せしめ以て皇祖皇宗の企圖し給へる鴻業を大成せんと欲せば益〻此君民一家忠孝一致の美風を發達せしめざるべからず。云々。

按ふに、此等諸說はひとり其の論脈を同じうせるのみならず、其の主旨將た同一

なり。すなはち忠孝一致といふことを以て國民道德の基礎(中心點)と定め、あらゆる國民的本務を之れに依據して割り出ださんと試みたるの點は、いづれも皆同案なり。蓋しかく言ひ合せたらんが如く同揆の倫理說の行はるゝに至れるは、畢竟するに彼の中學校倫理科細目取調の結果たるに外ならずと雖も、亦以て此の種國家主義的倫理教育案の現教育社會に歡迎せられつゝあるの一徵となすに足る。

さて此の種倫理講話を讀みて、ふと念頭に浮び來る第一の疑問は、かくの如き講說は中學校の教科用たらんよりは寧ろ國民教育策即ち政策上の參考として必要なる議論にはあらざるか。例へば、文部省內の當事者間などにて唱へらるべきものにはあらざるか。若しくは教育當事者などが平生の心得の爲に諳記し置くべき底の議論にはあらざるか。教科用即ち品性陶冶用の講話としては殆ど無效能なるものにはあらざるか。かゝる理論の效用は、齊家經世の必要をば既にほゞ心得たる父母師兄などの上にこそあれ、幼年の子弟に取りては肝腎の眞旨會得しがたく、隨うて何等裨益する所も無き無用の長物にはあらざるか、といふ疑問是れなり。

現に井上高山の二氏は其の『倫理教科書』中に明言して曰はく、

蓋し一國の教育は其國民の歷史、習慣、特性等に從て之れを施さゞるべからず。然るに若し歐米諸國の教育法を採りて直に之を我邦に行はんとすれば、國民に適せざること少からざるを以て、此によりて利益を生ずるよりも却て弊害を來すこと多かるべし。云々。

是れ豈教育策家の口吻にあらずや。而もこは實に尋常中學第一年級即ち年齡十三四歲を通例とせる第一年級生徒に讀ましむべき教科用書中の講說なり。苟も尋中學校教授に經驗あるの士はかゝる講說の到底實際用に不適當なるを認むべきにあらずや。蓋しかくの如きは教育策家の內幕話たちんのみ、善惡の標準すらも未だわきまへざる幼者に向つて、之れを論さんと試るは對牛彈琴の所爲に近からずや。然るに井上圓了氏も亦た曰はく、

已に皇室ありて後人民あるを知り、又億兆の人民大抵皆皇室の一族末裔なるを知れば、四千萬の人民は皆同胞兄弟にして且王臣なり。(中略)已に我國は君臣一家の國風なるを知れば、忠孝一致を以て人倫の大本となせることは自ら知るべし。云々。

と。是れ將た頗る献策者的口吻に髣髴たるものにあらずや。若し夫れ倫理教育の本願は倫理知識の注入にあらずして品性陶冶に在ること勿論なるが、件の

目的は果してかゝる三段法的説明に依頼して遂げらるべしや否や。父母、師兄其の他の教育の當事者に向つて、我が國民道德の基礎は宜しく之れを君、民、同祖、すなはち忠、孝、一、致といふ點に置くべし、其の然る所以は云々なりと、兩井上博士の聲に倣ひて、此の般教育政策の原理を説かんか、苟も常識を具へたらん師父兄等は、之れに對して殆ど何等の異議をも挿むことなくして立地に首肯すべし。何となれば目下の教育政策としては、兩博士の説かゝる所頗る其の宜しきを得たればなり。但しかくのごとき論理的説明(教育策中の一則)をば直ちに移して實際の教訓、用に供すべしといふものあらんか、餘人は知らず、余は呆然たらざるを得ざるなり。

思へ、親を愛敬するの情すらも未だ殆んど固定せざるが成童前後の習ひにあらずや。然るにそをば其の儘に打棄置きて、直ちに忠君の大義を説かんは教訓の適當なる順序なりや否や。成年に取りてだに、君、民、同祖、忠、孝、一、致などいふ理窟は、いと睹易きには相違なけれど只〻解し易きばかりにして、其の人に人情なくんば、よしや此の理を得知ればとて必ずしも之れが爲に忠孝の念を奮ひ興すべしとも思はれず。ましてや人情の根本たる親を愛する、の情念すらも未だ十分

には固まらざる少年者流に於てをや。忠、孝、一、致、説を主張する人々はそも如何にして此の般の困難に打克たんとはするぞ。

或は往々にして孝の德を自明の德即ち直覺的に自得せらるべき德なるが如く斷説し去りて、爰に教訓の基礎を立つる人あり。されど孝の德は果してその如く直覺的の自明なる德なりや否や。げに嬰兒が母を慕ふは自然本具の情なるべし、而も乳を求めて慕ふの情と、求むる所なくして愛するの情即ち所謂、孝、の情とは、相似て同じからざること勿論ならずや。然り、此の二者は一ならず、孝心絶無なる子女も許多あるなり。果して然ちば此の般孝心絶無なる少年等を陶冶するに、彼等は如何さまの手段をか用ひんとするぞ。忠孝の大切なる所以程は或は之れを會得せしむるにかたからざるべきも、件の忠、孝、を實踐せんの念を果して如何にしてか起さしむべき。父母をすらも私欲を離れては慕ふことを知らざる少年輩に、彼等は如何にしてか道念を注入せんとするぞ。彼等は彼のソクラテス一流の倫理論者にひとしく、ひたへに智識にのみ重きを置けるか。知德必ずしも一ならざるの眞理を閑却せるか。

秋山四郎氏は此の困難に應答せんが爲なるが如く、聊か忠孝の解釋を試みたり。

げにや解釋だに宜しきを得ば、抽象的なるが如き忠孝一致說も或は以て有效なる實際的敎訓となすに足るべければ、暫らく氏が解釋を謹聽すべし。秋山氏は曰はく、

世人忠といへば則國家の危難に臨み身を捨て、君國に報ゆるのみをいひ、孝といへば則家に在りて善く父母に事ふるのみをいふ。是れ誠に忠孝の道なりと雖、是れのみにては未だ以て其本義を盡さず。凡そ日常實踐の一擧一動も皆忠孝の範圍を脫するを能はず。（中略）今之を生徒の身上に就きて論ぜんに生徒の學業を勉勵するは父母の悅ぶ所にして皇上の嘉尙し給ふ所なり。然らば則生徒の學業を勉勵するは則忠孝の行爲にあらずや。兄弟に友にして朋友に信なるは是れ亦父母の悅ぶ所、皇上の嘉尙し給ふ所なれば則忠孝の行爲にあらずや。これに反して學業を懈り兄弟相鬩ぎて朋友に信ならざるは父母の悅ばざる所、皇上の嘉尙し給はざる所なれば即之を不忠不孝の行爲といはざるを得ず。云々。

と。さて尙『禮記』の祭義篇を引きてほゞ同義の解釋を反覆せり。

按ふに、此の解釋や、果して幾何の價値かあるぞ。偏に父母の悅ぶが如きことを行ふが孝なるか。兄弟に友とは如何なることぞ。明友に信とは如何なることぞ。孝の德の解釋をすらも要する底の生徒をば、友または信などの義を既に會得したるものゝ如く假定しての敎訓は妥當なりや否や。更に解釋を要するが如き語を用ふる解釋は、宜しきを得たる解釋なりや否や。否實際に效用あるべき解釋なりや否や。此の種、父母の鼻息を窺ふ事の外に何等の標準をも與へざる孝の解釋は偶〻以て阿諛追從を奬勵するの媒介たるには非ざるか。如何。

秋山氏また曰はく、孝行の第一義は巽順に在り。人の子たる者幼時に在ては何事も父母の命に從ひ敢て拂逆すべからず。（中略）父母は世故を歷ること久しく經驗多きを以て、學識の有無を論ぜず、其の言の實際に適するは幼年の遠く及ぶ所にあらず」と。此の訓誡果して能く維持せらるべしや否や。

夫れ尋中四五年級程度に至れば、識見、情操の上より見て、明かに其の父母より賢なる者間〻あり。經驗こそは劣りたれ、其の時勢に明かなる點に於てはたしかに父母を凌ぐ者間〻あり。例へば、父母には虛禮を愛し、方便をよろこび、虛僞詐謀を行ひ、甚しきは不義不法を行はんとする者、或は社會に有害なるが如き舊習を頑守せんと試るがごとき者屢〻有るに（日々の新聞紙の第三面は此の事の實證を供しつゝあるにあらずや）子は之れを屑しとせざることあり。蓋し親子其の見る所を異にすると同時に、子正しく親邪まなるが如きことは社會、遷移、時代、

の避くべからざる現象にあらずや。志かるに秋山氏の説かれたるが如くに、強ちに子のかたのみを抑へ、敢て親の非を長せしめんとするが如き訓誡は、果して妥當なる訓誡なりや否や。まして「絶對的に巽順ならざるべからず」と斷言するに於てをや。

井上、高山の二氏は曰はく、

夫れ人の愛する所吾身より重きは無し。而して吾身の生を得たる所以のものは即ち父母なり。父母に對する本務の亟且つ大なる又言を須ひざるなり。（中略）父母は吾幼稚の時吾を愛育したるのみならず已に自立して生活するを得るに至るも父母の吾を思ふの情は終生渝ることなし。（又略）故に子たるもの篤く其の大恩を感銘し日々報效を圖らざるべからざるなり。（井上圓了氏の説將た之れに外ならず。）

此の般純乎たる報恩説、而も利己主義に基けるらしき嫌ある此の種報恩説は、果してよく道念を啓發するの效を有し得べしや否や。報恩説は tit for tat 的打算的倫理説なり、「父父たるが故に子子たらざるべからず」といふ訓誡也。若し父父たらざる場合あらば如何せん。方今の如き利己時代に於ては父母の不慈なる雲の如し。予は報恩説、就中利己主義に立脚せるが如き報恩説のいと〳〵

脆弱なるべきを危疑せざるを得ず。よしや假に報恩説を以て維持し得らるべき確説なりとするも、倫理教育上必要とする所は孝の修めざるべからざる所以の説明にあらずして「如何にするが孝行なるか」即ち「孝行とは父母に對して如何さまに行ふことなるか」といふ疑問の解答なり。孝の解果して如何。井上、高山の二氏は之れに應じて曰はく、

父母の恩に報ゆるの道二つあり。父母の體を養ふは其一にして父母の志を養ふは其二なり而して之を貫くに愛敬の誠意を以てすべし。

又曰はく、

愛して敬せずんば狎れて禮を失はん。敬して愛せずんば遠ざかりて禮を缺かん。孝道は愛敬並び行はるゝにあり。云々。

秋山氏が之れに對する説明も、右兩氏のと殆ど符節を合せたらんが如し。而して秋山氏も前の二氏も、竟に愛敬の何物なるかを解せず、さながら直覺的に自明なる事の如くに説き去れり。愛や、敬や、果して自明なるべきか。親に對する愛とは如何にすることぞ。敬とは如何にすることぞ。是れはた秋山氏の所謂巽順の旨意に外ならざるか。所謂父母を養ふとは如何なる義ぞ。

秋山氏は纔かに短解を下して曰はく「志を養ふとは父母の心志に拂逆せず能く其の心志を樂ましむるをいふ」と。果して然るか。然らば孝の要義は偏に父母を悅ばしむるにあり、絶對的に巽順なるにあり、此の二義の外に出でざるが如し。さすれば所謂孝子たらんとする者は、まづ第一に自由意志の活動を抑止することを以て修業の發端となさゞるべからず、然り、唯命是れ奉ずることに全力を注がざるべからざるが如し。何となれば如何なることが親の心を悅ばし、如何なる行ひが親の心を安んずべきかと詰問するに至れば、巽順又は愛敬の義に叶ふ言動と答へざるを得ざるべく、さて如何なるが巽順、如何なるが愛敬と再詰するに至れば、解釋やうやく循環して、親の吩咐に悖らざるが巽順、親の心を慰め安んずるが如き言動是れ愛敬と答へざるを得ざるべく、さて如何なる言動が親の心を慰め且つ安んずべきかと三問すれば、竟にまた消極的說明に戻り來りて、親に不快を感ぜしめず、心配をかけぬこと是れ孝なりといふの外、亦た他語なきに至りぬべし。

嗚呼かゝる消極的訓誡は有爲活潑なる新國民を作るべき尋常中學の訓誡たるに叶ふべしや否や。況んや此の訓誡を擴充して忠孝一致と說き、君國に忠なる

の道將た此の消極的覺悟に外ならずと誨ふるに於てをや。予はかゝる消極的訓誡の品性陶冶の實際に、殆ど何等の效用をもなさゞるべきを疑はざるを得ず。かく詮じ來りて見れば、所謂國家主義の倫理教育案は、教育上の政策としては頗る宜しきを得たるにも係らず、また君民同祖、君臣一家、忠孝一致などいふ名目のいとめでたげに打聞かるゝにも係らず、將たいみじくも儒說を攝取し、孝を起點となして、こゝより訓誡を說きはじめたる手際のいと〳〵巧みなるにも係らず、品性陶冶用の訓誡としては、いとも〳〵迂濶なるものにて、そが教訓の根本と立てたる孝の德の實質をすらも、肝腎の正實たる幼者に對しては、消極的意義以外にいでゝ殆ど解釋する能はざるもの也。孝の解釋だに尙然り、況んや忠の解釋をや。忠と孝とは名は殊にして實は一なり。「親の悅ぶ所はやがて皇上の悅ばせたまふなりといふ。實際上の訓誡として此の語いかばかりの眞價かあるぞ。解し得て巧はずなはち巧也、才はぢけたる今の世の少年をして首肯せしむるに足るべしや否や。現に世上の親の中には不心得の輩夥しきにあらずや。其の家に在るや、實の子女に對しては遠慮なきが故に、利己主義一天張の劣情を吐露し、若しくは無理無法の私欲を主張する者も尠からざるにあらずや。今の錚々

たる政治家、宗教家などのうちにも、現に私欲一方の徒と認められたるも多きにあらずや。學者、教育家の中にも偏に個人的利福のために國家的事業を私するの徒も尠からざるにあらずや。日に月に現の證據が反論すなるに、かゝる事實ならぬ事にすがりて、そこに訓誡の命脈を繋がんとするは、いと〳〵覺束なきわざにあらずや。畢竟かゝる撫附沙汰が行はるればこそ我が國の德育は振はざるなれ。

かくはいへど、予は所謂國家主義の教育策を敢て排せんとするにはあらず。就中孝を百行の本と立てたるが如きは、族制國の教育策として頗る其の當を得たるものなり。德行は孝にはじまりて忠君、愛國、博愛に至極すと說くは、蓋し最も穩當なる教訓なるべき也。何人も之れに對して異議なかるべく、將た何人もかほどの理は一わたり聽きたるのみにて會得するを得べし。即ち孝を百行の本と立つるは、彼の至誠若しくは中庸などの德を行爲の中心と立つるものに比して、其の優ること數等なり。例へば、其の平易なる點に於て、其の明晰なる點に於て、其の具象的なる點に於て、いづれもはるかに優りたれど、尙憾むらくは未だ積極的道念の基礎となすに足らず、隨うて實際教訓の中心點としては、尙一歩相及

ばざる如き趣あり。さりとて前段に述べたるが如き消極的訓誡を發端點として常に之れに依據して國民的道德を講說せんか、數年ならずして生徒の大概は温柔となり、無氣力となり、不活潑となり、所動的となるか、然らざれば他人の鼻息をのみ是れ窺ふ無主義、無信念の徒となるか、然らざれば心にも無き追從を物する阿諛矯飾の人となるか、いづれにもせよ、正直剛邁の氣質、有爲活潑の品性などは、到底之れを陶冶するに由なかるべし。

蓋し孝や、仁に至るの本たるには相違なけれど、未だ以て道念の根本となすに足らず。人は何が故に孝を行ふにやと問ふに至れば、孝以外に出でゝ道德の根源を求めざるを得ざればなり。之れを要するに所謂國家主義的倫理教案の弱點は、其の教訓の發端點たる孝の德が十分に明解せられがたく、又積極的なる能はざる所にあり。而して其の明解せられがたきも、將た積極的なる能はざるも、畢竟は孝の德が所謂根本的道念ならざるが爲なり。道念の根本を涵養せんとすれば、更に孝よりも以上に遡らざるべからざる必要あるなり。然るに國家主義の論者は勿論、世間多數の教育家が、かゝる根本的道念の何たるかに關して、曾て秋毫も思を勞したることもなく、まして、やかゝる根本的道念を探りて之れを教

訓の中心點若しくは發起點と定むることの必要を認めたることもなく、漫然として忠孝を說き、情育を說けるは、そも〳〵何等の心なるちん。智育のみを專一と主張する輩ならばさしもあらなん、苟も情意育の必要を認めたる教育當事者にありながら、最も大切なる動機の取調を等閑にして、只〻漠然と情意の作用を論じ、如何なる情意が道德的行爲の眞動機たるべきかに關しては、何等の明解をも與へざるは、又は與へんとも試みざるは、學者としては不深切、教育家としては迂濶なる振舞ならずや。

近時動もすれば世間に向ひて、倫理教育は極めて困難の事業なるが故にと言ひて、如何にも多年の問焦慮苦心したりげに辯解する當事家無きにあらず。倫理教育の至難なるは、まことに其の人々の言へるが如し。但し彼の人々はよくかゝる事を口にするの權利あるべしや否や。夫れ百方思を焦し十分に法を講じて後にとそ事業の難易をば口にすべけれ。彼の『論語』、『中庸』などをさながらに講授せる人々、彼の勅語を直解せる人々、教育策としては不可無きも實際教訓としては不妙なる教育案を取調もせで採用せる人々、かゝる人々は倫理教育の難易に關して多く辯論するの權利ありや否や。予は寧に其の人々の爲に否定の

運命を危きざるを得ず。

約言すれば實際教訓の發起點（フォーチングポイント）を定めざること、即ち眞動機に就いて根本的道念を啓發せざること、是れ之れを現行倫理諸教案の根本的誤謬なりとす。

論者或は曰はん、かゝる根本的發起點は、決して一旦夕にして定めらるべきものにあらず。何をか道念の眞動機と見做すべき、若しくは何をか倫理教育の發起點と定むべきなどいふ根本的問題は、倫理哲學上古今の大疑問にして、もとより輕々しく斷定せらるべきものにあらず、將た實際教育者の敢て關與すべきことにあらずと。按ふに此の說全く非なり。予が所謂發起點に關することは、必ずしも心理學上若しくは倫理學上の困難なる問題には非ず。蓋し倫理學說の基礎即ち發起點を定むると、倫理講話（即ち實際教訓）の基礎即ち發起點を定むると、或は全く一なるを得べく、或は必ずしも一ならざるを得べきものたり。然り、一ならざるを得、故に學說的基礎として唱道したちん時には、種々の難問と種々の疑團とに撞着すべき發起點も、之れを實際教訓の基礎として主張すれば、何等の異論にも逢着せざることを得べし。其の故何ぞや。他無し、學說上に謂ふ基礎は全系統を貫いて絕對的に確實ならざるべからざれど、教訓用としての講話の

基礎は實際有效にして弊無ければ足る、必ずしも其の他を望まざれば也。

例へば、今倫理哲學の論壇に立ちて根本的に道念の動機を論じ、さて重情說若しくは重智說を偏奉せんと欲せば、立ちどころに議論湧出すべく、その是非を決定することは、頗る容易ならぬことなるべし。然るに暫らく學說を離れ、單に實際德育の便宜上より說を立てゝ、まづ兎も角も或種類の情念(例へば忠恕、克己)を涵養すべしと說かば、彼の理智にのみ重きを置くカント派の峻嚴論者も、彼の結果にのみ重きを置くベンサム派の功利論者も、或は一樣に可認し、只管其の實效如何を俟ちて是非を斷ぜんと欲することあるべし。之れを要するに、總じて學說は logical consistency に重きを置き、敎訓は practical consequence に重きを置く、是れ其の必ずしも是非を一にせざる所以なり。

さて如何なる感情、思想若しくは行爲が此の種實際敎訓上の發起點たるに適すべきか。如何なる手續によちば、かゝる發起點は見出だし得らるべきか。按ふに、敎ふる人の方よりいへば、實際敎訓の發起點たり、敎へらるゝ者の上よりいへば、諸德行の根本たるべき道德的端緒は、

(一) 必ずや最單純なる情緒若しくは意志たらざるべからず。最早分析すべか

ちざる、最早說明を要せざる底の根本的動機たらざるべからず。然らざれば、彼の「孝」の德の場合にての如く、更に此の情を皷吹すべき根本的動機に遡るの必要を生ずべく、若しくは「公益を重んずるの念」などの場合にての如く、更に「公益」の何たるかを說明するの必要起るべし、未だ以て眞の發起點たるの用をなさしむるに足らじ。

(二) 且つや件の情念は、力めざるも自在に發動する底の者にあらずして、寧ろ人々が自誡自戒して力め修むるの必要ある底のものたるを要す。然らざれば彼の旨動(アフェクツィオン)若しくは肉欲(センシュアルアペタイト)などにひとしく、全然放任し置きても機至れば發動すべきが故に、奬勵するの必要なく、隨うて敎訓の發起點となすに足らざることゝなるべし。

(三) 且つまた、單に善を好み惡を嫌ふの念、又は惡はなさじ善はなさまほしなどいふ純然たる形式的情念たるに止まるべからず。然らざれば、彼の良心、良智などを根柢とする直覺論者の說と一般、餘りに漠然たる敎訓となり、何等實際上の效用もなきものとなるべし。

(四) 且つまた、件の情念は、時、處、場合、事情、人柄、年齡等にかゝはらずして、每に其の

例を見いだし得べき底のものたるを要す。必ずしも非常の場合を俟つの要なく、家庭にても、學校にても、途上にても、舟車中にても、一たび教訓せられたる上は、旦夕に、出入に、いつも容易く之れを履行するの機會を見いだし得べく、且つ賢愚を問はず、老弱を論ぜず、如何なる者と雖も之れを履行せんの念だにあらば容易く履行し得らるべき底のものたるを要す。彼の「孝」の德の如く父母無き者は之れを行はんとするも行ふに由なきが如きは非なり。又は「忠君」、「愛國」の如く餘りに其の關する所廣大にして幼年輩には到底行ひ得られまじく思惟せらるゝが如きも非なり。之れを要するに、教訓者たる師父兄が、日々其の子弟に接する際にも、絶えず行ひ得べき底のものたるを要す。

(五) 又眞に諸善行の根本たるの名に背くことなく、限りなく廣く應用するも矛盾すること無く、否、むしろ彌〻擴充してさて彌〻其の可なるを見る底の質あるを要す。譬へば、彼のアルファベットの、一字を記するにも用をなし、千萬言の大文章を記するにも用をなすが如くならんを要す。彼の「孝」又は「愛國」の德の如きは、動もすれば誤解せられて、孝は純乎たる私情となり、個人的となりて、忠君又は愛國の情と衝突し、愛國將た躊躇して博愛と矛盾し、人道と牴牾することあり。いづれも擴充的、應用に便ならず。就中孝の如きは由來縮小的傾向に富む。是れ其の根本的發起點たるに適せざる他の一理由なり。

(六) 且つまた、及ぶべくは廣く世人(內外人)の尊信を博するに足るべき儼乎たるオーソリチの後援あるを要す。例へば、釋迦、孔子、基督などの教訓と其の揆を一にするの教訓たるを得ば、更に一段と有效なるべし。否、此等聖賢の教訓と相出入する能はざるが如き發起點は、恐らく甚だ薄弱なるものか若しくは甚だ不健全なるものなるべし。

(七) 何事にも弊は免れがたきものなれば、如何に穿鑿して發起點を立つるも、弊はなほ伴隨すべきが、而も其の伴弊は及ぶべきだけ尠く且つ豫防し易く、且つ其の弊源の知悉し易きものたるを要す。彼の敬神より生ずる妄信、頑信、愛國より生ずる排外鎖國の念などは、其の本來の對的が確定せるものだけに、一たび僻しはじむれば之れを矯治すること甚だ困難なり。及ぶべくばかゝる痼疾的弊害の多からざらんことを要とすべし。

(八) 且つまた、及ぶべくば其の所謂發起點は、單に教訓上の便宜たるのみに止まらずして、學理上より見るも諸道念の根本と認定すべき價値ありて、之れを一

論理學說の基礎とせんに、尙よく深刻なる剔抉に堪ふる底のものなるを要す。すなはち古今東西の德敎をもこゝに立脚して說明するを得る底の基礎たるを得んか、則ち更にます〳〵可なり。

（九）凡そ敎育は、畢竟するに主として現世的事業たるべきものなれば、當代の弊害を除き刻下の缺陷を補ふに於て直接なる殊效なくんばあらず。されば所謂實際敎訓の基礎を定むるに當りても、傍ら此の般の用心を重んじ、先づ當面の急患を治する爲に殊效あるが如きものを擇ばざるべからず。例へば、孔孟が亂離の戰國に生れたるが爲に專ら仁義を唱へたりしが如く、奈翁橫行時代の日耳曼列國に統一的精神の鼓吹せられしが如く、方今の如き物質的時代、爲我的、功利的時代には、恰も之れに照應すべき反對の情操を導入し來らざるべからず。

以上九箇條の制約は、苟も有效なる敎訓を行はんとする者の必ず先づ精査せざるべからざる條件なりと信ず。將た一兩年德育に從事する時は必然に想到すべき箇條なりと信ず。然るに異しむべきは今の倫理敎育の當事者中、未だ曾て此の般發起點の必要なる所以をすら唱へたる人無く、まして、や如何なる情念が

此の般發起點たるに適すべきかなどいふ立入りたる議論に至りては、いまだほのかにだも唱へられたるを聞かず。若し夫れ情育の必要は、遠き前かたより唱へられたれども、其の實際上の方針は、曾て聊かも指示せられたることなく、意育論の唱道は今も尙盛んなれど、如何にして有效なる意育を行ふべきか、其の實際の方案は未だ確定せられたる涉汰を聞かず。嗚呼之れをしも深切なる倫理敎育社會といふべきか。之れをしも十年一日の如く刻苦經營せ　底の敎育社會といふべきか。或は予が見る所誤れるか。

要するに予は根本的發起點の缺如たることを以て現行諸倫理敎案の根本的誤謬と斷信する者なり。

（明治三十二年七月）

方今の倫理敎員

△子を持ちて知る親の恩、此の知ると同義にて敎育の必要を知れる人はじめて倫理科の師たるに堪ふべし。

△敎育學の定義を知れる人よりも、敎育の眞の目的を經驗によりて感得したる

人をこそ倫理科の師とはなしたけれ。

△常識にも人情にも乏しくして兒童學の知識に富める師よりは、後の一者を缺きて前の二者を具へたる師こそほしけれ。

△愚夫愚婦を欺きたぶらかす僞宗教家も憎むべき限りなれど、比較的にいへばこれらは尙しも忍ぶべし、無邪の兒輩をほゝ意識しながらも殘賊して恬然平然たる今の僞教育家こそ堪忍なりがたきものゝ極みなれ。

△凡そ理想は企及しがたきを通例とす然るに今の教育家に至りては其の理想すらも庸劣卑俗甚しきは嘗然として何等の理想をだに具へざるもあり。

△十分に知解せしめてだに實踐せしめがたきは倫理的行爲のならひなるに、今の倫理の師は先づ知解せしむることをすら得せず、然せんとすらも力めず、否、知得せりや否やを精査せんとすらも企てざるなり。

△今の倫理の師が不忠實なることの證は、其の用語の晦澁にして兒童の心に透りがたく若しくは其の說く所の高き(否、高きにはあらず、甚だ卑俗なれど幼者に適せざるのみ)に過ぎ、複雜に過ぎて到底彼等の心に解せられざるべきを顧ることもなし。只管師たる威權を武器として目を怒らせ聲を勵まして講話

する樣の淺ましさを見ずや。心ある父兄は小中學の卒業式などの祝辭若しくは演說に於て其の片影を見とめ得ざるか。沒趣味の長談義の間、教員は恰も巡査の如く、衆生徒の間に自家を配置し、幼年等が私語を戒め、欠伸を抑へ、百方强迫的禁制法を講ずるを見ざりしか。

△兒童を訓誡するに長談義、殊に漢語澤山の、趣味なく陳腐なる、而も大かたに抽象的なる說法は、徒らに生徒らの厭倦を促すに足るべきのみ。欠伸し、顧眄し、退屈して心こゝに在らざるものに向ひ、無理强ひに解しがたき訓誡を注入す、何の效能かあるべきぞ。

△講話、訓誡、演說の際に靜肅を嚴守せしむるはもとより可也、但しかく肅然たらしむる者の本意も肅然たるものゝ意も、眞實に禮を重んじ、長者を敬し、師を尊むの念に基かざるべからず、若し誤りて單に管理上の便宜、否、校長、教員等が似而非學問を來賓に衒ふ便宜などの爲に、當の如き幼兒等をして三時間乃至四時間以上立往生の苦を忍ばしめんか、無情殘忍なり。

△右に類する事情よりして平生小學教員等が奬說する所、主として禮義、忍耐とおぼしく、予が嘗て取調べし結果によれば、中學一年生の過半數が忍耐を第一

の美德と心得たる、其の心根憫れむべからずや。

△又嘗て小學校の卒業式に臨みしに、三時間餘の祝辭やら、演說やら、而も殆ど解しがたき說法ばかりにて、尋常一二年生退屈し疲れはてたる貌いとあはれなりき。其のうちに聊か世才ありげなる敎員の登壇して、只一言二言ながら漢語ばなれしたる（をさなきに解し得らるゝ）事を語る、其の一言だけわかりたるか、花の如き子らの一齊にさびしく打笑みたる、いぢらしかりき。

△今の小中學の敎員、校長等が不深切と冷淡は明白の事實也。試に思へ、彼の煙草や、成人に大害のあるべくもあらず、さすれば敎員、校長等が之れを用ふればとて不都合はなき理なれど、さりとてそれ一つ禁ずれば感化上、陶冶上たしかに著き效用のあるを、それさへ得忍ばず、得實行せざるによりて、彼等が不深切と不熱心とはほゞ知らる。

△師の心に清新活潑なる敎訓は弟子もおのづから清新に感受し、活潑に奉體す、是れ自然の理合也、而して清新活潑の感想は其の現に行ふ所又は行ふ事柄にこそ伴ふべければ、小中學の訓誡は叶ふべくんば一々に師其の人の肺肝底より溢れいでんことを要す。此の意より見て予は彼の冷かなる倫理學說の小

賣講義を排斥す。

△さりとてある小中學敎員がなす如く、狹隘なる自家の經驗、固陋なる自家が見解、若しくは淺薄なる學識、輕忽なる論斷等を根據として管見の人生觀、倫理觀を建立し、之れによりて多數の人の子を陶冶せんとするが如き自負僭越の振舞は無論、排斥せざるべからず、而してかゝる弊習地方小學の校長などに多し。

△畏怖に基く敬あり、愛慕に因する敬あり、畏怖の因だに無く、愛慕の素だに無き所には、景仰の念絕えてあるなし、今の學校の師、就中中學の師には、此の二者の一をだに得ざるもの多し。

△德化の效は此の二者のうちいづれより來るかといふに、愛慕を重しとなす、畏怖は往々にして威令の結果、敬の純なるものにあらず。

△倫理敎育を施すに當りては、其の講話若しくは訓誡に一貫の系統なかるべからざるは勿論なれど、方今の或師等がなす如く、必ずしも形式上に歷々たる系統あるを要せざるべし、否、あまりに形式だゝせ、餘りに科學の講義めかす時は、其の訓誡に氣骨なく、血肉なく、活火なく、生命なく、隨うて陶冶の效缺如たるべし。

（明治三十二年三月）

倫理講話者心得

一、知識を與ふるよりも感銘を與へよ。感銘せしむるよりも實踐せしめよ。

二、されど薄弱なる感銘は明晰なる知識に如かず、故に時としては明透なる知解を與ふることを以て先とせよ。

三、所謂知解を與ふるの法は、一に曰はく眼前の出來事に關する批評、二に曰はく古今の例話、三に曰はく出題して答を募り詰問し批判して斷を下すこと、是れなり

四、就中「何をか善、何をか惡とな す」といふが如き根本的倫理思想に關しては、各級生徒の知恵相應の度合に於て明透なる概念を與へ置くの必要ありとす。

五、さて此の根本的概念に依據して教訓の大本を定め、終始之れを基礎とし、常に之れと分離せざること肝要なり、即ち訓誡の條目は如何に多きも、道德の名稱は如何に繁きも、其の大源は常に必ず唯一なるべし、所謂一以て貫くの確信あるを必要とす。然らざれば生徒等條目と名稱との多きに眩惑して倫道の大主眼を遺忘するに至るべし。

六、生徒等が刻下日常に行ひ得べき底の道德を先とし、然らざるはすべて之れを後とせよ。（例へば、恕、忠、忠恕を遂ぐるの勇、信、約を守るの勇、忍耐勤勉、節儉などの如きは其の人相應の度合に於て實踐し得べき德なり）。

七、最も屢〻聽きたること、最も近く聽きたること、又は最も後に聽きたることを最もよく記憶するは幼年者の常なれば、最も大切なる訓誡は殆ど間斷なく之れを反覆し、其の感銘の銷磨せざらんことを力むべし。

八、されど同事同語の反覆は生徒等をして倦厭せしめ、竟には箋如の念をすらも釀さしむる虞れあれば、教訓の第一要訣は、成るべくだけ德の名稱を口にせざるに在り、例へば、忠恕と言ふ名目を及ぶべきだけ避けて「おもひやり」とか「深切」とかいふ最も通用の廣き語を用ひて、知らず〳〵の間に忠恕の德に薫染せしむるやうなすを可とす。即ち說明によりて領解せしめずして例話、實例などの力によりて心通默會せしむるを要す。

九、總じて、別に長々しく義解註釋する必要あるが如き名目は、むしろ之れを用ひざるを可とす。例へば、忠恕なども、或は忠君の忠と混同する弊もあり、怒の字と見誤ることもありて、直ちに「おもひやり」又は「同情」「同感」と名稱し、「好意」「人情

の厚きこと)又は「他人をたすける深切心」など、やゝ長けれども俗語のまゝに言ふのまされるに如かず。

十、一意(即ち一德の訓誡)未だ十分に貫徹せざる間は、輕々しく他意(他の德の訓誡)に移る勿れ。例へば、堅忍不拔の德を奬勵せんと欲せば、尠くとも三四回は語を換へ、事例を換へ、人物、場合を改めて、引きつゞき反覆して講話すべし。

十一、方今小中學に行はるゝが如き、徒らに幅廣く、數多く、統一なく、聯絡なく、所謂臚列的に、新陳代謝的に物する教訓は、悉く非なり。常に前五條に所謂根本的概念(即ち予が別論に所謂教訓の發起點)に準據して、毎に一以て貫くの用心あるべき也。

(一)尋常中學校教科細目の取調べられし結果、中學の倫理科は課程五箇年の間に、國家に對する道も、家族に對する道も、自己に對する道も、他人に對する道も、社會に對する道も、天然に對する道も、盡く教授せねばならぬことゝなり、剩へ國家の要義を明かにする爲には、國家の概念、國權、國法の性質、國家と個人との關係等をも說き、且つ、將來中等以上の社會に立つべき心得としては、選擧、自治等の公權、貯蓄保險等の私務をも教へ、加ふるに、所謂倫理學の一斑を講授せざるべからざることゝなれり。げにこれ程の倫理智識は、是非とも授くべきものなるべけれど、之れを實行するに當りて、次第あり、先後あるべきは勿論ならずや。方今の諸中學校が爲す如く、未だ何等の修行心もなきもの(即ち道義を行はんと欲するの心なきもの)に向つて、無理强ひにかゝる雜多の倫理智識を注入するは、徒に彼等の道念を散漫ならしめ、專念して實踐することゝの到底企及び難きを感覺せしめんのみ。單に倫理智識を注入することが倫理教育の唯一能事ならば則ち止む、實踐躬行が第一義ならば、かゝる教授法は根本的に不當なるべきなり。

(二)よしや學校に於ける倫理教育は所詮倫理智識を注入することのみに止めざるを得ずとするも、唯〻徒らに諸種の智識を注入し、或は政治學、或は法律學、或は倫理學、或は經濟學、此等諸學の斷片的思想若しくは科語ほどを記誦せしめおくとも、何の效用をかなすべき。學ぶ者にして之れを隨喜し、渴仰するの思なくは、卒業後一年も經ざるうちに悉く之れを忘れ去るべく、隨うて後日の爲に何の實用をもなさゞるべし。かゝる無用の智的實質(matter)を注入せんよりは(智育的といふ方面より觀るも)むしろ不易なる智的形式

(form)を授けおく方幾段か有益なるべし。不易なる形式とは何ぞ。曰はく、論理的に事物を觀察し、研究し、判斷する心的習慣、尙委しくいへば、分類、分析、對照、比較、概括、綜合等の能力を練習しおかば、其の益は終身不滅なるべし。

(三)、按ふに、方今の中學科目は、餘りに繁多ならずやと疑はるゝ程に具備したれど、一つ甚しく闕如せるものあり、他なし、右にいへる論理的能力の練磨を缺けること是れなり。今の中學生は、諸種の斷片的智識には富みたれども、其の最上級即ち第五年級生徒の頭腦だにも、此の點より觀れば、其の疎散なること、劣弱なること、幼稚なること、驚くべし。分析力も、推理力も、綜合力も乏しく、何事も唯〻臚列的に記臆する習癖あり、且つ總じて應用の才に乏し。是れ一は其の心能力の未だ十分に成熟せざるにもよるべけれど、一は明かに今の教授法の結果なり。

(四)、余の觀る所によれば、今の中學校の課目中、かゝる論理的能力を訓練するに最も適當と思はるゝは、數學科につゞいては倫理科なりとす、倫理科をして此の役目を兼ねしむる可ならずや。將た倫理科の本願よりいふも、從來の如き沒系統の教訓は、智育的、德育としても不得策なるを明かなれば、以後は

或堅實なる系統を立てゝ、少くとも四年、五年の上級に向ひては、稍〻科學的なる講話を試る方一擧兩得なるべし。

(五)、分類、分析、對照、比較、類推、概括、綜合、等の智惠の力、縱横に働くやうになり、而して道を求むるの心、道義の何たるかを知らんと欲する心、及び知ちば則ち行はんと欲する意志だにあらば、今の中學にて教授する程の倫理知識、所謂中等國民の心得ほどの知識は、按ふに、第五年生の學力よりいへば、一通讀して直ちに會得するに足りぬべし。或は在學中に講授せずとも、件の教科書をだに示教し置かば足りぬべし。

十二、夫の徒らに「勿れ」幾十條を掲げて、分別乏しき幼者、少年をして去就進退に迷はしむるが如き訓誡を垂るゝ勿れ。例へば、柔弱なる勿れ、さりとて粗暴なる勿れ、などいふ訓誡は、幼者に與ふる訓誡としては、殆ど何の用をもなさゞるべし、此の二者の間に宜しきを得ることは十分の經驗若しくは智見と相俟つて後に漸く成るべければなり

十三、總じて、「中庸」、「禮」、「敬」、「至誠」、「剛毅」などいふ漠然たる美德は、成人すら概して其の眞諦に到ることを難んず、況んや之れを丁年以下、甚しきは成童以下の幼者

の、未だ世故人情に通ぜざるものに向ひて實踐せんことを奬說するをや。其の效の擧がらざるも宜ならずや。

十四、及ぶべきだけは、非常特別なる場合の例話を避けよ。道德は境遇に伴はざれば實にしがたきやうに誤解せしむる虞れあれば也。貧ならざれば孝を盡しがたく、國亂れざれば忠を盡しがたく、要するに何事か非ならざれば仁義を行ふに地なきが如く思はしむる弊生ずればなり。

十五、餘りに多く過去の例のみを擧ぐる勿れ、隱然の間に崇古退嬰の念を誘致する虞れあればなり。

十六、餘りに多く外國の例のみを擧ぐる勿れ、隱然の間に崇外卑屈の念を養成せる虞れあればなり。

十七、餘りに偉大なる人物の傳のみを語る勿れ。就中誇張的叙狀を避けよ。幼者をして到底企及しがたしと感ぜしめ、隨うて所謂道德は日常生活若しくは庸人生活には密接せざる、一種客在的理想なるが如く思はしむる虞れあればも也。

十八、君子偉人の傳記、逸話等を語るに當りて、餘りに屢〻讃美の語を重疊し、誤

つて少年者流が虛誇名聞の念を皷吹する勿れ。所謂名聞心も、功名心も之れを利用すれば向上の一具たるに相違なけれど、尙爲我的現代の傾向より見れば、之れを皷吹するの結果は頗る關心すべきものあり。君子傑人を讃美するはよし、只〻之れと同時に、道義を行ふことの人の本務たることを道破するを怠る勿れ。

十九、予は、此の理より觀て、彼の信賞必罰を倫理敎育の一主要方便となす敎育法を全然排斥す。かゝる敎育は、明かに德育の第一義を遺忘せる者。かゝる敎育は、德と法律との畛界を撤却せんとする者。かゝる敎育は、道義の眞源を涸却せんとする著。

二十、規律を嚴にし、典禮を重んじ、所謂形式的整理を事とする諸學校は、大抵賞罰の法を以て陶冶に資す。されどかくの如くにして成れる陶冶の功は、眞に淺膚的たるのみ、而して其の弊や擧げて言ふべからず。才はぢけたるは之れが爲に狡獪の邪路に入り、內氣小心なるは之れが爲に意氣ます〳〵沮喪す。矯飾僞善の惡風かくの如くにして起り、譎詐欺罔の惡習かくの如くにして成る。少年が特有たる快活と活潑と無邪淸淨と天眞爛熳とは、之れが爲に地を

拂ひまた殆ど見るべからざるに至る。是れ實に方今行はるゝ形式的教育の大弊也。

廿一、之れに次ぎて戒心すべきは、教訓の利己的功利主義に流るゝことなり。彼の虚言、食言を誡むるにも、信用を失ふといふ利己的理由を主とし、勉學を奬勵するに當りても、人に嗤笑せらるべしなどいふ私の利害に重きを置くが如き教訓は利害得失の打算以外に何等善惡の標準も無きが如く思はしむるに至る弊を生ず。道義を行ふの理由は、須らく道念の眞根柢、眞源泉の中に求め來るべし。利害と善惡とを混ぜしむべからず。

廿二、生徒が質疑せば、及ぶべきだけ懇到に説明すべし。昔時の師のなしゝ如く威壓的、命令的に訓誨して、疑問をゆるさず、説明を悉さゞるが如きは、方今の倫理教育即ち智育的、德育の構へてなすべからざること也。何故又は何の爲にといふ疑問に對して明かなる説明を與へずば、生徒の信念薄弱なるべく、隨うて實際の訓誡たるに堪へざるべし。且つや幼年の際に、「何故」「何の爲」などいふ質問のいと貴重なるとを知らしめ、道理を重んずるの習慣を授け置かざれば、後年道理によりて進退せぬばならぬ時に當り、當人のみならず社會全體の

迷惑又は大不利となることと出來すべし。（彼の感情一邊によりて政治を是非し、風俗時勢を好惡する一流の人物は、往々にして此の道理によりて陶冶せられざる者流なることを思へ）。

廿三、方今の教育は大概功利主義に立脚せるゆゑ、「何の爲に」即ち「如何なる利の爲に」といふ意味の疑問に對する説明は毎に之れを與ふれども、利用の目的を離れたる方面に向つては、殆ど何等の説明をも與ふることをなさず。これが爲に無邪無心の幼者をして笑止にも其の天眞を銷耗せしめ、竟には喜憂笑顰、行住坐臥悉く皆利用に伴はざるべからずなど思はしむるに至る。是れ明かに一大弊なり。留心して矯正せざるべからず。

予嘗て某中學の一年生に「おこと等は如何なる遊びを最も好むか。又何故にその遊びを好むか」を問ひしに、「云々の遊戯は學問の助けになれば」、「衞生の爲によき故に」、「修身上の裨益あれば」、「忍耐力を養ふの效用あるが故に」、「欝屈を慰むる效用ある故に」など答へ、甚しきは水浴、體操、復習、學問、算術などをも遊びの中に加へたりき。即ち説明するに當りては聊かも利、不利の念を脱する能はず、否、利用に因みて答へざれば惡しかるべきやうに心得て、かゝる心

にもなき答をなす、是れ皆今の功利的教育の惡結果なり。蓋し予が問に對する正當の答へは、「予は云々の遊びを好む、それには勝ち負けあり、その勝負が面白き故に」とか、「旅は面白し、珍らしきものを見ることが出來るゆゑ」とか、「予はトランプが好きなり、勝てば賭物が取れる故」などあるべかりしなり。

（明治三十二年四月）

德教頽廢の譬喩觀

犯罪學乃至精神病理學などの觀察點より觀來れば、あらゆる社會上の弊害は、主として人格上の病に基くものなるべく、隨うて德教の頽廢を時疫の流行若しくは傳染病の蔓延に比するなどは、蛇を蝮に比し、猫を虎に比するにひとしく、餘りに近似せる譬喩にして、多く新意を闡發する所なかるべし、而も其の相近似せる所以は、其の相的當せる所以なることをも記せざる可からず。

夫れ個人の疾病を治せんと欲する者は、先づ其の症候を診察して其の病症を診斷し、ついで其の由來を考究し、さて後に處方を定めて調劑し、やがて看護人に命じて機宜に應じて之れを患者にすゝめしむるを例とす。

而して患者が藥を服するを欲せざる場合には、之れをすかして服用せしむるの方便も講ぜざるべからず、中途に病症變ぜる場合若しくは他病の俱發せる場合には、之れに應ずるの用心もなかるべからず。或は飲食の節制、或は所謂「なほりぎは」の注意などいづれも皆大切なり、若し其の一をだにも誤らば、折角の治療は悉く效なきに至るべし。

個人の疾病を治するにだにかばかりの用心は必要なりとせば、所謂社會の重患を治せんとするに當りては、用心之れに幾十倍せざるべからず。就中診察の周到診斷の精確、先づもつとも大切なり、蓋し社會の疾病は個人の疾病よりも病症の複雜なるを通例とす。個人の疾病だにも二症の俱發せるを單に一症と誤診して治療せんか、幸ひに甲症を治するも乙症を募ちしむる弊あるべし、況んや重患三四種以上も俱發せる社會病の場合に於てをや。是れ診察の周到、診斷の精確といふこと先づ最も大切なる所以なり。

次には病因の考究と處方の考案とが緊要なり。個人の病に遺傳症のある如く、社會の病にも前代の遺傳に係るものあるべく、さるは或は人力を以てして如何

ともしがたかるべし、されど投藥上の參考ともなれば其の遺傳なりや否やを推究し置くことは必要なり。又所謂病因には、おのづから既に過ぎ去れるものと今尚存在して現にはたらきつゝあるものとの別あり。前者は遺傳的なる者を指す。後者は個人の場合にていへば、アルコール中毒、患者の飲酒癖の如き是れなり。飲酒といふ現に活動しつゝある病因を絶たざる以上は、如何なる神劑も治療の效を奏し得ざるべし。社會の病症を治せんとする者も豫め此の種の病因の有無を取調べ、藥を調合するに先だちて、先づ之れを除くことを力めざるべからず。

處方の考案將た決して輕々しく定めがたし。例へば、病症は肺結核に胃弱及び心臟病の併發せるなりと定まりたりとするも、又肺病は其の患者の遺傳症たること及び平素甘きものを嗜む癖あることも分明なりとするも、尚藥劑の選擇上には種々の愼重なる工夫を要すべく、或は病症によりては、外用と內用との取舍甚だ大切となりぬべきなり。彼の一概に滋養物をすゝめ、强壯劑を投ずるを以て療治の極意と心得るが如きは眞の素人料簡たること勿論なり。かばかりのことは、個人の病の場合には人之れを知らざるはなし、社會の病を治せんとする

に當りては、往々にして此の愚を行ふものあり。

個人病の場合に於て醫師は尠くとも傳染病者ならざるを要する如く、社會病の場合に於ても、醫師(社會改良家を以て自任する者)は些も時の流行病に感染した る氣味なきを要す。おのれ肺病に罹りながら他の肺患者を治せんとするの不都合はいふ迄もなく、己れ腸チブスに罹りながら肺炎患者を治せんとするが如き、亦た甚だ不都合にして且つ双方の危險なり。而も今の世には此の類の醫師尠からざるが如し、是れ豈治療の效の擧らざる一因にあらざらんや。

夫れ社會病の種類は、個人病の種類の限りなきが如く限りなし、而も所謂社會病とは、主として傳染質のもの、さなきも廣く通じて常に存するたぐひのものを指せるなれば、流石に四五種に概括しがたきにもあらず、猶尤も廣く行はるゝを標準とするときは個人病と雖も、胃腸病、肺病、心臟病、腦病、皮膚病、眼耳鼻口の病、種々の流行病などいふ數十種の普通病に概括し得らるべきが如し。蓋し社會の病は、いつの世、いかなる國土にも發生せざることを保しがたきものなりといへども、尚其の激しく發生するやおのづから時節あり、是れ將た前にいへる普通病の、其の常に發生する傾向は有しながらも、尚おのづから春の末、秋のはじめなど所

謂季候のかはり目に於て尤も激烈に發生すると同理なり。彼の革命前又は革命後は恰も季候のかはり目に相當す、社會擧げて病に感じ易く、時疫的敗風、流行病的醜德などが猖獗の勢ひを逞うする時節なり。かゝる際には種々の附屬的弊害乃至惡德將たむらがり生ず、猶肺病乃至腸チブスなどいふ一重患に罹れば、胃弱、腦病、氣管支など種々雜多の小患相追うて併發し來るが如し。社會病の場合にていへば、彼の便辟の如き、阿諛の如き、譎詐の如き、矯飾の如き、僞善の如き、自負高慢の如き、不遜剛愎の如き、猜疑嫉妬の如き、虛構讒誣の如き、摘非發醜の如き、中傷陷擠の如きもの、革新期の前後には併發し來る。これらは皆惡德たるや明かなれども、要ずるに皆伴發病のみ、或他の社會的大患の附屬病たるに外ならざるなり。

然らば所謂社會的大患とは、主として如何なる病症を指せるにや。換言すれば、社會の風儀をして不健全ならしむる根本因は何ぞ。凡そ人間をして惡を行はしむるに至る主因緣は何ぞ。此の疑問に明答することを得ば、所謂移り變り時代に於ける主なる社會病は知らるべきなり。

假に自己一身の利害の爲に他人の心身を害ふの行爲を惡行なりとせんに、人は

生れながらにして害他を嗜む動物にあらざる以上は、かゝる惡行を嗜むに至るには何等かの因緣なかるべからず、もとより其の因緣は、之れを個々の場合について檢すれば其の種類限なしと雖も、其の根本に遡りて檢するときはおのづから四大類に概括せらる。時の古今を問はず、國の東西を論ぜず、所謂社會病は此の四大症の外にいでざるべし、否、個人が惡を行ふの因は此の外にあるべからず。

所謂四因とは如何。

(一) 倫理觀念の不明確(無智)

(二) 倫理觀念の不健全(謬見)

(三) 同情性の缺乏(私慾一邊性)

(四) 薄志(克己自制の心の缺乏)

是れなり。前二者を知不足と總稱し、後二者を意不足と總稱す。

(一) 倫理觀念の不明確(無智)は尤も夥しく瀰漫せる病也とす。こは正に腸胃カタルなどに比すべし。凡そ世間の男女にして(流行病、肺病、心臟病などの經驗は曾てなきものも)其の病氣の經驗なく、衞生の智識なき少時に於ては賢愚の別なく多少此の病症を經驗せざるはなきが如く、ソクラテスと雖も、孟軻と雖も、其の

少時に於ては多少無智といふ病の爲に、知らず〳〵惡を行ひしことあるべし。世には同情性の生れながらに缺けたるか、乏しきかの爲に惡と知りつゝ惡を爲すものも間〻あれども、正邪の觀念の明かならぬ爲に(未だ正邪の別を敎へられざる爲に)惡を爲すものは更に一段夥しとす、否、少年青年の惡行は大概此の病に基くなり。按ふに、此の病は(經驗を重ぬるにつれて、如何なる人も多少みづから衞る故にや)概して命を奪ふには至らず、されど中には慢性となりて終身胃弱に惱めるものもあるが如く、正邪不明の間に一生を終ふるまれ者もあり。これ等は憎むべきといはんよりは憫むべき輩なりとす。下等社會の罪人中には此の類に屬する者尠からず、佛氏の所謂無明の徒なり。

(二) 倫理觀念の不健全は佛氏の所謂見惑即ち邪見にして、眞善ならざること若しくは邪惡なることを眞善なりと誤解誤信して言論し、行動するともがらは、すべて此の病に罹れる者也。彼の政黨の相搏噬する、彼の宗敎徒の相殺傷するは、互ひに一分の眞、一分の善に執して相排し、相惡むに因る也。島田、來島の徒將た此の亞流のみ。此の症は宜しく膓チブス病などに比すべし、其の傳染病たる點先づ相似たり。其の一種の有期病にして、段取よく經過し去れば、全治の後却り

て前に倍する健康を得る益もあれど、若し其の第一二期の際に於て肝要の治療を誤る時は、多くは命を失ひ、然らざるも神經衰弱し、または痴愚者となる虞れある點また酷だ相似たり。何となれば、彼の謬見の徒は、其の謬見に執するが爲に屢〻善惡正邪を顚倒し、國家を害ひ、自他を害ふの大弊を釀すことあると同時に、其の信ずる所に熱衷し、其の志す所に剛毅なるの性をも具ふ、かるがゆゑに若し幸ひにして其の罹病の第一期に於て其の謬見を全治せらるゝを得ば、其の謬見の爲にだに身を致さんとせし程の熱心は、一轉して正義大道の爲に傾注せられ、所謂身を殺して仁を爲す底の烈士義人を生ぜんか、これもまた知るべからざればなり。諺に謂へる如く、惡に強きは善にも強かるべきなり。三迦葉の傳に之れを見るべく、セント、ポールに之れを見るべし。龍樹菩薩や、文覺や、オーガスチンや、ホイットフィールドや、將た一面より見れば此の類に屬すべきか。而して世間此の病の爲に苦めらるゝもの實に夥し、尠くとも世上の不善人の過半は此の種の患者なるべくや。蓋し非理を眞理と做すの詭辯には黴菌性の病毒含まれ八面に傳播蔓延すればなり。邪說即ち似て非なる道德說の誤つて人々に用ひらるゝは、猶酒が百藥の長乃至天の美祿の美稱の下に濫用せらるゝが如し。所

詮此の謬見と前項の無智とは爲惡の二大根源なり、就中謬見は其の尤も甚しきものなり。ルーソーが「無智(イグノーランス)は必死的ならざれども謬見(エルロア)は必死的なり」といへるも宜なり。善と誤信して惡を行ふ者ほど思ひ切りたる惡を爲すものはあらざればなり。ソクラテスが誤謬を正し、無智を啓發するをもて德育の第一義となしゝもゆゑあり。孟軻が楊墨の摧折を仁義顯揚の第一着となしたるもゆゑあり。

三) 同情性の缺乏は遺傳性の肺病などに比すべし。病の遠因は遺傳にあるがゆゑに、如何なる良醫が如何なる神藥を投ずるも、恐らくは只〻其の重患に陷るを防ぐに足らんのみ。全治せりといふも、其の實黴菌を退治し得たるのみ、其の素因は尙依然として存すべき也。佛氏の所謂緣無き衆生とは是れなるべし。病根は其の性に在るなり。若し人間の惡を行ふに至る主なる原因が此の病にして、社會病の重なる源泉將た專らこゝにあらば、古今の社會醫師は皆絶望して匙を投ぜざるべからざりし筈なれども、幸ひなる哉、社會の病、個人の病は寧ろ之れに因せざるものを多分とす。世に遺傳病者の比較上少數なるが如く、同情性の缺乏せるが爲に惡を爲す者、即ち盜跖、イヤゴのともがらは、如何なる澆季の世にも多からざるなり。

(四) 以上の三惡病は幸ひに全く免れ得たるも、人は尙惡に墮することあり。何が爲ぞや。他なし、克己心の缺乏に因るなり、換言すれば、志氣薄弱にして(善事と惡事との別なく)何事をも遂行せんの意力に乏しきこと是れ最後の、恐らくは最も勢力ある病源なり。こは生れつきに然るもあれば、幼時の敎育法よろしからざるために馴致したるもあり。生れつきなるを通例粘液質と稱すれど、多血質なるが爲にも、神經質なるが爲にも此の失を生ず。按ふにこれは病症に比せんよりも寧ろ體質の虛弱なるに比すべきものならんか。されど强ひて病に譬へば、稍〻遺傳性の心臟病などに似たるべくや。其の甚だしきに至りては殆ど如何なる運動にも適せざる者となる點相似たり。其の十四五歲ごろより三十前後に發すること多き點なども相似たり。また慢性肺病等より轉じて發することある點も相似たり、何となれば所謂イクヂナシは一は肺病に比すべき同情性即ち愛他心の全然たる缺乏に基くこと多ければなり。いかなる自制力なきものも、父母乃至妻子を思ふ心切ならば、幾分か辛抱する氣も生ずべき筈なれど、只〻自家目前の安樂をのみ思ふ故に知りつゝも不義をも行ふなるべし。要する

に、此は必ずしも他人に對する惡德の根本にはあらねど、諸惡に流れ易き又は惡を釀し易き惡質なり、此の性質ある時は、倫理觀念は明確なるも甲斐なく、謬見は脫し得たるも甲斐なく、惻隱慈悲、慚愧等の念はあるも甲斐なし。何となればいづれの方面に向ひても薄志弱行なればなり、善にも弱く惡にも弱きはかゝる輩なればなり。孟賁の勇あるも身體虛弱ならば甲斐なきが如く、孔丘、陽明の仁ありとも薄志ならば甲斐なかるべし。

以上は社會病の四常住因とす、其の他はみな伴生病のみ。

社會の病患に罹るや、尠くとも此の四原因は必ず存す、社會醫たらんと自任する者は、是非共此の四症を併せ治するの醫方に精通し、且つ之れに相應するの良藥を調製せざるべからず。又自家の身內には此の四病の素因なきことを必せざるべからず、取りわけて傳染性の病素はかりそめにも無きことを必せざるべからず。

まばらく譬喩を離れて言はんに、苟も社會改良の大任に當らんと欲する者は、先づ自家の倫理觀念を及ぶべき限り正大ならしむるの義務あるは勿論其の世間に向つて自說を唱ふるに當りては、其の說く所の觀念善惡正邪の觀念をして、一

々火を覩るが如く明瞭ならしめ、精確周匝ならしむる必要あり、然らざれば聽く者皆思ひ〳〵に誤解し、健全なりし倫理觀念をも甚だ不健全なるものとならしむるの虞れあればなり。彼の老莊の敎旨が往々にして人を誤る所以のものは、一面敎旨其の物の病にも因するならめど、一面は其の語の含糊不明なるがためなりとす。之れを要するに、社會改良家乃至德育家の理想的資格は、エマアソンが所謂三能を兼ね備へたるものならざるべからず。三能とは能く知り、能く說き、能く行ふこと是れなり。能く知ることは或はなほ成し得べし、能く說くことに至りては甚だかたし、就中頑愚をして悟らしむるやうに稚蒙をして會得せしむるやうに說くことは最も難し、而も尠くとも此の二能（能知と能說）を兼ね備へずんば、社會改良の事業は竟に其の端緒をだにも得がたかるべきなり。予は古今の史傳を讀みて此の二能の兼具すらも容易くは望みがたかるべきを恐るゝものなり、豈敢て社會改良論者乃至德育論者に向ひて、每に能爲の資格までをも苛求せんや。只〻其の說く所を明瞭精確ならしめて、頑愚をも稚蒙をも啓發するを得ば則ち足る也。彼の漠々然として仁義博愛を說き、彼の茫々然として倫理、人道を講じ、若しくは徒らに支離滅裂の德義條目を羅列することの、社會病を

療治する上に於て寸效無きことを證得せば則ち足るなり。予はかばかりの資格ある者を社會病の良醫師と見做さんと欲するなり。

さてこの標準によりて古今の社會醫を品評せんに、名醫は多けれども良醫は乏し。良醫方家は間〻在れども良治療家は甚だ稀なり。況んや起死回生の大醫をや、神醫をや。彼の良心說に立脚せる德育家は往々にして良醫なるべし、而も其の末流を酌める者はおしなべて庸醫のみ。彼等は同情性の缺乏を如何ともなす能はざるのみならず、不健全乃至不明確なる倫理觀念をすらも治する能はざるなり。何となれば彼等は彼の漠然たる良心といふ一木皮、一草根にのみ依賴して萬種の道德病を治せんとすればなり。彼の功利主義に立脚せる德育家もまた庸醫のみ、然らざれば多少警戒を要すべき危險の醫師たり。何となれば危險なる藥劑を用ふればなり、彼等の治療は往々にして倫理觀念の不健全をして亢進せしむる虞れあるのみならず、人は其の性爲我的(イゴイスチック)なりと誤診して、暗に同情性の發達を阻礙するの弊あればなり。老莊の如きもまた大醫にあらず、彼等は或特殊の不健全(一代の時疫)を治するに宜しきのみ、即ち或種の專門醫に比すべきものなり。ストア派の如きも大醫にあらず、彼等は薄志性(ウイークウイル)の主治醫として

は甚だ可なり、他面の力量は多く言ふに足らざるなり。要するに眞の神醫は古今屈指に過ぎず、大醫、良醫、將た甚だ多からざるなり。

最近世の英米に觀んか、醫方家としてだに秀でたるものは甚だ稀なり。カーライルは徒らに患者が病に罹れることを罵倒するのみ、未だ明確なる治術を說きしことあらざるなり。彼れの倫理觀念其の物(聽く者に取りては)茫漠たり。マッシュー、アーノルド將た然り、彼れは口癖の如く正義(ライチャスネス)を說き、眞理(トルース)と叫べり、而も所謂正義、所謂眞理の眞義は、曾て明說せしことなし。腐敗せる社會に向つて、漠然「正義」「眞理」の名目のみを呼號するは、「良藥服用の必要を叫びながら曾て其の「良藥」の何たるかを指示せざるに似たらずや。かゝる失はエマアソンにもあり、ラスキンにもあり、文學者的社會改良家にして此の失なきものは殆ど稀なり。而して憾むらくは他の哲學者的德育家乃至社會改良家もまた多く之れに勝ることを能はざるものゝ如し。社會醫となるも亦た難いかな。(明治三十三年十二月)

文藝と教育

終

20703

明治三十五年六月一日印刷
同　年六月四日發行

文藝と教育　並製
實價　金七拾錢

著者　東京市日本橋區通四丁目五番地　坪内雄藏

發行者　東京市日本橋區兜町二番地　和田垣

印刷者　東京市日本橋區兜町二番地　齋藤章達

發行所　東京市日本橋區通四丁目角　春陽堂
電話本局五拾壹番

印刷所　東京市日本橋區兜町二番地　東京印刷株式會社
電話浪花二百五番
千三百二十五番

●内に發行者●　●之印檢査濟●
●有り合ひ拾錢●

編輯主任後藤宙外

毎月一回

新小説

一日發行

『新小説』は小説を主とし文學、藝術、社會に關する饒味有益の記事に富む日本第一の大雜誌なり。

◉本誌に執筆せらるゝ諸大家には紅葉、露伴、柳浪、抱月、天外、鏡花、風葉、曙山、春葉、春雨、宙外其他十餘名あり。

小説欄には毎號長短數篇の作を新鋳諸大家に起草を乞ひて之を掲ぐ。

雜錄欄には高尚鈎玄の文と平易饒味の記事とを併載して上下一般の歡迎に背かざるべし。

時文欄は宙外氏が公平穩健の筆を以て縱横に現時の文界を評論して餘さゞるべし。

滯歐文談　島村抱月氏が勇健の筆を以て、歐洲文壇の各方面に度りたる觀察を記述し、或は逸話に或は評論に、陸離たる光芒を發揮すべし。

文苑欄には諸名流の新體詩、美文等を採錄し傍ら寄書の俊秀なる物を併載して光彩陸離。

海外文壇は歐米各國に於ける文界の趨勢、思潮の張落、文士の動靜、著書の紹介を爲すべし。

譚叢欄は社會各方面に涉りて一代の名家と稱せらるゝ人々の話説を書記し、又此外の珍談奇聞を掲ぐ、演劇、相撲、落話、講談、淨瑠璃の他百般の藝道に關する多趣味の記事を收む。

藝苑欄には裝飾品、風俗、挿畫を以て記事の足らざるを補ふ。

流行欄は衣服、風俗、挿畫各方面の鋭利周到なる觀察記にして、傳神の挿畫と巧妙なる寫眞版とを以て文の足らざるを補ふ。

社會欄には社會百般の流行を精細に報道し、巧妙なる印刷の技術と意匠の豐富なるは、由來新小説が江湖に誇る所なり。

挿畫　本誌は其意匠の寄與に重鎮視せらるゝ斯道の巧拔なるを以て、印刷の巧妙なる技術とを以て每號美麗なる繪畫を添附し、尚ほ從來の口繪の外に、淺井忠氏の海邊書二葉、小山太郎氏の風俗の密畫を口畫として交互に挿入す、殊に本誌の表紙畫は和田英作氏の筆になり每便佛都巴里より送附せらるゝものなれば、單に繪畫としても、尚優に斯道の部に於て廿五の飾たるに足るべし。

實價	金一圓四十四錢	一六二
十二冊前金二圓八十二錢	郵送料	十二錢
一割增の事	合計金	廿四錢
代用は	廿七錢	廿一圓五十六錢
切手		三圓〇六錢

東京市日本橋通四丁目角

發兌元（電話本局五十一番）春陽堂